

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03148 5881



(27)

(以下は概算表)

昭和二十一年四月二十五日現在
昭和二十一年四月二十五日現在
昭和二十一年四月二十五日現在

現金	100	現金	100
預金	100	預金	100
有価証券	100	有価証券	100
固定資産	100	固定資産	100
流動資産	100	流動資産	100
負債	100	負債	100
資本	100	資本	100

現金
預金
有価証券

負債

昭和二十一年四月二十五日現在
昭和二十一年四月二十五日現在
昭和二十一年四月二十五日現在

現金
預金
有価証券

負債

現金
預金
有価証券
負債
資本

昭和二十一年四月二十五日現在

昭和七年十月十五日印刷
昭和七年十月二十日發行
昭和十二年四月五日再版

不許
複製

國譯一切經 寶積部 七

編輯者兼 岩 野 眞 雄
東京市芝區芝公園地七號地十番

印刷者 長 尾 文 雄
東京市芝區芝浦二丁目三番地

印刷所 日 進 舍
東京市芝區芝浦二丁目三番地

東京市芝區芝公園地七號地十番

發行所 大 東 出版 社

振替東京一九四七一番
電話芝三九四四番

索 引

(頁数は通頁を表す)

—ア—

阿迦尼吒	157
阿闍世	57, 58
阿須倫	127
阿踰闍	93
阿闍鞞佛	79
阿闍地	125
阿漸貨羅天	157
阿僧祇	26, 81
阿那含	59, 143
阿那含果	55
阿難	9, 59
阿耨達地	102
阿比羅提	124
阿毘達摩	239
阿鞞跋致	79, 81
阿部多	142
阿彌陀佛	59
阿淮越致	124
阿羅呵	236
阿羅漢	74, 81
阿羅漢道	71
愛法	38
惡口	47
惡道	22
惡律儀	96
安輪	237

—イ—

威儀	74
威神力等六故	27
韋提希	57
瞿瞿煥爛	31
異心	38
異道	138
意生身	107, 114
意力	39
維無	143
郁迦	175
一切爾焰	110
一切智の境界	116

一切の法を攝持す	94
一切の論	100
一食	12
一生補處	79, 134
一乘	39
一心度無極	161
一大善	46
一智	111
一日一夜	50
因果	59, 69
因授如來	184
因力	39

—ウ—

友稱王	117
右繞三匝	114
有爲と無爲	33
有頂	250
有餘不了義	105
有緣の衆	67
有量	113
有餘と無餘	113
烏曇婆	246
優曇蓋	39
優曇蓋華	38
優曇羅華	23, 28
優鉢	132
優樓頻羸迦葉	9
鬱金	247
鬱單越	139

—エ—

衣祴	78
廻向發願	68
廻向發願心	68, 72
慧	38
慧眼	38
慧力	39
炎天	151
菴羅	247
菴勒	247
緣覺	11

緣力	39
圓光	65, 67
闍浮提	58
闍浮檀金	62, 66
醯王光佛	25
醯天	24

—オ—

惡露	128
王舍城	9
往生の授記	75
往來地	155
應正遍知	95
應法の妙服	20
憶念	74
音響忍	27
圓觀	191

—カ—

火焔	237
伽他	251
伽耶迦葉	9
迦遮	237
迦陵頻伽	78
迦留羅	130
過去	123
過去五十四佛	12
過稱量	94
我見	116
合掌	11
合掌叉手	73
月光摩尼	27
月光	57
月實	237, 249
戒行	68
戒定慧解脫智見	72
戒聞精進三昧智慧	14
客塵	117
閑居	188
勸進	59
灌頂	28
觀喜光佛	25

觀行成就 40
 觀世音菩薩 73
 觀無量壽經 57
 願力 39, 63

—キ—

記 10
 記を授く 34
 喜法 38
 綺語 47
 機の上中下 71
 祇洹林 117
 義趣 73
 書閣峴山 9
 耆婆 57
 經道滅盡 55
 經法 15
 輕舉 37
 交露 27
 絃露 135
 橋耆耶 237
 橋尸迦 117
 橋羅羅 238
 行 10
 行願 9
 行業果報不可思議 24
 巧曆 26
 吉祥の感徴 10
 卻行 58
 劇難 11

—ク—

求菩提心 40
 苦空無常無我 61
 苦惱を除く法 63
 拘物頭華 28
 拘文 132
 功德作證 111
 功德莊嚴 78
 共命の鳥 78
 具足戒 71, 74
 愚人 71, 75
 空 203
 空如來藏 115
 空無我の聲 28

空無相無願三昧 11, 39
 空亂意 117

—ケ—

快廓 23
 下品下生 71, 72
 下品中生 72
 下輩 33
 下輩生想 73
 解脱 25
 決 129
 結願 124
 賢護勝上 235
 推沓毘 130
 賢劫 9
 甄叔伽 64
 甄叔迦寶 63
 閑 11
 見 10
 見濁 81
 現身 64
 現前僧物 72
 現法の壞 116
 現に西方に在しませり 24

—コ—

虛誑語 47
 五惡 44, 47
 五惡趣 39
 五音 27
 五音聲 141
 五戒 70, 74
 五逆 75
 五逆十惡 72
 五劫 16
 五根五力 78
 五須彌 67
 五須彌山 65
 五更陰 116
 五濁 10
 五濁惡世 81
 五燒 44
 五善 44
 五大善 49
 五痛 44

五道 66, 68
 五不思議力(行業果報) 24
 五分法身 75
 五萬劫 64
 後際 101
 光明科力 72
 功祚 22
 劫 12
 劫濁 81
 劫賓那 9
 行行あひ値ひ 26
 恒沙 14
 業障 241
 極長生 20
 極樂國土 73
 金剛喻 112
 金剛鐵圍 24
 金翅 238
 建立常然 23

—カ—

作もなく起もなく 23
 薩芸若 124
 西方極樂國土 59
 最後身 108
 最勝尊 22
 齋戒 38
 三惡趣 78
 三惡道 16, 78
 三有 107
 三會 213
 三界 12
 三界の雄 22
 三歸 59
 三苦 10
 三垢 22
 三三昧 11
 三十二想 64
 三十六百千億の佛 31
 三匝 13
 三趣 11
 三乘 11
 三乗の初業 116
 三心 68
 三誓偈 21

三大善	47	七覺	38	十萬億刹	24
三塗	25	七覺意	184	十力	28, 75, 109
三毒(染患癡)	23	七重の室内	57	十六正土	9
三忍	21	七步	9	住地の四種	106
三輩	32	七菩提分	78	重誓偈	21
三輩往生	33	七寶	26, 66, 79, 184	香滅	38
三福	59	七寶の色	68	宿願力	68, 70
三寶	23	七寶池	72, 77	宿世善根	39
三品	146	沙彌	74	出世間上上智	112
三昧	38	沙彌の十戒	74	出家	103
三明	71, 74	沙門	13, 58	出定入定	64
散善流通	75	舍衛	77	純樹	26
		舍利	177	所依	108
		舍利弗	9	所住	10
		捨惡正修	40	所聞妙解	40
尸羅	221	捨相入實	40	初會	25
止行成就	40	釋迦毘楞伽寶	63	諸戒	74
四依	116	釋迦毘楞伽摩尼寶	61	諸大	240
四依智	116	邪衆	32	諸佛現前三昧	73
四緣	112	釋	9	諸佛の家	75
四事	23	釋提桓因	78	除滅罪	73
四衆	51	寂靜の聲	28	小身	68
四十二劫(佛壽)	16	寂滅	23	少善根福德	79
四十八願	16, 71	珠璣	140	正觀	62
四聖諦の中	115	首題	71, 75	正士	145
四諦	70, 74	修多羅	65, 66, 239	正定衆	32
四大海	67	衆火一時	72	正道	32
四大海水	65	衆香手	157	正遍知海	64, 65
四大善	47	衆苦を計せず	23	正法	9, 96
四不願倒	115	衆生濁	81	正法住と正法滅	102
四法	112	須陀洹	71, 174, 142	清淨解脫三昧	21
四魔	109	須摩提	175, 176	清淨光佛	25
斯陀含	143	須彌山	59, 102	清風	27
至心	68, 73	須彌天冠	12	清法眼	55
至心信樂願(第十八願)	18	執持	79	清揚哀亮	27
至誠心	63	執智炬	228	勝心	38
師子	14	淺記	65	勝鬘夫人	93
師子吼	22	樹想	62	聖旨	11
自然虛無の身	29	十劫	24	聲聞	11
自然の化成	27	十二光佛	25	上品下生	70
持海輪寶	27	十二部經	68	上品上生	69
茲心	68	十二分經	70	上品中生	69
慈氏菩薩	51	十善業	59	上輩	32
爾燔地	109	十方	63	上輩生想	70
室利摩羅	93	十方世界	65	丈六像觀	70
實際	200				

—シ—

丈六八尺
 定
 定心
 定力
 成熟
 常力
 淨居天
 淨除業障
 淨智
 心想
 心法の智
 信心回向
 神足
 身見
 身量無邊
 眞陀羅
 眞實の利
 親近知識
 深心
 深智慧
 深法
 深法忍
 深法門
 塵勞

—ス—

水想
 芻洛迦

—セ—

世雄
 世眼
 世自在王
 世尊
 世饒王佛
 世英
 施戒忍辱精進禪定智慧の力
 刹土
 千輻相
 旋火輪
 旃陀羅
 栴檀香
 染恚癡
 踐度能行
 善

68 善行方便
 21 善巧
 38 善勝
 39 善導疏第四散善義
 96 善智識
 39 善力
 51, 203 漸至

—リ—

64 麗惡語
 117 蘇息處
 52 相續
 146, 177 僧祇
 117 僧祇物
 68, 70 僧聲
 130 僧那
 12 想像
 40 總觀の想
 38, 68, 72 總舉有緣之類
 12 總持
 33 總相欣求身
 27 雜穢語
 33 雜樹
 10 像を想ふ
 塞建陀
 60 足下に千輻輪の相あり

—タ—

他化自在
 多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀
 12 多聞の力
 13 多羅
 12 陀羅尼
 16 陀羅尼門
 12 太子の疏
 15 底極廝下
 228 大海小海
 62 大目捷連
 58, 59, 93 大慈悲の聲
 12, 23 大住
 23 大丈夫
 45 大淨志
 29 大乘

184 大乘十二部經
 210 大乘の道
 213 大乘方等經
 71 大聖
 71, 74 大莊嚴
 39 大身
 112 大施主
 大勢至菩薩
 14, 22 大千
 235 大那伽
 100 大欲心
 106 大力菩薩
 9, 73 第一義
 69 第一義諦
 71 第一總明告命
 16, 80 第一無三惡趣願
 24 第一無三惡趣願成就
 16 第二不更惡趣願
 17 第三悉皆金色願
 62 第三地想觀
 72 第四に辨定三心以爲正因
 62 第四寶樹觀
 17 第四無有好醜願
 29 第四無有好醜願成就
 252 第五宿命以下第十漏盡通諸願成就
 66 第五宿命智通願
 72 第五に正明簡機堪與不堪
 62 第五寶池觀
 17 第六天眼智通願
 24 第六天の寶のごとし
 63 第六寶樓觀
 72 第六に受法不同
 63 第七華座觀
 17 第七天耳智通願
 72 第八廻所修行願生彌陀佛國
 64 第八像想觀
 17 第八他心智通願
 80 第九神境通願
 17 第九神境智通願
 37 第九神境通願所成
 67 第九佛身觀
 57 第九臨命終時聖來迎接不同
 73 去時遲疾
 59, 69 第十觀音觀
 68

第十速得漏盡願	17
第十到彼華開遲疾不同	73
第十の觀	66
第十漏盡願所成	37
第十一華見以後得益	73
第十一住正定聚願	17
第十一住正定聚願成就	32
第十一勢至觀	69
第十二光明無量願	17
第十二光明無量願成就	24
第十二普觀想	69
第十三壽命無量願	17, 81
第十三壽命無量成就	25
第十二雜想觀	70
第十三觀	63
第十四聲聞無數願	17
第十四聲聞無數願成就	25
第十四聲聞無數願成就細說	25
第十四の觀	70
第十五眷屬長壽願	17
第十五眷屬長壽願成就	25
第十五の觀	71
第十六離諸不善願	18
第十六離諸不善願成就	28
第十六の觀	72
第十七諸佛稱揚願	18
第十七諸佛稱揚願成就	25, 32
第十八念佛往生願	18
第十八念佛往生願成就	32
第十九來迎引接願	18
第二十係念定生願	18
第二十一具足諸相願所成	36
第二十一具足諸相願成就	29
第二十一三十二相願	18
第二十二國土嚴飾願成就	26
第二十二必至補處願	18
第二十二必至補處願所成	36
第二十三供養法佛願所成	37
第二十三供養諸佛願	18
第二十三供養諸佛願	79
第二十四供具如意願	19
第二十四供具如意願所成	37
第二十五語一切智願	19
第二十五語一切智願所成	36
第二十六得金剛身願	19

第二十六得金剛身願成就	25
第二十七萬物嚴淨願	19
第二十七萬物嚴淨願成就	29
第二十八見道場樹願	19
第二十八見道場樹願成就	27
第二十九得辯才智願	19
第三十智見無窮願成就	25
第三十智辯無窮願	19
第三十智辯無窮願	36
第三十智辯無窮願所成	29, 37
第三十一國土清淨願成就	24
第三十一徹見十方願	19
第三十二國土嚴飾願	19, 64
第三十二國土嚴飾願成就	21, 24
第三十三觸光柔軟願	19
第三十三觸光柔軟願	25
第三十四聞名得忍願	20
第三十五女人往生願	20
第三十六常修梵行願	20
第三十七人天致敬願	20
第三十八衣服隨念願	20
第三十八衣服隨念願成就	29, 30
第三十九受樂無染願	20
第三十九受樂無染願成就	30
第四十見諸佛土願	20
第四十一諸見具足願	20
第四十二住定供佛願	21
第四十三生尊貴家願	21
第四十四具足德本願	21
第四十五住定見佛願	21
第四十六隨意聞法願	21
第四十六隨意聞法願成就	23
第四十七得不退轉願	21
第四十七得不退轉願成就	35
第四十八國土三法忍願	21
第四十八得三法忍願成就	27
提洹竭	130
提婆達	58
堪忍の地	213

—子—

智慧身自在	94
智波羅蜜	116
中下	11
中品下生	71
中品中生	70, 71
中輩	32
中輩生想	71
晝夜六時	78
住地	111
長老	77
長跪	11
調達	57
超世の願	21
超日月光佛	25
—ツ—	
通	38
通慧の聲	28
—テ—	
天光	22
天帝釋	126
天掌	12
天人師	22
轉輪王	184
轉輪聖帝	23
顛倒	117
—ト—	
兜率天	9
度世の道	11
度無極	123
忉利天	24
等心	38
道意	10
道術	9
道場	74
道場樹	27
道法御	181
童真	235
德	29
德號	129
德本	21
智慧の眼	22

—十一—

南無阿彌陀佛	71
那術	136
那提迦葉	9
那由他	17, 67
那羅延身	19
乃至一念	32
泥洹	15, 143
泥犁	138
南閻浮提	78
難思光佛	25
難信の法	81
難中の難	55
難伏地	94

—十二—

二見	116
二大善	46
二忍	36
二百一十億佛土	16
尼拘類	39
尼拘類樹	38
尼瞿陀	246
禰爛	94
肉髻	66
肉眼	38
日想	60
如來藏	112
柔順忍	27
人雄	14
人我兼利	23
人理	29
忍力	23

—ネ—

涅槃	114
念佛	73
念佛三昧	65
念佛の衆生	65

—ハ—

波斯匿	93, 238
波頭犁	142

波羅提木叉	103
波羅尼蜜和耶越	143
波羅蜜	97
波羅蜜の聲	28
波藍	146
跋陀劫	126
蓋頭摩	67
蓋頭摩華	67
蓋曇摩華	28
八惟務禪	142
八音妙響	34
八戒	57
八戒齋	70
八戒と齋食	74
八功德	79
八功德水	28, 62, 77
八解脱	71, 74
八十隨形好	64, 65
八聖道分	78, 80
八池水	62
八部	23
八楞具足	60
般拏	238

—ヒ—

非壞の法	114
非身	145
彼岸	9, 11
比丘	9
毘陀論經	58
毘奈耶	239
毘尼	103
百味	29
冰想	60
冰想瑠璃想	62
頻婆娑羅	57, 58

—フ—

不可思議功德	79
不學地	149
不起法忍	192
不起滅の聲	28
不共法の聲	28
不閑	11
不思議の法身	109

不請の友	11
不請の法	11
不定衆	32
不淨說法	72, 75
不退	74
不斷光佛	25
不復還地	155
不亂心	100
付屬念佛	75
富丹那	253
富樓那	57
普賢大士の徳	9
普地	23
普等三昧	21
福田	10

福德度世上天泥洹	45, 46, 47
福德度世長壽泥洹	44
佛華嚴三昧	11
佛眼	38
佛事	63
佛種性	11
佛樹	10
佛聲	28
佛心とは大慈悲これなり	65
佛智不思議智不可稱智大乘	
廣智無等無倫最上勝智	52
佛の十號	13
佛名	72
佛名法名	72
佛力	60
分衛	10
分陀利	75
分陀利華	28, 74

—ヘ—

跋陀	149
薜荔	138
辨上其位	71
偏袒右肩	11

—ホ—

菩薩	9
菩提	95
菩提心	59
方便の説	39, 113

法界身	64
法眼	38
法子	73
法聲	28
法城	10
法藏	13
法藏比丘	16, 71
寶蓮華	68
佛	9
本學	10
本願三心の願(第十八願)	18
本空	36
發願	79
梵	9, 23
梵音聲	72
梵三鉢	126
梵天王	38
梵摩尼	64
梵摩寶妙眞珠網	63
煩惱濁	81
—マ—	
摩訶衍	102
摩訶迦葉	9
摩訶周那	9
摩休勒	130
摩尼	14
魔	10, 23
—ミ—	
未度	110
眉間の白毫	65
彌戒	71
彌勒	40
命濁	81
明	38
—ム—	
無畏	11, 28
無央數劫に功を積み徳を累ぬ	23

無願	204
無礙光佛	25
無見頂	69
無見頂相	66
無間修行	40
無極の體	29
無作	114
無所作の聲	28
無生法忍	27
無稱光佛	25
無上正遍知	74
無上尊	9
無上道心	70, 72
無常壞	108
無盡の大悲(無盡の大慈)	12
無相	103
無對光佛	25
無覆護	103
無邊光佛	25
無邊不斷	110
無邊法	94
無量覺	33
無量光佛	25
無量壽	81
無量壽佛	25, 63, 73
—メ—	
滅盡三昧	30
滅盡定	241
滅諦	116
滅度	24
—モ—	
妄言	47
文殊師利	58
—ヤ—	
夜叉	76
夜摩天	65
—ユ—	
由旬	25, 67

—ヨ—	
欲覺	23
浴池	27
餘方に因順するがゆゑに	29
餘財	116
—ラ—	
羅云	9
羅闍祇	123
樂法	38
—リ—	
離蓋清淨	38
離間語	47
離垢光明	227
離癡見性	40
離欲と深正念と淨慧との修	
梵行をもて	22
兩舌	47
靈鳥頂山	175
靈瑞華	12
—ル—	
流通分	76
瑠璃妙華	13
—ロ—	
漏	10
六根清徹	27
六畜	40
六通	71, 74
六通三明	40
六念	68, 72
六波羅蜜	23
六反	128
六萬の床座	237
六欲	23
—ワ—	
和夷羅	131
和耶越致	151

疑有れば胎中に在りて、

疑はざれば、臺に坐して生れ、

願ふて十方に遍ぜんと欲すれば、

彼の菩薩を惟念するに、

本の行もて、此の如きを致し

佛の興には値ふことを得難く、

講説の士は遇ひ難く、

若し後に末世に遭ひ、

當に共に擁護を建て

佛は能く此の要を説きたまへり、

此の無量の福を受け、

合せざること五百年なり。

又手して無量の前にあらん、

須臾に則ち旋還す。

歎劫に功勤を作しつ、

號を得て世尊を憐す

須臾は會ふも聞き難し、

受學する人は得難し。

法の衰微せんと欲する時、

佛の無欲の法を行すべし、

各各に勤めて思し行じ、

世々に稽首して行ぜん。

【八】疑有れば云云、佛力を疑ひて、念佛を修すれば、たとひ極樂に往生するも、五百年の間、三寶を見聞する能はざること、母胎の中にあるが如くなりとせられる。觀無量壽經參照。

【九】臺、元明本による。

【一〇】無量、無量壽佛の謂。

【一一】世尊云云、本文に得號愴世尊とあり。愴の字は、惡也・悶也・憤なりとあれど今は通ぜず。

後出阿彌陀佛偈

法比丘を惟念するに

發願すること喻へば諸佛のごとく、

世々に諸佛を見ること、

宿命の行を廢せずして、

世界を清淨と名け、

國界平夷にして易く

寶樹若干種あり、

本と莖と枝と葉と華とに、

風に順つて日に三たび動き、

地に墮ちては手布の如く、

一切、諸の山無く、

但だ河水の流るゝ有るのみにて

天・人、水に入つて戯るゝに

水をして、脛・肩に齊しからしめんとせば、

佛の壽は十方の沙のごとく、

菩薩及び弟子は、

若し彼の佛を見んと欲すれば、

乃ち世繞王に従ひ、

誓ふこと二十四章なり。

姦數量有ることなきも、

功德遂に具に成りぬ。

佛を得て無量と號し

豐樂にして上人多し。

羅列して叢りて相生じ、

種々に各異香あり。

翕習、華の生ずるが如く、

雜廁の上、普く平かなり。

海水及び諸の源に、

音響は經を説くが如し。

意の欲望する所に在り、

意に願ふこと、念に隨つて得。

光明普く無邊なり

算へて稱量すべからず。

疑ふ莫く亦忘るゝ莫かれ

【一】法比丘、法藏比丘の略、阿彌陀佛の因位の名。

【二】世繞王、又世自在王ともいふ。因位に於ける阿彌陀佛の師。

【三】二十四、阿彌陀佛の發願とその成就とを説ける經、今存するもの五ある中、二十四の發願をいふものは、後漢の支婁迦讖譯の無量清淨平等覺經と、吳支謙譯の阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人經との二あり。

【四】無量(ganta)の譯か。普通は無量光(amitaha)又は無量壽(amitayus)とし、光・壽を明に云はざる時は阿彌陀の音譯を用ふ。

【五】翕習、翕はやはらぐさま、習、和ぎ舒びるさま。

【六】雜廁、ごたごたとまじるをいふ。

【七】脛、腋なり。又頸骨なりともせらる。

後出阿彌陀佛偈解題

梁僧祐の出三藏記集第四、失譯の項に、後阿彌陀佛偈として出せるもの、恐らく是で、法經錄以下、何れも失譯の部に載せてゐるが、開元錄第十一には後出阿彌陀佛偈經一卷を掲げ「後漢失譯、第二譯なり、兩譯あつて、一は闕けたり」と註し、同第十四の有譯無本の部には、阿彌陀佛偈一卷、失譯を出して「後漢錄に在り、第一譯なり。右は後出阿彌陀偈と同本にして、前後兩譯あり、一は存し一は闕く」と云つてゐる。

是に依ると、この偈は、或は單に偈とも呼ばれ偈經とも稱せられ、二譯の一が闕けて、一が存し、それが後漢の代に譯せられたが、譯者不明といふことになる。

阿彌陀佛因位の修行と、その成就とを讚へ、極樂の三種の莊嚴(佛と國土と衆生)を稱揚したものである。而してその説く所を見ると、後漢の支婁迦讖譯の平等覺經や、同本の支謙譯にある様に法藏比丘の發願を二十四に數へてゐる。又かの佛國に生れんとする者に對して、疑あるべからざると説く中に、胎宮の考が見えてゐるが、この方は觀無量壽經の示す所であるから、この偈も、一の經典によつて、阿彌陀佛を讚歎したものではなくて、大經・觀經に説かるゝ如きを中心として、阿彌陀佛を稱讚したものと云ふべきである。

昭和七年十月一日

譯者 蓮澤成淳識

「此は是れ阿彌陀鼓音聲王大陀羅尼なり。若し比丘比丘尼、清信士・女有らんに、常に應に至誠に、受持讀誦し、如説に修行すべし。此の持法を行ぜんには、當に閑寂に處り、其の身を洗浴して、新の淨衣を著け、飲食白素にして、酒肉及び五辛を噉はず、常に梵行を修し、好香華を以て、阿彌陀如来、及び佛の道場、大菩薩衆に供養し、常に應に、是の如く、專心に念を繋げ、發願して、安樂世界に生れんと求むべし。精勤にして怠らずば、其の願の如く、必ず彼の佛の世界に往生するを得ん。』時に阿彌陀佛、諸の大衆と、寶蓮華に坐せん。其の土の叢林・華果、鮮敷にして、間錯嚴飾す。復樹王有り、香風馥扇して、和雅の音を出だし、純ら無上不思議の法を説かん。復妙香有り、名けて光明と曰ひ、若干の塗香、亦是れ寶香ならん。

『阿彌陀佛、大寶華に於て、結加趺坐するに、二の菩薩有り、一を觀世音と名け、二を大勢至と名く。是の二菩薩、左右に侍立し、無數の菩薩、周匝圍遶す。此の衆中に於て、若し能く深く信じて、狐疑する無くば、必ず阿彌陀の國に往生するを得ん。其の地眞金にして、七寶の蓮華、自然に踊出せん。』若し四衆有りて、彼の佛の名號を受持し讀誦せんに、乃至水火・毒藥、刀杖の怖有ること無く、亦復夜叉等の怖有ること無く、過去の重罪・業障の有るを除き、極なるもの七生に至つて、必ず所願を果さん』と。

佛是の阿彌陀鼓音聲王陀羅尼を説きたまへる時、無量の衆生、皆悉く願を發して、彼の極樂世界に生れんことを志求したり。時に世尊、讚へて言はく「善い哉、善い哉、善い哉、汝の所願の如く、必ず彼に生るゝを得ん』と。

佛説を聞き已り、天龍八部は、歡喜踊躍し、禮を作して奉行したりき。

阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經 終

【四】五辛、辛味ある五種の蔬菜。

り憶念相續して、斷絶せしむる勿れ。

「此の鼓音聲王大陀羅尼を受持・讀誦すること十日十夜、六時に専ら念じ、五體を地に投げ、彼の佛を敬禮し、正念を堅固にして、悉く散亂を除き、若しは能く心をして、念々に絶えざらしめん、十日の中、必ず彼の阿彌陀佛を見、并に十方世界の如來と及び所住の處を見るを得ん。唯重障鈍根の人をば除く。今に於て、少時も、觀る能はざる所なれば、一切の諸善根を、皆悉く迴向して、安樂世界に往生することを得んと願はんに、終に垂んとするの日、阿彌陀佛は、諸の大衆と、其の人の前に現れて、安慰稱善したまはんに、是の人、即時に、甚だ慶悅を生ぜん。是の因縁を以て、其の所願の如く、尋で往生するを得ん」と。

佛、諸比丘に告げたまはく「何等をか名けて、鼓音聲王大陀羅尼とは爲すとならば、吾れ今當に説くべし、汝等善く聽け」と。「唯然り、教を受けん」と。

時に世尊、即ち呪を説いて言はく、

- 多狄他 婆離 阿婆離 娑摩婆羅 尸地奢 昵閻多禰 昵茂邸 昵茂企 闍維婆羅車馱禰 宿
- 佉波啼 昵地奢 阿彌多由婆離 阿彌多蛇伽婆昵呵隸 阿彌多蛇波羅娑陀禰 涅浮提 阿迦舍
- 昵浮陀 阿迦舍昵提奢 阿迦舍昵閻啼 阿迦舍久舍離 阿迦舍達奢尼 阿迦舍提兜禰 留波昵
- 提奢 嚧跋坦泥勢 遮埤唎達摩波羅婆阿禰 遮唾唎阿利蛇娑帝蛇波羅娑陀禰 遮埤唎末伽婆那
- 波羅娑陀禰 婆羅毘梨耶波羅娑陀禰 達摩呻他禰 久舍離 久舍羅昵提奢 久奢羅波羅啼兜
- 禰 佛陀久奢離 毘佛陀 波羅波斯 達摩迦羅禰 昵專啼 昵浮提 毘摩離 毘羅闍 羅闍
- 羅斯 羅娑岐 羅娑伽羅婆離 羅娑伽羅阿地兜禰 久舍離 波羅啼久舍離 毘久舍離 兜啼
- 修陀多至啼 修波羅舍多至啼 修波羅啼癡啼 修離 修目企 達詳 達達啼 離婆 遮婆離
- 阿兜舍婆離 佛陀迦舍昵婆禰 佛陀迦舍婆禰 娑婆呵。

阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經

是の如く我れ聞く、一時、佛、瞻波大城、伽伽龜池に在し、大比丘衆、五百人と俱なりき。爾の時世尊、諸比丘に告げたまはく『今當に、汝の爲に、演説すべし。西方の安樂世界に、今現に佛有して、阿彌陀と號す。若し、四衆有つて、能く正しく彼の佛の名號を受持せんに、此の功德を以て、命終の時に臨み、阿彌陀は、即ち大衆と、此の人の所に住し、其をして見るを得しめ、見已つて、尋で慶悅を生じ、倍、功德を増さん。是の因縁を以て、所生の處に、永く胞胎、穢欲の形を離れ、純ら鮮妙の寶蓮華中に處りて、自然に化生し、大神通を具して、光明赫奕たらん。』

爾の時、十方恒沙の諸佛は、皆共に、彼の安樂世界所有の佛法の不可思議なると、神通現化・種々の方便の不可思議なるとを讚へん。若し能く是の如きの事を信する有らんに、當に知るべし、是の人、不可思議、得る所の業報も、亦不可思議にして、阿彌陀佛は、聲聞と俱なり。如來・應・正遍知の其の國を、號けて清泰と曰ひ、聖王の住する所たり。其の城は、縱廣十千由旬、中に刹利の種を充滿す。

『阿彌陀佛・如來・應・正遍知の父は、月上轉輪聖王と名け、其の母を殊勝妙顏と曰ひ、子をば月明と名け、奉事の弟子を無垢稱と名け、智慧の弟子を、名けて賢光と曰ひ、神足精勤なるを、名けて大化と曰ひ、爾の時、魔王をば名けて無勝と曰ひ、提婆達多有り、名けて寂靜と曰ふ。阿彌陀佛は、大比丘六萬人と俱なり。』

『若し彼の佛の名號を受持する有らんに、其の心を堅固にし、憶念して忘れざること、十日十夜、散亂を除捨し、精勤して念佛三昧を修集して、彼の如來——常恒に安樂世界に住したまふ——を知

【一】瞻波 (Gandhara) もと木の名、取つて國に名く。中印度に在り恒河に濱す。この瞻波城は中印都城の始なりといふ。

【二】四衆、比丘・比丘尼・優婆塞(清信士)・優婆夷(清信女)。

【三】提婆達多、釋尊の從弟、五逆を作せるによつて知らる。今之を普通名詞として、佛の肉身にして、佛にあだをなすもの、意に用ひたり。

1880年11月10日

Dear Sir,
I have the honor to acknowledge the receipt of your letter of the 10th inst. in relation to the above mentioned matter. I am sorry to hear that you are unable to attend to the same at present. I will be glad to hear from you again when you are able to do so.

Very respectfully,
Your obedient servant,
J. H. [Name]

1880年11月10日

1880年11月10日

阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經解題

本經は、隋の法經の錄に、阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經一卷、單本失譯として出して以來、諸錄は失譯とし、開元錄第十二には「失譯、拾遺編入、今附梁錄」と註し、貞元錄第九の、新集失譯諸經の項には、この經をはじめ、十四部を出し、「其の文句を尋ぬるに、是れ遠代のものに非ず、故に梁末に編して、以て梁代失源と爲す」とことわつてゐる。是れ等に依ると、この經は梁代（五〇七—五五七）に譯されたものといふことになる。

經は西方安樂世界の阿彌陀佛の名號を受持する者の功德——命終の時、阿彌陀佛を見るを得、爲に寶蓮花の中に化生し、諸佛に讚へらるゝ——を説き、阿彌陀佛の世界——清泰と號す——と、その眷屬を述べ、彼の佛の名號と、並に鼓音聲王大陀羅尼とを受持すべきことをいひ、これによつて、衆生は願の如く、彼の國に往生すとて、鼓音聲王陀羅尼經を説き、この呪を持する法を述べ、阿彌陀佛の刹土、並に觀音・勢至の二菩薩が、その左右に侍することを擧げ、この佛の名號受持の徳を述べて終つてゐる。

呪を説くところを除けば、大經・觀經に説く所と、甚だしい相違はないが、後出阿彌陀佛偈の如く、これ等の經と、その内容上、直接に聯關あるものは見がたし。

昭和七年十月一日

譯者 蓮澤成淳識



拔一切業障根本得生淨土神呪

劉宋天竺三藏求那跋陀羅

詔を奉じて重ねて譯す

南無阿彌多婆夜、哆他伽跢夜、哆地夜他、阿彌利都婆昆、阿彌利哆悉耽、婆毘、阿彌利哆毘迦蘭諦、阿彌利哆毘迦蘭哆伽彌膩、伽伽那枳多迦隸、莎婆訶。

若し善男子・善女人有つて、能く此の呪を誦せんに、阿彌陀佛は、常に其の頂に住して、日夜擁護したまひ、怨等をして、其の便を得しむる無く、現世に常に安隱を得、命終の時に臨み、任運に往生せん。

拔一切業障根本得生淨土神呪 終

拔一切業障根本得生淨土神呪

- 【一】 不空譯、無量壽如來觀行供養儀軌に出せる、無量壽如來根本陀羅尼の前半に當る。
- 【二】 「無量光」の謂。
- 【三】 「如來に」。
- 【四】 所謂。
- 【五】 甘露發生。
- 【六】 甘露成就。
- 【七】 生。
- 【八】 甘露神變。
- 【九】 甘露騰躍。
- 【一〇】 等虛空作成就。

現存の藏中には別に阿彌陀佛説呪といふがあつて、それにはこの抜一切業障呪と同様の呪（但し阿彌陀佛説呪の方は少し長いが、内容はさして異つてゐない）があり、呪の終に「若し能く如法に受持すれば、決定して彌陀佛國に生ずるを得」と註してある。然もこの呪は麗本のみにあつて、宋等の三本には無い。ところが、彼の呪は麗本に缺けて、三本に存してゐ

昭和七年十月一日

る。即ち抜一切業障の呪のある麗本には、この佛説呪を缺き、佛説呪を載せた三本には、かの抜一切業障の呪を缺いてゐる。それと共に、これ等の兩呪を比較すると、文句の長短の差こそあれ、その云はんとする所は全く同じといつてよく、共に不空譯の無量壽如來觀行供養儀軌の示す、無量壽如來根本陀羅尼の略出と云ひ得るものである。依つて思ふに、同様な

事述べた梵本に二種あり、一方は求那跋陀羅に譯せられ、一方は他の人によつて譯されたもので、求那跋陀羅が重ねて譯したといふのは、先に小無量壽經を譯した彼が、再度彼の經に依るこの呪を譯したことを謂ふのか、或は實際、同じものを二度譯して、先のが失せたか、何れかであらう。

譯者 蓮澤成淳 識

拔一切業障根本得生淨土神呪解題

この呪は麗本は之を缺き、宋元明三本は之を載せてゐる。經題下に「小無量壽經に出づ」と註し、譯號に「求那跋陀羅、詔を奉じて重ねて譯す」とあること、注意すべきである。

先づ小無量壽經に出づといひ、求那跋陀羅重譯とあるので、求那跋陀羅の項(出三藏記第十四)を見ると、無量壽一卷を譯した事が見え、開元錄第五には、小無量壽經一卷を出し、「或は小の字無し、第二出なり、羅什譯の阿彌陀、及び唐譯の稱讚淨土と同本、孝建年〔中〕(西紀四五四—四五六)出」とあるから、求那跋陀羅が小無量壽經を譯したことが知られるが、是の本は唐代既に失はれてゐた(開元錄十四)ので、傳はらないが、小無量壽經に出づとあるから、この譯本中に、この呪

があつたことを云ふのであらう。作者未詳の阿彌陀經不思議神力傳にも、この神呪は、「宋の元嘉の末年に、求那跋陀、重ねて譯す」ところと。

然るに求那跋陀羅譯する所の小無量壽經は、その内容が、羅什譯の小經、玄奘譯の稱讚經と同本の異譯であるとすると、現存のこの二經中には、かゝる呪も無く、この呪に相當する文も見當らない。従つて小無量壽經に出づとは、文がそのまゝ、あつた事を示すものでは無いのでなからうか。

阿彌陀經不思議神力傳(作者不詳、西方願生の支那諸高僧を擧げて、道綽禪師に及んで居る)には、この呪に就いて、「乃ち宋の元嘉の末年(元嘉は西紀四五三—三〇年で終る)に、求那跋陀が重ねて制

譯しまつるところで、合計五十九字、十五句)より成ることを記し「龍樹菩薩が安養に生ぜん」と願じて、夢に此の呪を感じ、耶舍三藏が此の呪を誦してゐたのを、天平寺の鍔法師が、耶舍三藏の口より此の呪を受けたのであつて、其の人(耶舍)の云ふに、この經本は、外國に來つてゐない。若し呪法を受持せんとならば……佛像の前に於て、日夜六時に、各誦すること三七遍ならんには、即ち四重・五逆・十惡・謗方などの罪をば、悉く滅除するを得、現世の所求、皆得ん云云」とある。

この傳の云ふ所を以て、彼の「小無量壽經に出づ」と云ふのを考へると、かの經の一部別出の意味でなくして、小無量壽經の意によつて出來たことを示すものではなからうか。それにしては求那跋陀羅が重ねて譯したといふ文を如何見るべきか。

法聚を説きたまひ、當に未來に於て、大に衆生を利益し安樂ならしめたまふべし」と。

佛の言はく「如來の法聚は、常住にして斷ずることあらず、一切智者は、知つて而も爲さず。我れ無量劫を經るあひだ、勤苦して智光を積集し、今此の經をば説く。此の正法は、日のごとく、諸の衆生の爲に、大明照を作し、德譽普く一切智海に流れん。能く心を調して、流注する者の爲に説きぬ。此の經所在の處、または讀誦解說せんに、諸天鬼神、阿修羅・摩睺羅伽など、咸悉く擁護し、皆來つて禮拜し、水・火・王・賊等の怖れも、皆害する能はざらん。

「諸比丘、今より已往、不信のもの前に、此の經を説くこと勿れ。經の過を求めん者にも、慎んで之を示す勿れ。尼乾子、尼乾部の衆、諸の外道の中に於ても、亦之を説くこと勿れ。恭敬渴請せざるものにも、亦説を爲す勿れ。若し我が教に異して、法事を虧損せんには、此の人則ち如來を虧損すとは爲す。

「諸比丘、若し禮拜して、此の經典を供養する者有らば、應當に是の人を恭敬し供養すべし。斯の人は則ち如來の藏を持すとは爲すなり」と。

爾の時、世尊、偈を説いて言はく、

「當に勇んで塵累を超え、

死の軍衆を除滅せんこと、

法を持し、禁戒を奉じ、

以て生の流轉を棄てんに、

佛、此の經を説き已りたまふに、賢護勝上童真、大藥王子、并に諸の比丘、菩薩摩訶薩、天人、阿修羅等の、普き大會の衆は、佛の所説を聞いて、歡喜奉行したりき。

大乘顯識經終

大乘顯識經卷下

勤めて佛の正教を修し、

象の葦蘆を踏まんが如くなるべし。

專精にして虧怠する勿れ、

諸苦の有の邊をば盡さん」と。

【三〇】一切智者云云、異譯には、「一切智者に非ずんば、此の眞實體を知ること能はず」と云へり。

【三一】讀、麗本請に作るも、今三本に依る。

【三二】尼乾子、尼乾陀若提子 (Migamatta jhāṇi putra) の略、離繫と譯す。六外道の一とせらる。普通尼乾子と云へば、尼乾の徒衆を指すも、今は次に尼乾部衆とあれば、尼乾子は部主、部衆はその門徒を云ふなるべし。

賢護、復、佛に白して言はく「請ひまつる所有らんと欲す、唯願はくは、聽許したまはんを」と。佛の言はく「汝の怖望するが如く、汝の所問を恣にせよ」と。

賢護、佛に白して言はく「世尊、云何が積と爲し、云何が陰と爲し、云何が身の不遷とは爲す」と。

佛の言はく「賢護、智界と見界と意界と、無明界と、此の四界を以て、和合して身をば成するなり。四界の境の識、是を名けて積とは爲す。

「衆とは謂はく、六界・六入なり、六入の境は、三界の因、二入の因なり、即ち鬚髮毛爪、皮肉膿血、涕唾黄痰、脂髓液、手足面目の大小支節など、和合崇聚する、之を名けて衆と爲す。猶し穀豆麻麥などの如く、積集聚貯して高大を成す、之を謂つて衆とは爲す。

「其れ地水火風空識を、名けて六界と爲し、眼耳鼻舌身意を、名けて六入と爲し、色聲香味觸法を、六入の境とは名く。即ち貪瞋癡をば、三界の因と名け、又風・黄・痰を、亦三因と名く。二入とは戒と信となり。又二の因有り、捨と施とを謂ふ。又二因有り、進と定とを謂ふ。又二因有り、善と不善とを謂ふ。

「其れ受想行識の此の四をば、無色陰と名く。受とは謂はく、苦樂等の相、及び不苦不樂の相を領受するなり。想とは謂はく、苦樂の相を知るなり。行とは謂はく、現に作意及び觸を念するなり。識とは是れ身の主にして、遍く諸體に行き、身にして爲す所有らば、識に由らざるは莫きなり。

「不遷とは謂はく、身と語と意と淨くして、道果を證獲するなり。此の人死し已れば、識は有の陰を棄て、重ねて有を受けず、諸趣に流れず、極樂にして遷る。復重ねて遷らざる、是を不遷とは名く」と。

是に於て、賢護と大藥王子とは、佛の雙足を禮し、白して言さく「世尊、佛は一切智もて、此の

【三】 不遷、異譯には移に作る。

【三】 無の字、四本共に無し、聖語藏本に依つて加ふ、異譯にも無明を擧げたればなり。

【三】 崇、あつまる。

【三四】 風等、異譯には、風、黄白痰、涕唾を擧ぐ。

す、業報の盡くるに非ずんば、苦の身を捨てず。

「飢渴の苦逼れば、便ち園林の花果敷榮し、廣博に翠茂せるを見、見已つて喜笑し、互に相謂つて「此の園は翠茂し、清風涼美なり」と言ひ、衆急いで園に入り、須臾のあひだ、暫く樂しむに、樹葉花果は、咸刀劍を成じ、罪者を斬截し、或は中に身を破り、分つて兩段と爲し、或は大に叫呼して、四面に馳走するに、獄卒群り起つて、金剛の棒を執り、或は鐵棒・鐵斧・鐵杖を執り、脣を嚙んで瞋怒し、身より火焰を出し、罪者を斫棒し、遮して出でしめざるなり。

「斯れ皆、己が業もて、是の如きの事をば見るなり。獄卒は罪者の後に隨ひ、罪者に語つて云ふ「汝何處にか去る。汝此に住すべく、復、東西して、何よりか逃竄せんと欲する勿れ。今此の園は、汝の業もて莊嚴したるところなれば、離るるを得べきや不や」と。

「是の如く、大藥、地獄の衆生は、種種の苦を受け、七日にして死して、還地獄に生ず。業力を以ての故に、遊蜂の花を探り、本處に還歸するが如し。罪業の衆生、應に地獄に入るべきもの、初めて死する時、死の使の來るを見、繫項驅逼して、身心大に苦しみ、大黑闇に入り、劫賊に執捉せられて將に去らんとするが如く、是の如きの言を作さん「訶々、禍なる哉、苦しい哉。我れ今、閻浮提なる、種種の愛好する親屬知友を棄てて、地獄に入る。我れ今、天の路を見ずして、但だ苦事を見るに、蠶の絲を作り、自ら纏ひて死を取るが如く、我れ自ら罪を作し、業の爲に纏縛せられ、羅索を項に繫け、牽曳驅逼せられて、將に地獄に入らんとす」と。賢護、罪業の衆生、地獄に生る者の苦相是の如くなり」と。

爾の時、賢護と大藥王子とは、是を説きたまふを聞き已り、身驚き毛豎ち、俱に起つて合掌し、是の如きの言を作せり「我等今、俱に佛に歸依して、救護を垂れたまはんことを請ふ。願はくは今、此の開法の功德を以て、未だ有流を脱せず、生死の輪に處るも、三塗に落ち、地獄に入らざらん」と。

大藥、佛に白して言はく「云何がして識は地獄に生ずるや」と。佛の言はく「大藥、惡業を行じたる者、地獄に入る。汝當に諦に聽くべし。大藥、此の中の衆生、不善根を積まんに、命終の時、是の如きの念を作す「我れ今、此に於て身死し、父母親知所愛を棄捨すること、甚大の憂苦なり」と。諸の地獄を見、及び己身の、應に入るべき者を見るに、足上に在り、頭倒にして下に向くを見、又一處を見るに、地は純ら是れ血なり。此の血を見已り、心に味著する有り、味著の心に縁つて、便ち地獄に生じ、腐敗せる惡水臭穢の因力もて、識は其の中に託すること、譬へば糞穢の臭處には、臭酪・臭酒などの諸臭の因力もて、蟲の其中に生ぜんが如くなり。地獄に入り、臭物に託して生ぜんこと、亦復是の如くなり」と。

賢護勝上董眞は、合掌して佛に白して言さく「地獄の衆生は何の色相をか作し、身復云何」と。佛の言はく「大藥、其れ血地を愛して、地獄に生るる者は、遍身に血光あり、身は血の色の如く、湯隍（二九）に生ずる者は、身黑雲の如く、乳湯河（三〇）に生ずる者は、身に斑雜の種種の色を作せるを點じ、體極めて軟脆にして、猶ほ貴樂せる瓔珞の身の如し。其の身の大きさ、八肘の量に過ぎ、鬚髮身毛は、並に長く垂曳し、手足面目は、駭曲して全からず。閻浮提の人、遙に見んも便ち死せん」と。

大藥、佛に白して言さく「地獄の衆生は、何を以て食と爲すや」と。佛の言はく「大藥、地獄の衆生は、食に少しの樂も無く、惶懼馳走し、遙に鋒銅の赤き汁を見ては、意に是れ血なりと謂ひ、衆奔つて之に趣く。又聲有つて「諸の飢有る者、速に來つて食すべし」と呼ばんに、便ち走つて彼に向ひ、至り已つて住し、手を以て口に承くるに、獄卒熱き銅の汁を以て、手掬の中に寫し、之に通つて飲ましむるに、銅汁腹に入り、骨節爆裂し、舉身に火を起すなり。

「大藥、地獄の衆生所食の物は、唯苦痛を増すのみにて、少しの安樂も無し。地獄の衆生、苦痛する是の如くなれども、識は之を捨せず、亦毀壞せず。身は骨の聚の如くなれども、識は止つて離れ

【二九】湯隍、宋本寶積經百十
一に依れば、毘羅尼に作り、
難度と註したり。河名なり。
【三〇】乳湯河、同上に依れば
灰河とあり。

「大藥、火未だ出でざれば、火相も現れず、亦暖の觸無く、諸相も皆無きが如く、是の如く、大藥、若し未だ身有らざれば、識受想行も、皆現れざるなり。大藥、日輪の光明、照曜するを見るも、而も諸の凡夫は、日の體を見ず、是れ黒なるや、是れ白なるや、黄白なるや、黄赤なるやをば、皆知る能はず、但だ照熱の光明、出沒し環運するなど、諸の用事を作すを以て、日有るを知るのみ。識も亦是の如く、諸の作用を以て識有るを知るなり」と。

「大藥、佛に白して言はく「云何なるをか識の作用とは爲す」と。佛の言はく「大藥、覺を受くると想と行と、憂苦惱を思すると、此を識の作用とは爲す。復、善不善の業有りて、熏習するを種と爲し、作用して識を顯はすなり」と。

大藥、佛に白して言はく「云何がして識は身を離れ、便ち速に身を受くるや。識の故身を捨てて、新身を未だ受けざる、爾の時に當り、識は何の相をか作す」と。

佛の言はく「大藥、丈夫有り、長臂勇健なるが、堅き甲冑を著け、馬の疾きこと風の如くなるに、乗つて以て陳に入らんに、干戈既に交はり、心亂れて馬より墜つるも、武藝捷習したれば、還即ち跳り上らん。識は身を棄てて速に即ち身を受くること、亦復是の如くなり。又怯なる人、敵を見て怖懼し、馬に乗つて退走せんが如く、識も善業に資けられ、天の父母、同座にして坐するを見、速に彼に託生すること、亦復是の如くなり。

「大藥、汝問へる所の如く、識は故身を棄て、新身を未だ受けざる、爾の時に當つて、識は何の相をか作すとならば、大藥、譬へば人影の、水中に現するに、質の取るべき無きも、手足面目、及び諸の形狀など、人と異らざれども、體質・事業は、影中に皆無く、冷無く熱と及び諸の觸とも無く、亦疲乏せる肉段の諸大も無く、言の聲、身の聲、苦樂の聲も無きが如し。識の故身を棄て、新身を未だ受けざるや、相も亦是の如くなり。大藥、是れ善業に資けられて、諸天に生ずる者なり」と。

「便即ち旋返して、安慰親知せん」とて、憂惱せしめず、「有流は法爾として、生ずれば必ず當に死すべきなり、分別を以て、苦惱を生ずる勿れ」と。

「大藥、善業の人、命終に臨むの時、布施を好樂し、種々の伽陀、種種の頌歎、種々の明句もて、種々に正法の教を稱説し、睡れるが如くにて睡らず、安隱に壽を捨つるなり。將に壽を捨てんとする時、天の父と天の母とは、同じく一座に止るに、天母の手中に、自然に花出づ。天母は花を見、顧みて天父に謂はん「甚だ福吉と爲す、希奇の勝果なり、天、今、當に知るべし、子慶の歎、時將に久しからじ」と。天母遂に兩手を以て、其の花を搖弄せん。花を弄ぶの時、命便ち終盡し、無相の識は、諸根を棄捨し、諸境の業を持し、諸界を棄捨し、諸界の事を持つて、遷つて異報を受けんこと、猶し馬に乗るもの、一を棄てて一に乗るが如く、日の光を愛引するが如く、木の火を生ずるが如く、又月影の澄清の水に現するが如くなり。

「識の善業に資けられ、遷つて天の報を受くること、脈風の移るが如く、速に花内に託す。天父と天母とは、座を同じうして之を視る。甘露の欲風、花を吹くこと七日なるに、寶璫もて身を嚴り、曜動炫燦として、天童朗潔に、天母の手に現はれん」と。

大藥、佛に白して言はく「世尊、無形の識は、云何がして、因縁の力を假つて、有の形を生ずるや。云何がして有形は、因縁の内に止るや」と。

佛の言はく「大藥、木の和合相觸して火を生ずるに、此の火は、木の中に求むるも得べからず、若し木を除けば、亦火をも得べからず、因縁和合して火を生ずるにて、因縁具せざれば、火即ち生ぜず、木等の中に、火の色相を尋ぬるも、竟に見るべからず、然も咸火は木の中より出づるを見るが如し。是の如く、大藥、識は父母の因縁和合するを假つて、有形の身を生ずるも、有形の身中に識を求むるも得ず、有形の身を離れて、亦識の有ること無し。

【三】有流、四流の一、有は生死の果報不亡の義。上二界（色・無色）の一切の諸惑の爲に、漂流して息まざれば流と名く。

大藥の言はく「世尊、柔妙の識は、云何ぞ龜鞭なる色の中に穿入するや」と。佛の言はく「大藥、水體は至つて柔かなれども、激流・懸泉は能く山石をも穿つ。意に於て云何、水と石との質の鞭軟如何ぞや」と。大藥の言はく「世尊、石質堅韌なること、猶し金剛の如く、水質は柔軟にして、諸の樂觸を爲す」と。「大藥、識も亦是の如く、至妙至柔なるも、能く剛韌なる大身の色をば穿ち、遷入して報を受くるなり」と。

大藥、復、佛に白して言さく「世尊、衆生は身を捨てて、云何がして諸天の中に生れ、乃至云何がして地獄等の中に生るるや」と。佛の言はく「大藥、衆生臨終の時、福業資すれば、本の視を棄てて、天の妙視を得、天の妙視を以て六欲天を見、爰に六趣に及んで、身の搖動するを見、天の宮殿、歡喜園、雜花園等を見、又諸天の蓮華殿に處つて、麗妓侍遊し、笑譚嬉戯し、衆花もて耳を飾り、嬌奢耶を服し、臂印環釧もて、種種に莊嚴し、花常に開敷して、衆具備に具はるを見、天と天女と、心便ち染戀して、歡喜意に適ひ、姿顔舒悅して、面蓮花の如く、視ること錯亂せず、鼻虧曲せず、口氣臭からず、目色明鮮にして、青蓮葉の如く、身の諸節際には、苦痛有ること無く、眼耳鼻口に、又血の出づること無く、大小の便利を失せず、毛驚いて孔現ぜず、掌は死せるがごとく黄ならず、甲は青黒ならず、手足は亂れず、亦卷縮もせず、好相顯現するを見ん。

「また虚空中には、高大の殿有り、彩柱百千あつて、彫麗列布し、諸の鈴網を垂れたるが、風の吹拂するに和して、清音悦美なり。種種の香花もて、寶殿を莊嚴し、諸の天の童子は、衆寶もて身を嚴り、殿内に遊戯するを見、見已つて歡喜微笑し、齒の現はるること、君圖花の如く、目張開せず、亦合閉せず、語音和潤にして、身は極冷ならず、亦極熱ならず、親屬圍遶して、亦憂苦せず、日の初めて出づる時、當に其の壽を捨つべく、見る所明白にして、諸の黑闇無く、異香芬馥にして、四方に至り、佛の尊儀を見て、歡喜敬重し、見已つて親愛歡喜し、離辭も猶ほ暫く行くときの如く、

【二五】君圖花(Kunda)また君陀と寫すものなるべし。西方の花、鮮白無比なりと云はる。

【二六】離辭、分れの言葉。

蚊もん 蝮ひなの識と、寧ろ異有るや不ふや」と。

大藥の言はく「世尊、四龍と蚊蝮とは、其の識異ること無し」と。

「大藥、一小滴の 跋錯那婆も、四龍の口に入らんに、四龍便ち死せんが如し。意に於て云何。小滴の藥の毒と、龍の口中の毒と、何の毒か大とは爲す」と。大藥、佛に白して言はく「龍口の毒は大にして、小滴の藥毒は甚だ微少とは爲す」と。

「大藥、大身の衆生は、力九の象にも敵せん、微妙の識は色無く形無くして、量を分別すべきに非ざるも、業に隨つて任持すること、亦復是の如くなり。尼瞿陀の子は極めて微細なるも、之を種ゆれば樹を生じ、婆娑たる廣大の枝條百千ならんが如し。意に於て云何。其の子と樹とは、大小類するや不ふや」と。大藥の言はく「世尊、其の子と樹とは、大小相懸つて、藕絲の孔を、虚空界に比べんが如くなり」と。

「是の如く、大藥、樹は子の中に求むるも、得べからず、若し子に因らずんば、樹も則ち生ぜず、微細なる尼瞿陀の子は、能く大樹を生ず。微細の識も能く大なる身を生ずれど、識の中に身を求むるも、身は得べからず、若し識を除かんに、身は則ち有ること無し」と。

大藥、復、佛に白して言さく「云何ぞ金剛堅固の、壞すべからざる識は、危脆にして速に朽つる身内に止るや」と。佛の言はく「大藥、譬へば貧人の、如意の寶を得たらんが如し。寶の力を以ての故に、高宇に彫鏤し、妙麗の宮室あり、園林鬱茂し、花果敷榮し、象馬妓など侍し、資用の樂具も、自然に至らんも、其の人、後に好意の寶を失はんに、衆の資樂の具、咸悉く銷滅せんが如し。如意の神寶は、堅固眞牢にして、縦ひ千の金剛ありとも、毀壞する能はざれども、生ずる所の資用は、虛假無常にして、速に散じ速に滅す。識も亦是の如く、堅固不壞なるも、所生の身は、速に朽ち速に滅せん」と。

【三】 蝮、蚊なり。

【三】 跋錯那婆 (Vatsanabha) 寶藏經百十一卷、宋元二本には婆蹉那婆に寫し、牛樹子齊と註記したり。毒藥の名。

【四】 尼瞿陀 (Nyagrodha) 縱廣樹と譯す、その子微細、柳花子の如しとあり。

「善業にして資すれば、飲食衣服などの、内外の諸資、豐饒羨麗にして、手足端正、形容殊好に、屋室華侈にして、摩尼・金銀の衆寶盈積し、安寧快樂にして、歡娛意に適はん。當に知るべし、此を善業の相とは爲すを。」

「下賤に生るれば、邊地に貧窮し、資用闕乏して、他の業を憐羨し、飲食麁惡にして、或は食を得ず、形容弊陋にして、止る所卑下なり、當に知るべし、此を惡業の相とは爲す。猶し明鏡の、面の好醜を鑒すに、鏡像は質無くして、取るとも得べからざるが如し。是の如く識は、善不善の業に資せられて、人天の中に生れ、或は地獄畜生等の中に生る。大藥、應當に是の如く、業と識と和合して遷化するを見るべし」と。

大藥の言はく「世尊、云何ぞ微なる識は、能く諸根を持して、能く大身をば取るや」と。佛の言はく「大藥、譬へば獵者の、山林に入り、弓と毒箭とを持つて、香象を射るに、毒箭は血を穿して、毒は象身を運び、支體既に廢れて、根と境と同じく喪ひ、毒は要害を流れて、身色猶し淤血の如く、象を毒殺し已れば、便即ち遷化するが如し。意に於て云何、毒と象身とは、その多少大小は、比ぶるを得べきや不や」と。大藥、佛に白して言さく「世尊、毒と象身とは、多少大小、其の量懸殊して、對と爲すべからず、猶し須彌を芥子に比べんが如くなり」と。

「大藥、是の如く、識も此の身を棄つれば、以て諸根を取り、此の諸界を棄て、業に隨つて遷化すること、亦復是の如くなり」と。

大藥、復、佛に白して言さく「世尊、云何ぞ微細の識は、大身を任持して、疲倦せざる」と。佛の言はく「大藥、須彌山王は、高さ八萬四千由旬なるに、難陀・烏波難陀の二大龍王は、各遶ること三匝し、二龍大息すれば須彌を搖振し、内海中の水は、咸變じて毒を成ず。此の二龍王は、長大にして力壯なり。和修吉龍、德叉迦龍の二大龍王も、亦之と等し。意に於て云何。四龍王の識と、

【九】 難陀(Nanda)烏波難陀(Upananda)。
【一〇】 和修吉(Vasuki)九頭龍と譯す。
【一一】 德叉迦(Taksaka)多吉と譯す。

水を許與せざる無し。各業因を以て、苦・樂の報を受くるなり。

『大藥、應當に是を以て善惡を見るべし。空中の月に、白黒二分あるが如く、又生果の、火大に由つて増熟し、便ち色異なるが如し。是の如く此の身は、福の増に由るが故に、勝族の家に生れ、資産豐盈にして、金寶溢滿し、勝相顯盛にて、或は諸の天宮に生れて、快樂自在なり。斯れ皆善業の福相顯現せるなり。譬へば種子を、地に植うるに、果は樹の首を現はす如し。然も其の種子は、枝より枝に入つて、樹首に至るにはあらず。樹身を割析するも、亦子を見ず、人子を持って枝上に置くこと無く、樹は根を成ずること固く、種を求むるに見えず。

『是の如く、諸の善惡の業は、咸身に依るも、之を身に求むとも、亦業を見ざることに、種に因つて花有るも、種の中には花無く、花に因つて果有るも、花の中に果無く、花は果に増進するも、増進は見えざるが如し。

『身に因つて業有り、業に因つて身有るも、身の中には業無く、業の中にも身無きこと、亦復是の如くなり。花熟すれば落ちて、其の果乃ち現するが如く、身熟すれば謝殞して、業果方に出づるが如し。種子有つて、花果の因、具有するが如く、是の如く身有つてこそ、善惡の業因、備在す。彼の業には形無く、亦熟相も無きこと、人の身影の、質無く形無く、執持すべからず、人に繫著せず、進止往來するに、人に隨つて運動するも、亦影の身より出づるを見ざるが如し。

『業身とても亦爾り、身有り業有るも、業を見ず、身に繫著し、亦身を離れずして、而も能く業有ること、辛苦澁などの殊味の諸藥、能く濼ぎて一切の病を淨除し、身をして充悅し、顔色光澤あり、人之之を見んに良藥を服するを知らんが如し。藥味は取るべきも、熟功は無形にして、視んとするも見るべからず、執らんとするも得べからず。而も能く人を資けて、膚容を色澤あらしむ。業は形質無きも、能く身を資すること、亦復是の如くなり。

念を作す「此の屍は是れ我が大善知識なり、其の諸善業を積集したるに由るが故に、我をして今日の報をば獲しむるなり」と。

大藥、佛に白して言さく「世尊、此の識は屍に於て既に愛重有り、何ぞ託止せざる」と。佛の言はく「大藥、譬へば鬚髮を剪棄したらんが如く、烏光の香澤あるを見ると雖も寧ろ更に身に植ゑ、重ねて生ぜしめざるや不や」と。大藥、佛に白して言さく「不ず、世尊、已に鬚髮をば棄てつ。重ねて身に植ゑ、其をして更に生ぜしむべからず」と。佛の言はく「是の如く、大藥、已に之の屍を棄つれば、識も亦重ねて託し、報を受くべからず」と。

大藥、復、佛に白して言はく「世尊、此の識は冥冥・玄微にして、質の取るべき無く、狀の尋ねべき無し。云何ぞ能く、象等の大身の衆生を持し、身を縦くこと堅固なること、猶し金剛のごとくにして、而も能く壯夫の身に貫入し、力九象に敵して、而も能く之を持するや」と。佛の言はく「大藥、譬へば風大の、質無く形無くして、幽谷或は窟隙の中に止まり、其の出づるや暴猛、或は須彌を摧倒し、碎いて塵粉と爲さんが如し。大藥、須彌と風大と、色相如何」と。

大藥、佛に白して言さく「風大は微妙にして、質無く形無し」と。佛の言はく「大藥、風大は微妙にして、質無く形無し。識も亦是の如く、妙にして形質無く、大身も小身も、咸悉く能く持し、或は蚊身を受け、或は象身を受く。譬へば明燈の、其の焰微妙なるも、之を室に置くに、室の大小に随つて、衆聞咸除くが如し。識も亦是の如く、諸の業因に隨ひ、大小を任持するなり」と。

大藥、佛に白して言さく「世尊、諸業の相と性とは、彼復云何。何の因縁を以てか、顯現するを得る」と。佛の言はく「大藥、諸の天宮に生れんに、天の妙饌を食して、安寧快樂なる、斯れ皆業果の致す所なり。人の渴乏するや、曠野を巡遊し、一は清涼の美水を得、一は得る所無くして、渴乏の苦を受くるが如し。冷水を得ん者は、人持つて與ふる無く、渴乏を受けん者、亦遮障して、

【二】無、否定にして「非ず」と言はば解し易し。次の無亦然り。

なつて欲を生ずること、猶し 鑽燧の、兩木互に因となり、之に人の功を加へて、火の生ずる有るが如くなり。是の如く識に因り、及び男女の色・聲・香・味・觸等に因り、欲の生ずる有り。譬へば花を因として果を生ずるに、花の中に果無きも、果生じて花滅するが如し。是の如く身に因つて識を顯はすなり。身を循つて識を求むるも、識は見るべからず、識業の果生じて、身便ち滅に謝し、身の骨髓等の不淨の諸物、咸悉く銷散す。

「又種子の、將來の果の味・香・觸を持し、遷し植うるに生ずるが如く、識も此の身を棄つるや、善惡の業を持し、受・想・作意に、來生の報を受けんこと、亦復是の如くなり。又男女の愛欲もて歡び會し、分離して去るが如く、識業和合して、戀結愛著し、味玩貪悋なるも、報盡くれば分離し、業に隨つて報を受け、父母の因縁には、中陰に之に致す。業力を以て生じ、識は身の果を獲るなり。愛情と及び業とは、俱に形質無く、欲と色と相因つて、而も欲を生ず。是を欲の因とは爲す。

「大藥、云何が戒取の因を見るとならば、戒とは謂はく師所制の戒にして、不殺、不盜、不邪淫、不妄語、不飲酒等の行なり。取とは謂はく執取なり。是の戒は是の如き見を作し、是の戒を持するに因つて、當に須陀洹果、斯陀含果、阿那含果を得べく、是の因を以ての故に、勝有を獲。謂はく人天等の身を受くるなり。斯れ皆是れ有漏の善にして、無漏の善には非ず。無漏の善は、無陰熟の果なり。今此の戒取は、是れ有漏にして、之を種植せんに、識に於て、善惡の業を執り、識は淳淨ならず。煩惱の因の故に、熱惱の苦をば受く。是をば戒取の因を見るとは爲す。

「大藥、云何が識は、天身乃至地獄の身をば取るや」と。佛の言はく「大藥、識と法界とは、微妙の視を持し、内眼の所依に非ざるも、以て見の因と爲る。此の微妙の視は、福と境合して、天宮の欲樂嬉戯するを見、見已つて歡喜し、識は便ち繫著して、是の如きの念を作す「我れ當に彼に往くべし」とて、染愛戀念するを、有の因とは爲す。見已つて、故に身を棄屍の所に臥せ、是の如きの

【二】鑽と燧、たがねとひうち。印度の古は、この二を用ひず、専ら兩木を摩して火を起したるも、この活らきは後世の「たがね」と「ひうち」とに等しければ、今この名を用ひしならん。

所と爲るや、其の著ける體をば、身中に求めて見るを得べきや不いなや」と。賢護、佛に白して言さく「不しからず世尊、天等の鬼神の著く所となるや、其の著きたる體は、無色無形むしきむぎょうにして、身の内外に求むるも、皆見るべからず」と。

「賢護、其れ福勝の諸大天神の著く所と爲れる者は、即ち好香花を須もちひ、衆の名香を燒き、香美の飲食を、清淨に安置し、祭り解く供具、咸須く華潔なるべし。是の如くして此の識、福資の爲に、便ち尊貴・安樂の果を獲て、或は人王と爲り、或は輔相ほしやうと爲り、或は豪望貴重ごうぼうじゆうに、或は財富自在にして、或は諸の長と爲り、或は大商主だいしやうしゆと作り、或は天身を得て天の勝果を受けん。識福資を爲せるに由り、身に樂報を獲るなり。彼の福勝の天神の著ける所の如きは、勝妙の花香、香美の飲食を得て便やす即ち歡喜し、病者安隱びやうじやあんいんにして、今尊貴・豪富・自在を得。當に知るべし、皆是れ福資の識に由つて、身に樂果を獲つるなり。

「賢護、其れ富丹那等の、下の惡鬼神の著く所と爲れる者は、便ち糞垢・腐敗・涕唾ていだなどの諸不淨の物を愛すれば、此を以て祭り解くに、歡喜して病愈え、其の人、鬼神の力を以て、鬼神の欲に従ひ、不淨の臭朽・糞穢を愛樂す。識以て罪に資すること、亦復是の如く、或は貧窮びんきゆうに生じ、或は餓鬼、及び諸の穢を食する畜生の中、種種の惡趣に生じ、罪識を資くるに由り、身に苦の果を獲。

「賢護、勝上の天神、其れ體に著するや、無質無形むじつむぎょうにして、而も種種の香潔の供養を受く。識の福無形にして、勝樂の報を受くること、亦復是の如し。富丹那等下の惡鬼神、彼に著くことを爲さんに、便ち不淨穢惡の飲食を受け、識は罪業に資せられて、諸の苦報を獲ること、亦復是の如くなり。賢護、當に知るべし、識に形質なきこと、天等の鬼神所著の體の、供具飲食の獲る所好惡あるが如く、罪・福を資して苦樂の報を得るが如くなり」と。

大藥王子、佛に白して言さく「世尊、云何が欲の因を見るや」と。佛の言はく「大藥、互に因と

【二六】富丹那(Putana) 嗅餓鬼と譯す。

を垂れたまはんを」と。佛の大藥に告げたまはく「人の影像の、これはに現するが如くなり。此の像は、執持すべからず、有無辨すべきに非ず、芻洛迦の形の如く、渴愛の像の如し」と。

大藥王子、佛に白して言さく「世尊、云何が渴愛なる」と。佛の言はく「人、可意の色に對するに、眼根の之に趣くを、名けて渴愛とは爲す。猶し明鏡を持つて、己が面像を見るに、若し鏡を去れば、面像見えざるがごとし。識の遷運すること、亦復是の如くにして、善惡の業形と、識の色像とも、皆見るべからず。生首の人、日出づるも日没するも、晝夜も明闇も、皆悉く知らざるが如く、識の能く見る莫きこと、亦復是の如し。

「身中の渴愛は、受も想も見るべからず、身の諸大・諸入・諸陰など、彼は皆是れ識なり。諸有色の體、眼・耳・鼻・舌、及び身の色聲香味觸等、并に無色の體、苦樂を受くるの心など、皆亦是れ識なり。大藥、人の舌は、食物を得ては、甜苦辛酸鹹澁等を知りて、六味皆辨するに、舌と食物とは、俱に形色有れども、味は無形なるが如し。又身の骨髓肉血等に因つて、諸受を覺知するに、骨等は形有るも、受は形色無し。識の福非福の果を知ること、亦復是の如くなり」と。

時に賢護勝上童眞、佛の雙足を禮し、佛に白して言はく「世尊、此の識は福・非福を知るべきや」と。佛の言はく「善く聽け、未だ諦を見ずして、能く識を見ることあらず。識は視るべからず、掌中の阿摩勒果の如くには非ず。識は眼等の中には在らず。若し識にして、眼等の中に在らんに、眼等を剖破せんに、應當に識をば見るべければなり。

「賢護、恒沙の諸佛は、識の無色なるを見たり。我れ亦是の如く、識の無色なるを見る。識は凡愚の能く見る所には非ず、但だ、譬喩を以て、開顯すべきのみなり。

「賢護、識の罪福を知らんと欲すれば、汝今當に聽くべし、譬へば人有り、諸の天神、或は乾陀婆等、及び塞建陀等の、鬼神の著く所と爲れるが如し。賢護意に於て云何、其の天等の鬼神の著く

【三】芻洛迦。Chola と謂ふか。

【四】諸の天神云云、異譯には、譬如三人著陰鬼、或羊頭鬼、或乾闥婆鬼、或天神、と云へり。

【五】塞建陀 (Siddhanta)。童子天なりといふ。韋駄天をいふ。

何の色像をか作すや」と。佛の言はく「善い哉、善い哉、大藥、汝今問へる所、是れ大に甚深にして、佛の境界なり。唯如來を除いて、更に能く了するもの無し」と。

是に於て賢護勝上童眞、佛に白して言はく「大藥王子、問へる所甚深にして、其の智微妙、敏利明決なり」と。佛の賢護に告げたまはく「此の大藥王子は、已に毘婆尸佛の所に於て、諸の善根を植ゑ、曾て五百生の中に、外道の家に生れ、外道たりし時、常に識の義を思して「識とは云何、云何なるをか識とは爲すや」と。しかも五百生に、識の去來を決了する能はず、由緒をも知る莫かりしかば、「我れ今日、疑網を破し、開解を得しめんとは爲す」なり」と。

是に於て賢護勝上童眞、大藥王子に謂つて言はく「善い哉、善い哉、仁の今問へる所、微妙甚深なり。月實の問は、其の義淺狹にして、猶し嬰兒の、心外境に遊んで、内を知らざるが如くなり。正法は稀にのみ聞き、諸佛は遇ひ難し。佛の圓廣の智は、測るべき無き深慧なり、至妙の理は、應に専ら啓請すべきのみ」と。

時に大藥王子、佛を見まつつて、熙怡の顔容に悦ぶること、秋蓮の開けるが如く、踊躍歡喜し一心合掌して、佛に白して言さく「世尊、我れ深法を愛し、深法を渴仰して、常に如來の、般涅槃に入りたまひ、正法を聞かず、五濁の衆生の中に於て、愚にして知る所無く、善惡を知らず、善と不善、熟と不熟とを覺了する能はず、生死の苦趣に迷惑輪轉せんをば恐るるなり」と。

佛、大藥王子に告げたまはく「如來の正法は、遇ひ難く得難し。我れ往昔に於て、半伽他のために、山に登りて自ら墜ち、身命を棄捨して、正法を求めんと爲し、無量百千萬億の種種の苦難を経歴したりき。大藥、汝の稀望する所をば、皆恣に汝問へ。我れ當に汝の爲に、分別して解説すべし」と。

大藥王子、佛に白して言さく「唯然り、教を奉じまつらん。世尊、識の相は云何。願はくは開示

【三】伽他(Gāthā)。偈。

『月實、譬へば大吉善の蘇の如く、衆の良藥の味力を以て、熱功に和合したる、之を大吉善蘇と爲す。凡の蘇性を棄て、良藥の力を持て、辛苦・酸鹹・澁甘の六味もて、以て人身を資け、便ち人身の與に、色香味をば作す。識の此の身を棄て、善惡の業及び法界等を持して、遷つて餘の報を受けんこと、亦復是の如くなり。』

『月實、蘇の質は身の如く、諸藥和合して大吉善を爲すは、諸法諸根の和合して業を爲すが如く、衆藥の味觸、蘇を資成するは、業の識を資くるが如く、大吉善を服するに、悅澤充盛し、光色美好にして、安隱無患なるは、善の識を資けて、諸の樂報を獲るが如く、蘇を服すること法に違はば、顏容變惡し、慘として血氣の色無く、死土のごとく白きは、惡の識を資けて、諸の苦報を獲たらんが如くなり。』

『月實、吉善の寶蘇は、手足眼無きも、能く良藥の色香味力を取る。識も亦是の如くにして、法界の受、及び諸の善業を取り、此の身界を棄てて、中陰を受け、天の妙念を得、六欲天及び十六地獄を見、己が身の、足手端嚴にして、諸根の麗善なるを見、棄てたる所の屍を見て「此は是れ我が前生の身なり」と云ふ。』

『復、高勝の妙相と、天宮の種種の莊嚴——花果・卉木・藤蔓など蒙覆し、光明赫麗にして、新しき練金の如く、衆寶もて細節せる——を見る。彼此をば見已り、心に大に歡喜し、大に喜愛するに因つて、識便ち之に託す。此の善業の人は、身を捨てて身を受くるに、安樂にして苦無く、乘馬の者一を棄てて一に乘らんが如く、壯士の武略備具せるが、敵兵の至るを見、堅き甲冑を著け、驥駃に乗策して、去る所畏無きが如く、識の善根を資け、出入の息を棄て、界を捨てて身に入り、遷つて勝樂を受くること、亦復是の如く、梵身天より爰有頂に至るまで、其の中に生ずるなり』と。二、爾の時、會中に大藥王子あり、座より起つて合掌し、佛に白して言はく『世尊、識は身を捨てて

【四】 中陰、また中有といふ、此に死し彼に生るる中間に於て、受くる陰形をいふ。

【五】 六欲天、欲界なる四天王、忉利、夜摩、兜率、樂變化、他化自在の六天。

【六】 十六地獄、八寒八熱の地獄。

【七】 驥、駿足の馬。

【八】 策、むちうつなり。

【九】 梵身天(Brahmakāya)また梵樂天といふ、欲界

初禪天の第一なり。

【一〇】 有頂。akaniṣṭha 天をいふ、色界十八天の最上なり。

【一一】 宋元明三本に在つては、以下の文が寶積經第三十九會の二なり。

卷の下

爾の時、會中に、月實勝上童眞といへる有り、座より起つて合掌し、佛に白して言さく「世尊、云何が色の因を見るや。云何が欲の因を見るや。云何が見の因を見るや。云何が戒取の因を見るや」と。

佛、月實に告げたまはく「智あるもの、智の境を見、愚なるもの、愚の境を見る。智者は諸の妹麗善色を見るも、穢惡にして、唯是れ肉段・筋骨・膿血、大脈小脈、大腸小腸、膈液・膈膜、腎心・脾膽、肝肺・肚胃、生藏・熟藏、黃痰・涕唾、髮鬚毛爪、大小便利などをば、薄皮之を裹み、不淨汚露にして、畏るべく惡むべきをば了知す。

「凡そ有らゆる色は、皆四大より生じ、是を色の因とは爲す。月實、父母生身の如きは、身の堅硬なるものを地大と爲し、流潤なるものを水大と爲し、暖熱あるものを火大と爲し、飄動するを風大と爲し、覺知する所有り、念の聲香味觸等の界に及ぶは、斯れ皆識とは爲す」と。

月實童眞、復、佛に白して言さく「世尊、將に死せんとするの時、云何が識は身を捨て、云何が識は身より遷り、云何がして識は、今此の身を捨つべきを知るや」と。

佛、月實に告げたまはく「衆生は業に隨つて報を獲、識の流相續して、身を持して絶えず、期畢り報終れば、識は身を棄捨し、業の遷るに隨つて受く。譬へば水と乳との和したるをば、煎るに火熱の力を以てせば、乳と水と膩とは、各各分散するが如し。

『是の如く、月實、衆生の命盡くるや、業力を以ての故に、形骸と識と及び諸入界とは、各各分散し、識は所依と爲つて、法界を取れると、法界の念、并に善惡の業とを以て、遷つて他の報をば受くるなり。』

【一】實積經卷第一百、賢護長者會第三十九の二に在つては、麗本は本經と全く同じ、即ち本經の文を以て、彼の會の二としたり。宋元明三本は然らず。

【二】月實、隋譯には蘇摩浮坻と寫し、眞月と譯せり。

【三】云何が云云、隋譯によれば、云何が云、欲取、見取、戒取を觀すべきやを問へるなり。

他等の種種の果、或は辛く或は苦く、或は酸く、或は甜く、或は鹹く、或は澁くして、味力各別、消熱に資する所、其の功一ならざるが、果の壞し已るに及び、味力は種に隨ひ、遷り化して生ずるが如く、是の如く識の種も、其の所遷に隨つて、念を受けて善惡咸悉く之に隨ひ、此の身を棄てて餘の報身を受くるを知る、故に名けて識と爲す。善惡の業を知り、業の我に隨ふを知り、我の業を持し、遷化して報を受くるを知る、故に名けて識とは爲す。身の爲す所をば、咸悉く之を知る、故に名けて識とは爲す。

『譬へば風大の、形の取るべき無く、質の持すべき無きも、因縁を以ての故に、諸の事業を作し、風大有つて、冷を持し熱を持し、香を運び臭を運び、林木を搖振し、或は鼓扇摧擊するを表するが如く、是の如く、識も形質無く、視聽の取る所に非ざれども、因縁を以ての故に、識の相具顯し、識身を持するに由り、身は苦樂と、光色充盛なると、行來進止し、言笑歡憂すると、事業照著するとを知る。當に知るべし、識有るを』と。

生長成熟す。

『是の如く、識有るに由るが故に、生類に隨遷して、即便ち覺有り、覺に由つて受有り、善惡の業を持して、種種の身をば受くるなり。又蜂の、花に止つて、愛樂戀著し、花味を啜吮して、以て自ら資養するが如し。蜂は此の花を棄てて、更に餘の花に處り、或は香しきを棄てて臭きに入り、或は臭きを棄てて香しきに入るに、其の所在に隨つて、自ら愛戀し、貪著を結ばざる莫し。識も亦是の如く、福業を以ての故に、諸の天身を獲けて、勝樂の果を受け、或は天身を棄つ。惡業を以ての故に、地獄の報を獲て、衆の苦果を受け、輪迴遷轉して、種種の身とは爲るなり。』

『識は 舊金・紅藍・芬陀利等は、其の子皆白く、其の子を破るも、中には芽花を見ず、異色をも見ず。之を地に種うるに、水の潤液を以て、便ち芽等有り、時に順つて滋長し、花果敷榮して、或は赤、或は白など、種種の色あるも、色と芽等は、子の中に在らず、然も子を離れては、皆生ずるを得ず。』

『識の、身を棄て已るに、肉身の容貌、諸根、諸入など、識の中には見えす、因縁和合するや、識は妙視・妙聞、聲・觸・味法及び念を以て入り、已に造る所の善惡等の業を知つて、以て身の報をば取ること、蠶の繭を作り、自ら作つて自ら纏ひ、中に於て遷化するが如く、識も亦是の如くなり。』

『識は自ら身を生じ、還自ら纏裏し、自ら身を棄捨て、更に餘の報を受く。種有るに由るが故に、色・香・味有り。識の、身を棄捨するや、其の遷る所に隨ひ、諸の根・境界、受及び法界は、皆悉く之に隨ふこと、如意珠の、其の在る所に隨つて、樂具皆隨ふが如く、日の在る所に、光明皆隨ふが如し。識も亦是の如く、其の遷る所に隨ひ、覺と想とを受け、及び法界等も、皆悉く之に隨ふなり。』

『識の、身を棄捨して、一切の性を攝するや、色因となつて身を爲し、骨肉無きの身なるも、諸根有るが故に、妙念を受くる有り、善惡を取ることを知る。棗・石榴・菴羅・菴勒・菴勒・鼻螺・渴堅・劫必

【五】 啜吮、ナムリすふ。

【五九】 舊金(Kunkuma)。草の名、其の花香しければ以て香と爲すべし。

【六一】 菴羅(Amra)。
【六二】 菴勒(Amalā)。

「識の身を生ずるや、身の支體しだいに通じ、識の止る所を求むるも、其の所ところを得る無し。若し識を除け身も則ち生ぜず。樹果じゆくわの熟したるものは、將來に樹の種子と爲るに堪へ、不熟ふじやくのものはしからざるが如く、是の如く、報熟すれば身死しんしして、識の種便ち現す。

「識に因つて受有り、受に因つて愛有り、愛に繋著けいやくすれば、便ち念を生ず。識は念を攝取さつしゆし、善惡の業に隨ひ、風大と并に父母を知念し、因縁合對すれば、識便ち之に託す。人の面影の、鏡に現するが如く、淨じやうに非ず、明に非ざれば、面像めんざうは現ぜず。鏡明なれば、面對するに、影像乃ち現するも、鏡中の像には、受も無く念も無く、人身の屈伸・俯仰し、開口・談諱し、行來進止するに隨ひ、種種に運動す。

「賢護、影像の現するは、誰の力なる」と。賢護、佛に白して言さく「是れ人の力なり、面有るに由るが故に、面の影有りて、影像の色は、面の色の如く、根の具・不具も、咸悉く面の如くなればなり」と。

佛の言はく「面は影の因たり、鏡は影の縁たり、因と縁と和合する故に、影の現する有り。識てふ因に由るが故に、受・想・行及び諸の心所有り、父母を縁と爲して、因と縁と和合して、身の現する有ること、彼の身と鏡との如くなり。鏡中の影は、身去れば影も滅し、身に影像を持すれば、或は別して水等の中にも現す。識の此の身を棄つるや、善・惡の業を持し、遷つて餘の報を受くること、亦復是の如くなり。

「又 尼瞿陀五五に・烏曇婆等五六にの種子の、小なりと雖も、能く大樹を生じ、樹亦子を生じ、子は故の樹を棄てて、更に新樹を生じ、故樹は久しきを経て、質力衰微し、味液銷竭し、乾枯腐朽せんが如し。是の如く諸の小生類は、其の識、身を棄つるや、己が業に乗じて、或は種種諸類の大身を受けん。又大麥・小麥・烏麻五七に、菘豆及び摩沙等の種種の子實の如きは、皆種を以ての故に、芽莖・花實など、

【五五】 尼瞿陀(Nyagrodha)。
 慧琳によれば、この樹、地を去る三丈餘、その子は微細にして柳花子の如しと。

【五六】 烏曇婆(Uttambary)。
 靈瑞と譯す。

【五七】 菘、かりやす。

賢護、佛に白して言はく「唯願はくは開示したまはんを」と。佛、賢護に告げたまはく「夢中に見るとは、内の眼所たり、是れ慧の分別にして、肉眼も見るには非ず。其の内の眼所は、念力を以ての故に、盲者の夢の中に、須臾に現じ、復念力を以て、覺して之を憶するなり。識の内色たる、亦復是の如くなり。」

「復次に賢護、身死すれば識の遷ること、猶し種子の、棄てられて地中に在るが如く、四大に攝持せられて、苗莖枝葉、漸次に遷り化するが如く、識は念の爲に、善・不善等の四法の攝持を受け、身を棄て、遷化すること、亦復是の如くなり」と。

賢護、佛に白して言さく「世尊、云何ぞ善不善の法は、識を攝持するや」と。佛の言はく「賢護、譬へば妙頗梨寶は、處く所の物の、若しは黒く、若しは白きに隨ひ、寶の色も、物に隨つて、白と成り黒と成るが如く、善不善の法、識を攝持すること、亦復是の如く、攝持する所に隨つて、善不善を成じ、遷化して報をば受くるなり」と。

賢護、復、佛に白して言さく「此の身は云何ぞ、識を稟受するや」と。佛の言はく「賢護、此の識は、積無く聚無く、亦生長する無し。譬へば芽の生ずるや、種不變にして生ずるに非ず、亦種壞して生ずるにも非ざれども、然も芽の生ずる時、種は則ち變毀するが如し。賢護、意に於て云何。其の芽、在止する所は何處なる。子なるや、枝なるや、莖なるや、柯なるや、葉なるや、樹頭に止るや」と。

賢護、佛に白して言さく「不らず、世尊、芽は止る所無し」と。「是の如く、賢護、識の身に在るや、止るに處所無し、眼に非ず、耳・鼻・舌・身等にも非ず。種の芽を生ずる時は、識の微覺の如く、乃至花の五四合を結ぶ時は、識の受含有るが如く、開花の發する時より、果を結ぶに至るまでは、識の身を有つが如し。」

【五四】 芽、三本に依る、麗本牙に作る。

【五四】 合、麗本合に作るも、今三本に依る。

故に、香油内に遷つて、油香澤を成するが如し。鵝鶉の子の識の、卵に入出すること、亦復是の如く、瞻蔔香の、油内に遷るが如く、識の遷り運ること、日の光を流すが如く、摩尼の照らすが如く、木の火を生ずるが如く、又種子の如し。之を地に種うるに、體地中に化して、芽苗莖葉など、備に外に顯はれ、白・不白・赤等の、雜色種種の花を生じ、種種の力味成熟す。爲す所の種種の差別は、同一の大地、等しく四大を資くるも、各其の種に隨つて、生ずる所便ち異ればなり。是の如く一識法界は、一切生死の身——或は黒、或は白、或は黄・赤等と、淳和・顯暴などの種々の殊品ある——を生ずるなり。

「賢護、識は手足無く、支節・言語無けれども、法界中の念力強大なるに由り、衆生の死する時、識は此の身を棄て、識は念力の與に、來生の種と爲る。即ち識を離れては法界を得ず、法界を離れては亦識を得ず。識は風大、微妙の念界、受界・法界と和合して遷るなり」と。

賢護、佛に白して言さく「若し是の如くならば、云何が世尊、識をば無色とは説きたまふや」と。佛の言はく「賢護、色には二種有り、一に内、二に外なり。内とは眼識を謂ひ、眼をば則ち外と爲す。是の如く、耳識を内と爲し、耳をば則ち外と爲す。鼻識を内と爲し、鼻をば則ち外と爲す。舌識を内と爲し、舌をば則ち外と爲す。身識を内と爲し、身をば則ち外と爲す。

「賢護、生盲の人の、夢に美色、手足面目の形容殊麗なるを見、便ち夢中に於て、大愛悅を生じ、睡より覺め已るに及んで、冥として見る所無きが如し。夜盡きて晝明く、人衆の聚會するや、盲者遂に夢中の樂事を説きて、「我れ麗人の、姿容殊絶なる、園觀の華茂り、人衆百千、嚴飾嬉戲し、肌膚光澤あり、肩・膊緊滿し、臂長くして圓く、猶し象鼻の如くなるを見たり。我れ夢中に、大快樂を獲、適に心喜歡したり」と。賢護、此の生盲の人、未だ會て物を見ざるに、云何ぞ夢中に、能く色を見るや」と。

【五〇】 同一の云云、異譯、而彼境界は一、水火風大亦然と云へり。

【五一】 是の如く云云、此等有二一法界、二切諸有中、成成就身、然後生ニ或黒…と云へり。

【五二】 譯、かたぼね。

惡業の衆生及び諸の不淨、死屍臭穢ししきうじなど、偏ずるところ無く等しく照らして、諸惡の爲に汚染おぼせられざるが如く、識も亦是の如く、猪狗の食じゆ、不淨の類、諸惡趣の身に處りと雖も、而も彼の爲に染汚おぼせられざるなり。

「賢護、識の、此の身を捨し、善惡の業に隨ひ、遷つて餘の報を受くること、譬へば風の、大に深山やま蓮谷れんこくより出で、瞻蔔あざみ衆香しゆかうの林に入らんに、其の風便ち香しく、荻穢あざみ死屍ししなどの臭惡穢汚しつの所を經んに其の風便ち臭くさきが如し。若し風に於て、香と臭とに俱に至らば、風則ち香臭並び兼ねて、盛なる者先づ顯れん。風は形質無く、香臭も無形なり。然も風は香臭を持し、之を遠くに遷す。識の此の身を棄て、善惡の業ごふを持して、遷つて餘の報を受くること、亦復是の如く、猶し彼の風の、大に物を持して、香臭を他所に致いたさんがごとし。

「又人の、夢に衆の色像しきざう、種種の事業を見て、而も自ら知らず、安眠あんみんして臥するが如く、福徳の人、命盡きて識の遷ること、亦復是の如く、安隱あんいんにして覺せず、夢に遷化して、恐懼くわいする所無けんが如し。

「識の遷り出づるや、喉口こう及び諸の竅くわうけつ穴けつに由らず、所從はらを測るべき莫く、徑戸けいこを知るべき莫きなり」と。

爾の時、賢護勝上童眞じやんしん、佛足を頂禮ちやうらいし、佛に白して言はく「世尊、鷄鵝けいご等の子は、其の卵未だ熟せざるや、周匝しゆさつ細密さいみつにして、識何いしよりか入らん。子の卵中に死するや、卵殼らんけつ破れされば、隙あひら無く窳あな無きに、識何いしよりか出づる」と。

佛の言はく「賢護、譬へば烏麻うまを瞻蔔あざみの花もて熏するに、其の油香美しゆかうみにして、瞻蔔油あざみあぶらと名け、凡麻油あざみあぶらとは、好惡かうお殊隔しゆかくするも、油は先に香無く、花を以て熏種くんしゆして、油遂しゆに香を成じたるも、香は麻を破せずして入り、亦麻を破せずして出で、復形質を油内に留止りゅうしする無し。但だ因縁力いんえんりきを以ての

【四八】瞻、明本に依る、屍本は薙はに作り、宋、元は占あに作る。瞻蔔は香樹の名。

【四九】窳、あな。

ればなり。知覺と想念とは、同じく識を包み、苦を知り、樂を知り、惡を知り、善及び善惡の境を知る、故に名けて識とは爲す。

『汝所問の如く、云何ぞ識は此の身を離れて、餘の報を受くるとならば、賢護、面の像をば、之を鏡に現するが如く、印の文をば、之を泥に顯はすが如し。譬へば日出でて、光の及ぶ所、衆の闇咸除き、日没すれば光謝りて、闇便ち故の如くなるが如し。闇は形質無く、常にも無常にも非ずして、能く其の處を得。識も亦是の如く、質無く形無きも、受想に因つて顯はる。識の身に在ること、闇の體の如く、見るべからず、執持すべからざるを視る。母の子を懷きて、自らはれ男なるや、是れ女なるや、黒・白・黄色と、根の具と不具、手足耳目の類と不類とを知る能はざれども、飲食の熱、其の子を刺せば、便ち動いて、苦痛を覺知するが如し。

『衆生の來去し、屈伸し、視瞬し、語笑し、談説し、擔運負重して、諸の事業を作すや、識相具に顯はるゝも、而も識の所在を知る能はず、身中に止れども、其の狀を知らず。

『賢護、識の自性は、遍く諸處に入るも、諸處の爲に染汚せられず、六根・六境・五煩惱陰には、識遍く之に止るも、其の爲に染せられず。此に由つて識の專用を顯はす。

『賢護、木の、機關を一所に繫執したるが、種種の業を作し、或は行走し騰躍し、或は跳擲戲舞するが如し。意に於て云何、機關の作す所、是れ誰の力なる』と。賢護、佛に白して言さく「智慧狹淺にして、決了する能はず」と

佛の言はく「賢護、當に知るべし、皆是れ作業の力なるを。作業は無形なるも、但だ智の運るあり。是の如く、身の機關は、識の力を以て、諸の事業を作す。仙通・乾闥婆、龍神・人天、阿修羅等の種種の趣の業も、咸悉く之の識に依つて、能く身を生ずること、工作の機關の如し。

『識は形質無きも、普く法界の智力を持して具足し、乃至能く宿命の事をば知る。譬へば日光の、

【四三】包、麗本苞に作る、今三本に依る。

【四四】質、物的存在。

【四五】懷、胎むなり。

【四六】類と不類、類は法なり式なり。正しきと正しからざるとなり。

【四七】木の云云、本文に如木機關繫執一所云云と云へり。隋譯は木人の一機關を以て一切の諸事を作す云云と云へり。

餘の身を受くること、譬へば風の、大に衆の妙花を吹くや、花は此に住まれども、香は流れて遠きに至るが如し。風の體は妙花の香を取らず、香體と風體と及び身根とは、俱に形色無きも、而も風力に非ずんば、香も遠く至らず。

「賢護、衆生の身死するや、識は受・覺・法界を持つて、以て他生に至り、父母の縁に因つて、識之に託するに、受・覺法界も、皆識に隨ふこと、亦復是の如くなり。花の勝力に従つて、鼻に嗅有り、嗅の勝力に従つて、香の境を得るが如し。又風身の勝力に従つて、風色の解を得、風力に因つて、香も遠きに至るを得るが如し。是の如く、識に従つて受有り、受に従つて覺有り、覺に従つて法有り、遂に能く善と不善とを了知す。

「賢護、又畫工の、壁板を料理するが如し、諸の所畫の處、法の如く端潔なるに、意の爲す所に隨つて衆像を圖繪す。則ち工の識と智とは、俱に形色無きも、而も種種の奇容・異狀をば爲す。是の如く識と智と、無形なるも、而も六色を生ず。謂はく眼に因つて色を見るも、眼識は無形なり、耳に因つて聲を聞くも、聲に形色無く、鼻に因つて香を知るも、香は形色無く、舌に因つて味を知るも、味に形色無く、身に因つて觸を知るも、觸に形色無く、法入の諸境は、皆悉く無形なり。識の形色無きこと、亦復是の如くなり。

「賢護、識の、此の身を棄て、他の生を受くとは、衆生死する時、識は業障の所纏と爲る。報盡きて命終るに、猶し滅定の阿羅漢の識の如く、阿羅漢の滅盡定に入るが如し。其の阿羅漢の識も、身の滅に従つて轉ず。是の如く死者の識も、身及び界を棄つるや、念力に乗じて、是の知を作す。——彼れ是の如くして——我れ某乙、生平に作せる所の事業、臨終に成現じ、憶念すること明了なりと。そのとき身と心の二受遍切す。

「賢護、識とは是れ何の義なるとならば、識を名けて種と爲す、能く衆類の雜報の身の芽を生ず

【三〇】業障、業が即ち障となるをいふ。

【三一】滅盡定(Nirodhasamāpatti)六識の心と心所とを滅して起らざらしむる禪定なり。

【三二】界、異譯は諸大に作る。念力云云、同に、唯有二念力、如是知、我是彼某甲とあり。以下異譯や異なる。

【三三】芽、元明本に依る。麗宋本牙に作る。

く「世尊、一切衆生を憐愍攝護したまへ、少しく請問しまつらんと欲す、願はくは聽許を垂れたまはんを」と。佛賢護に告げたまはく「我れ先に汝に聽して、汝疑ふ所有らば、今汝の問を恣にせよ、我れ當に汝の爲に、分別解説すべし」と。

賢護、佛に白して言さく「世尊、衆生は識有るを知ると雖も、寶の篋中に閉在して、顯れず知られざるが如くなり。世尊、此の識は何の形狀を作すやを知らず、何の故にか識と名くる。衆生の死する時、手足亂動し、眼色變異し、制すること自由ならず、諸根喪滅し、諸大乖離するや、識は身より遷つて、何所にか去至する。自性や如何、何の色相をか作せる。云何が此の身を捨離して、更に餘の身をば受くる。云何が身分をば之を此に棄て、諸入を牽いて、當來の報をか獲、種種の身の差別不同なるを受くる。世尊、云何ぞ衆生は身の滅に謝り已るに、更に諸入をば生ずる、云何ぞ今生に福業を積聚して、來生に之を得、今身に福を爲せば、當來の身食する、云何ぞ識は能く身を滋長する、云何ぞ諸入は、身に隨つて轉變する」と。

佛の言はく「善い哉、善い哉、賢護、善い哉、善くぞ問へり。諦に聽き諦に聽き、善く之を思念せよ、當に汝の爲に説かん」と。賢護、佛に白して言さく「世尊、唯然り、教を奉じまつらんと」。佛、賢護に告げたまはく「識の運轉し遷滅し往來すること、猶し大風の、色無く形無く、顯現すべからざるも、而も能く萬物を發動して、衆の殊狀を示し、或は林木を搖振し、摧折破裂して、大音聲を出し、或は冷と爲り熱と爲り、衆生の身に觸れて、苦を作し樂を作すが如し。風には手足面目の形容も無く、黑白黃赤の諸色も無し。賢護、識界も亦爾り、色無く形無く、光明顯現も無けれど、因縁を以ての故に、種種功用の殊異を顯現す。當に知るべし、受覺の法界も、亦復是の如く、色無く形無く、因縁を以ての故に、功用を顯發するを。

「賢護、衆生 此に死するに、受・覺・法界と識界とは、皆身を捨離す。識は受・覺・法界を運んで、

【三】 諸大、地水火風など、肉體を構成する要素に名く。此等の要素は廣大にして、一切の物質を造るが故に大と名く。四大、五大、六大などの説あり。

【三】 諸、四本共に識に作るも、諸に作るもの(宮本、聖語藏本)有り、今後者に依る。

【三】 識運轉云云、異譯には、神識去來移滅と云へり。

【三】 當に知るべし云云、同には、當に知るべし、彼の處に於て、此の識界は、受觸の法界と名くるを得べきをと云へり。

【三】 此に死す云云、同に此の身を捨て已て後、愛觸等を受くと云へり。この受・覺・法界に就ては、次節を見よ。

て返るなり」と。

是の時阿難、佛足を頂禮し、佛に白して言はく「賢護童眞は、何の善根を種え、何の福業を修してか、資産廣大にして、大樂報を受け、宮室妙麗にして、寶輅奇特なる」と。

佛、阿難に告げたまはく「賢護童眞は、先に佛の法中に於て、福業を修植したるに由るが故に、今此の廣大の樂報をば獲たるなり。過去に佛有り、名けて樂光如來・應供・正遍知・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と曰へり。賢護は、爾の時、彼の佛の法の中に於て、出家して比丘となり、名けて法髻と曰へるが、戒行を虧くこと多かりき。然も善く修多羅、阿毘達摩、毘奈耶を講説して、三藏の深教には、咸悉く明達し、常に衆生の爲に、宣暢敷演し、法施絶えずして、美音深重に、正直高亮にして、剖析明辯あり、聽く者歡喜し、所説の法を聞いて、思惟し修行し、惡趣を脱する者其の數無量なりき。

「阿難、法髻比丘は、法施の功德を以て、九十劫のあひだ、天人の報を受けたり。又清淨持戒の比丘の、身羸弱して瘦瘠せるを見ては、恒に飲食及び屣履等を施し、殷重誠徹に、淨心もて布施したり。故に今此の大富の樂報、勝妙の宮室、奇特の寶輅をば獲つるなり。

「又、迦葉如來に遇へるに、示教指誨して、之に告げて曰はく「汝は未來に、釋迦牟尼佛の所に於て、當に授記を得べし」と。故に今我を見つるなり。我れ爲に説法して、之を成熟せしめん」と。

阿難、佛に白して言はく「世尊、賢護勝上童眞は、是の如く、財富・金寶など盈積し、豪盛にして自在なるも、謙柔にして卑下し、憍慢の心無きは甚だ奇特なりとは爲す」と。

佛の言はく「阿難、大智は、財寶と欲樂とに於て、矜傲をば生ぜず。賢護は、久しく善行を修し、善法に資せられ、常に福果をば食す」と。

賢護は、佛と阿難との、共なる稱歎を蒙り已り、恭敬合掌して、佛足を頂禮し、佛に白して言は

【二九】修多羅(Sūtra)經の義、轉じて經をいふ。

【三〇】阿毘達摩(Abhidharma)對法と譯す、論なり。

【三一】毘奈耶(Vinaya)滅又は律、調伏とも譯す。戒律なり。

【三二】屣履、くつ、はきもの。

を暢べ志に適へり。

『又細腰の般拏有り、空篔・長笛・銅鉞もて清歌するに、種種の音聲、數凡そ六萬あり、美聲調潤、響や亮にして遠く聞え、喧囂雜り作して、方域を震警す。福業の致す所として、歡樂不絶なり。

『鶴等の諸鳥、飛翔遊集し、異聲聞り和し、心を暢べ、耳を悦ばしむ。藤蔓の衆花、臺閣に榮り緣ひ、鮮葩・標秀にして、翳翳暉煥たり。鈴鐸・樂器の響は天宮の如く、房廊は昭晰にして、須彌窟の如く、神藥流照したり。

『また六萬の城有り、高牆峻峙し、樓櫓の備設、街々に布列し、四衢三達して、美麗填溢し、諸方より、種種の服飾、種種の言語など湊集し、法制萬差にして、殊容狀を異にし、奇貨列肆し、商侶百千、交易囂喧の聲、城域に震ひ、園林鬱茂して、大樹小樹あり、藤蔓卉藥の衆花競ひ發り、清波環り映じて、間錯光鮮なること、粲として錦を舒べたるが如くなり。象馬車乘、其の衆こと百千、往還絶えずして、城邑に充遍したり。

『阿難、六萬の城中には、名徳高人、及び諸の豪富、并に諸の商主など、日日に賢護童眞を稱讚し、聲徳を播揚し、虔敬に合掌して、禮拜修敬したり。『嬌薩羅國なる波斯匿王は、福力富盛なるも、之を賢護に比するに、狀類貧下なり。月實童眞は、無量百千の妓、從侍して遶り、恭敬奉事し、愛悦歡戲し、衆樂つて依る所、天帝釋の百千萬億と雖も、月實には及ばず。賢護童眞は、容色豐美、富有自在、安寧適樂なるも、亦百千萬倍すとも、月實には及ばず。斯れ皆、宿福の所感にして、力の致すところには非ざるなり。

『阿難、賢護童眞は、又如意寶の輅有り、天寶もて彫嚴し、光暉赫爛、天金・金剛、光玉日を受け、種種の諸寶、鈿則間錯して、麗はしきこと星を觀るがごとく、運ることの速かなる、風の如く金翅の飛ぶが如くなり。此の寶輅に乗るに、寶洲等應に念すべき所に至り、身疲勞せず、戲樂し

【二】 般拏 (Pāṇāna) 不男と譯す、男根の不具なるもの。

【三】 標、あらはれる。
昭晰、共にあきらかなり。

【四】 肆、つらなる。

【五】 嬌薩羅 (Kosara)、摩揭陀の北、迦毘羅城の西に在り、十六大國の一とせられる。譯、無闍賊。

【六】 波斯匿王 (Prasenajit) 勝光と譯す、嬌薩羅王。

【七】 如意寶の輅、隋譯には、一妙車の、奪意と名くる有り」と云へり。
【八】 金翅 (Garuda) 翅金色なれば、かく名くといふ。兩翅の廣さ三百六萬里と云はる。

は、唯月實童眞を除いて、更に比ぶべき者無し」と。

阿難、佛に白して言さく「賢護童眞の、果報の資用と、宿植の善根とをば、唯願はくは、爲に説きたまはんを」と。

佛、阿難に告げたまはく「賢護の、現に受くる樂報の資用の廣大なること、及び宿「植」の勝因とを、汝今當に聽くべし。阿難、此の賢護童眞には、六萬の商主——資産豐饒にして、金寶を盈積したる——が、恭敬受教し、隨逐して奉事し、六萬の床座に臥具を敷設し、氈褥・繡綺、并に倚枕など、雜色輝發して、妙麗に莊嚴せられ、俱羅・帷幕及び檀香耶・熒麗の常帛、及び支那の安輪などをば、周匝して衆寶の彫間に施布したるに、相宣燦爛し、交錯して畫の如くなりき。

「六萬の妓女の被服は、安輪の衆色間雜せるものにして、金寶・瓔珞・蘇華・熒麗にして、光彩目に輝き、其の觸るゝや細軟にして、天の迦遮の如く、輕重は心に隨ひ、情意に適稱へり。戲容もて笑語し、歌唱して相娛み、閑婉嚴潔にして、柔に主に敬事し、他人の所に於て、心愛欲を絶し、慚耻して首を低くし、或は頭を覆ひて容を爲せり。肌膚平滿にして、柔軟細滑、手足の支節、踝等の骨脈は、咸悉く現ぜず、齒白くして齊密、髪は紺にして右旋し、臘を削つて成せるが如く、工畫の作の如し。氏族華に望み、名譽遠くに流れたり。是の如きの婦人、侍従たり。

「又六萬の、食を供する婦人有り、飯餅の諸物、種種の異色あり、香味調美して、天の餽饌の如く、飲には八徳を具して、見るもの、心を悦ばしめ、身を寧じ意に適ひ、勞せずして熟す。是の福の食心に應じて至り、擁穢を滌淨し、諸の病惡を去る。

「庭宇臺樓には、六萬の、摩尼・眞珠・琉璃の諸珍を、具足したる羅布を垂飾し、衆寶の間細くして、行列端美、綺縠蒙ひ懸り、綴るに鈴鐸を以てしたれば、風に隨つて飄颺し、鏗鏘和發したり。「地は琉璃のごとくにして、衆の影像を現じ、雜花散布して、清凉快樂、遊遊栖息するに、心

【九】月實、隋譯には蘇摩浮帝(隋言「眞月」とあり。

【一〇】六萬の床座は、隋譯によれば賢護の家に鋪設せられたるなり。

【一一】檀香耶(Kanday)綢衣の名。

【一二】熒麗、火鼠の毛を紡織して製したるもの、火に燒けず、垢あれば火に投じて洗ひ得といふ。

【一三】安輪、隋譯相當文には蠶(又は麻)紵に作る。

【一四】熒、かやく。麗本、紵に作り、宋本紵に作る。今元明本に依る。

【一五】迦遮、迦底隣地衣の略、最軟輕妙と言ひ、最上の衣なりといふ。

【一六】臘、麗本蠟に作る、今三本による。

【一七】擁、さへぎり、さへる。

【一八】飄颺、共に吹き上るなり。

【一九】鏗鏘、共に金石の鳴る音をいふ。

【二〇】遊、あそぶなり。

まふ。是の如來・阿羅呵の正等覺は、誠實にして虚しからず」と。佛足を頂禮して、諦に視て住しぬ。

佛、賢護を見たまひ、舉身より光を放ちて、賢護を流照したまへり。賢護は爾の時、便ち無畏を獲、佛を遶ること三匝し、佛足を頂禮して、佛に白して言さく「唯願はくは世尊、悲愍もて教授したまはんを、我れ今始めて、佛所に於て、淨信の心を得て、心に妙法を希ひ、問ひまつる所有らんと欲す。而も我れ久しく生死に處り、煩惱の苦に溺れて、亂念紛雜し、戒等の業に於て、冥資を作す無し。心奇重すと雖も、我れ今知らず、此の愚惑疑網の中より、如何して超出し、生死を度るを得べきやを。

「世尊は是れ一切智あり、普く一切を見たまふ。佛の出でたまふこと甚だ難く、逢遇しまつらんと希有なり。如意珠の衆生に樂を施すが如し。佛は是れ大如意寶なり。一切の衆生は、成佛に由依して、大安樂を得れば、是れ大父母なり、衆生の善本なり。佛てふ父母に因つて、正路をば見るところを得。唯願はくは悲愍もて、疑と闇とを開き曉らしめたまはんを」と。

佛、賢護に告げたまはく「汝疑ふ所有らば、汝の意を恣にして問へ。我れ當に、汝の爲に分別して、解説すべし」と。

爾の時、賢護、佛の聽許を蒙り、心に請問を専らにせんとして、一面に在りて住したり。

時に長老阿難、賢護童眞の、姿容暉澤にして、色相の具足せるを見、佛に白して言さく「世尊、未曾有なり、此の賢護童眞は、大福德有り、光色豐盛にして、諸王の威相も、威蔽はれて現れず」と。

佛、阿難に告げたまはく「此の賢護勝上童眞は、福業の致す所として、人間に處りと雖も、天の勝果を受け、安寧適樂にして、歡娛嬉戲し、暢悅恣心にして、猶し帝釋の如くなり。閻浮提の中に

【七】阿羅呵(Arhat)應供と譯す。佛十號の一。

【八】希、麗本條に作るも、今三本に依る。

大乘顯識經

中天竺國沙門 地婆訶羅 詔をうけ奉つて譯す

卷の上

是の如くに我れ聞きぬ。一時薄伽梵、王舍城なる迦蘭陀竹林に在し、大比丘衆、千二百五十人と俱なりき。皆阿羅漢にして、諸漏已に盡き、復煩惱無く、自在を逮得して、心も善く解脱し、慧も善く解脱し、去來・今をば、照了すること無礙なり。是れ大那伽にして、佛の教の如くに、所作已に辦じて、大重擔を棄て、己が利を獲、已に生死に流轉する有苦を斷じ、正智力を以て、善く衆生の、心の所趣を知る。是の如きの大聲聞衆にして、長老舍利弗をば、上首となし、復無量の菩薩摩訶薩衆有り、俱に會集に在りき。

爾の時、諸比丘、世尊の所に在り、疲睡有ること多く、容を失して阿り委ひ、自ら持する能はざりき。

是に於て世尊、面門暉發したまふこと、蓮花の開ける時の如くなりき。時に諸比丘、咸悉く醒悟して、各自ら嚴正となり、是の如きの念を作しぬ。今佛、世尊は、顔容暉煥したまひ、面光照朗たり、何の法眼をか開いて、大饑益を作さんとは欲したまふや」と。

爾の時、賢護勝上、童眞——修容豐美にして、柔和の光澤あり、色相具足したる——が、六萬の商主に、前後圍遶せられ、侍從轟鬱するの聲、地震の如くにして、佛所に來詣し、佛・世尊の、寂靜・安隱にして、衆徳の藏たり、巍々赫赫として、大金樹の如くなるを見まつり、深く心に信重し、合掌して思惟し、是の如きの念を作して、衆と共に稱讚したり「佛は一切智もて、普く一切を見た

大乘顯識經卷上

一

【一】大寶積經（卷第九、百七）、第三十九、賢護長者會（隋闍那崛多譯）參照。

【二】大那伽、阿羅漢をいふ。智度論第三によれば、「那言」無、伽名罪、阿羅漢は諸煩惱を斷じたれば大無罪といふと。

【三】疲睡云云、隋譯には身心調順にして睡眠有ること無かりきと云へり。

【四】暉、てりかゞやくなり。

【五】賢護勝上、隋譯によれば、大巨富長者の子にして、梵名を跋陀羅波梨（Bhadra Pala）といふ。

【六】童眞、究摩羅浮多（Kamrabhuta）の譯、沙彌の異名。

に於て、未來の生に關係すると考へられ
易い。本經にいふ識の遷移といふのは、
かゝる常識的な立場から、生死を貫く意

昭和七年九月二十九日

識的な力を意味したもので、まだ八識九
識の建立にまで及んでゐない。加之個人
の内に於ても、積極的に常住不滅なもの

(佛性・如來藏といふが如き)を認めては
ゐない。此の點から見ると、經の成立は、
思想上かなり古いものと考へらる。

譯者 蓮澤成淳 識

死するや、念力のために來生の種となること、身死して識の遷ること、種子の地中に在るが如くなること、識の身に在るや、止るところ無きこと、識が本となつて受・愛・念あること、識有るが故に覺・受有つて業を持し、身を受くること、識の中には肉身の容貌、諸根諸入見えざるも、父母の因縁和合すれば、識は妙視・妙聞及び念等を以て、己が業を知つて身の報を取り、肉體の主として諸の動作の本となることなどが説かれる（卷上）。

次に月實童眞に對して、衆生は業に隨つて報を得、識の流相續して身を持し、期畢れば業の遷るに従つて、他の身を受くることを説き、會中の大藥王子に對して、識の相、渴愛などに就いて述べ、轉じて賢護に、諸の譬喩を引いて識の罪福を知ること、如何にして識は天・地乃至は地獄の身を取り、識が屍に託せず、壯夫・力象の身にあつて、よく之を持せ

るは、業に依るとして、業の性と相とを説き、識が大身を取つて、疲倦せず、危脆なる身内に止ること、並に衆生の諸天乃至は地獄の中に生るゝも善惡の業に依ること及び、更に識の作用と共に、地獄の衆生に就て述べ、終に賢護に對して、積・聚・陰・不遷に就て説き、此の經の利益を擧げて了るのである。

かくの如く、經は主として識（異譯には神識）に就いて説くのであるが、特に衆生がこの界に死すると、識がこの身を捨て去り、他の身を取ることが主要な問題として扱はれてゐる。この點から云ふと、闍那崛多の初譯本にあつたと云はれる移識經といふ經題の方が、より多く經の主旨を顯はしてゐると云ふべきである。

生死の相續が業に依つて貫かれ、業の存續を、有情輪廻の主體とはするが、業と云ふのみでは、未だ意識的な方面を表

はすに不適當であり、力としての業以外に、それは又意識的なものであるか、乃至は意識的なものを伴ふものであることを言はねば「意識あるもの」の生死の相續を説くに不十分な點がある。即ち力としての業は、一面に又個人的な制約を受けるが、この制約を齎す根本は、個人に於ては、その識（受想行に對する）であるから、個人を主として考へる限り、彼の業は、また意識的な方面をも有つわけである。この意識的な方面を主にして考察を加へると、生死輪廻を來さしめるものは、個人の業力であるとしても、業の依止すべき個人的なもの（即ち識）が、業と共に存續するものと見ねばならぬ。即ち生死を貫くものは、意識的な力と考へられる傾向に在る。況して常識的に、個人の生死を觀れば、斷見に墮せざる限り、此の身が死すると、今までこの身に活らいてゐた意識的な力が、何等かの形

大乘顯識經解題

本經には二譯あつて、初出は隋の闍那
崛多の出にかゝる移識經二卷である。歷
代三寶記十二によると、是は開皇十一年
(西紀五九一)の十月から十二月に亘つ
て譯されたもので、費長房が筆受したも
のだとある。是が大寶積經第三十九會に
編入される際、經題を賢護長者會と改め
られ、もとの移識經には證信序が無かつ
たので、新に之を加へた(開元錄十一)
といふ。第二譯は今の地婆訶羅による大
乘顯識經で、永隆元年(六八〇)東都な
る東太原寺に於て譯されたものである。

兩譯共に現存してゐるので、兩者の内
容を比較すると、賢護長者會の麗本下卷
は、今經の下卷と全く同一であつて、恐
らく麗本では、今經の卷下に相當する、
「賢護長者會之二」が、闕失してゐたの
で、地婆訶羅譯の卷下を取つて、闍那崛
多譯の卷上に續け、それを一にして賢護
長者會の首尾を整へたものであらう。然
し宋・元・明の三本では、「賢護長者會の
二」も、その一と同じく、闍那崛多譯を
載せてゐるので、縮刷本では麗藏を取ら
ず、大正藏本は、別に明本の文を出して
ゐる。本輯の大寶積經第一百卷(寶積部
第五)に在つても、第三十九會の二は、
明本に依つて譯出されてゐるので、今經
の文は、この國譯一切經には、重複しな
い譯である。

經は、題號の示すが如く、識を顯說す
るのであるが、初に、賢護童眞の、大福
徳あり、光色豊盛で、諸王の威相と雖も、
威蔽はれて現はれざるが如きに就いて、
其の現に受くる樂報の廣大なると、宿世
に植ゑた勝因(樂光如來の所に、法髻比
丘として、修行した)との物語が終ると、
賢護が、識の形狀、識と名くる所以。衆
生の死するや、諸根乖滅すると、識は何
處に行くか。識の自性は如何。此の身を
捨て、識が他の身を受くる所以。識が
來世に種々不同の身を受くる理由。今生
に福業を積めば、來生に之を得る所以。
云何にして識が身を增長し、諸入が身に
隨つて轉變するか等の問題を提出するの
で、それ等に就て順次に、佛が解説を與
へられる。

先づ身の形狀は、大風の如くに無色無
形であり、人死するや、識は受と覺と法
とを持つて、他に生を受くることを述べ、
識は諸種の業報としての身を生ずるから
種の義があるとし、識が此の身を離れて、
餘の報を受くる状態、識は諸處に入るが、
その爲に染汚せられざること、識は何處
より入るか(卵を例として)、識は衆生の

阿難の言はく「唯世尊、此の法門をば、當に何が之を名け、云何が奉持すべき」と。佛の言はく「此の法門をば、文殊師利所說不思議佛境界と名け、是の如く奉持すべし」と。

佛、此の經を説き已りたまふに、善勝天子、長老阿難、及び一切世間の天・人・阿修羅・乾闥婆等、皆大に歡喜して、信受奉行したりき。

衆有つて、深く信解を生じ、阿耨多羅三藐三菩提心を發したりき。

爾の時、文殊師利菩薩、兜率天宮に於て、爲す所の事畢り、諸の菩薩は、釋・梵・四天王等の無量の諸天、及び一切の功德光明國土の、諸の來れる菩薩と、坐より起たすして、天宮より没し、一念の間に、佛の所に至り、皆座より起つて、佛足を頂禮し、合掌恭敬して、右に遶ること七匝し、佛を遶り已んぬ。

時に執智炬菩薩、其の同類の十億人と、前んで佛に白して言さく「世尊、普賢如來は問を致さしめて「起居少病・少惱にして、安樂に行じたまふや不や」と」。

時に世尊、法の如く、諸の菩薩を慰問し已つて、普く一切の諸來大衆を觀じ、勅して坐に復せしめ、廣く說法を爲したまへるに、歡喜せざるなかりき。

爾の時世尊、復、衆に告げて言はく「汝等當に知るべし、此の文殊師利童子と、執智炬菩薩とは、無量の衆生を成熟せしめんと欲したるが爲に、此の神通變化の事を現じたるなり。此の二丈夫は、已に能く種種の方便を成就し、深理を獲て、智慧と辯才とあり、已に無量阿僧祇劫に於て、佛事を施作し、衆生の爲の故に、世間に生れたり。若し衆生有り、此の二の菩薩を見ることを得んには、應に知るべし、則ち六根の自在を得、永く諸の魔の境界に入らざらん」と。

爾の時、執智炬菩薩、及び同じく來れる所の諸菩薩は、此の國土に入り、世尊を見まつるを得、法を聽聞したるが故に、無生忍を證し、既に忍を得已つて、右に佛を遶り、雙足を敬禮したり。

爾の時に當り、此の三千大千世界は、之が爲に震動したり。是の諸菩薩は、即ち佛前に於て、没して現れず、須臾の頃に、還つて本國に到りぬ。

爾の時世尊、長老阿難に告げて言はく「此の法門をば、汝當に奉持して、廣く人の爲に説くべし」と。

爾の時、普賢如來、即ち足下の千輻相の中より、大光明を放ちたまふに、其の光朗曜して、彼より下方の、十二恒河沙の佛土を過ぎて、此の世界に入り、光悉く周遍したれば、彼の諸菩薩は、佛の光明を以て、此の娑婆世界、及び釋迦牟尼佛と諸の菩薩等とを見まつらざる莫く、此の土の菩薩も、亦彼の國、及び普賢如來并に菩薩衆をば見まつりぬ。

爾の時、普賢如來、諸の菩薩に告げて言はく「娑婆世界には、恒に大法を説く、汝等誰か能く彼に往いて聽受する」と。衆中に菩薩有り、執智炬と名けたるが、座より起ち、白して言さく「世尊、我れ今願はくは、佛の神力を承けて、娑婆世界に往かんと欲す。惟願はくは如來、哀を垂れて、見ることを許したまはん」と。普賢如來の言はく「善男子、今當に是れ時なり、當に疾く往詣すべし」と。

爾の時、執智炬菩薩は、諸の菩薩十億人と俱に、頭頂もて普賢如來を敬禮し、合掌恭敬して、右遶七匝し、彼の國より没して、譬へば壯士の、臂を屈申する如き頃に、娑婆世界なる兜率天宮の、善住の樓觀中なる、文殊師利菩薩の衆會の前に到り、躬を曲げて合掌し、文殊師利菩薩の足を禮して、是の言を作しぬ「大士、汝舒べたまふ所の光は、我が國に至り、我が世尊普賢如來・應・正等覺は、我等が此の世界に來るを垂許したまへり。大士を見、禮事瞻仰して、法を聽聞せんが爲の故に」と。

爾の時、欲・色界の諸天子は、彼の國土の、諸の來れる菩薩を見已り、咸是の言を作しぬ「善哉・善哉、不可思議なり、甚だ希有と爲し、甚だ希有と爲す。文殊師利善權大士は、乃ち是の如き神通變化有り、三昧力を以て、是の光明を放ちたまふに、能く彼の上方の世界に至り、諸の菩薩をして、疾く來詣せしめたり」と。

此の時、文殊師利菩薩、復、大衆の爲に、妙法を廣宣したるに、衆中に七十二那由他の諸天子

【四】千輻相、佛の三十二相の一、千輻輪相ともいふ。

【五】執智炬、寶積の文には持法炬と云へり。

具に菩薩所行の行を修する、之を名けて復とは爲す。是をば菩薩の往復の道とは名くるなり」と。
是の法を説ける時、會中に、菩薩五百人有り、皆無生法忍を得たりき。

爾の時、善勝天子、文殊師利菩薩に白して言はく「大士、我れ會て聞く、一切功德光明といふ世界有り。是の如き世界は、何方の所にか在り、佛をば何等と號し、中に説法したまふや」と。

文殊師利菩薩の言はく「天子、此より上方、十二恒河沙の佛土を過ぎて、世界有り、一切功德光明と名け、佛をば普賢如來・應・正等覺と號し此の土の中に在して、正法を演説したまふ」と。

善勝天子の言はく「大士、我れ心に、彼の世界及び彼の如來をば、見まつらんと欲す。惟願はくは仁、慈もて我に示して見せしめたまはんを」と。

時に文殊師利菩薩、即ち三昧に入りたまふ、此の三昧をば 離垢光明と名け、其の身中より、種種の光を放つに、其の光は上、十二恒河沙の佛土を徹して、一切功德光明世界に至り、種種の色光は、其の國に遍滿したりき。

彼の諸菩薩は、是の光を見已り、未だ會て有らざるを「見るを」得、合掌敬恭し、普賢如來に白して言さく「世尊、今の此の光明は、何所よりか來れる」と。

普賢佛の言はく「善男子、此より下方、十二恒河沙の佛土を過ぎて、世界有り、娑婆と號し、佛をば釋迦牟尼如來・應・正等覺と號し、今現に彼に在して、法教を敷演したまふ。彼に菩薩有り、文殊師利と名け、不退轉に住し、離垢光明三昧に入り、其の身中より、種種の光を放ちたるに、其の光、遠く十方の無量阿僧祇の世界に至り、一一の世界に、光充滿したるなり。是の故に今、此の光明有るなり」と。

彼の諸菩薩、復是の言を作さく「世尊、我等は今、皆娑婆世界の釋迦牟尼佛、及び文殊師利菩薩を見まつるを得んことを願ふ」と。

【四】離垢光明、寶積の文には光明莊嚴三昧と云へり。

「復、次に天子、若しは菩薩、空に於て清淨なりと雖も、而も善く諸の境を示し、亦境をも取らず。無相に於て清淨なりと雖も、而も善く諸相に入り、亦相にも執せず。無願に於て清淨なりと雖も、而も善く三界に行き、亦界にも著せず、無生・無滅に於て清淨なりと雖も、而も善く生滅を説き、亦生滅をも受けず、所以は何とならば、此の心を調伏せる菩薩は、一切法の、空・無所有なるを了知すと雖も、然も諸の衆生は、境界の中に於て、見と著とを生じ、見と著とを以ての故に、煩惱を増長するを以て、菩薩は諸の見と著とを斷ぜしめんと欲して、説法を爲し、一切の境界は是れ空なりと知らしむ。空を説くが如く、無相・無願・無生・無滅に於ても、皆亦是の如くなり。是をば菩薩道を修行すと名くるなり。

「復次に天子、往有り復有つて、菩薩道を修すと名く。云何なるをか名けて往有り・復有りとは爲すとならば、諸衆生の、心に樂欲する所を觀する、之を名けて往と爲し、其の所應に隨つて説法を爲す、之を名けて復とは爲す。自ら三昧に入る、之を名けて往と爲し、諸衆生をして、三昧を得しむる、之を名けて復とは爲す。自ら聖道を行する、之を名けて往と爲し、能く一切凡夫を教化する、之を名けて復とは爲す。自ら無生忍を得る、之を名けて往と爲し、諸の衆生をして、皆是の忍を得しむる、之を名けて復とは爲す。自ら方便を以て、生死を出づる、之を名けて往と爲し、又衆生をして出離を得しむる、之を名けて復とは爲す。心に寂靜を樂ふ、之を名けて往と爲し、常に生死に在つて、衆生を教化する、之を名けて復とは爲す。自ら勤めて往復の行を觀察する、之を名けて往と爲し、諸の衆生の爲に、斯の如きの法を説く、之を名けて復とは爲す。空・無相・無願の解脱を修する、之を名けて往と爲し、衆生をして、三種の覺觀の心を、斷ぜしめんが爲の故に、説法を爲す、之を名けて復とは爲す。堅く誓願を發す、之を名けて往と爲し、其の誓願に隨つて、衆生を拯濟する、是を名けて復とは爲す。菩提心を發し、願じて道場に坐する、之を名けて往と爲し、

【四三】此の段、同には説相や
ゝ異なる。

【四三】往有り復有り、寶積の
文には菩薩去來の道を見るべ
しと云ひ、説相やゝ簡なり。

思惟を修習すとは名け、自他の不平等を遠離するが故に、正語を修習すとは名け、詭偽・不實の相を離るるが故に、正命を修習すとは名け、怯弱の身心の事を離るるが故に、正業を修習すとは名け、自の足るを殫り、他に憊るの心を離るるが故に、正勤を修習すとは名け、諸の情愚を離るるをば、正念を修習すとは名け、諸の分別を息むるをば、正定を修習すとは名く。是を八聖道分を修習すとは名く。

「諸仁者、我れ前に説く所の義の如きを以て、諸の菩薩、不放逸に住すれば、則ち三十七種の菩提分等の、一切の善法を成就し、諸佛の無上菩提を證するを得とは言ふなり。

「諸仁者、此の不放逸の菩薩は、是の如き菩提分の法に入り已れば、則ち一切の生死の游泥より出で、生死を出で已つて、一切の法に於て、都て所見無く、所見無きが故に、言説する所無く、言説する所無きが故に、則ち畢竟の寂靜に入ることを得。

「云何なるをか名けて、畢竟の寂靜とは爲すとならば、一切法は所作に非ず、所作に非ざるが故に、取るべからず、取るべからざるが故に、用有ること無く、用有ること無きが故に、安立すべからざるを以て、之を以て不可安立有りとは爲し、有りと爲すを以ての故に、應に知るべし、即ち是れ畢竟寂靜なるなり」と。

是の法を説ける時、會中に、一萬二千の天子有り、遠塵・離垢して、法眼清淨なりき。

爾の時、善勝天子、復、文殊師利菩薩に白して言はく「大士、云何なるをか、菩薩道を修行すとは名くる」と。文殊師利菩薩の言はく「天子、若し菩薩にして、生死を捨せずと雖も、而も生死の諸惡の爲に染せられざると、無爲には住せずと雖も、而も恒に無爲の功德を修すると、具に六波羅蜜を修行すと雖も、而も聲聞・辟支佛の行を示現するなど、是をば菩薩道を修行すとは名くるなり。

【三】 情、くらし。

【三】 一切法以下、實積の文には、諸法無起、亦無所盡、無所盡故、則無所作、無所作故、亦非無作、無受、無受者、無施設、是名畢竟寂靜とあり。

【四】 之を以て云云、本文に、以之爲有不可安立、以爲有故、應知云云とあり。

【四】 生死云云、同には、不捨生死、而令衆生、入於涅槃、不捨愛取、而拔三出衆生、令立聖道とあり。

ならば、謂はく、諸の菩薩は、自力に依つて覺悟する有り、他より聞かずと雖も、然も衆生を教化し、其をして了知し、深信を發生せしむると、來の想無く亦去の想無しと雖も、而も勤めて遍く一切の智行を修行すると、境界に於て、念無く憶無しと雖も、而も其の中に於て、忘れず愚ならざると、智光を以て、諸法を開了すと雖も、而も恒に正定にあり、寂然不動なると、常に平等の法性に安住すと雖も、而も衆の翳障・戲論・分別を斷ずるとなり。是の如きを名けて、五根を修習すとは爲す。

『又諸の菩薩は、不放逸を以ての故に、五力を修習して、疾く圓滿するを得。云何が修習するとならば、謂はく諸菩薩は、信力を修する時、一切の外論は、傾動する能はざると、精進力を修するや、一切の惡魔も、能く沮壞する無きと、念力を修するを以て、聲聞・辟支佛地に入らざると、定力を修するが故に、疾く五蓋・煩惱を遠離するを得ると、智慧の力を以て、永く諸見の境界を取らざるとなり。是を則ち名けて、五力を修習すとは爲す。』

『又、諸の菩薩は、不放逸を以ての故に、七覺分を修し、疾く圓滿するを得。云何が修するとならば、謂はく、諸の菩薩は、一切の善法をば、恒に忘失せざる、是れ念覺分を修するなり。諸の緣起をば、常に樂んで觀察する、是れ擇法覺分を修するなり。菩提の道を行じて、永く退轉せざる、是れ精進覺分を修するなり。法の足を知り、希求する所無き、是れ喜覺分を修するなり。身心の散動の失をば遠離する、是れ猗覺分を修するなり。空・無相・無願の解脱に入る、是れ定覺分を修するなり。學習を生起するの心を離るる、是れ捨覺分を修するなり。是をば名けて、七覺分の法を修するとは爲す。』

『又諸菩薩は、不放逸を以ての故に、八聖道を修し、疾く圓滿するを得。云何が修習するとならば、謂はく永く斷・常の見を離るるが故に、正見を修習すと名け、欲覺・志覺・害覺を離るるが故に、正

【三三】 自力云云、實積の文には、一者信根、決定安住於諸法中、爲上首、故とあり。

【三四】 來の想云云、同じ、二者精進根、遍修三諸行、成就佛身一故とあり。

【三五】 境界云云、同じ、三者念根、具足諸法、心善調柔、無忘失一故と云へり。

【三六】 智光云云、四者定根、遠離攀緣、不隨二昏睡一故とあり。

【三七】 常に云云、同じ、五者慧根、決斷諸法、正觀現前不隨他故とあり。

【三八】 五力以下、七覺分、八聖道分に關する寶積の文の説相、極めて簡略なり。

『又諸菩薩は、不放逸を以ての故に、四正勤しやうこんを修して、疾く圓滿を得るなり。云何が修習するとならば、謂はく諸の菩薩は、恒に一切の諸法は、本來無生・無得・無起、作者有る無きこと、猶し虚空の如くなるを觀察すと雖も、而も、未だ生ぜざる諸の惡・不善の法をば、生ぜざらしめんが爲の故に、心を攝して正住し、勤めて精進を行すると、一切法の業無く果無きを觀すと雖も、而も諸の衆生の、已に生じたる諸惡・不善の法をば、斷ぜしめんと欲するが爲の故に、心を攝して正住し、勤めて精進を行すると、一切法の空にして無所有なるを信解すと雖も、而も未だ生ぜざる諸善法をば、生ぜしめんと欲するが爲の故に、心を攝して正住し、勤めて精進を行すると、諸法の本來、寂靜なるを知ると雖も、而も已に生じたる諸の善法をば、住せしめんと欲するが爲の故に、退失せざらしめんための故に、増に增長せしめんための故に、心を攝して正住し、勤めて精進を行するとなり。是の諸菩薩は、恒に一切諸法の、所作有ること無く、能作者有ること無く、體相平等にして、是の中に少法の得べき——若しは生じ、若しは滅する——有ること無きを觀察すと雖も、而も常に精進修習して捨せず。是を則ち名けて正勤を修すとは爲す。』

『又諸菩薩は、不放逸を以ての故に、四神足を修して、疾く圓滿を得るなり。云何が修習するとならば、謂はく、諸の菩薩は、永に貪欲を斷ずと雖も、而も恒に諸の善法を捨せず、若しは身、若しは心に、常に善行を修せんと欲すると、諸法の空・無所得なるを觀すと雖も、而も衆生を化せんが爲に、勤めて精進を行すると、心・識は幻の如く、化の如くなるを了知すと雖も、而も恒に諸佛の法を具し、正覺を成ぜんとする心を捨せざると、諸法の、依無く作無く、取著すべからざるを知ると雖も、而も恒に聞く所に隨つて、理の如く思惟するとなり。是の如きをば、名けて神足を修習すとは爲す。』

『又法の菩薩は、不放逸を以ての故に、五根を修習して、疾く圓滿を得るなり。云何が修習すると

【三】寶積の文には、この次に四念處の説明を置けり。

不放逸に住すれば、速に能く除斷す。何等か三とは爲すとならば、謂はく自ら布施せず、他の施するを欲せず、能く施する者を瞋ると、自ら戒を持せず、他の持するを欲せず、能く持する者を瞋ると、自ら忍辱せず、他の忍を欲せず、能く忍ぶ者を瞋ると、自ら精進せず、他の精進するを欲せず、能く精進する者を瞋ると、自ら定を修せず、他の修するを欲せず、能く修する者を瞋ると、自ら智慧無く、他の有るを欲せず、能く有る者を瞋るとなり。是の如きを名けて、菩薩の六度の一一に、具有する三障の差別——不放逸の除斷する所——とは爲すなり。

「復次に諸仁者、菩薩所行の六波羅蜜は、各三法を以て、成滿するを得、此の三は皆不放逸より生ず。何等をか三とは爲すとならば、布施の三は、謂はく一切に能く捨して、果報を求めず、菩提に迴向するなり。持戒の三は、謂はく、心を重んじて、敬受し、護持して缺かず、菩提に迴向するなり。忍辱の三は、謂はく柔和寛恕にして、自ら護り他を護り、菩提に迴向するなり。精進の三は、謂はく善鞭を捨てず、去來の想無く、菩提に迴向するなり。禪定の三は、謂はく遍く諸定に入り、攀緣する所無く、菩提に迴向するなり。般若の三は、謂はく智光明徹にして、諸の戲論を滅し、菩提に迴向するなり。是の如きをば名けて、菩薩の六度の一一にある、三種の能く成滿するの法——不放逸の生長する所とは爲すなり。

「復次に、諸仁者、一切の菩薩は、不放逸を以ての故に、速に三十七種の菩提分等の、有らゆる善法を成就し、諸佛の無上菩提を證することを得るなり。云何がして速に、菩提分の法をば成ずるとならば、諸の菩薩は、不放逸を以ての故に、四念處を修し、勤苦を経ずして、疾く圓滿を得。云何が修するとならば、謂はく身處の無所有なるを觀じ、受處の無所有なるを觀じ、心處の無所有なるを觀じ、法處の無所有なるを觀じ、一切の法に於て、皆無所得なる、是の如きを名けて、四念處を修すとは爲す。

【三】 心を云云の二、實積の文には戒増長と不求生天とを擧ぐ。

【七】 受、三本に依る、麗本授に作る。

【八】 精進の三の中、實積の文には、初の二を、増長種種善根、無有厭足に作る。

【九】 諸戲論云云、實積の文には常修善業とあり、非理・無義の言論を戲論とす。

【三〇】 四念處の項、實積の文には、次の四正勤の次に出づ。

名く。

「復次に、諸仁者、應に知るべし、不法逸も亦、八法を以て清淨なることを得。何等か八とは爲すとならば、一には尸羅を汚さず、二には恒に多聞を淨め、三には諸定を成就し、四には般若を修行し、五には神通を具足し、六には自ら貢高ならず、七には諸の諍論を滅し、八には善法を退せざるなり。是を不放逸の八種清淨とは名く。

「諸仁者、若し諸の菩薩、不放逸に住しなば、三種の樂をば失せず。何等か三とは爲すとならば、所謂諸天の樂、禪定の樂、涅槃の樂なり。又則ち三惡道を解脱せん。何等か三とは爲すとならば、所謂地獄道と畜生道と餓鬼道となり。又則ち三種の苦の爲に逼迫せられず。何等か三とは爲すとならば、所謂生苦と老苦と死苦となり。又則ち永く三種の畏を離れん。何等か三とは爲すとならば、所謂不活畏と惡名畏と大衆威德威となり。又則ち三種の有を超出せん。何等か三とは爲すとならば、所謂欲有と色有と無色有となり。

「又則ち三種の垢を濂除せん。何者か三とは爲すとならば、所謂貪欲の垢と、瞋恚の垢と、愚癡の苦となり。又則ち三種の學を圓滿せん、何者か三とは爲すとならば、所謂戒學と心學と慧學となり。又則ち三種の清淨を得ん。何者か三とは爲すとならば、所謂身の清淨、語の清淨、意の清淨なり。又則ち三種所成の福を具足せん、何者か三とは爲すとならば、所謂施所成の福、戒所成の福、修所成の福なり。又則ち能く三種の解脱門を修せん、何者か三とは爲すとならば、所謂空解脱門、無相解脱門、無願解脱門なり。又則ち三種の種性をして、永く斷絶せざらしめん、何者か三とは爲すとならば、所謂佛の種性、法の種性、僧の種性なり。諸仁者、不放逸の行には、是の如きの力あり、是の故に、汝等應に共に修行すべきなり。

「復次に、諸仁者、菩薩所行の六波羅蜜は、一一に具に、三の——治せらるべき——障有り、若し

【二】 不放逸、實積にはたゞ觀察と云へり。

【三】 尸羅、(五、三三)戒なり。

【四】 六以下、實積の文には、智、寂滅、不放逸を擧ぐ。

【三】 三惡道、同には三種の畏と云へり。

【三】 生苦等の三、同には行苦、苦苦、壞苦に作る。

【四】 心學、禪定の謂。

【五】 三種の清淨以下、三種の福、三種の解脱門の三項、實積には相當文を缺く。

「復次に、諸仁者、應に知るべし、般若も亦、八法を以て、清淨なるを得るを。何等か八とは爲すとならば、一には善く諸蘊を知り、二には善く諸界を知り、三には善く諸處を知り、四には善く諸根を知り、五には善く三解脱の門を知り、六には永く一切煩惱の根本を抜き、七には永く一切蓋纏等の惑を出で、八には永く一切諸見の所行を離るるなり。是を般若の八種の清淨とは名く。」

「復次に、諸仁者、應に知るべし、神通も亦、八法を以て、清淨なるを得。何等か八とは爲すとならば、一には一切の色を見るに、障礙有ること無く、二には一切の聲を聞くに、限隔する所無く、三には遍く衆生の心の所行を知り、四には前際を憶念するに、礙無く著無く、五にはは足もて遊行して、遍く諸佛の國を見、六には一切の漏を盡して非時ならず、七に廣く善根を集めて、諸の散動を離れ、八には初發の誓願の如く、恒に善友と爲つて、廣く衆生を濟ふなり。是を神通の八種清淨とは名く。」

「復次に、諸仁者、應に知るべし、智も亦、八種を以て清淨なるを得ることを。何等か八と爲すとならば、一には苦智もて遍く五蘊を知り、二には集智もて永く諸愛を斷じ、三には滅智もて、諸の緣起の、畢竟不生なるを觀じ、四には道智もて、能く有爲・無爲の功德を證し、五には因果の智もて、業と事と、相違有ること無きを知り、六には決定智もて、我無く、衆生無き等を了知し、七には三世の智もて、能く三世の輪轉を分別し、八には一切智智、謂はく般若波羅蜜は、一切處に於て、證入せざる無きなり、是を名けて、智の八種の清淨とは爲す。」

「復次に、諸仁者、應に知るべし、調伏も亦、八法を以て清淨なるを得。何等か八とは爲すとならば、一には内恒に寂靜、二には外護の所行、三には三界を捨せず、四には緣起に隨順し、五には諸法は其の性、無生なるを觀察し、六には諸法に、作者有ること無きを觀察し、七には諸法は、本來無我なることを觀察し、八には畢竟じて、一切の煩惱を起さざるなり。是を調伏の八種清淨とは

【三】 諸處、十二處の謂、三科の一。

【四】 以下、寶積の文には、緣起、諦、三世、一切乘、一切佛法の善巧を擧ぐ。

【四】 以下六まで、同には、天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡の六通を擧げたり。

【五】 七と八、同には不_レ住煩惱、不_レ取_レ解脫と、不_レ依_レ聲聞_レ解脫_レ而入_レ涅槃とを擧ぐ。

【六】 決定智、寶積の文には、只緣智とのみ云へり。

【七】 調伏、先に示せるが如く、寶積には寂靜に作る。

【八】 二、同にはたゞ外寂靜とあり。而して本經第三の三界寂靜を第八に置き、第三以下、第六までに、要と取と有と生との寂靜を擧ぐ。

爾の時、善勝天子、文殊師利菩薩に白して言はく「大士、今此の大衆、悉く已に來集したり。願はくは辯才を以て、法教を闡明したまはんを」と。

時に文殊師利菩薩、普く衆に告げて言はく「諸仁者、若し諸の菩薩にして、四種の行に住しなば、則ち能く一切の善法を成就せん。何等をか四とは爲すとならば、一に持戒、二に修禪、三に神通、

四に調伏なり。若し能く戒を持すれば、則ち多聞を成就し、若し能く禪を修すれば、則ち般若を成就し、若し神通を得れば、勝智を成就し、若し調伏に住すれば、則ち能く心の不放逸を成就せん。

是の故に我れ言ふ「若し諸の菩薩、四行に住すれば、則ち能く一切の善法をば成就す」と。

「諸仁者、當に知るべし、戒を持すれば、八法を具足して、清淨なるを得るを。何等か八なるとならば、一に身行端直なり、二に語業淳淨なり、三に心に瑕垢無く、四に志賢貞を尙び、五に

正命もて自ら資し、六には頭陀もて足るを知り、七には諸の詐僞不實の相を離れ、八には恒に菩提の心を忘失せざるなり。是を持戒の八種清淨とは名く。

「復次に諸仁者、應に知るべし、多聞も亦、八法を以て、清淨なるを得るを。何等か八なるとならば、一には師長を敬順し、二には憍慢を摧伏し、三には精勤して持を記し、四には正念にして錯ら

ず、五には説釋して倦む無く、六には自ら矜伐せず、七には理の如く觀察し、八には教に依つて修行するなり。是を多聞の八種清淨とは名くるなり。

「復次に諸仁者、應に知るべし、禪定も亦、八法を以て、清淨なるを得るを。何等か八とは爲すとならば、一に常に蘭若に居して、宴寂思惟し、二には衆人と共に群衆・談說せず、三に外の境界

に於て、貪著する所無く、四には若しは身、若しは心に、諸の榮好を捨て、五には飲食に少欲に、六には攀緣の處無く、七には音聲文字を修飾することを樂まず、八には轉他人に教へて聖樂を得

しむるなり。

【三】 第四、實積には寂靜に住して、常に觀察することを擧ぐ。

【四】 語、麗本諸に作るも、今三本に依る。何となれば、この初三は、實積の文に、身と語と意との清淨を云へばなり。

【五】 四、同には見清淨と云へり。

【六】 頭陀(Dhuta)、抖擻、浣洗など譯す、衣食住の三種の食著をはらう行法。

【七】 二、同にはたゞ下心と云へり。

【八】 矜伐、自らほこり他をうつなり。同上に、自讃毀他せずと云へり。

【九】 蘭若(阿蘭若(Aranya-ka))の略、空閑處なり。

【一〇】 六、實積の文には心緣定境と云へり。

【一一】 八、同に不取聖樂と云へり。

中より没して、須臾の間に、彼の天宮に至り、天宮に至り已つて、普く衆に告げて言はく「汝等當に知るべし、文殊師利菩薩摩訶薩は、我等を愍みたまふが故に、此に來至せんと欲したまふ。汝等諸天、皆應に放逸の諸樂を捨離して、共に來集すべし、法を聽かんが爲の故に」と。

時に善勝天子、是の語を作し已り、天宮の中に於て、道場を建立したるに、其の場は廣博にして、清淨に嚴好せられ、天の如意の衆寶を以て成ぜられ、東西は三萬二千由旬、南北は一萬六千由旬なり。又其の中に於て、無量百千の帥子の座を置きたり。其の座は高くして廣く、種種に莊嚴せられ、天の寶衣を以て、其の上を覆ひたり。

時に善勝天子、道場及び師子座を嚴辦し已り、躬を曲げて合掌し、遙に文殊師利菩薩に向つて、是の言をば作しぬ「我れ天宮に至り、爲すべき所の事を畢りぬ。唯、仁、降止したまへ、今正に是れ時なり」と。

爾の時、文殊師利菩薩は、諸菩薩一萬二千人、大聲聞一千五百人、及び餘の無量百千の、天・龍・夜叉・乾闥婆等と、坐より起ち、頂もて佛足を禮し、右遶三匝して、如來の前より没して現れず、須臾の頃に、兜率陀天に至り、道場の中に詣り、其の敷擬の如くに、各其の座に坐したり。

爾の時、四天王・三十三天・夜摩天・化樂天・他化自在天、及び色界中の諸梵天衆、遞に相傳告して、是の言をば作しぬ「今、文殊師利菩薩は、兜率陀天に在つて、大法を説かんと欲したまふ。我等應に、共に往いて其の所に詣るべし。未だ聞かざる所の法を聽き、及び種種希有の事をば見んと欲するが爲の故に」と。

是の語を作し已り、欲・色界中の、無量阿僧祇の諸天子衆は、須臾の頃に、各住する所より、來つて共に、兜率の天宮に集るに、文殊師利菩薩の威神力を以て、其の道場の中に、悉く皆容受して、追隘無かりき。

ば、要す逼沮を加へ、其をして退失せしむるなり。我れ今、是の如き惡事を斷ぜんが爲に、陀羅尼をば説かん」とて、即ち呪を説いて曰はく、

「怛姪他阿麼黎、毗麼黎、耻哆答鞞、阿羯波備是多設咄路、誓曳、誓耶末底、輪婆末底、跋迷扇底、阿普迷、普普迷、地嚩、阿契、莫契、佉契、弭履維、阿伽迷、普羅、普羅普羅、輪輸迷輸輸迷、地嚩地嚩、阿那跋底、耻哆答鞞、訖里多曷梯、訖里多毗提、毗盧折擔、薩達摩婆拏、曷寫蘇恒羅寫陀路迦、阿跋羅自多伊婆蘇履耶」。

「世尊、此の陀羅尼は、法師を擁護し、能く其の人をして、勇猛に精進し、辯才無斷ならしめ、一切の惡魔を斷じて、能く便を得る無く、更に其の魔をして、心に歡喜を生じ、衣服・臥具・飲食・湯藥など、諸の須つ所有るを以て、供養を爲さしむ。

「世尊、若しは善男子・善女人有り、此の呪を受持して、日夜に絶たざらんには、則ち一切の天・龍・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・人非人等の爲に、常に守護せられ、一切の怨憎も、害をば爲す能はざらん」と。

佛、魔に語つて言はく「善い哉・善い哉、汝は今此の陀羅尼を説き、恒河沙等の無量の世界をして、六種に震動せしめたり。魔王、當に知るべし、汝の此の辯才は、皆是れ文殊師利童子の神力の作す所たり」と。

文殊師利菩薩の、神通力を以て、魔の波旬をして、此の呪を説かしめたる時、衆中の三萬人は、皆阿耨多羅三藐三菩提心を發したりき。

爾の時、文殊師利菩薩、是の變を作し已り、其の神力を攝めて、即ち善勝天子に告げて言はく「天子、我れ今、兜率陀天に詣らんと欲す。汝先づ往き、其の衆をして、集まらしむべし」と。

時に善勝天子、是の語を聞き已り、其の眷屬と與に、佛及び文殊師利菩薩の大衆を右遶し、會の

卷の 下

爾の時、文殊師利菩薩、佛の教を受け已り、即時に一切法心自在神通三昧に入り、此の三昧に入り已つて、神通力より起ち、上に説く所の如き神變の事を現じ、豁然・明著に、皆悉く現前せしむること、佛所言の如くにして、不増不減、斯の會に預りし皆、咸見ざる靡かりき。

是の時、大衆、此の神力を觀、未曾有なりと歎じ、同聲に唱へて言はく「善い哉・善い哉、諸佛如來は、衆生の爲の故に、世間に出現したまへり。復、是の如き善權の居士有つて、同じく世に出で、而も能く、此の不可思議威神の力を現はしたまへり」と。

爾の時、惡魔、此の種種の神變の事を見已り、歡喜踊躍し、文殊師利菩薩の足を禮し、合掌恭敬して、如來に向ひ、是の如きの言を作せり「文殊師利童子は、甚だ希有なりと爲す、乃ち能く是の不可思議神通の變化を現じたまふに、諸の聞く有る者、孰も驚疑せず、若し衆生有つて、此の事を聞くを得、能く信受を生ぜんには、假使惡魔の、恒河沙の如くなるもの、惱害を爲さんと欲したりとも、終に能はざるところなり。世尊、我は是れ惡魔にして、常に佛の所に於て、其の便を伺求し、心に一切の衆生を惱害することを惡ぶも、若し人の、精勤して善を習する有れば、必ず威力を以て、其の爲に障礙せらる。

「世尊、我れ今日より、深く誓心を發す、但だ此の法門の、弘宣せらるる處、また所在の國土・城邑・聚落の、百由旬の内に、我れ其の中に在らんに、譬へば盲者の、作す所有ること無きが如く、衆生に於て侵惱を生ぜざらん。若し是の經を、受持して讀誦し、思惟して解釋する有らんに、必ず尊重を生じて、供給供養せん。

「世尊、私の儻黨は、佛の法に於て、留難を生ずることを樂ひ、若し人の、善を修行する有るを見れ

【一】一切法心自在神通三昧、實積に心自在一切法莊嚴三昧と云へり。

【二】留難、善事を留止し、修行の難障を爲すをいふ。

「又恒河沙等の如き諸佛國土の、有らゆる大海を以て、一の毛孔に置き、其の中の衆生をして、覺えず知らず、觸燒する所無からしめん。

「又恒河沙等の如き諸佛國の、有らゆる須彌山王を以て、彼の衆の山を以て、一山に内れん。復此の山を以て、芥子に内れ、而も彼の山上に住する一切諸天をして、覺せず知らず、亦燒す所無からしめん。

「又恒河沙等の如き諸佛の國土の、其の中の有らゆる五道の衆生を以て、右掌の中に置かん。復、是の諸國土の、一切の樂具を取り、一切の衆生に、盡く以て之を與へ、等しくして差別無からしめん。

「又恒河沙等の如き諸佛の國土の、劫盡きて燒けん時の、有らゆる大火を以て、一處に集在せしめ、其の大小をして、一の燈炷の如くならしめ、所有の火事をば、本の如くにして別無からしめん。」「又、恒河沙等の如き諸佛の國土の、有らゆる日月をば、若しは一毛孔より、光を舒べて之を映し、普く其の明を隱蔽して、現れざらしめん。天子、我れ一劫、若しは一劫の餘のあひだも、文殊師利童子の、三昧・神通の變化の力を説くも、窮盡すべからず」と。

爾の時、魔波旬、自ら其の身を變じて、比丘の形と作し、會中に在り、却つて一面に坐したるが、佛に白して言はく「世尊、我れ今、文殊師利童子の神通の力をば説きたまふを聞けども、信受する能はず。唯願はくは世尊、我が前に於て、其の神力を現せしめ、我をして見るを得しめたまはん」と。爾の時、世尊、是の惡魔の、變じて比丘と爲れるを知りたまひ、衆生をして、善根を増長せしめんと欲したまへるが故に、文殊師利菩薩に告げて言はく「汝應に自ら、神通の力を現じ、此の會中なる、無量の衆生をして、咸善利を得しむべし」と。

文殊師利所說不思議佛境界經卷上

【五三】劫盡きて云云、劫の終に及び水、火、風などの災あつて、世間を壞すといふ。今はその中の火災あるを云へり。

小なるものにして、猶ほ七層有り、或は八層・九層、乃至高きこと二十層なるあり。一一の臺上には、處處に層級ありて、皆衆の天女有り、盛年好色にして、手足柔軟、額廣く眉長くして、面目清淨、金の羅網の如く、常に光明有り、亦蓮華の如く、諸の塵垢を離れ、言を發するに笑を含み、進止に廻旋し、動けば必ず儀に合し、麗にして而も別有り、譬へば満月の如くにして、人の樂見する所たり。笙・篋・琴・瑟・簫・笛・鐘・鼓もて、或は歌ひ、或は嘯かに、音節相和し、妙妓行を成し、庭を分つて共に儻ふを見たり。是の如き等の事、宛然として備に、曠たり。

時に善勝天子、自の宮殿と、及び其の眷屬の、歡娛の事を見已り、心に疑怪を生じ、文殊師利菩薩に白して言さく『奇なる哉、大士、云何ぞ我及び大衆をして、瞬息の間に、此に來至せしめたる』と。

爾の時、長老須菩提、善勝天子に語つて言はく『天子、我も初には亦、諸の大衆と、皆共に兜率陀天に至れりと謂へるも、而も今乃ち知んぬ、本來動かす、會て共に彼の天上には往かず、是の如きの所見は、皆是れ、文殊師利菩薩の、三昧神通の所現たるのみなるを』と。

時に、善勝天子、即ち佛に白して言さく『世尊、文殊師利菩薩は、甚だ希有なりとは爲す。乃ち能く三昧神通不思議の力を以て、此の衆會をして、本處より動せずして、此の兜率陀天に至ると言はしむることや』と。

佛の言はく『天子、汝は但だ文殊師利童子の、神通變化の少分の力を知るのみ。我の知る所は無量なり。天子、文殊師利の神通の力を以てせば、假使恒河沙等の如き諸佛國土の、種種の嚴好、各各不同なるをも、能く一佛土の中に於て、普く明に見えしめん。

『又恒河沙等の如き諸佛國土を以て、一處に集在せしめ、狀貌の束の如くならしめ、上方に擧擲せんことも、以て難しとは爲さず。』

【五】 曠、みつめるなり。

は即ち是れ 非相にして、平等の相なり。是れ諸の聖人の、一切法に於て、解脱を得たるの相なり。是の中には、苦を知り、集を斷じ、滅を證し、道を修するなど、是の如き等の相の、得べきもの、有ること無し。若し衆生有り、是の如き一切諸法平等の義を聞くことを得て、驚怖を生ぜんには、應に知るべし、是を増上慢の者とは爲す」と。

爾の時、世尊、即ち之に告げて言はく「善い哉、善い哉、諸の比丘、汝の説く所の如く、是の如く、是の如し。須菩提、汝等應に知るべし、此の諸比丘は、已に過去に、迦葉佛の所に於て、文殊師利童子より、是の如き甚深の法を聞くことを得、法を聞けるを以ての故に、疾く神通を得、今復、聞くことを得て、隨順して逆はざるなり」と。

「須菩提、若しは復人有り、我が法中に於て、斯の義を聞くを得、信解を生ぜんに、皆來世に於て彌勒佛を見、若し未だ大乘の意を發さざらんも 三會の中に、悉く解脱を得、若し已に大乘の意を發したらん者は、皆 堪忍の地に住するを得ん」と。

爾の時、善勝天子、文殊師利菩薩に白して言はく「大士、汝常に此の閻浮提の中に於て、衆の爲に說法したり。今兜率天に、諸の天子有り、會て過去に於て、無量の佛に値ひ、供養・恭敬して、諸の善根をば種ゑたるも、然も生れて天中に在り、境界に耽著し、能く此の法會に來つて、聽受する有らず。昔種ゑたる善根は、今將に退失せんとす。若し誘誨を蒙らば、必ず更に増長せん、惟願はくは、大士、暫く彼の天に往き、彼の諸天の爲に、法の要を弘宣せんことを」と。

爾の時、文殊師利菩薩、神通力を以て、即ち其の處に於て、忽然として、兜率天宮を化作し、其の所有の如くに、悉く皆備足し、善勝天子、及び此の會の一切の天人をして、皆彼の天の上に在り、具に彼の種種の嚴飾、園林・池沼・果樹の行列、殿堂・樓閣・棟宇の交臨せる、繡柱の梁を承け、窓間を戸を彫み、檀檣・壘・棋・碁、砵訶分布し、寶を積んで臺と爲して、莊嚴綺錯し、其の臺の極めて

【四五】 非相、寶積の文には、無相無所得に作る。

【四六】 三會、彌勒菩薩成佛の曉には、華林園中の龍華樹の下に、三度の法會を開き、一切衆生を度すとすといふ。故に龍華三會ともいふ。

【四七】 堪忍の地、菩薩十地の中の一、或は初地といひ、或は五地とす。

【四八】 善勝、寶積には善徳に作る。

【四九】 檣はむらがる。檣はますがた、即柱上の柝なり。

【五〇】 棋、柱の上のますがたなり。

【五一】 砵訶、もと石の衆いさまをいふ、今はますがたの多くかさなれるを示したるなり。

無く、色界無く、眼識界無く、耳界無く、聲界無く、耳識界無く、鼻界無く、香界無く、鼻識界無く、舌界無く、味界無く、舌識界無く、身界無く、觸界無く、身識界無く、意界無く、法界無く、意識界無し。此の中には亦、地界・水界・火界・風界・虚空界・識界無し。亦欲界・色界・無色界も無く、亦有爲界と無爲界とも無く、我・人・衆生・壽者等の、是の如き一切も、皆有る所無く、定んで不可得なり。若し能く是の平等の深義に入らば、無所入と共に相應す。即ち是れ世間法を出離したるなり」と。

是の法を説ける時、會中の比丘、二百人は、永く諸漏を盡し、心に解脫を得て、各各身に著くる所の上衣を脱し、以て文殊師利菩薩に奉つて、是の言をば作せり、「若し衆生有り、此の甚深の妙法を聞くを得んには、應に信受を生ずべし。若し信を生ぜずして、證悟を求めんと欲するも、終に得べからず」と。

爾の時、長老須菩提、諸の比丘に語つて言はく「汝、何の得る所かあり、何を以てか證とは爲す」と。諸比丘の言はく「大徳、得無く證無きは、是れ沙門の法なり。所以は何とならば、若し得る所有らんに、心則ち動亂し、若し證する所有らんに、則ち自ら矜負す。動亂と矜負とは、魔業に墮す。若し自ら「我れ得たり、我れ證したり」と言ふ有らば、當に知るべし、則ち是れ増上慢の人なり」と。

佛の言はく「諸の比丘、汝等審に、増上慢の義を知るや不や」と。諸の比丘、答へて言はく「世尊、我が意の如くんば、若し人有り「我れ能く苦を知る」と言はんに、是れ苦の相を知らずして「我れ知る」と言ひ、我れ能く集を斷じ、滅を證し、道を修す」と言はんに、「是れ集・滅・道の相を知らずして、乃至「我れ能く道を修す」と言ふなり。應に知るべし、此は是れ増上慢の人なり。

「所以は何とならば、苦の相は即ち無生の相なり、集・滅・道の相も、即ち無生の相なり、無生の相

【四二】 無所入、實積には無所住に作る。

【四三】 上衣、鬱多羅僧衣なり。

【四四】 矜負、ほこりたのむなり。

而も佛の身・口・意の業と莊嚴せん爲の故に、精進をば捨てず、若し諸の菩薩、是の如きの行を具せば、乃ち能く行するなり」と。

爾の時、須菩提、復、文殊師利菩薩に白して言はく「大士、汝の今説ける、此の菩薩の所行は、諸世間の、能く信受する所には非ず」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、我れ今、諸の衆生をして、永く世間を出でしめんと欲するが爲に、諸菩薩の、世法を了達したる出離の行をば説けるなり」と。須菩提の言はく「大士、何者か是れ世法にして、云何がするをば出離とは名くる」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、世間法とは、所謂五蘊なり。其の五とは何ぞとならば、色蘊・受蘊・想蘊・行蘊・識蘊——是の如きの諸蘊を謂ひ、色は聚沫の如く、受は浮泡の如く、想は陽焰の如く、行は芭蕉の如く、識は幻化の如くなり。是の故に、此の中には世間有ること無く、諸の蘊及び是の如きの言説・名字も有ること無し。若し是の解を得なば、心則ち散せず、心若し散せざれば、則ち世法に染せず、若し世法に染せざれば、即ち是れ世間の法を出離したるなり。

「復次に、大徳、五蘊の諸法は、其の性、本空にして、性空なれば則ち二無く、二無ければ、則ち我と我所とは無く、我と我所と無ければ、則ち取著する所無く、取著する所無ければ、則ち世間法を出離したるなり。

「復次に、大徳、五蘊の法は、因縁を以て有り、因縁もて有るが故に、則ち力有ること無く、力無ければ則ち主無く、主無ければ、則ち我と我所とも無く、我と我所と無ければ、則ち受と取とも無く、受と取と無ければ、則ち執競無く、執競無ければ、則ち諍論無く、諍論無ければ、則ち是れ沙門の法なり。沙門法は、一切法の、空中なる響の如くなり」と知る。若し能く一切諸法の、空中なる響の如しと了知しなば、即ち是れ世間法を出離せるなり。

「復次に、大徳、此の五蘊の法は、法界に同じく、法界は則ち是れ界に非ず、非界の中には、眼界

【二】執競、諍ふをいふ。

爾の時、須菩提、復、文殊師利菩薩に白して言はく「大士、汝は已に正位に入りたるや」と。
 文殊師利菩薩の言はく「大徳、我れ已に入りたりと雖も、復亦入りたるには非ず」と。

須菩提の言はく「大士、云何ぞ、已に入りて而も入りたるには非ざる」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、應に知るべし、此は是れ菩薩の智慧、善巧のみ。我れ今、汝の爲に、一の譬喩をば説かに、諸の智有るの人は、譬喩を以て解するを得ん。大徳、射師有り、其の藝超絶せるが、惟一子有りて、特に心を鍾めて愛したり。其の人、復、極重の怨讎有りて、耳に聞くを欲せず、眼には觀ることを欲せざりき。或る時、其の子、外出遊行し、遠處に在つて、路側に立てり。父遙に之を見て、是れ其の怨なりと謂ひ、弓を執り、箭を持ち、弦に控へて射たり。箭既に發し已つて、方にはれ子なるを知り、其の人、巧捷に疾走して箭を追ひ、箭の未だ至らざる間に、還復收得したらんが如し。射師と言へるは、菩薩に喩へ、一子とは、衆生に喩へ、怨家とは、煩惱に喩へ、箭と言へるは、此れ則ち聖智慧に喩へたるなり。大徳、應に知るべし、菩薩摩訶薩は、般若波羅蜜を以て、一切法の無生なるを觀じて正位にあるも、大悲の善巧の故に、故に實際に於て、證を作さずして、聲聞・辟支佛地に住り、將に一切の衆生を化度して、佛地に至らしめんとは誓ふなり」と。

爾の時、須菩提、又、文殊師利菩薩に問ひて言はく「大士、何等の菩薩か、能く此の行をば行する」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、若し菩薩にして、行を世に示し、世法の爲に染せられずば、現に世間に同じて、諸法に於て、見をば起さず。一切衆生の煩惱を斷ずることを爲すと雖も、勤めて精進を行じ、法界に入つて、盡の相を見ず。有爲に住せずと雖も、亦無爲をも得ず、生死に處ること、園觀に遊ぶが如くなりと雖も、本願未だ滿たざるが故に、速に無上の涅槃を證することを求めず、深く無我を知ると雖も、而も恒に衆生を化し、諸法の自性、猶し虚空の如くなるを觀ると雖も、勤めて功徳を修して、佛の國土を淨め、法界に入つて法の平等なるを見ると雖も、

【三〇】 正位、寶積の文には正性離生に作る。

【三一】 入りたる云云、同によれば、已に證入して、而も亦出でたりと云へり。

【三二】 善巧、方便をいふ。

【三三】 實際、眞如法性をいふ。

【三四】 問は、寶積に、云何菩薩而得此地と云ひ、答には、若し諸菩薩、一切地に住して所住無ければ、此の地を得たりと爲し、若し一切地に、悉く能く演説して、下劣の地に住せざれば、此の地を得たりとは爲す。

【三五】 有爲云云、同に雖に住無爲、而行有爲と云へり。

【三六】 本願の句、同には、次の無我の句に聯屬し、以下やや説相異なる。

生の爲に、未だ聞かざる法をば【三〇】説きつ。是の故に、我を聲聞とは爲すなり」と。

又問ひて言はく「汝は云何ぞ是れ辟支佛なる」と。答へて曰はく「我れ能く一切の諸法は、皆縁より起るを了知す。是の故に我を辟支佛とは爲すなり」と。

又問ひて言はく「汝は云何ぞ是れ三藐三佛陀なる」と。答へて曰はく「我れ常恒に、一切諸法の體と相と、平等なるを覺す。是の故に我を、三藐三佛陀とは爲すなり」と。

爾の時、須菩提、又問ふて言はく「大士、汝は決定して、何の地にか住する。聲聞地に住すとや爲ん、辟支佛地に住すとや爲ん、佛地に住すとや爲ん」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、汝應に知るべし、我れ決定して、一切の諸地に住するなり」と。

須菩提の言はく「大士、汝亦、決定して、凡夫地に住すべし」と。答へて曰はく「是の如し、何を以ての故にとならば、一切の諸法と及び衆生とは、其の性、即ち是れ決定の正位なり、我れ常に此の正位に住す。是の故に、我れ決定して、凡夫地にぞ住すとは言ふなり」と。

須菩提又問ひて言はく「若し一切の法及び衆生は、即ち是れ決定の正位ならんには、云何ぞ諸地の差別をば建立して、此は是れ凡夫地、此は是れ聲聞地、此は是れ辟支佛地、此は是れ佛地など言ふや」と。

文殊師利菩薩の言はく「大徳、譬へば世間の、言説を以ての故に、虚空中に於て、十方を建立するが如し。所謂此は是れ東方、此は是れ南方、乃至此は是れ上、此は是れ下方などなり。虚空は無差別なりと雖も、而も諸方の有ること、是の如く、是の如くに種々に差別す。此も亦是の如し。如来は一切の決定正位の中に於て、善方便を以て、諸地を立てたまへり。所謂此は是れ凡夫地、此は是れ聲聞地、此は是れ辟支佛地、此は是れ菩薩地、此は是れ佛地などなり。正位は無差別なりと雖も、而も諸地は別有り」と。

【三〇】 説きつ。實積には聞くを得しむるが故にと云へり。聲聞の字義に依る解釋なり。
【三一】 我れ能く云云。同には衆生をして法界を、信ぜしめ覺せしむるが故となす。
【三二】 一切諸法、同一一切諸法と法界とは平等なりと云へり。

須菩提の言はく「大士、汝、今、説法して、將て初學の心を護らざるべけんや」。

文殊師利菩薩の言はく「大徳、我れ今汝に問はん、汝の意に隨つて答へよ、良醫有り、人の病を治せんと欲するが如し。將て病人の心を護らんが爲の故に、辛・酸・鹹・苦など、病に應ずるの藥をば與へずして、能く其の人をして、病除差え、安樂に至らしむるを得るや不や」と。答へて言はく、「不す」と。

文殊師利菩薩の言はく「大徳、此も亦是の如し、若し説法の師にして、將に初學の心を護らんとするが爲の故に、甚深の法をば隠して、爲に説かず。其の意欲に隨つて、龜淺の義のみを演べて、能く學者をして、生死の苦を出で、涅槃の樂を得しめんこと、是の處有ること無きなり」と。

是の法を説ける時、衆中に五百の比丘僧有りて、諸漏永く盡きて、心に解脱を得、八百の諸天子、遠塵・離苦して、法眼淨を得たり。復、七百の諸天子有り、其の辯才を聞いて、深く信樂を生じ、皆阿耨多羅三藐三菩提の心を發したりき。

爾の時、須菩提、復、文殊師利菩薩に向つて言はく「大士、汝は頗し亦、聲聞乘に於ても、信解を生じ、又此の乘の法を以て、衆生を度するや不や」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、我は一切の乘に於て、皆信解を生じたり。大徳、我は聲聞乘を信解し、亦辟支佛乘を信解し、亦三藐三佛陀乘をも信解せるなり」と。

須菩提の言はく「大士、汝をば是れ、聲聞とや爲ん、是れ辟支佛とや爲ん、是れ三藐三佛陀とや爲ん」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、我は是れ聲聞なりと雖も、然も他よりは聞かず、是れ辟支佛なりと雖も、大悲を捨てず、及び畏るる所無し。已に正等覺をば成すと雖も、一切の應に作すべき所の事に於て、未だ嘗て休息せざるなり」と。

須菩提、又問ふて言はく「大士、汝は云何ぞ是れ聲聞なる」と。答へて曰はく「我れ恒に一切衆

【二六】 初學の心、新發意の菩薩。

【二九】 一切の云云、寶積には不捨本願とあるのみ、

く「世尊、諸の聖人は、數の法を證したるに非ず、已に諸數の法を出離するを得たるが故なり」と。

爾の時、世尊、復、文殊師利菩薩に語つて言はく「童子、汝は聖法を成就したりとや爲ん、非聖法を成就したりとやせん」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、我れ聖法をも成就せず、亦非聖法をも成就せず。世尊、化人有るが如し、聖法を成就したりとや爲ん、非聖法を成就したりとや爲ん」と。

佛の言はく「童子、化人は聖法を成就したりとは言ふべからず。亦非聖法を成就したりとも言ふべからず」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、佛は豈に、一切の諸法は、皆文化の如しとは説きたまはずや」と。

佛の言はく「是の如くなり」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、一切の諸法は、文化の相の如し。我れ亦是の如し。云何ぞ聖法を成就し、非聖法を成就すと言ふべけんや」と。

爾の時、世尊、復、文殊師利菩薩に語つて言はく「童子、若し是の如くならば、汝、何の所得がある」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、我れ如來の平等・無自性の境界をば得たり」と。

佛の言はく「童子、汝、佛の境界を得たるや」と。文殊師利菩薩の言はく「若し世尊、佛の境界に於て、所得有らば、我れも亦、諸佛の境界をば得ん」と。

時に長老須菩提、文殊師利菩薩に問ひて言はく「大士、如來は佛の境界を得たまはざるや」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、汝は聲聞の境界を得たりと爲べきや不や」と。

須菩提の言はく「大士、聖心解脫は、境界有ること無し。是の故に我れ今、境界の得べき無し」と。文殊師利菩薩の言はく「大徳、佛も亦是の如くにして、其の心の解脫には、境界有ること無し。云何ぞ所得有りと謂はんや」と。

【三】 諸の聖人云云、同に法無數故、聖遠離數、爲無數也と。

【四】 非聖法、同には只、聖法を證すとやせん、證せずとやせんとのみ云へり。

【五】 化人云云、同には、化人に問ひて、汝云云と云はんが如しとあり。

【六】 汝何の云云、寶積には、汝於三乘、證三何等と云へり。

【七】 聖心解脫、同には聖者解脫、非レ得非ニ不得と云へり。

れんとて、而も空を求めなば、當に知るべし、是の人は未だ善く修行せず、名けて修行する者とは爲すを得ざるなり。何を以ての故にとならば、貪瞋等の一切の煩惱は、即ち空なるが故なり」と。

爾の時、世尊、復、文殊師利菩薩に語つて言はく「童子、汝は貪瞋癡に於て、已に出離したりと爲んや、未だ離せずと爲んや」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、貪・瞋・癡の性は、即ち是れ平等なり、我れ常に是の如き平等に住するなり。是の故に我れ貪瞋癡に於て、已に出離したるにも非ず、亦未だ離せざるにも非ず。世尊、若しは沙門・婆羅門有り、自見には貪瞋癡を離れんも、他見には貪瞋癡有り。即ち是れ二見なり。何をか二見とは謂ふとならば、謂はく、斷見と常見となり。所以は何とならば、若し自身は貪瞋癡を離れたりと見んに、即ち是れ斷見なり。若し他身に、貪・瞋・癡有るを見れば即ち是れ常見なり。世尊、是の如き人をば、正住と爲すに非ず。夫れ正住の者は、應に已に於て勝を見、他を謂つて劣と爲すべからざるが故なり」と。

爾の時、世尊、復、文殊師利菩薩に語つて言はく「童子、若し是の如くならば、何所に住するをか名けて正住とは爲す」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、夫れ正住とは、所住有ること無く、無所住に住する、是を乃ち名けて正住と爲すのみ」と。

佛の言はく「童子、豈に正道に住するを以て、正住と爲すにあらずや」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、若し正道に住すれば、則ち有爲に住するなり。若し有爲に住すれば、則ち平等の法性には住せず。所以は何とならば、有爲の法は生滅有るが故なり」と。

爾の時世尊、復、文殊師利菩薩に語つて言はく「童子、無爲は是れ數法なるや不や」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、無爲は是れ數の法には非ず。世尊、若し無爲の法にして、數に墮せば、則ち是れ有爲にして、無爲には非ざるなり」と。

佛の言はく「童子、一切聖人は、無爲の法を得たれば、數有らずや」と。文殊師利菩薩の言は

【七】 自見云云、同に自謂離欲見他煩惱。

【八】 若自身云云、實積の文には謂ふ煩惱一名爲常見。謂無煩惱一名爲斷見とあり。

【九】 正住の者云云、同に正修行者、不見自他有無之相と。

【一〇】 夫れ正住云云、同に正修行者、爲無所依と云へり。

【一一】 數法云云、同に煩しは數有るやと。

【一二】 一切聖人云云、同に若聖者得證無爲一則有二此法一寧無數耶と。

は則ち平等の正覺しょうかくには非ず、異らざるを以ての故に、一切の法に於て、平等びやうどうに正覺しょうかくしたまふをば、説せついて如來じゆらいとは名なけまつればなり」と。

爾の時、世尊、復、文殊師利菩薩に語かたつて言はく「童子、汝は能く、如來所住にょらいしよじゆの平等びやうどうの法を了知りやくちしたるや不いなや」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、我れ已に了知りやくちしまつる」と。

佛の言はく「童子、何物なにものかか是れ、如來所住にょらいしよじゆの平等びやうどうの法なる」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、一切の凡夫ぼんぷの、貪さん・瞋じん・癡ちを起す處、是れ如來所住にょらいしよじゆの平等びやうどうの法なり」と。

佛の言はく「童子、云何ぞ、一切凡夫いっけんぼんぷの、貪さん・瞋じん・癡ちを起す處、是れ如來所住にょらいしよじゆの平等びやうどう法なる」と。

文殊師利菩薩の言はく「世尊、一切の凡夫ぼんぷは、空くう・無相むじやう・無願むげんの法中に於て、貪さん・瞋じん・癡ちを起すなり。是の故に一切凡夫いっけんぼんぷの、貪さん・瞋じん・癡ちを起す處、即ち是れ如來所住にょらいしよじゆの平等びやうどう法たり」と。

佛の言はく「空くうは豈に、是れ有法いふほふにして、中に貪さん・瞋じん・癡ち有りと云ふべけんや」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、空くうは是れ有なり、是の故に貪さん・瞋じん・癡ちとも、亦是れ有あなり」と。

佛の言はく「童子、空くうは云何いふなんぞ有にして、貪さん・瞋じん・癡ちも復、云何いふなんぞ有なる」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、空くうは言説ごんせつを以ての故に有り、貪さん・瞋じん・癡ちも亦、言説ごんせつを以ての故に有り。佛の比丘びくうに説きたまふが如し「有あとは無生むじゆ・無起むき・無作むさく・無爲むゐにして、諸行しよぎやうの法には非ず。此の無生むじゆ・無起むき・無作むさく・無爲むゐなるものは、諸行しよぎやうの法には非ず、不有ふゆうにも非ず。若し不有ふゆうならば、則ち諸行しよぎやうを生起しやうきし、作爲さくゐするの法に於て、應おつに出離しゆりすること無かるべし。有あなるを以ての故に、出離しゆりと言ふのみ」と。是も亦、是の如くなり。若し空くう有ること無ければ、則ち貪さん・瞋じん・癡ちに於て、出離しゆりすること無かるべし。空くう有るを以ての故に、貪さん等の諸しよの煩惱ぼんなんを離ると説くのみ」と。

佛の言はく「是の如く、是の如し、汝の所説なんじゆせつの如し、貪さん・瞋じん・癡ち等の一切の煩惱ぼんなんは、皆空くうの中に住せざる莫なきなり」と。文殊師利菩薩、復、佛ぼつに白まをして言はく「世尊、若し修行しゆぎやうする者、貪さん・瞋じん等を離

【二】有法、有は存在の謂、有法は存在するものと云ふが如し。

【三】有云云、寶積には、諸比丘、有無生、無爲、無作、無起、若無生、無爲、無作、無起、不有者、亦不可說有生有爲有作者、是故比丘、以有無生及無所起、由此得說有生有起。：

【四】修行する者、寶積には觀行者に作る。

於て、菩提を得たり、諸相平等なるが故に。無願の境界に於て、菩提をば得たり、三界平等なるが故に。無作の境界に於て、菩提を得たり。諸行平等なるが故に。童子、我は無生・無起・無爲の境界に於て、菩提をば得たり。一切の有爲は平等なるが故なり」と。

時に文殊師利菩薩、佛に白して言はく「世尊、無爲とは、是れ何の境界なるや」と。佛の言はく「無爲とは、思量の境界に非ず」と。

文殊師利菩薩の言はく「世尊、思量の境界に非ざるもの、是れ佛の境界たり。何を以ての故にとならば、思量の境界に非ざる中には、文字有ること無く、文字無きが故に、辯説する所無く、辯説する所無きが故に、諸の言論を絶す。諸の言論を絶する者、是れ佛の境界たるなり」と。

爾の時、世尊、文殊師利菩薩に問ひて言はく「童子、諸佛の境界は、當に何に於てか求むべき」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、諸佛の境界は、當に一切衆生の煩惱中に於て求むべきなり。所以は何とならば、若し正しく衆生の煩惱を了知しなば、即ち是れ諸佛の境界なるが故に。此の正しく衆生の煩惱を了知する、是れ佛の境界にして、是れ一切の聲聞辟支佛所行の處には非ず」と。

爾の時世尊、文殊師利菩薩に語つて言はく「童子、若し佛の境界にして、即ち一切衆生の煩惱中に求むべきならんには、諸佛の境界には、去來有りや」と。文殊師利菩薩の言はく「不ず、世尊、諸佛の境界には、來も無く、去も無し」と。

佛の言はく「童子、若し諸佛の境界にして、來無く去無ければ、云何ぞ「若し正しく衆生の煩惱を了知せば、即ち是れ諸佛の境界なり」とは言ふ」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、諸佛の境界の、來無く去無きが如く、諸の煩惱の自性も、亦復是の如く、來も無く、去も無し」と。

佛の言はく「何者か是れ諸煩惱の自性たる」と。文殊師利菩薩の言はく「世尊、佛境界の自性こそ、即ち是れ諸煩惱の自性たり。世尊、若し佛境界の自性にして、諸煩惱の自性に異らば、如來

【六】 無願 (apamāṇikā) 無相なるが故に、願求すべきなしと觀するをいふ。

【七】 諸行、實積の文には有作に作る。

【八】 無生無記、同には説かず。

【九】 思量云云、同には無念に作る。

【一〇】 言論を絶する者、同には不可説に作る。

【一一】 此の正しく云云、實積には衆生煩惱性、不可得とあり。

【一二】 去來、同には増減に作る。

【一三】 如來は云云、實積には則ち佛、一切法平等性中に住すとは説かず。煩惱の性、即ち佛界の性なるを以ての故に、如來は平等性に住すとは説くと。

文殊師利所說不思議佛境界經

唐天竺三藏 菩提流志詔をうけ奉つて譯す

卷の上

是の如くに我れ聞く。一時、佛、舍衛國なる、祇樹給孤獨園に在し、大比丘衆一千人、菩薩十千人と俱なりき。復、欲界の諸天子、色界の諸天子、及び淨居天子有り、并に其の眷屬、無量百千、周匝圍遶し、供養恭敬して、佛の說法を聽きたり。

爾の時、佛、文殊師利菩薩に告げて言はく「童子、汝は辯才有れば、善能開演せよ。汝、今應に、菩薩大衆の爲に、妙法を宣揚すべし」と。

時に文殊師利菩薩、佛に白して言はく「世尊、佛今、我をして何等の法をか説かしめたまふや」と。佛の言はく「童子、汝、今應に、諸佛の境界を説くべし」と。

文殊師利菩薩の言はく「世尊、佛の境界は、眼の境界に非ず、色の境界に非ず、耳の境界に非ず、聲の境界に非ず、鼻の境界に非ず、香の境界に非ず、舌の境界に非ず、味の境界に非ず、身の境界に非ず、觸の境界に非ず、意の境界に非ず、法の境界に非ず。是の如き等の差別無きの境界をば、是を乃ち名けて諸佛の境界とは爲すなり。世尊、善男子・善女人にして、佛の境界に入らんと欲する有らんに、無所入を以て方便と爲さんに、乃ち能く悟入せん」と。

爾の時、文殊師利菩薩、佛に白して言はく「世尊、如來は、何等の境界に於てか、菩提をば得たまへる」と。

佛の言はく「童子、我れ空の境界に於て、菩提を得たり、諸見平等なるが故に。無相の境界に

文殊師利所說不思議佛境界經卷上

【一】 大寶積經卷第一百一、善德天子會第三十五。

【二】 淨居天、四禪に不還果を證せる聖者の生るべき處。之に無煩、無熱、善現、善見、色究竟の五天あり。此の五は聖者のみ有り、凡夫の雜はり住すること無き故に淨居といふ。

【三】 是の如き云云、寶積には、非境界、是佛境界とあり。

【四】 空(Sūnyatā) 萬有の人又は法の空なるを觀するなり。
【五】 無相(Animitta) 空なるが故に差別の相狀無きをいふ。

の云ふ所とするも、何の障りもなく、寧ろその方が却つて自然にさへ見える。文殊をして是を語らしめたことは、佛の方便に非ずんば、即ち文殊既に佛位に入るべきの證佐とならう。かくの如き菩薩の現する所、説く所が、佛の境界に非ず、佛

地に在る者の所説に非ざる理由は無い。文殊師利所説佛不思議境界經の題號、實に顯はし得て妙といふべきである。而して文殊の説く所（殊に經の初に於て）は、染淨を分たず、凡聖を隔てず、煩惱即佛、三毒即平等とし、三乘を以て佛の

方便と見るなど、諸他の大乘諸經の、好んで取り扱へる所の諸問題に觸れつゝも、而も夫等を凡て「佛境界」を以て攝したる如き觀あるは、自ら本經の思想的地位を暗示するものと見ることが出来る。

昭和七年十月一日

譯者 蓮 澤 成 淳 識

説くと、文殊は兜率天に行かんことを善勝天子に告げ、無量の諸天と共に、かの天に至り、一切の善法を成就するを得る爲の行として、持戒・修禪・般若・神通・智・調伏・不放逸などを説き、更に不放逸もて、三種の樂を得、三種の垢を除き、六波羅蜜の一一にある三の障と三の成滿とを得、また菩薩の三十七菩提分もこの不放逸で得ることを述べ、不放逸の菩薩は、畢竟の寂靜に入るべきを教へる。

次に善勝天子は、菩薩道の修行に就て尋ねるので、是に就ての文殊の詳説があり、一切功德光明といふ世界を見度いと申し出ると、神通もて普賢如來のかの世界を見せしめ、その世界より來れる諸菩薩大衆の爲に、更に説法して、天宮より没し、かの世界の菩薩衆と共に佛所に至る。佛は文殊等が神通を變化したのは衆生成熟の爲であつて、已に深理を得、永く佛事を施作して、此の界に生れたるこ

となどを説かれ、付屬があつて終つてゐる。

經は佛の境界を示すのに、隱顯・表裏の法を用ひてゐる。先づ文殊をして、佛の境界を説かしめられたことは、表面からは規定したもので、たとひその説き方が積極的でないにしても、佛の境界を顯説したものと云はねばならぬ。經の後半は、是に反して、文殊の神通を用ひ、その上で種々の説法のあることは、その限りに於て、文殊の威力を示すものではあるが、經の前半に對照して考へると、單に文殊の神通を示すものではなくて、文殊の神通によつて、裏面から佛の境界を説いたものと見ねばならない。蓋し文殊は佛に對して、「我れ如來の平等無自性の境界をば得たり」と云ひ、語を繼いで、「佛の境界にして所得あらば、我れ亦、諸佛の境界を得たり」と述ぶるところ、既に佛地を證すべくして、然も尙ほ所願あ

つて、之を取らざることを云ふものであり、「我れ恒に一切諸法の、體と相と平等なるを覺す、是の故に、我を三藐三佛陀とは爲す」と説き、「我れ決定して一切の諸地に住す」と自ら述ぶるのみならず、經の末尾に、「文殊師利は已に無量阿僧祇劫に於て、佛事を施作し、衆生の爲の故に世間に生れ、此の神通變化の事をば現じたり」と佛の演べられた所を以てして、身を菩薩に現じつゝも、實は佛境界に在ることを知るべきであり、従つて文殊所現の神通、所説の教法は、則ち佛の神通説法と簡ぶ所がないわけであつて、經の後半に隱の義有りと云ふ所以、亦ここに存するのである。

若し更に一步を進むれば、文殊と佛との問答の如きは、形式上問答の體をなすと雖も、その内容より云へば、佛が文殊をして説かしめられたものであつて、文殊の詞を直に佛の詞とし、佛の問を文殊

文殊師利所說不思議佛境界經解題

本經は大寶積經第三十五會である善徳天子會と同本異譯で、共に唐の菩提流志の譯にかゝるものである。開元錄第九には、文殊師利所說不思議佛境界經二卷を出して、長壽二年（西紀六九三、唐の中宗、嗣聖一〇年に當る）に周の東寺に於て譯出したもので、是が第一譯であるといひ、更に同第十一には、大寶積經第三十五の善徳天子會の項では、菩提流志新譯とし、流志が先に譯した經と同本異譯なる旨を記してゐる。同一の譯者の手に成つたといふ右二本を對照すると、全同では無いから、東寺に於て譯した經の外、大寶積經を編んだ際、更に改譯したものと云はねばならぬ。

經は題號の示すが如く、佛境界の不思議なるを、文殊師利が説いたもので、内容

は大體次の如きものである。即ち舍衛城の給孤獨園で、佛の間により、佛の境界は、六根六境を超えた、無所入のものであり、思量の境に非ざるも、而も一切衆生の煩惱の中に於て求むべく、正しく衆生の煩惱を了知すれば、是れ佛の境界であつて、諸煩惱の自性は、即ち佛境界の自性であり、凡夫の三毒を起す處、これ佛所住の平等の法で、凡夫は空・無相・無願の法に於て、煩惱を起すが、この三毒の性は實は平等であることを知るを正住とし、正道に住するから正住とすと見るが如きは、有爲を離れざるものであつて、聖人は有爲無爲、聖法・非聖法の二元を超えたことが述べられる。

次で文殊と須菩提との間に、境界の得否に就ての問答があり、文殊は決定して

一切の諸地（三乘の）に住すること、既に正住に入りたるも、而も亦入りたるに非ざることを述べて、菩薩の行に及び、世間法は即ち五蘊であり、この五蘊が、本空なるを了知するが出離であることを示してゐる。

次に須菩提が、諸比丘に對して、何の得る所かあり、何をか證となすを問ふた機會に、佛は慢に就て説き、かゝる義を聞かん者は、彌勒の世に、大乘の意を發して地位に在るべきを説かれる。

時に善勝天子が、兜率天に於ても、かかる説法のあらんことを請ふので、文殊は、神通を以て、直にかの天の在るが如くに化作すると、佛がその通力の無量なるを讚へ、重ねて會中の無量衆生をして、善利を得しむるやう、その通力を發揮せんことを求められる（卷上）。

文殊の通力を現前に見て、惡魔もこの法に歸依し、菩提心を起して護法の呪を

薩と一切の會者・諸天・龍神・乾沓恕・世間人など、經を聞いて歡喜し、前んで佛の爲に禮を作しぬ。

彌勒菩薩所問本願經終

彌勒菩薩所問本願經

一一

めんと欲し、五濁・姪・怒・癡の中に處つて、樂うて生死に在りき。所以は何とならば、是の諸の人民は、多く非法を爲し、非を以て是と爲し、邪道を奉行して、轉相ひ賊害し、父母に孝ならずして、心常に惡を念じ、惡意もて、兄弟・妻息・眷屬及び他人に向ひ、師・和上を輕易し、常に男・女の垢濁を犯し、轉相ひ食噉せん。願はくは是の時世に處つて、中に佛と爲らんを。

「若し郡國・丘聚・縣邑など、但だ衆惡を説き、轉相ひ賊害し、瓦石相擊ち、杖もて相ひ搗撥し、便ち共に聚會し、轉相ひ罵詈し、自ら其の舍に還り、飯食を設置し、毒を以て中に著けて、他人を害せんと欲し、垢濁を起想して、轉誹謗を起し、過惡を伏匿して、還相ひ發露し、復善意とて無ければなり」と。

佛、阿難に言はく「我れ大哀を以て、普く一切を念じ、此の輩の人の爲に、經法を講説するなり」と。

賢者阿難、佛の此を説きたまふを聞き、即ち佛に白して言さく「未曾有なり、是の天中の天・如來の等正覺や。能く勤苦を至して、普く大意を弘め、弊惡を調御して、成就を得しめたまふことや。重擔を除かんが爲に、法寶を具足して、此の輩人の爲に、其の經法をば説きたまへり」と。

佛の言はく「是の如し、阿難、汝所言の如く、佛能く此を忍ぶのみ。乃ち應・如來の等正覺もて、剛強を教化して、衆の冥を除かんと爲し、佛の法徳を用て、之を具足せんための故に、乃ち此の人の爲に、其の教法をば説きたり」と。

阿難、佛に白して言さく「我れ如來の、堅重なる精進等の心の、是の如くなるを聞きまつつて、衣毛爲に堅ちぬ。此の經を名けて何等と爲し、云何が奉行すべき」と。佛の言はく「阿難、此の經をば名けて、本願當持慈氏本行・彌勒所問と名け、當に善く之を持すべし」と。

佛、經を説き已りたまふに、彌勒菩薩、賢者阿難、賢者大迦葉などの、諸大弟子、及び衆の苦

【七】女、麗本子に作る、今三本に依る。

【七】搗撥、うちはらふ。

【七】本願云云、異譯には「彌勒所問と名け、亦往昔本願因縁とも名くべし」と云へり。

乃ち視ることを得ん」と。爾の時、明月王は自ら兩眼を取つて、盲者に施與し、其の心譚然として、一の悔意も無かりき。この月明王とは、即ち我が身是れなり」と。

佛の言はく「須彌山は、尙ほ斤兩を稱知すべけんも、我が眼の布施は、稱計すべからざるなり」と。

佛、賢者阿難に語りたまはく「彌勒菩薩の、本道を求めける時、耳鼻・頭目、手足・身命、珍寶・城邑、妻子及び國土を持って、布施して人に與へ、以て佛道を成ぜんとはせずして、但だ善權方便の、安樂の行を以て、無上正眞の道を致すことを得たるなり」と。

阿難、佛に白さく「彌勒菩薩は、何の善根を以てか、佛道を致すことを得たる」と。佛の言はく「彌勒菩薩は、晝夜に各三たび、衣を正し體を束ね、又手して膝を下し、地に著け、十方に向つて、此の偈を説いて言はく、

「我れ一切の過を悔ひ

歸命して諸佛を禮しまつる

勸めて衆の道徳を助け、
無上の慧を得しめたまはんを」と。

佛、賢者阿難に語りたまはく「彌勒菩薩は、是の善權を以て、無上正眞の道の最正覺を得たるなり。阿難、彌勒菩薩は、道を求めて、本願すらく「某をして佛たらしめたまはん時、我が國中の人民をして、諸垢瑕穢有ること無く、姪・怒・癡大ならず、慇懃に十善を奉行せしめたまはんに、我れ爾らば乃ち、無上の正覺を取らんを」と」

佛、阿難に語りたまはく「後に當來の世の人民、垢穢有ること無く、十善を奉行し、姪・怒・癡に於て、以て心を経ざれば、正に爾の時、彌勒は、當に無上正眞の道を得、最正覺を成すべし。所以は何とならば、彌勒菩薩本願の致す所なればなり」と。

佛、賢者阿難に語りたまはく「我れ本、菩薩道を求めける時、一切を護つて、悉く淨なるを得し

【七】この段、先に註(云々)に云へる文に當る。次の偈文は、本文極めて簡なるも、異譯に在つては、長し。

【七】某、麗本其に作る、今三本に依る。

り出で、道にて一人の、疾を得て困篤せるを見、見已つて、哀傷の心有り、病人に問ふらく「何等の藥を以て療するを得なば、即ち痊ゆるや」と。病人答へて曰はく「唯王の身血のみ、我が病を療すを得ん」と。爾の時、太子は、即ち利刀を以て身を刺し、血を出して以て病者に與へ、至心に施す。與して意に悔恨無かりき」と。

佛、阿難に語りたまはく「爾の時の現義太子こと、即ち我が身是れなり。阿難、四大海の水は、尙ほ升量すべきも、我が身血の施は、稱限すべからじ。爾る所以は、正覺を求むるが故なり」と。

佛、賢者阿難に語りたまはく「乃往の過ぎし世に、王太子有り、號して蓮花王と曰ひ、端政妹好にして、威神巍巍たりしが、園觀より出でて遊び、道に一人の、身體癩を病めるを見、見已つて即ち哀念の心有り、病人に問ひけらく「何等の藥を以てか、汝の病を療すべき」と。病者答へて曰はく「王の身髓を得て、以て我が體に塗らば、其の病乃ち愈えん」と。是の時、太子は、即ち身骨を破り、以て其の髓を得、持て病者に與ふるに、歡喜して惠施し、心に悔恨無かりき。爾の時の太子こそ、即ち我が身是れなり」と。

佛、阿難に語りたまはく「四大海の水は、尙ほ升量すべけんも、身髓の布施は、稱計すべからず」と。

佛、賢者阿難に語りたまはく「乃往の去にし世に、王有り、號して月明と曰ひ、端政妹好にして、威神巍巍たりしが、宮より出で、道に盲者の、貧窮にして飢餓し、道に隨つて乞食するを見たるが、往いて王の所に趣き、王に白して言さく「王獨り尊貴にして、安隱快樂なり、我れ獨り貧窮にして、加ふるに復、眼盲たり」と。

「爾の時、月明王は、此の盲人を見、之を哀んで、涙を出し、盲者に謂はく「何等の藥か有つて、卿の病を愈すことをば得ん」と。盲者答へて曰はく「唯王の眼を得んに、能く我が病を愈して、眼

ての物語の一段あり。次註(七)參照。

【六六】一切現義、異譯には見一切義に作る。

【六七】病人答へて……療すを得んの句、異譯には傷頰を以て問答體を作り詳説す。以下の物語、亦爾り。

【六八】蓮華王、異譯には妙華に作る。

【六九】月明、異譯には月光に作る。

事を以て、正覺を取らず、何等をか、四と爲すとならば、一に國土を淨むると、二に國土を護ると、三に一切を淨むると、四に一切を護るとなり。是を四事と爲す。彌勒菩薩の、佛を求めんとする時も、是の四事を以ての故に、佛を取らざるなり」と。

佛の言はく「阿難、我れ本、佛を求めける時、亦國土を淨めんと欲し、亦一切を淨めんと欲し、亦國土を護らんと欲し、亦一切を護らんと欲したり。彌勒の發意は、我の前に先んずること、四十二劫なり。我は其の後に於て、乃ち道意を發したるも、此の賢劫に於て、大精進を以て、九劫を超越して、無上正眞の道を得、最正覺を成じたるなり」と。

佛、賢者阿難に告げたまはく「我れ十事を以て、最正覺を致しつ。何等をか十とは爲すとならば、一に所有を愛惜する所無きと、二に妻婦と、三に兒子と、四に頭目と、五に手足と、六に國土と、七に珍財寶物と、八に髓腦と、九に血肉と、十に身命を惜まざりしとなり。阿難、我れ此の十事を以て、疾く佛道を得たるなり」と。

佛、阿難に語りたまはく「復、十事有つて、疾く佛道を得たり。何等をか十とは爲すとならば、一に法を以て戒の徳を立てたると、二に常に忍辱を行じたと、三には常に精進を行じたと、四には常に其の心を一にしたると、五に常に智慧を行じて無極に度りたると、六には一切を捨てざりしと、七には已に忍の心を得て、一切に等しかりしと、八には空を習せざりしと、九に空法忍を得たると、十に無想の法を得たるとなり。阿難、我れ是の十事を以て、自ら佛道を得ることを致しぬ」と。

佛、賢者阿難に語りたまはく「我れ本、佛道を求めける時、勤苦すること無數にして、乃ち無上正眞の道を得たるなり。其の事一に非ざるなり」と。

佛、阿難に言はく「乃ち過去世の時に、王太子有り、一切現義と曰ひ、端政殊好なりき。國觀よ

【五〇】 四、異譯には、二種の莊嚴、二種の攝取ありとし、衆生を攝取し、衆生を莊嚴すると、佛國を攝取し佛國を莊嚴するなりと云へり。

【五一】 佛を求め云云、異譯には、彌勒菩薩は、過去世に於て、菩薩の行を修むるに、常に佛國を攝取し、佛國を莊嚴するものと樂へりと云へり。

【五二】 亦國土云云、是に對して釋迦佛は、衆生を攝取し、衆生を莊嚴することを樂へりと異譯にあり。

【五三】 四十二劫、異譯は四十二劫に作る。

【五四】 九劫云云、菩薩は三僧祇百大劫の修行を要すといふ。佛は今その九劫を超へて、九十一劫の修行にて、成道せられしをいふ。

【五五】 二より九に至る妻婦乃至血肉には夫々施したりしが略せられたるなり。

【五六】 其の心を一にすとは禪定に住したるを謂ふ。

【五七】 八、本文に不習空とあれども、空を修習したる」とならざれば、前後と連絡せず。異譯も「常に諸の空法に於て、常に修習したり」とあり。

【五八】 無想、異譯には「無想無願を成就したり」とあり。

【五九】 異譯には、この次に、彌勒の過去に於ける修行に就

過ぎたまふに、適其上を越し已りたまふや、便ち不起法忍を得たりき。是に於て佛、還、顧みて侍者に告げて言はく「我れ長者子梵志賢行の身上を過ぎたる所以は、即時に不起法忍を得しめ、眼能く洞視し、耳能く徹聽して、他人の心中に念する所を知り、自ら從來して生ずる所を知り、身能く飛行し、神通具足せしめんとてなり」と。

「佛、梵志賢行の身上を過ぎたまふに、便ち衆智に達し、五通具足して、亡失する所無かりしかば、即ち偈を以て佛を讃へて言はく、

「世を往來して十方に到りたまひ、
人中の尊にして、與に等しき無し

唯道に志して諸の行を過ぎたまへり、
願はくは覺・導師を稽首しまつらん。

諸の世間の明、
及び摩尼の光、炎光に過ぎたまへるを以て、

佛の光明を最上と爲す、
願はくは覺導師に稽首しまつらん。

師子の一たび鳴吼すれば、
諸の小獸伏せざる無きが如く、

佛の法を講じたまふこと亦是の如く、
悉く諸の異道を降伏したまふ。

眉間の相は清くして且つ徹し、
威無量にして積雪の如く

其の光明は三界を照したまふ、
佛の世に在るや與に等しき無し。

五圓の下の下には相輪を生じ、
其の輪妙にして千の輻あり、

此の土地及び山陵も
無上尊をば動かしまつる能はず」と

是の時、佛、賢者阿難に告げたまはく「爾の時の長者子梵志の賢行を知らんと欲すれば、今の彌勒菩薩是れなり」と。

賢者阿難、即ち佛に白して言さく「彌勒菩薩の不起忍を得たまへること、久遠より乃ち爾らば、何を以てか速に、無上正眞道の最正覺を達したまはざる」と。佛、阿難に語りたまはく「菩薩は四

【五二】 不起法忍、また無生法忍といふ、見惑を斷じて空理と生ずるを不起法忍を得といふ。空理は無起無生なれば、又無起法、無生法といひ、この法を忍可決定するを忍とす。

【五三】 眉間の相、即ち白毫相なり。

【五四】 足下の相は千輻の輪相なり。

【五五】 この偈を異譯に比するに、彼の前半に當るのみ。後半の相當文、本文に無し。

諸の外道を恐伏せしめたり
色妙にして與に等しき無く

精進ともて諸岸を度りたまひ、
雜譬も喩ふべからず

常に諸の法寶を講じ、

佛慧は度無極なり。
戒の徳及び智慧と
佛の道は衆の徳に過ぎたり。
無上の大智慧もて
光明もて衆を導師したまふ」と。

爾の時、賢者阿難、佛に白して言さく「未曾有なり、世尊、是の彌勒菩薩の、所願具足し、法を説くに缺減無く、法を講する字句、平等にして、説く所の法句は、縛著する所無く、經を講じ竟るに亂れたるところ無きことや」と。佛の言はく「是の如く是の如し、阿難、其の云ふ所の如く、彌勒菩薩は、辯才具足して、説く所の經法には、缺減する所無し」と。

佛の言はく「阿難、彌勒菩薩は、獨り偈を以て我を讚ふるのみにあらず、乃往を過ぐることも十無央數の劫に、爾の時佛有して、炎光具嚮作王如來・無所著・等正覺と號し、今現在に慧行を成じ、安定世間父・無上士・導御法・天上天下尊・佛・天中の天と號したり。爾の時、梵志長者の子有り、名けて賢行と云へるが、園觀より出で、遂に如來の經行したまふを見たるに、身色の光明、無央數に變じたるを見已り、心に念ずらく「甚だ善し、未曾有なり。如來の身は、不可思議なり、巍々たることは是の如く、光色妙好にして、威神照曜し、吉祥の徳を以て莊飾と爲したまふ。願はくは我をして、後に當來の世に、身を得んには、是の如く光色を具足して、威神照曜し、吉祥の徳もて、自ら莊嚴せしめんを」と。

「是の願を作し已り、便ち身を伏せ、心に念言するところを審にすらく「我れ當來の世に、法身の、如來無所著等正覺のごとくなるを得んには、如來當に我が身上を過ぎたまふべきことを」と。
「時に世尊、炎光具嚮作王如來、賢行長者子梵志の、心に念する所を知りたまひ、便ち其の身上を

とあり。

【四六】 色妙云云の偈は、異譯に在つては次の偈と倒置したり。

【四七】 炎光具嚮作王如來、異譯には日光遊戲妙音自在王如來とあり。

【四八】 賢行、異譯は賢壽と云へり。

【四九】 園觀、園苑なり。
【五〇】 如來云云の敘述、異譯詳し。

【五一】 法身、異譯はたゞ佛身と云へり。

三には善權教授三昧を得、四には有念無念御度三昧を得、五には普遍世間三昧を得、六には苦樂平等三昧を得、七には寶月三昧を得、八には月明三昧を得、九には照明三昧を得、十には二寂三昧を得、一切諸法に於て具足するなり。彌勒、是を菩薩の十の法行と爲し、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざるなり」と。

是に於て彌勒菩薩、偈を以て佛を讃へて言はく、

「世尊の本布施したまふや、

頭目をなど惜む所無く

禁を護つて犯す所無くして、

戒を奉じて與に等しき無し、

已に忍力を現じて

忍辱を大勢と爲して

已に精進力を了し

精進を大志と爲して

已に一切の惡を斷じ

大慧寂を力と爲して

清淨の惡、自在にして

智慧常に第一なり

慧もて魔の官屬を降して、

上義もて諸穢を離れ

世尊の法輪を轉じたまふは

妻子及び飲食

佛徳は 度無極なり。

鶻の、其の毛を愛するが如く、

功德度無極なり。

悉く諸の苦樂に等しく、

佛徳度無極なり。

無上の 徳もて害に對し

佛徳度無極なり。

導師として一心を樂み

佛、度無極を淨めたまふ。

自然にして起す所無く

佛、度無極を明らかにめたまふ。

樹下に大智を得、

佛力もて魔をも降伏したまへり。

大身の師子の吼ゆるがごとく

して、異の攀緣無く、無邊の

虚空處定に安住す」と云へり。

【三二】 六、同によれば、第五

を超えて、能く無邊の識定安

住するをいふ。

【三三】 七、同様に、無所有定

に安住するなり。

【三四】 八は、非想非非想定に

住するをいふ。

【三五】 九は、滅受想定に安住

するをいふ。

【三六】 悉く云云の一句、麗本

缺く。三本に依つて加ふ。

【三七】 二、異譯は處非處相應

三昧と云へり。以下夫々異なる。

【三八】 度無極、波羅蜜多の譯。

【三九】 鶻云云異譯には「如

犛牛愛尾」とあり。

【四〇】 悉く云云の二句、同に

「捨離於遺靜、不求入過惡」と

云へり。

【四一】 無上云云の二句、異譯

「得無上寂靜、究竟常安樂」と

云へり。

【四二】 徳、麗本勤に作る、今三

本に依る。

【四三】 志、麗本には至に作る、

今三本に依る。

【四四】 已に云云の一句、同に

「佛以禪定力、能滅諸罪垢、一

爲二天人導師、到於定彼岸」と

と云へり。

【四五】 自然云云の二句、同に

「善了知諸法、自性無二所有こ

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、七の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざるなり。何等をか七とは爲すとならば、一には善權の意有り、二には能く諸法の實を分別し、三には常に精進し、四には常に當に歡悅すべく、五には信忍を得、六には善く定意を解し、七には總じて智慧明なり。是を七法と爲す」

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、八の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざるなり。何等か八とは爲すとならば、一には直見を得、二には直念、三には直語、四には直活、五には直業、六には直方便、七には直意、八には直定なり。是を八法と爲す。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、九の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざるなり。何等をか九とは爲すとならば、一には菩薩は欲を脱したるを以て、諸の惡・不善の法を遠離し、想念有ること無く、寂定を得たるを以て、歡喜し、第一の一心を行するなり。二には已に想念を除き、内意寂となり、其の心一と爲り、想無く行無くして、便ち定意を得、心爲に歡悅して、第二の一心を行するなり。三には歡喜を離れて觀じ、常に寂定を爲し、身に安隱を得て、諸の賢聖の如く、説く所、觀する所に、心意の起る無くして、第三の一心を行するなり。四には善樂已に斷じ、歡悅と憂惑と、皆悉く爲に止まり、觀する所、苦無く樂無く、其の意清淨にして、第四の一心を得るなり。五には色の想を過ぎ、六には復説の想無く、七には復種種の想を念ぜず、悉く無央數の虚空の慧に入り、八には皆、無央數の虚空の慧を過ぎて、無量諸識の識知の行に入り、九には皆、諸の識知の慧を過ぎ、復有無の想無く、皆諸の無識の慧を過ぎて、即ち有想無想の行に入り、悉く有想無想の行を過ぎて、想を見ずして、寂定三昧を得るなり。是を九法と爲す」と。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、十の法行有りて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざるなり。何等か十とは爲すとならば、一には金剛三昧を得、二には所住の處に進益する所の三昧有り、

【八】善權云云、異譯には「正念に住し」と云へり。善權は善巧方便の謂。

【九】諸法云云、同じ「擇法を成す」と云へり。

【一〇】信忍、異譯には「身に輕安を得」と云へり。

【一一】七、異譯には「行捨を具足し」と云へり。

以上の七は、異譯によれば、七覺支を指すこと明なり。

【一二】この八は八聖道に擧げたり。

【一三】直活、普通に正命と云はるもの、活は麗宋二本治に作るも、元明等に依つて活に改む。

【一四】直意、普通正念と呼ばるるものに當る。

【一五】九、四禪定四無色定並に滅盡定の九次第定を擧ぐ。

【一六】想念云云、異譯には「初禪の尋伺喜樂、一心境性に安住す」と云へり。

【一七】二、異譯には「二禪の淨喜樂、一心境性に安住す」とあり。

【一八】三、異譯には「喜を遠離し、三禪の捨念慧樂、一心境性に安住す」あり。

【一九】四、同じ「憂苦及び喜樂を遠離し、四禪の捨念清淨、無苦無樂の心一境性に安住す」と云へり。

【二〇】五、同じ「色想を超過

て、乃ち意を發し、如來に此の如きの義を問へり。諦に聽いて、當に之を思念すべし」と。

彌勒、即ち言はく「唯然り、世尊、教を受けて聽きまつらん」と。佛の言はく「彌勒、菩薩には一の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せず。何をか謂つて一とは爲すとならば、謂はく寂靜平等の道意なり。是を一法と爲す」と。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、二の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せず。

何等をか二とは爲すとならば、一には定に住して起つ所無く、二には方便もて、諸の所見を別にする。是を二法とは爲す」と。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は、復、三の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せず。

何等をか三とは爲すとならば、一には大哀の法を得、二には空に於て所習無きを。知り、三には所知に所念無きなり。是を三法とは爲す」と。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は、復、四の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざるなり。何等をか四とは爲すとならば、一には戒に立し、二には一切法に於て、疑ふ所無く、三には樂つて閑居に處り、四には等しく觀するなり。是を四法と爲す」と。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、五の法行有つて、諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せず。何等か五なるとならば、一には常に徳義を立て、二には他人の長短を求めず、三には自ら身の行を省み、四には常に法を樂ひ、五には自ら身を念せずして、常に他人を救ふなり。是を五法と爲す」と。

佛、彌勒に語りたまはく「菩薩は復、六の法行有つて、諸の惡道を棄つ、惡知識の中に墮せざるなり。何等か六とは爲すとならば、一には慳貪ならず、二には弊惡の心を除き、三には愚癡無く、四には龜言無く、五には意慮空の如く、六には空を以て舍と爲すなり。是を六法と爲す」と。

【六】當、麗本常に作る、今三本に依る。

【七】寂靜平等の道意、異譯には勝意樂菩提の心と云へり。

【八】この二、異譯には、奢摩他をば常に勤めて修習すると、毘鉢舍那に於て、善巧を得るとの二とす。

【九】大哀、同に大悲と云へり。

【一〇】知、麗本缺、三本に依つて加ふ。異譯には「空の法を修習す」と云へり。

【一一】所知云云、異譯は、一切法に於て分別を生ぜずと云へり。

【一二】戒、麗本缺に作る、今三本に依る。

【一三】閑居、阿蘭若をいふ。

【一四】等觀、異譯には、正見の心を起すと云へり。

【一五】常に云云、異譯には「空法に依り」と云へり。

【一六】弊惡の心、瞋恚をいふ。

【一七】空を以て云云、空の法に住するをいふ。

彌勒菩薩所問本願經

西晋月氏三藏竺法護譯

聞くこと是の如し。一時、佛、披祇國、妙華山中なる、恐懼樹間の、鹿所聚の處に遊びたまひ、大比丘衆と俱にして、比丘五百人あり、一切賢聖にして、神通已に達し、悉く算比丘なりき。其の名を賢者了ん實際、賢者馬師、賢者愁波、賢者大稱、賢者賢善、賢者離垢、賢者具足、賢者牛同、賢者鹿吉祥、賢者優爲迦葉、賢者那翼迦葉、賢者迦翼迦葉、賢者大迦葉、賢者所説、賢者所著、賢者面王、賢者難提、賢者和難、賢者羅云、賢者阿難と曰ひ、是の如きの輩、五百の比丘ありき。

復、菩薩有り、彌勒等の如き五百人にして、其の名を増意菩薩、賢意菩薩、辯積菩薩、光世音菩薩、大勢至菩薩、瑛吉祥菩薩、軟吉祥菩薩、神通華菩薩、空無菩薩、慈信淨菩薩、根土菩薩、稱土菩薩、柔軟音響菩薩、淨土菩薩、山積菩薩、具足菩薩、根吉祥菩薩など、是の如き等の菩薩、五百人なりき。

爾の時、彌勒菩薩、座より起ち、衣服を整へ、長跪叉手して、佛に白して言さく、「願はくは問ひまつるところ有らんと欲す。唯天中の天、聽したまはば、乃ち敢て問ひまつらん」と。佛、彌勒菩薩に告げたまはく、「我れ當に問ふ所を聽すべし、便ち欲する所に在つて問へ。如來は當に、其の欲する所に隨ひ、之を發遣して、心をして歡喜せしむべし」と。

是に於て彌勒菩薩、問ふ所を聽さるるを得、踊躍歡喜して、世尊に白して言さく、「菩薩は幾の法を行する有つてか、皆諸の惡道を棄て、惡知識の中に墮せざる」と。佛、彌勒菩薩に告げたまはく、「善い哉、善い哉、彌勒、菩薩は哀念する所多く、安穩ならしむる所多し。諸天及び人を慰傷し

【一】 大寶積經第四十二會（第百十一卷、彌勒菩薩會、菩提流志譯）參照。

【二】 披祇國云云、流志譯には波羅奈國施鹿林中に作る。
【三】 比丘の名、異譯は只、橋陳如、摩訶迦葉、優樓頻螺迦葉、伽耶迦葉、那提迦葉、舍利弗、目連、阿難、羅睺羅を擧ぐるのみ。

【四】 菩薩の名、異譯大に異なる。

【五】 墮、慶本隨に作る、今三本に依る。

の發意は釋迦佛に先んづること四十二劫であり、釋迦佛も亦この四事を欲したが、今成道されたのは、百劫修行の中、九劫を超越されたのに由るのであつて、この成道の爲には種々の行をなしたまふた事を、二種の十法に約して述べ、更に佛道を求めて勤苦された事の、一にあらざる旨を説いて、過去に一切現義太子として、一病人の爲に、自ら身を刺き、身血を以て之に與へられたことや、蓮花王太子として、癩を病める者に、身骨を破つて髓を與へ、月明王として、盲目の者に、その兩眼を取つて與へられたことなどを述べ、須彌は計量し得んも、佛の兩眼の施は、稱計すべからざることが説かれる。

昭和七年九月廿九日

次で彌勒が佛道を求めた時、身支、寶財、妻子、國土を施して、道を成ぜんとせず、善權方便の安樂道に依つて無上道を致すことを得たと云ひ、更に晝夜六時に、衣を正し體を束ね、又手して膝を下し、地に著け、十方の佛に向つて禮し、一切の過を悔ひ、衆の道徳を助け、無上の慧を得しめたまはんことを請ふて、佛道を成ずるを得たこと、並に道を求めて佛たらん時、國中の人民は、垢穢無く、三毒大ならずして、十善を奉行するものたらんを願じたから、當來の人民が垢穢無く、十善を行ひ、三毒少ければ、彌勒は正覺を成すべきことを説かれる。

更に阿難に對して、釋尊が菩薩道を求

められた時には、一切を護つて、悉く淨なるを得しめんとし、樂つて三毒五濁の中に生死されたことを示されると。佛の勤苦して大意を弘め、弊惡を調御し成就せしめん爲に、經法を説きたまふことを阿難が歎じ、最後に經の付囑がある。

以上の如く、本經は菩薩の行を主として述べてゐるが、特に彌勒が今なほ正覺を取らずして、菩薩の位に在ることは、衆生成熟の方便であるとするとするところは、佛の法が、法の佛にまで進み、應身の思想から法身の思想に開展したことを示し、法身常住の思想から來るものである。

彌勒菩薩所問本願經解題

經錄の示す所によると、本經には三譯あつて、第一は西晋の法護が太安二年(西紀三〇三)に譯した(歷代三寶記六)、彌勒菩薩所問本願經(出三藏記二)には單に彌勒本願經とし。歷代三寶記六にはまた彌勒難經ともいふとす)であつて、茲に譯したものである。第一は東晋の祇多蜜譯。彌勒所問本願經で歷代三寶記七に出す所である。是に依つて、開元錄三には祇多蜜の項に之を出し、第二譯としてゐるが、開元錄第十四の有譯闕本の部に、この譯を出してゐるから、當時既に失せてゐたものである。第三譯は、大寶積經中へ、菩提流志が新に譯して加へた、第四十二會の彌勒菩薩所問會であつて、開元錄第十一には、明に第三譯と記入してゐるのである。

解題

經は正覺を成ぜんとする菩薩の所行を述べたもので、前半は、彌勒に對して、列學的に之を示し、後半では、阿難に對して、佛の因位に於ける行を主として述べてある。經題に云ふ本願とは、この菩薩の發意修行を意味したものである。

初に彌勒菩薩が、幾の法を行じて、菩薩は、諸の惡道を捨て、惡知識の中に墮せざるやと尋ねると、佛は一法より十法に至る十種の法を示される。即ち一法では寂靜平等の道意を擧げ、二法では空に住すると、方便を以て諸の所見を別にするを云ひ、三法には大悲と空と一切法に於て分別を生ぜざるとを説き、四法では戒を持すると、疑無きと、阿蘭若に處ると、正見に住するとを擧げ、五法では徳を立て、他人の長短を求めず、自らの身

行を省み、法を樂ひ、他人を救ふを述べ、六法では、慳貪無く、弊惡の心を除き、愚癡無く、意虛空の如く、空法に住するを示し、七法には七菩提分、八法には八正道分、九法には九次第定、十法には十種の三昧を説かれる。

すると彌勒菩薩は偈を以て佛を讚へるので、佛は阿難に向ひ、十無數劫の昔、炎光具嚮作王如來の所に、賢行と名くる梵志有り、如來の相好を見て、我れ後に身を得んに、斯の如く色光を具し、吉祥の徳を以て莊嚴せんことを願ふと、この如來は梵志の心を知つて、其の體上を過ぎて、無生法忍を得しめられ、梵志は佛を偈もて讚へたが、この賢行梵志こそ、今の彌勒であることを述べられる。

かく彌勒の無生忍を得たのが、久遠の昔にあるも、今尙ほ正覺を成じて佛とならざる所以のものは、菩薩は四事を以て正覺を取らざるに基くのであつて、彌勒

得、九十劫を超えて、復生・死せざりき。

時に佛、五百人に決を授けたまはく、「劫後十劫にして、劫を無塵垢と名け、佛を因授如來・無所著等正覺と號せんとし、是の五百人等は、當に彼の國——國を焔氣と名く——に生れ、同一の劫に當つて、俱に佛と作ることを得、皆字を同一にし、莊飾預知人意如來無所著等正覺と號せん」と。

佛、文殊師利に謂ひたまはく、「乃ち知る是の經は、饒益する所多きこと、是の如くならずや。若し今、最後に、菩薩摩訶薩及び沙門、若しは善男子・善女人等に有り、菩薩道を求め、六の度無極を奉行して、未だ善權方便を曉らざらんには、如かず、是の經を書・持し、諷誦・讀誦せんに。復人に教へて、常に其の中の事を念ぜしめ、諸の聞かざる所、本行ぜざる所の、是の如き輩の菩薩は、當に念じて、習持すべきなり。所以は何とならば、譬へば、轉輪聖王の、世間を治むるが如し。時の至り竟るに當つては、七寶缺減を爲さず、其の王、壽終れば、七寶爲に散す。是の如く文殊師利、若し佛の經道、世間に住すれば、佛の七覺意も、終に減を爲さず。若し佛の法にして滅すれば、覺意の諸法も、皆之が爲に盡きん」と。

佛、文殊師利に謂ひたまはく、「當に無數の方便を求めて、諸の經を具索し、勤學書持し、他人の爲に説いて、一切を教授し、廣く其の義を説いて、常に當に精進すべし。是を法教とは爲す。若しは善男子・善女人の、道を求めんと欲せん者は、中に悔有ること莫れ」と。

佛、經を説き已りたまふに、須摩提菩薩、文殊師利菩薩、大目犍連等、諸の天及び人の、其の會に在りたる者、阿修羅・犍沓和・持世者など、皆歡喜して樂聞したりき。

佛說須摩提菩薩經終

【六〇】無塵垢、流志譯には無垢光明劫に作る。

【六一】因授如來、同には難忍佛とす。

【六二】焔氣、同に陽焰に作る。

【六三】莊飾預知人意如來、羅什譯は預を豫に作り、流志譯には辯才莊如來となす。

【六四】善權方便、羅什譯には、原音を出して、濶和拘舍羅 (Uparakusala) に作る。

【六五】轉輪王、羅什譯には、原音により、遮迦越王 (Cakravartin) に作る。

【六六】七寶、輪王の七寶は、輪寶と白象、耕馬、神珠、王女、居士、主兵の六種の寶となり。

【六七】七覺意、即ち七菩提分なり。

【六八】中に悔云云、流志譯には後世に悔恨の心を生ずる勿れと。

事有ること莫からしめん。何等か三とは爲すとならば、一には魔事、二には地獄、三には女人の態なり。若し我れ至誠ならんに、我が身は當に、年三十の沙門の如くなるべし」と。時に須摩提、適に是の語を作したる時、形體顔色は、年三十の如くなりき。

時に須摩提、文殊師利に謂つて言はく、「我れ佛と作らん時、我が國人をして、皆金色と作らしめ、城郭及び地は、七寶を周帀し、七寶の樹有りて、八種に行かしめ、七寶の池水の、四邊中外に、皆七寶の雜色の蓮華、及び諸の雜寶を生じ、多からず、少なからずして、皆悉く停等ならん」と。

須摩提の言はく、「仁の國の如く、我の刹土も、亦當に是の如くならん。如し我れ至誠ならんに、今會に在る者、當に金色を作すべし」と。適に是の語を作せるに、時に應じて衆の座、皆金色と作りぬ。

時に持地の神、即ち地より出でて、天の身を化作し、聲を揚げて稱揚し、須摩提を歎じて、三たび言ひぬ、『摩訶須摩提菩薩摩訶薩の、佛と作るを得ん時、その國土の有らゆる七寶の池水・樹及び華實は、皆當に是の如くなるべし』と。

是に於て佛、文殊師利に謂ひたまはく、『是の須摩提菩薩摩訶薩は、久しからずして、當に佛を得て、寶徳合吉祥如來・無所著・等正覺・成慧行・安定世間父・無上士・道法御・天人師・佛・天中の天と號すべし』と。

佛、是の經を説き、須摩提に、刹を授けたまへる時、三十億人の、無上平等の慶意を發したる者、皆不退轉に立つを得、六萬の天子、悉く諸法の法眼の生ずることを得たり。座中に五百の菩薩有り、文殊師利所言の甚深なるを聞き、意に解せざるを用て、中に墮落せんと欲したるが、須摩提所説の眞誠なるを見て、尋て皆應有り、即ち身衣を解し、以て佛に上り、亦諛諂せず、希望する所無かりき。是の功徳を持って、用て自ら堅固にし、無上平等の慶意に於て、即ち不退轉地に住することを

【五】 持地の神、地天を謂ふ。流志譯には、地居天に作る。

【五〇】 寶徳合、吉祥如來、流志譯には殊勝功徳寶藏如來とし、羅什譯には、字名三邊聞具足藏如來過四道不受平等覺興具足行安隱世間天上天下無上大入と云へり。
【五九】 羅什譯に對照するに、次に約八百字の脫文あり。但し流志譯にも、右の相當文無きを以て、今は取らず。

合する」と。須摩提、報へて言はく「仁の所説の如きは、大快を爲すことを致す。一切の法處は、亦有ならず、亦不有ならず。如來に至れば、合も無く散も無きなり」と。文殊師利、彼の所説を聞き、甚だ悦んで「善いかな」と讚へたり。

文殊師利、佛に白して言はく「甚だ善し、須摩提の所説たるや、微妙にして大に怪むべし。乃ち能く深く入りて、法忍を速得したり。發意已來、幾何なりとは爲す」と。

佛、文殊師利に語りたまはく「是の須摩提は、無上平等の度意を發し、等住已來、積んで計るべからず。仁の前に先んずること、三十億劫なり。仁は乃ち彼に於て、無上正等の度意を發し、適に甫めて乃ち、無所從の生法忍に入りたるなり。是れ仁、本發意を造せる時の師たり」と。

文殊師利、佛の所説を聞き、則ち前んで禮を作し、須摩提に白して言はく「唯別ること久遠にして、今乃ち、遭侍し、師と相見えて、法誨を受くるを得たるなり」と。

須摩提、報へて言はく「是の念を作す莫れ。何等を用つての故にとならば、無所從の生法忍は、亦所念も無く、亦師有ることも無ければなり」と。

文殊師利、問ふて言はく「云何が女人の身をば轉ぜざる」と。須摩提、報じて言はく「是に於ては所得無し。所以は何とならば、法には男無く女無ければなり。今我れ當に、仁の疑ふ所を斷すべし」と。文殊師利の言はく「善い哉、樂うて之を聞かんと欲す」と。

須摩提、文殊師利に謂つて言はく「今の如く、我れ後に亦、當に如來・無所著・等正覺・成慧行・安定世間父・無上士・道法御・天人師・佛・天中の天を逮すべし。是の如きこと審諦ならんには、我れ今便ち當に變じて男子とは爲るべし」と。適に是の語を作すに、便ち男子を成じ、頭髮即ち墮ち、袈裟を身に著けて、便ち沙彌とは爲りぬ。

須摩提、復、文殊師利に謂つて言はく「審に我れ來世に、當に作佛すべき時、我が國中には、三

【四三】 法處、法界なり。

【四四】 無上平等の度意、菩提心をいふ。羅什譯には、阿耨多羅三耶三菩提心を發しといへり。

【四五】 以下、流志譯は、我れ乃ち無上菩提を發趣し、彼も亦汝をして無生忍に住せしめたりと云へり。

【四六】 無所從の生法忍、法の無生無滅を認め、之に安住して動かざる位をいふ。

【四七】 遊、麗本譯に作る、今三本による。遊は會に、遇なり。

【四八】 無所從云云の句、流志譯には只、無分別を以て無生忍を得るが故にと云へり。

【四九】 是に於て云云、同じ「女人の相、不可得なるを了す、今何ぞ轉ずる所あらん」とあり。

【五〇】 この一段、流志譯には缺く。

【五一】 成慧行、慧と行を成じたるもの、佛の尊稱。

【五二】 安定世間父、世間を安定ならしむる父、是亦佛の尊稱。

【五三】 道法御、道法を以て調御するの謂、佛の尊稱。

【五四】 我が國中云云、流志譯には、我が國中の有縁を細説し、本經の次の段を合説した

で佛に白して言はく「今、諸の一切の、初めて大意を發して、菩薩と爲りたる者に、我れ當に自ら歸して、之が爲に禮を作さん。所以は何とならば、八歳の女子にして、感應是の如くなり。豈に況んや高士の摩訶薩をや」と。

是の時、座中に大菩薩有りて、文殊師子と名けたるが、須摩提に謂つて言はく「何の法に住してか、現する所の感應、乃し是の如くなる」と。須摩提、答へて言はく「諸法は計數すべからず、亦所住と無し。而も仁、我に問ふて、何の法にか住すと。仁、是の間を作さんよりは、如かず、問はざるに」と。

文殊師利、須摩提に問ひて言はく「此の語言は、何ぞ乃ち斯くのごときを致すや」と。須摩提、文殊師利に報へて言はく「諸法には住する所有らず、亦疑ふ所も無く、亦是非をも言はず」と。

文殊師利、須摩提に問ひて言はく「如來は本より、行を作さざるや」と。須摩提、報じて言はく「譬へば月影の、水中に現するが如く、若しは野馬を夢み、深山の響のごとし。如來の本行も、亦是の如くなり」と。

文殊師利、須摩提に問ひけらく「仁、所説の如く、是の事を合會すれば、能く佛を得ると爲すや不や」と。須摩提、報じて言はく「云何ぞ仁者、癡と黠と行と、三事異ると謂ふや、異と爲さざるや。一切の諸法は皆合せり。所以は何とならば、若しは正法、若しは不正の法も、適に所住無く、亦所取無し、亦所放無く、空にして色有ること無ければなり」と。

文殊師利、復、須摩提に問ふらく「是の義を解する者、幾人有りとか爲す」と。須摩提、報じて言はく「夫れ幻を作す者は、意の所化を恣にして、寧ろ限有ること無し。幻師の化する所すら、猶尙限無し。此の法を信解せんもの、亦是の如くなり」と。

文殊師利、須摩提に問ふて言はく「我の如きは化無く、幻無くして行を起す。何の法か、道と

【三三】 初めて云云、流志譯には、初發心の菩薩及び諸の菩薩と云へり。

【三七】 現する云云、同に斯の誠顯をば發したるやと云へり。

【三八】 此の段に相當する所、流志譯には、云何が菩提と爲し、云何が菩薩とは爲すとの問答となり居れり。

【三九】 この問、同には、云何が菩提の行とは爲すと云へるに當る。

【四〇】 野馬、同に陽焰とす。かげろふのことなり。

【四一】 この問、同には、何の密意に依つてか、是の如きの説を爲すとあり、答もや、異なる。次で、凡夫と菩提とに就ての問答あれど、本文には之を缺く。

【四二】 所放、羅什譯には所收となす。

【四三】 幻を作す云云、流志譯には、「若干幻化の心、心所の量の如し。若干幻化の衆生、能く斯の義を了す」とあり。

【四四】 問の文、同に、幻化は本無し、云何ぞ是の如き心、心所有らんと。

には常に三寶さんぼうを供養くやうせんことを念ず。是を四法とは爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、壽の終らんとする時に臨み、即ち諸佛に見え、皆前に在りて立ち、爲に經法を説きて、其の人をして苦痛の處に墮おらしめず」と。

佛、是に於て偈もて言はく、

「一切の爲に所願を滿し

雜まじの施を以て黠慧けつゑを致し、

無極むごくの哀もて檀ぜんを勸足くふそくし、
三寶に供して佛を致すことを得」と。

爾の時、須摩提、佛に白して言さく「唯、世尊所説の四十事をば、我れ當に奉行して、缺減せざらしめ、悉く具足して一事も違せざらしめん。若し一の義を失せんも、我れ佛の劫法を斷じ、衆の弟子を滅すとは爲す」と。

是の時、大目犍連、大會の中に在りて坐し、即ち須摩提に問ひけらく「此の四十事は、大士の所行、菩薩の所爲にして、甚だ亦難し。當に汝の如き小女は、何ぞ能く之を辦すべけん」と。

時に須摩提、目連に答へて言はく「假令我れ今、寔實に能く此の四十事を行ぜんには、三千大千の國土、皆當に我が爲に、六反震動して、天華を雨らし、諸の音樂の器、鼓せざるに自ら鳴るべし」と。

須摩提、適に是の言を發すや、時に應じて三千大千の國土は、六反震動し、即ち天華を雨らし、

樂器皆鳴りぬ。女目連に語るらく「是れ則ち我の至誠を證明したるなり。若し未來に、菩薩の意を起す有らんに、亦當に是の如くなるべし。我れ後に久しからずして、亦當に如來無所著等正覺の如くなるべし。我が言の如くにして、虚有ること無きを信ぜんには、其の衆會に在らん者、皆當に一に等しく、悉く金色と作るべし」と。尋で語る所の如く、輒ち金色と作りぬ。

是に於て目連、即ち坐より起ち、衣服を整へ、右膝を下し、又手して佛の爲に稽首作禮し、前ん

【三】檀は檀那の略、施し。

【三】佛劫法、羅什譯には佛法と爲し、流志譯には、この句をば、佛教に違し、如來を欺誑すと爲す。

【三】假令云云、流志譯には若我佛願、眞實不虛云云と云へり。

【三】未來云云の句、流志譯には、未來世に、當に佛を成ずること、亦今日の釋迦如來の如くなるを得べく、我が國中には魔事及び惡趣、女人の名有ること無けん。若しこの言、虚妄に非ずんば、斯の大衆をして、身皆金色ならしめん云云とあり。

【三】如く、羅什譯には亦當に佛を得べしと云へり。

法を講ずるを聞くも、短たんを求めず、若し經を説かば、心に喜躍きよくす」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有つて、殊非しゆひ無きを得、作す所の善行もて、疾く淨住をば得るなり。何等をか四とは爲すとならば、一には心意の所念、常に善を志し、二には常に戒と三昧と智慧とを持し、三には初發の菩薩は、意に便ち一切智を起して、度脫する所多く、四には常に大慈有りて、一切を愍あはれむなり。是を四法と爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、殊非無きを得、疾く淨住をば得るなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

「常に善を志して、廣く度せんことを念じ、戒等と定とは慧を離れず、

當に人に一切智を教ふべく、慈を行じて意に淨住を得」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有りて、魔も其の便を得る能はず。何者か四とは爲すとならば、一には常に佛を念じ、二には常に精進し、三には常に經法を念じ、四には常に功德を立つるなり。是を四法とは爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、魔も其の便を得る能はざるなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

「常に淨意もて佛を念じ、精進を志して深法に在り、

自ら勗勉して功德を立つれば、魔も是を用て便をば得ず」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有つて、壽の終らんとする時に臨み、佛は前に在つて立ち、爲に經法を説き、其をして苦痛の處に墮おちらしむるなり。何等をか四とは爲すとならば、一には一切の人の爲の故に、具に諸願を滿し、二には若し人布施せんに、諸の不足の者には之を足らしめんと欲し、三には人の雜施を見て、若し短少なるもの有らんに、便ち之を補助し、四

【三五】 殊非云云、流志譯には能く法障を離れて、速に清淨を得と云へり。

【三六】 一以下の三句、流志譯には深き意樂を以て三律儀を攝し、甚深の經を聞いて、誹謗を生ぜず、新發意の菩薩を見ては一切智心を生ずと云へり。

【三七】 當に、羅什譯には常にとあり。

【三八】 一、三、四の句、流志譯には、一に法性の平等を了知し、三に常に勤めて佛を念じ、四に一切の善根を皆悉く廻向すと云へり。

【三九】 勗、つとむるなり。

【四〇】 二と三、流志譯には、ここに諸の善法に於て深く信解を生じ、三に諸の菩薩に、莊嚴の具を施すと云へり。

の說法するを見ては、中止せず、三には、燈火を塔寺の中に然じ、四には三昧を求むるなり。是を四法とは爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、神足を得て、一の佛國より、一の佛國に至るなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

經説を聞くも、中止せず、

「功德を行じ、法施を爲し、

三昧に入りて諸國に遍す」と。

常に燈を佛寺に然じ

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩には復、四事の法有りて、驕怒無く、侵嫉する者無きことを得。

何等をか四とは爲すとならば、一には、善知識に於て諛語の心無く、二には慳貪にして他人の物を妬まず、三には、人の布施するを見ては、其の喜を助け、四には、菩薩の諸の所作を見ては、爲に誹謗を行ぜざるなり。是を四法とは爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、常に是の行を行じて、驕

怨無く、侵嫉する者無きを得るなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

「善友に於て諛語無く

他人の物を慳惜せず、

人の施するを見ては其の喜を助け、

菩薩「の行」を行じて驕怒無し」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有りて、其の言語する所を聞く者、信従し、踊躍して受行す。何等をか四とは爲すとならば、一には、口に説く所と、心とは亦異なること無く、二には、善知識に於て、常に至誠有り、三には、人の說法を聞くも、心に是非せず、四には、若し他人の、請ひて說法せしむるを見るも、其の短をば求めざるなり。是を四法とは爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、其の語り言ふ所を聞く者、信従し、踊躍して受行するなり」と。

佛、是に於て、偈を説きて言はく、

「念ずる所の如く、言も亦爾り、

善友に於て至誠有り、

【三】 中止、留碍を作さざるなり。

【四】 三の句、流志譯には、他の名譽を得るや、心に常に歡喜すとあり。

「時を以て施し、悔心無く、

二五 作す所の施には、勇と慧と有りて、

喜悅して與へ、希望する無し、
所在の處に、常に大富あらんと。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有りて、他人の爲に別離せられず。何等をか四とは爲すとらば、一に惡説の、彼此を鬪亂するをば傳へず、二に、愚癡の者を導いて、佛道に入らしめ、三に、若し正法を毀敗するもの有らんに、護つて絶えさせしめ、四に、諸人を勸勉し、教へて佛を求めしめ、堅くして不動ならしむるなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

「彼と此とを鬪はしむることを傳説せず、

愚冥を導いて正法を護り、

人を勸進して佛を求めしむるに、

終に能く別離する者無し」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩には復、四事の法有りて、千葉の蓮華の中に化生し、法王の前に立つことを得るなり。何等をか四と爲すとらば、一には細く紅蓮華・青蓮華・黃蓮華・白蓮華を擣き、此の四種の末の、塵の如くなるをば合し、軟妙華に満たしめ、是を持つて世尊、若しは塔及び舍利に供養し、二に他人をして、慧の意を起させしめず、三に佛の形像を作りて、蓮華の上に坐せしめ、四に最正覺を得て、便ち歡喜して住するなり。是を四法と爲し、菩薩は是の四事を用ての故に、常に千葉の蓮華中に化生し、法王の前に立つを得るなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

「四華を施すに軟妙に満たし、

悲恨を除いて法義を受け、

上覺を得て佛前に立ち、

形像を作つて華中に生ず」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有りて、神足を得、一の佛國より復、一の佛國に至る。何等をか四とは爲すとらば「一には、人の功德を作すを見ては、斷絶せしめず、二に人

【二五】 作す所云云、同には「能於此業」常勤修」と云へり。

【二六】 惡説云云、同に、離間するの語を棄捨すと云へり。

【二七】 導、應本、道に作る。今三本に依る。

【二八】 軟妙華、羅什譯相當文には句蟲に作る。

【二九】 舍利(Sarira)。遺身、身骨など譯す。

【三〇】 二の句、流志譯には、他に於て妄に損害を加へずとあり。

【三一】 四の句、同に佛・菩提に於て、深く淨信を生ずと云へり。

【三二】 神足、神通に同じ。

行をば、能く壞する者無きをば得る。云何がして、魔も其の便を得る能はざる。云何がして、壽の終る時に臨み、佛在して前に立ち、爲に經法を説きたまひて、即ち苦痛の處に墮ちざらしめたまふや。問ひまつる所は是の如くなり」と。

是の時、佛、須摩提に語りたまはく「汝の如來に問ふ所の義の如きは、善い哉、大に快きこと、乃ち是の如し。汝若し聞かんと欲すれば、諦に聽き諦に受け、勤思して之を念ぜよ。吾れ當に解説すべし」と。

時に女、即ち言はく「甚だ善し、世尊、願樂して聞きまつらんと欲す」と。是に於て須摩提、教を受けて聽けり。

佛の言はく「菩薩は四事の法有り、人々を見るに、皆歡喜す。何等をか四とは爲すとならば、一に嗔恚を起さず、怨家を視ること、善知識の如くにし、二に常に慈心有りて、一切に向ひ、三には常に行じて無上の要法を求索し、四には佛の形像を作るなり。是を四法とは爲す。菩薩は是の四事を用ての故に、人々を見るに、常に歡喜するなり」と。

佛、是に於て偈を説いて言はく、

「恚——本の根を毀する——を起さず、

常に慈を行じ、要法を得、

佛の像を作さば、身好潔にして、

心歡喜し、人は喜んで見ん」と。

佛、須摩提に語りたまはく「菩薩は復、四事の法有つて、大富有をば得るなり。何等をか四とは爲すとならば、一に布施するに時を以てし、二に與へ已つて、倍悦び、三に與へて後復悔まず、四に既に與へては、其の報を求めざるなり。是を四の法とは爲す。菩薩は是の四事を用つての故に、大富有を得、常に財寶多きなり」と。

佛、是に於て、偈を説いて言はく、

【一】 殃罪云云、同に淨餘於法障とあり。

【三】 本根、流志譯によれば善根を指す。

【三】 富有、富貴の身。

【四】 與へ已つて云云、流志譯に、無二輕慢心とあり。

佛說須摩提菩薩經

西晉三藏竺法護譯

聞くこと是の如し。一時、佛、羅闍祇・靈鳥頂山中に在し、大比丘衆、千二百五十人、菩薩萬人と俱なりき。

爾の時、羅闍城大國に長者有り、號して 郁迦と曰へり。郁迦に女有つて、須摩提と名けたり。厥の年八歳なり。歷世に過去無數百千の諸佛に奉敬し、功德を積累したること、稱計すべからざりき。

時に須摩提、羅闍祇大國より出でて、靈鳥山に詣り、行いて佛所に到り、前んで頭面を以て、佛足を稽首し、禮し畢つて、却いて一面に住し、又手して佛に白して 言はく「願はくは問ひまつる所有らんと欲す。唯佛、善權・方便を以て、我の疑ふ所を解説したまはんを」と。

時に佛、默然として、即ち女の意を知りたまへり。佛、須摩提に語りたまはく「問はんと欲する所を恣にせよ。如來は今當に、汝の爲に、具に之を解説し、事事を分別して、汝をして歡喜せしめん」と。

須摩提、佛に問ひまつつて 言はく「菩薩は云何がして、所生の處に、人之を見て常に歡喜する。云何して大富有を得、常に財寶多き。云何がして他人の爲に 別離せられざる。云何がして母人の腹中に在らず、常に千葉蓮華の中に化生して、法王の前にか立つ。云何がして神足を得、不可計億の利土より去つて、彼の間に到り、諸佛をば禮しまつる。云何が驕怨無く、侵嫉する者無きを得る。云何がして、説く所を聞かん者、信從し、踊躍して受行する。云何がして 殃罪無く、作す所の善

佛說須摩提菩薩經

【一】大寶積經卷第九十八、妙慧童女會(菩提流志譯)、並に羅什譯の須摩提菩薩經參照。
 【二】靈鳥頂山(Gridhras Kūṭa)。羅什譯に耆闍崛に作る。靈鷲山と稱せらる。Gridhrasは貪食者より轉訛せる語にして兀鷲をいふ。玄應音義によれば、案一梵、本無靈義、依別記云、此鳥有靈、知人死活、人欲死時、則群翔彼家、待其送林、則飛下而食、能以懸知二故、靈鷲也。と。智度論第二卷には、この山、この鳥の頭に似たりと云ひ、或はこの山に依りたるなり。
 【三】郁迦(Dhruva)。功德、威德など譯す。羅什譯には優迦に作り、流志譯には之を缺く。
 【四】須摩提(Sumati)。流志譯には、妙慧に作る。
 【五】羅闍祇大國、羅什譯亦同じ、流志譯には唯、王舍城とのみ云へり。
 【六】以下の詞、流志譯は偈を以てす。
 【七】この詞、流志譯は偈文。人之を見て云云、流志譯は、云何得二端正と云ふ。
 【八】別離云云、同じ「眷屬は沮壞し難き」と云へり。
 【九】不可計云云、同じ「遍往無量刹あり」。

THE HISTORY OF THE

1789

女をして、文殊と問答せしめ、やゝもすればその知解は、文殊にも超えたる觀がある。これ亦須摩提を假りて、菩薩大士の所行は、獨り出家のみ修すべきものに非ずして、廣く一般に開放せらるべきを暗示したものと見るべく、須摩提が、佛並に文殊との問答に於て、空義を説くところ、正に般若の思想に立つを示し、

昭和七年九月三十日

而も般若より一步を進めて居ることは、經中に、「文殊所言の甚深なるを聞き、意に解せざるを以て、中に墮落せんとしたるも、須摩提所説の至誠なるを聞いて、皆應有り」などとあるのは、文殊の所説を豫想したものと見ねばならない。

經の前半に四十事を説いてゐる所は、所問の事項が、世出世に亘つてゐるだけ、

未だ熱を帯びた所は無いが、文殊との問答に入ると、解空の菩薩ならずんば、なし能はざる趣を添へ、更に誓願を起してそれが證誠される所、いかにも大乘の精神を解したものの言動なるべきを思はしむるものがある。

譯者 蓮 澤 成 淳 識

の辨すべき所にあらざるを云ふと、大地震動し、天華降つて、須摩提の能く之を行すべきを證するので、目連は高士摩訶薩に歸依することを述べたる。

次で文殊が、何の法に住して、かゝる感應あるやを少女に質すと、諸法は計數すべからず、亦所住無きを答ふるを始として、少女は、如來の所行は空であり、一切の法界は有に非ず不有に非ず、如來には合も散も無きことを述べたる。

文殊は更に、須摩提の發意已來幾ばくなるやを佛に質すので、彼の女の無意を發してよりは、三十劫に過ぎ、もと文殊をして發意せしめたる師なることを教へ、文殊が久遠の師に、今會ふことを得たるを喜べば、少女は無生忍には、所念も無く、師も無きことを云ひ、何故に女身を轉ぜざるやの問に對して、法には男女の別無き義を以て答へる。

進んで須摩提は、當に作佛すべきこと

を述べて、今女身を轉じて男子となるべしと云ひ已るに、即ち沙彌の形とは爲り、來世に我れ作佛せん時、我が國中に魔事と地獄と女人と無からんことを願ひ、この言至誠ならば、我れ三十の沙門の如くなるべしと云ふに、即ち言の如く三十の如き形容を具へた。須摩提又謂つて、我れ作佛せん時、國人皆金色とならん、この言誠ならば、今會に在る者、亦金色と作るべしと。此の語を作せし時、衆の座即ち金色と化した。

次で佛は、須摩提菩薩は、久しからずして、當に作佛し、寶徳合吉祥如來と名くべき記を與へられる。

羅什譯によると、次に佛と須摩提との間に幻化に就ての問答があり、明と無明とに就て須摩提が述べ、佛所轉の輪は不可思議なるを説かれるので、須摩提は華香を散して供養し、佛が欣笑されると、五色の光が佛口より出で、十方を照して

頂より入る。七法曉了の阿難が、この理由を質すと、梵志女の須摩提が、心に誓願を發し、やがて法輪を轉ぜんとするを知りたまふたからであることを述べ、斯の徳本を以て、命終の後、女身を轉じ、八十四劫の間、惡趣に歸せず、六萬の諸佛を供養し、出家して道を爲し、經法を聽受して宣布し、佛滅後は、衆生を勸化して、無上道に立たしめ、常に要法を奉持すべきを述べられる（以上の文は、本經並に流志譯に缺けてゐる。註五九參照）。

此の經を聞いて、會中の人、或は不退に住し、或は法眼を生じたので、佛は五百人に記を授け、十劫の後、作佛して面授如來と號し、同一の劫に出ることを説き、更に未だ善根方便を曉了せざる者は、此の經を書持し、習持すべく、また他人の爲に義を説いて精進すべきを教へたまふて終つてゐる。

經は極めて簡潔ではあるが、八歳の少

佛說須摩提菩薩經解題

本經には四譯があると謂はれる。第一譯は西晋の法護譯出に係る今の經であり、第二譯は雜什譯の經であるといふ。然し雜什に須摩提經のあることは費長房の出すところ(開元錄第四)で、出三藏記以下の諸經錄には之を載せないが、歴代三寶記の説を取つて居る開元錄で、始めて雜什の部に之を入れて、第二出であることを註記してゐる。第三譯とは、菩提流志が、長壽二年に、大周の開寺に於て譯した妙慧童女所問經である。この流志は、のち神龍二年(西紀七〇六)から先天二年(七一三)にかけて、大寶積經を編み、舊譯の存するものは取り、存せざるものは新に譯して加へたが、その新譯の中に、この經を重ねて譯し妙慧童女會としたといふ。開元錄第十一には、大寶積經の各

品を説いてゐるが、この第三十項に、妙慧童女會兼後一卷、大唐三藏菩提流志新譯第四譯、右新譯重本、舊の兩譯須摩提經及び流志の先に譯した妙慧童女經と、同本異で、第九十八卷に當り、初より半に至る、其の先譯の妙慧經の本は、東部に在つて之を尋ぬるも、未だ獲すと註してゐる。

然るに麗藏載する所の流志譯須摩提經は、寶積の文と全同であり、麗藏には、經の内題下に、開元錄を按ずるに云ふ、妙慧童女經は流志の後譯であることを記し、この譯本は麗藏に掲ぐるのみで、宋元明の諸本は、之を略してゐる所から見て、開元錄十一の云ふ如く、第三譯と稱せられるものは、よし在つたにしても失せたものの如く、同一人にして同じ經を、

二度も譯出することは如何かとも考へられるが、開元錄第九は、明に第三出の經を出し、重ねて先の如き注意を與へて居る點からして、今は三存一闕と見ておく。

經は羅閱城(即ち王舍城)の長者郁迦の女である、八歳の須摩提が、佛所なる靈鳥頂山に至り、佛に十項を尋ねる。即ち云何がして儀容の端正なるを得。富貴の身となり。他人と別離せず。千葉蓮華の中より化生して法王の前に立ち。神通を得て無量の佛土に至り、諸佛を禮し。怨讎侵嫉無く。所説を聞く者、信從し。殃罪無く、所作の善行をば壞する者無く。魔便りを得ず。命終の時、佛前に立ちたまひて經法を説き痛處に墮ちざらしたまふやを質した。

佛はその一一に對して四種の方面より教へてゐられるが、要するに六度十善を主としたものであるが、目連はかゝる四十事は菩薩大士の爲す所で年少の一女兒

「若し菩薩摩訶薩有りて、疾く無上正眞道の最正覺を成ぜんと欲すれば、當に是の阿闍佛徳の法經を受くべく當に持して諷誦し、之を説くべく、當に廣普せしむべし。若し是の徳號の法經にして、郡國縣邑に在らんに、善男子・善女人有りて、受持し諷誦せん。

「其れ菩薩摩訶薩は、是の經を有つて、郡國縣邑を護ることを爲す。其れ是の徳號の法經を受くる有らば、當に持して諷誦すべく、復出家學道して罪をば離る。菩薩摩訶薩は、當に居家學道の者をして、之を知らしむべし。所以は何とならば、善男子・善女人は、憚に是の徳號の法經を究竟する能はざればなり。」と。

佛の言はく、「舍利弗、若し遠き郡國縣邑にも、是の經を行する菩薩摩訶薩有らんに、當に往いて彼に至り、當に是の經を受けて諷誦し、持つて説くべし。善男子・善女人は、諷誦せずとも、但だ是の經卷有るのみにて、當に説いて之を供養すべく、若し經卷を得ざれば、便ち當に之を寫すべし。若し其の人をして、是の經卷を與へ、持ち歸つて寫さざらしめなば、菩薩便ち其の家に就て之を寫さん。若し善男子・善女人をして、自ら餓ゆるも寫さんと言はしめん、自ら餓して之を寫し、若し經行して寫せと言はんに、當に經行して之を寫すべく、若し住して寫せと言はんに、當に住して之を寫すべく、若し坐して寫せと言はんに、當に坐して之を寫すべし。」

【二〇】 自ら餓ゆるも云云、斷食して寫せと要求せらるゝなり。
【六】 異譯に對照するに、以下本文に脱文あり。

阿闍佛國經 終

く、「天中の天、當に先づ國王、若しは太子の左右の手中に至るべし。」と。

佛の言はく、「舍利弗、是の阿闍佛の德號の法經も、當に先づ菩薩の手中、及び阿惟越致の手中に至るべし。復次に舍利弗、菩薩摩訶薩は、是の阿闍佛德號の法經を聞いて、便ち受持し諷誦し、誦し已らば、即ち當に専ら無上・正眞道の最正覺を成すべし。」と。

賢者舍利弗、佛に白して言はく、「是の阿闍佛の德號の法經をば、薄德の人は、終に聞いて受持し、諷誦することを得ざらん。所以は何とならば、天中の天、阿惟越致を得る能はざるが故なり。」と。佛、賢者舍利弗に告げたまはく、「審に是の如くなり。若し善男子・善女人有り、金銀を持つて天下を滿たし、以て布施し、願ふて、「我れ是を以て、阿闍佛の德號の法經を聞かしめん」と言はんも、薄德の人は、終に是の經を聞くことを得ず、亦受持し諷誦するを得ざらん。菩薩摩訶薩の、阿闍佛の德號の法經を聞かん者は、爲に阿惟越致の行を成じ、聞き已つて受持・諷誦す。是の故に専ら無上正眞道の行を得るなり。」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、「二生にて補處し、三生にて等正覺を補處するものには、弟子道を求むるの人、及ぶ能はざる所なり。若し阿闍佛の德號の法經を聞く有つて、受持し諷誦して、若干百人、若干千人、若干百千人の爲に之を説かんに、譬へば舍利弗、轉輪王の、福德を以て自然に七寶を生ぜんが如くなり。是の如く、舍利弗、阿闍佛の、昔願の致す所として、我れ爲に是の德號の法經をば説くなり。若し復、菩薩摩訶薩有りて、是の經を聞き、甫めて當に聞くべき者も、福德の致す所なり。」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、「阿闍佛德號の法經をば、是の阿闍劫中に於て、有らゆる諸佛・天中の天は、皆當に是の經を聞くべし。是の如くして缺減無からしめ、安諦なること、亦我が所説の如くなり。」

「若し菩薩摩訶薩有りて、是の阿闍佛の德號の法經を受け、持し已つて受けて諷誦し、若干百人・若干億百千那術の人の爲に、之を解説せんに、當に若干億那術百千人をして、徳本を積累せしむべし。是の人の積む所の徳本の如く、其の菩薩の是の徳本は、計るべからず。是の菩薩摩訶薩は、徳本衆多なれば、已に便ち無上正眞道に坐せるなり。」と。

佛の言はく、「舍利弗、若し菩薩摩訶薩有りて、疾く無上正眞道の最正覺を成ぜん欲すれば、當に是の徳號の法經を受くべく、當に持して諷誦すべく、受持し諷誦し已らば、若干百・若干千、若干百千人の爲に、之を解説し、便ち説く所の如きの事を念すれば、即ち大智慧を得て、其の罪即ち畢る。是の大智慧を得て、其の罪畢るを以て、其の人自ら功徳を以て、便ち生死の道をば盡すなり。」と。

佛、舍利弗に告げたまはく、「若し善男子・善女人の、弟子道を求むる者有らんに、是の阿闍佛徳號の法經を聞かば、便ち當に受持すべく、當に諷誦すべく、受持し諷誦し已らば、若干百人・若干千人、若干百千人の爲に之を解くべし。若しは善男子・善女人の、是の法經を受くる有らば、自ら功徳を以て、即ち自ら阿羅漢の證を取らん。」と。

佛の言はく、「舍利弗、若しは善男子・善女人有り、専ら持して是の徳號の法經を説かんに、是の人は、是の如くにして、便ち等正覺を捨し、自ら功徳を以て阿羅漢の證を取らん。」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、「是の阿闍佛の徳號の法經は、終に癡人の手中には至らずして、當に點人の手中に至るべし。」と。

佛の言はく、「舍利弗、是の善男子・善女人にして、是の徳號の法經の、其の手中に至らん者は、爲に如來を見已らん。譬へば、舍利弗、種々の諸寶、其の價甚だ重きが如し。大海より採り來る者は云何。舍利弗、大海より種々の寶を採るや、當に先づ誰の手中にか至るべき。」と。舍利弗の言は

【五九】 點、慧なり。

「譬へば天眼を得たる比丘、遠くに住まつて、遙に色の光を見るが如く、是の如く、舍利弗、阿闍佛は、遠く住まつて、遙に他方世界なる諸の住せる菩薩摩訶薩を見、其の顔色・形類をば見るなり。

「譬へば神通比丘の、遠く住して、他人の意に念する所を知るが如し。是の如く、舍利弗、阿闍佛は、遠く住して、遙に他方世界の諸の住せる菩薩摩訶薩の意を知る。

「譬へば神通比丘の、遠く住するも、遙に天耳を以て、聲を聞くが如く、是の如く、舍利弗、阿闍佛は、遠く住して、遙に他方世界の諸菩薩摩訶薩の語を聞く。

「及び其の刹に生るゝ、是の善男子・善女人について、阿闍佛は、其の名字及び種姓をば知るなり。若し是の徳號の法經を受け、諷誦して持する者有らば、舍利弗、是の人をば、阿闍佛を見るとは爲すなり。當に知るべし、是の人、壽の終に臨む時、阿闍佛は、即ち其の人の爲に：：」と。

賢者舍利弗、佛に白して言はく「及び難き天中の天、諸佛世尊は、諦に諸の菩薩摩訶薩に囑累したまふ。」と。佛の言はく、「是の如し、舍利弗、諸佛・天中の天は、諦に諸の菩薩摩訶薩に囑累す。『所以は何とならば、菩薩の諦に囑累を受ければ、便ち諦に一切の衆生を受け已れりとは爲す。譬へば轉輪王の、第一・第二・第三・第四・第五、第十・第二十など、不可計の諸倉有つて、中に稻米・大麥・小麥、及び種種の穀有り、穀貴き時、便ち出して穀をして賤ならしむるが如くなり。』

「是の如く、舍利弗、菩薩をば如來、記し竟るも、菩薩摩訶薩の、未だ最正覺を成ぜざる時は、譬へば穀の貴きが如く、已に無上正眞道の最正覺を成ずれば、便ち安隱に說法すること、穀の賤しきが如くなり。是の故に、諸佛・天中の天は、諦に諸の菩薩摩訶薩に囑累するなり。」と。

佛の言はく「舍利弗、若し菩薩摩訶薩有り、是の阿闍佛の徳號の法經を聞き、聞き已つて即ち受け、諷誦して持せんに、阿闍の佛刹に生れんとは願はずと雖も、當に知るべし、是の菩薩摩訶薩は、阿惟越致に比ぶとは爲す。

【五〇】即ち其の人の爲に、本文に即爲其人とあり、恐らくは次に數字乃至數句を脱したるならん。異譯相當文には、佛その人を護念することを述べたり。

若し是の徳號の法經を聞くこと有らんに、聞き已つて即ち受持し、諷誦するなり。

「舍利弗、是の善男子・善女人は、前世に皆已に、阿闍佛の、昔、菩薩道を求めたる時のことを見聞したるが爲なり。所以は何とならば、若し是の徳號の法經を聞く有らんに、即ち信する有ればなり。是の阿闍佛の徳號の法經をば、十方等の世界の佛利に、菩薩道を求むるもの、及び弟子道を求むるの人、悉く受けて諷誦し、持つて之を説くなり。他方の佛利なる、諸の阿惟越致の菩薩摩訶薩の住、及び餘の菩薩も、亦阿闍佛所結の願と、及び阿闍佛利に生れたる者、甫めて當に生るべき者とを説くなり。東方亦是の如し。南方・西方・北方、上方・下方等の十方にも、亦是の如く、一切の諸の佛利なる、菩薩道を求むるの人は、皆是の徳號の法經を受け、諷誦して持つて之を説くなり。阿惟越致菩薩摩訶薩の住は、復、無上正眞道の最正覺を成する有り、及び餘の菩薩も亦是の如く、阿闍佛所結の願と、及び其の佛利に生れたる者と、甫めて當に生るべき者とを説くなり。

「是の如く舍利弗、阿闍佛の、阿比羅提世界に住するものは、十方等の諸の、菩薩道を求むるの人を炎照す。若し善男子・善女人の、阿闍佛徳號の法經を諷誦する有り、聞き已つて即ち持て諷誦し、阿闍の佛利に生れんと願すれば、壽の終に臨む時、阿闍佛即ち、其の人を念す。

「所以は何とならば、儼し慚魔、其の便を得んに、即便ち所願を轉すればなり。故に如來之を念すれば、其の善男子・善女人は、復、轉會せず、當に所願と及び無上正眞の道とを得べし。若し他の異なる因縁有らんも、能く燒害する者無けん。是の如くにして、火刀・毒水も是れ亦行ぜず。若しは復、搗捶する者有らんも、亦向はず、亦人・非人を畏れざらん。其の人、是の如くに、等しく護られて、便ち阿闍の佛利に生れん。」と。

佛の言はく、「譬へば、舍利弗、日の宮殿は、遠く住まるも、遙に天下の人を炎照するが如く、是の如く、阿闍佛は遠く住するも、他方世界なる諸の住せる菩薩摩訶薩をば炎照す。

【五六】住、阿惟越致に住する菩薩の謂。

【五七】搗捶、うつなり。

「復次に舍利弗、是に於て無上正眞道の最正覺を成じ、人民をして須陀洹道、斯陀含、阿那含、阿羅漢道に在らしめ、復教へて辟支佛道に在らしむ。我が教授する所の諸の弟子と、及び餘の弟子とを、皆共に合會して、當に阿闍佛刹の諸弟子衆の邊に在らしむるとも、百倍・千倍・萬倍、億百千倍、巨萬倍にして、與に等しからず。但だ解脫を説く者、異有ること無きのみ。我が諸の弟子、及び彌勒佛所有の諸弟子、及び復餘の弟子を、皆復共に合會して、當に阿闍佛刹の諸弟子衆の邊に在らしむべけんも、是れ亦、百倍・千倍・萬倍、億萬倍にして、與に等しからず。所以は何とならば、阿闍佛は、一一の説法の時、人民の道を得るもの、復計るべからざればなり。」と。

佛、舍利弗に言はく、「我が諸弟子を置き、復彌勒佛の諸弟子を置いて、跋陀劫申なる、諸佛・天中の天の、有らゆる諸弟子と、及び餘の得道の弟子とを、復共に合會して、當に阿闍佛刹の諸弟子衆の邊に在らしむべけん、百倍・千倍・萬倍、億萬倍・巨億萬億にして、與に等しからず。但だ解脫を説くこと、異なる人無きのみ。」と。

爾の時、賢者舍利弗、佛に白して言さく、「天中の天の説きたまふ所の如く、我が知る所の如くんば、當に其の佛刹を觀じて、阿羅漢の刹と爲すべく、凡夫の刹とは爲さず。所以は何とならば、彼の阿羅漢、甚だ衆多なればなり。」と。

佛の言はく、「是の如し、舍利弗、彼の刹には、阿羅漢の、生死已に盡きたるもの、甚だ衆多にして、三千大千世界の中なる、有らゆる星宿の、計るべからず、亦多少を知るべからざるがごとし。阿闍佛の、一一の説法の時、阿羅漢を得る者は、計るべからず。是の如く、舍利弗、一一の聚會の時に、不可計、無央數の人、阿羅漢道を得。三千大千世界中の星宿は、なほ數を知るべし。

阿闍佛刹の、是の諸人民は、天眼を以て光明を見るなり、徳本を積累せるを用てなり。阿闍佛刹の三千大千世界の、是の諸人民——諸善男子・善女人——は、晝夜に往いて阿闍佛の所に至り、

【五】天眼を以て云云、異譯には、彼の刹の天人、衆の善本を植うるをば、餘の界の善人は、たとひ天眼を以てすとも、見る能はずとす。

屬を降伏し、向に欲念——阿闍の佛刹に生れんと——する所、即ち其の佛刹に生るゝを得ん。南方、西方、北方、上方、下方にも亦是の如く、四維にも亦是の如くならん。

「若し菩薩摩訶薩有り、是の三事の善本を念じて積累し、以て勸助を作し、勸助し已つて、持て阿闍の佛刹に向はんと願ぜんに、其の人即ち、其の佛刹に生るゝを得ん。」と。

佛、舍利弗に告げたまはく、「若千百の佛刹、若千の佛刹、若千百千の佛刹など、是の如き佛刹の善快——諸佛刹の善快——は、空なるのみ。阿闍の佛刹は、是の如くに非ず。「我れ當に、其の佛刹の善快を見るべく、是を見て以て、是の如き比の佛刹の善快を、我れ亦當に取るべく、當に若千百の菩薩、若千の菩薩、若千百千の菩薩の、爲に現に作せるに、勸助し、歡喜・踊躍して上り、及び阿闍世尊と等しからしめん。」と。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、阿闍の佛刹に生るゝを得ん。

「若し菩薩摩訶薩有り、専ら是の意を發して、阿闍佛に向けんに、若し行かざらしむれば、是の如きを、欺くと爲す。専ら是の意を發せば、便ち阿闍の佛刹に生るゝことを得るなり。

「譬へば、城有り、中に市無く園と浴地と及び萬物と無く、亦象馬有ること無く、亦中を往來する者有ること無きが如し。云何が舍利弗、其の城には、寧ろ疆王有つて、其の中に止る在りや不や。是の城の徳を最下と爲す。是の如きを、快と爲すや不や。疆王にして大城に在れば、其の城には善徳の萬物有り、是の如きを最上とは爲す。

「是の如く舍利弗、是の我が三千大千世界の佛刹力の善快到於て、我が佛刹の如きをば下と爲し、是を上好とは爲さず。是の間の、我が佛刹所有の善快は是の如し。舍利弗、若し菩薩、其の佛刹の善快を淨めんと欲し、取らんと欲すれば、當に是の如く、清淨に之を取るべきこと、阿闍佛の、昔、菩薩道を行じける時、取れる所の清淨佛刹の善快の如くなるべし。

【五】阿闍、三本に依る、麗本は何に作る。

【五】勸助、異譯は廻向に作る。

【五】空なるのみ云云、異譯には、かの佛刹の功德莊嚴は無量の佛刹中に於て、有ること無しと云へり。

【五】非ず、本文は亦如是に作る。按ずるに亦は非の悞か。何となれば、前には諸佛刹の善快を空としたり、今阿闍の佛刹亦空ならんには、餘他の佛刹と選ぶ所無ければなり。前註參照。

【五】作、三本に依る。麗本正に作る。

ち無上正眞道の最正覺を成ぜんをや。何に況んや、諸度無極の衆の善本を合會して、便ち阿闍の佛刹に生るゝを得んをや。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、阿闍の佛刹に生るゝを得るなり。

「復次に、舍利弗、菩薩摩訶薩の、阿闍の佛刹に生れんと欲する者は、當に東方の、不可計の諸佛・天中の天の、善法品等の因縁と、諸佛・天中の天の、説くべき所の法とを念すべし。其を念すること、等しき者有ること無からんには、我をして無上正眞道の最正覺を成ぜしめんをと。」

「當に復、法を説くこと、是の如く、諸佛・天中の天の如くなるべく、其の衆の弟子を念する因縁も等しく、我れ何の時にか無上正眞道の最正覺を成ぜんに、亦當に無央數・不可計の諸弟子衆有るべけんをと。」

「舍利弗、若しは善男子・善女人有らんに、當に三事を念すべく、當に曉了して是の三大事を念すべし。若し善男子・善女人にして、是の三大事を念じて、合會したる徳本を以て、一切衆生の爲に、迹念を作して、持つて、無上正眞の道を作さんと願ぜんに、一切衆生を用ての故に、三事をば願ふなり。善男子・善女人、菩薩摩訶薩は、無上正眞道を願ふも、限るべからざる一切の衆生のためなり。若し人有つて來り、器を以て、限つて虚空を取らんと欲し、來り已つて謂つて言はく、「善男子、善本を持つて、我と共に之と分て」と。」

佛、舍利弗に言はく、「若し善本をして、有色ならしめば、一切の衆生は、便ち器を以て滿たし、限つて虚空を取るべきも、竟るべからず。是の善本をば、器を以て取ることは是の如し。舍利弗、善本もて無上正眞の道を願ふも、是れ亦器を以て取るべからず。是の如きをば、謂つて、薩芸若の善本とは爲す。」

「若し三事の善本を念する有らば、便ち轉じて三寶を得ん。若し菩薩摩訶薩有りて、是の三事の善本を念じて願ひなば、皆善法を見ん。菩薩にして、三事の善本を行じて願ひなば、衆の魔及び官

【四三】 三事、異譯には三種の隨念の善根と云へり。

【四四】 合會したる云云、異譯には、一切衆生と平等に共に習はんと願ふ云々と云へり。

【四五】 菩薩云云、本文には菩薩摩訶薩、願無上正眞道、不可限一切衆とあり。異譯相當文には、菩薩の廻向せる善根の如きは、限量あること無しと云へり。

【四六】 器を以て云云、異譯は一切の衆生、各一器の量、虚空に等しきを以て云々と云へり。

【四七】 善本を以て云云、異譯には、彼の善根を我に分與せよと云ふ。

【四八】 三事云云、異譯には彼の三隨念を成ずる所を、一切種智に廻向せば、此の善根を以て、三寶は隨つて轉ぜんとなへり。

故に、彼の佛刹に生るゝを得るなり。菩薩の精進度無極を行するや、持つて無上正眞道を願ひ、阿閼佛の邊に在るを得んをと。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故、阿閼の佛刹に生るゝを得るなり。菩薩の一心度無極を行するや、持つて無上正眞の道を願ひ、阿閼佛の邊に在ることを得んをと。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、彼の佛刹に生るゝを得るなり。菩薩の智慧度無極を行するや、持つて無上正眞の道を願ひ、阿閼佛の邊に在ることを得んをと。菩薩摩訶薩は、是を用ての故に、彼の佛刹に生るゝを得るなり。

『復次に、舍利弗、阿閼佛の光明は、皆三千大千世界を炎照す。我れ當に是を見んことを願ひ、見已らば、我をして無上正眞道の最正覺を成ぜしめ、當に復、自ら其の佛刹を炎照せんをと。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、阿閼の佛刹に生るを得。我れ當に阿閼の佛刹の無央數・不可計の諸弟子を見、見已りて、我れ亦當に、是の如きの行を作して、我をして無上正眞道の最正覺を成ぜしめん時、無央數の諸弟子有らしむべしと。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、阿閼の佛刹に生るを得。』

『阿閼の佛刹には、若干百の菩薩、若干千の菩薩、若干百千の菩薩有り、我れ當に是の諸尊菩薩を見、寂寞の觀行をば、我れ當に之を學ぶべく、當に處々に於て、曉了して之を知るべし。我れ當に同學と等しくして、差特無かるべく、當に是の一等類と、俱に一處に在るべく、大慈大悲を具せんと欲す。佛を用ての故に、沙門の義の故に、辟支佛の義無く、弟子の行有ること無く、弟子の意有ること無く、緣一覺の意有ること無く、諦に空に住して、惡道の法有ること無けん。諸佛の名等、諸如來の名等、薩芸若の名等、諸法の名等、衆僧の名等、常に諸の名等を念ぜん』と。

『諸の菩薩摩訶薩の如く、若しは善男子・善女人有り、名を聞かんに、阿閼の佛刹に生ずるを得ん。何に況んや、諸度無極の善本を合會して、持つて阿閼の佛刹を願ひ、衆の善本を合會し已りて、便

【四一】一心度無極、禪定波羅蜜。

【四二】大慈大悲云云、異譯に欲求する者、二乘の心を捨する者、空性に安住する者、如來の一切智性、法・僧の名號に於て念住する者に會遇すべしとあり。

【四三】名、異譯には、この色類の菩薩の名とす。

なり。』

『復次に、舍利弗、阿闍佛の摩訶般泥洹の時、佛所説の法は、當に住ること若干百千劫に至るべし。』
 と。賢者舍利弗、佛に問ひまつつて言はく、『天中の天、何等の數を以てか、佛所説の法、住ること
 百千劫に至るとはする。』と。

佛、舍利弗に告げて言はく、『二十の小劫を以て一劫とは爲す。是を數と爲して、佛所説の法、住
 ること百千劫なりとす。復次に、舍利弗、其の法、滅盡の時には、一切の三千大千世界は、當に大
 に照明なるべく、其の法は、是の魑魔及び魔天の滅する所にはあらず、亦是の天中の天の弟子の滅
 する所にもあらず。諸の比丘、稍寂を樂んで是に往還し、稍寂と共に往還し已つて、俱に行いて、
 復次に法を聽聞せず、聽聞せずして、亦次に承用せず、復大精進を得ず。法師比丘は、法・教に於
 ても、亦寂にして、法を説くこと少し。是の故を以て、法稍滅盡し、稍見えざるなり。』と。

爾の時、賢者舍利弗、佛に問ひまつつて言はく、『云何ぞ、天中の天、菩薩摩訶薩は、何等の徳行
 を用ての故にか、阿闍の佛利に生るゝを得るや。』と。

佛、舍利弗に告げたまはく、『是の菩薩摩訶薩は、阿闍佛の、昔、菩薩道を求めける時に行じたる
 ところを學んで、當に是の如きの意願を發すべし——我をして阿闍の佛利に生れしめんをと。菩薩
 摩訶薩は是の行を以ての故に、彼の佛利に生るゝことをば得るなり。』

『復次に、舍利弗、菩薩の布施度無極を行するや、徳本を積累し、持つて無上正眞の道を願ひて、
 阿闍佛の邊に在ること得んと。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、彼の佛利に生るゝことを得る
 なり。菩薩の戒度無極を行するや、持つて無上正眞の道を願ひ、阿闍佛の邊に在ることを得んを
 と。菩薩摩訶薩は、是の行を用ての故に、彼の佛利に生るゝを得るなり。菩薩の忍辱度無極を行す
 るや、持つて無上正眞の道を願ひ、阿闍佛の邊に在るを得んをと。菩薩摩訶薩は、是の行を以ての

【三〇】 異譯によれば、法は自ら沈隱するなり。

【三一】 以下、異譯は往生因縁品第六とす。

【三二】 戒、麗本誠に作る、今三本に依る。

閻佛の、摩訶般泥洹の時には、其の骨、自ら破碎して、其の身骨、復見えす、自然に還らん。

「時に一切の三千大千世界の人民、皆其の身を供養し、七寶を以て塔を作らん。其の三千大千世界は、當に七寶の塔及び葉と、金色の蓮華とを以て莊嚴せられん。

「復次に、舍利弗、阿閼佛刹の、諸菩薩摩訶薩は、禮を作すに當つて、瑞應有ること、乃ち是の如くならん。自然の諸寶、其の處に於て、前に在つて住せん。

「其れ菩薩摩訶薩の、阿閼の佛刹に往生する者有らんに、甫めて生るるに當り、當に佛意の無亂なるを見るべく、命過ぐる時、一切の諸天人、當に其の身を供養すべく、諸天及び人民は、是を發起して其の身を供養せんと願はん。

「菩薩摩訶薩は、自ら功德を以て、稍虚空に於て疾行するも、都て復、其の處を知らざらん。譬へば舍利弗、草木を持って火中に著くるに、熏烟出で、其の烟、虚空中に上り、亦虚空中に於て行き、亦虚空中に於て、都て滅して、所經の處を知らざるが如くなるべし。其の佛刹の菩薩摩訶薩の法身も是の如くならん。

「復次に、舍利弗、阿閼佛刹の、菩薩摩訶薩は、壽命盡きて、壽の終らんとする時に臨み、餘の菩薩摩訶薩は、他方世界にて、佛樹の下に坐する時なるを見ん。是れ菩薩摩訶薩の、壽終らんとする時に臨んでの瑞應なり。

「復、餘の菩薩の、母の腹中に入るを見ん。時には亦復、餘の菩薩摩訶薩の、母の右脇より生出し、時には七歩を行くを見ん。時には姪女の中に在つて、相娛樂するを見ん。時には餘の菩薩摩訶薩の、出家學道するを見ん。時には餘の菩薩の、佛樹の下に坐し、魔を降伏して、薩芸若の慧を得るを見、時には他方世界たる諸佛、天中の天の、法輪を轉するをば見ん。」と。

時に佛、舍利弗に言はく、「阿閼佛刹の菩薩は、壽の終に臨む時、是の比を以て、自然の瑞應有る

【三七】出、三本による、麗本は行に作る。

復一方に至り、等輩と共に遊行し、若干百千等の輩と共に遊行せん。菩薩摩訶薩は、當に若干百千の如來を見、當に無數の佛を見、當に無數の薩芸若を見るべし。

【一】若し菩薩摩訶薩の、是の世界、若しは他方の世界に於て終亡し、阿闍佛に生るる者有らんに、甫めて生るに當り、其の人亦、衆等と俱に遊行し、佛の威神所致の薩芸若を以ての故に、阿惟越致を爲さん。菩薩摩訶薩にして、是の阿闍佛の德號の法經を聞かんには、皆、魔の羅網を離るるとは爲すなり。

【復次に、舍利弗、阿闍佛の摩訶般泥洹の時、法行に至つて在る者と、諸の菩薩摩訶薩にして、阿闍佛に生れん者とも、亦當に等輩と遊行し、阿闍佛の昔時の願を求索し、然る後、當に阿闍佛利に生るべし。菩薩摩訶薩は、便ち當に八百門を諷誦すべく、諷誦し已つて、皆當に諸法を諷誦して、便ち微妙の阿闍佛利に上る有らん。諸の菩薩摩訶薩は、行・住に八百の門もて、我れ當に阿闍佛利に生るべしと念するを得、亦當に八百の門を諷誦し、諷誦し已つて、皆當に復、諸法を諷誦し、上妙の句を見、是の如くして、諦に之を受くべし。

【菩薩摩訶薩は、阿闍佛の、現在し及び般泥洹する時も、法を説くこと、等しくして異ること無けん。佛利も、如來の示現したる所と等しく、阿惟越致より、無上正眞道の最正覺を成ずるに至らん。

【復次に舍利弗、阿闍佛は、身中より自ら火を出し、還身を燒き已つて、便ち金色を作し、即ち碎けて芥子の如く、復還復せず、訖つて便ち自然に生ぜん。譬へば舍利弗、樹有つて埵彌羅と名くるが、髪のごとく、段段に斷ち已るに、復見されども、自然に生ず。是の如く、舍利弗、阿闍佛の、摩訶般泥洹する時、身をば破碎して、復見されども、還自然に生ぜん。

【復次に舍利弗、阿闍佛の、摩訶般泥洹の時、其の身骨の坐處は、自然なるを見ること、譬へば山有り、碎破すれば、其の山、復見えず、自然に其の處に還るが如くならん。是の如く、舍利弗、阿

【三】 法行云云、文に至法行在者とあり。異譯には乃至正法住世に作る。

【三】 八百門、異譯には百八の法門とす。

【三】 法を説くこと云云、異譯には、佛滅度すと雖も、説法の聲、莊嚴の功德は、その在世の時と等しきを云へり。

【三】 斷ち已る、異譯によれば、この樹は、分斷する所に從て卍字の文あるが如しと云へり。

阿閼佛の般泥洹の時、菩薩摩訶薩の、衆香手と名くる有り、當に是の衆香手菩薩に決を授けて、號して、羞洹那洹波頭摩（漢に金色蓮華と言ふ）如來無所著等正覺と曰ふべし。

『復次に舍利弗、其の金色蓮華佛の刹の、有らゆる善快も、亦當に阿閼佛刹の善快の、有らゆる安諦なるが如くなるべし。金色蓮華佛の有らゆる衆弟子も、亦當に阿閼佛の如くなるべし。』

『復次に舍利弗、阿閼佛の摩訶般泥洹の時、當に大に動搖して、皆悉く三千大千世界に通じ、その聲は、阿漸貨羅天に聞え、乃ち復、阿迦尼吒天に聞ゆるに至るべし。阿閼佛の般泥洹するの時には、當に是の瑞應有るべし。』

『復次に、舍利弗、阿閼佛刹の、諸の好樂の樹木は、皆曲つて、阿閼佛般泥洹の所に向ひ、禮を作さん。阿閼佛の摩訶般泥洹の時、諸の天人、及び人民は、華香・雜香・擣香を持つて、供養して其の身上に散げんに、供養し已るや、其の諸天・人民の、華香・雜香・擣香及び餘の寶は、上つて虚空に至ること四十里にして、圓華蓋を成ぜん。』

『阿閼佛の摩訶般泥洹の時、其の三千大千世界の、諸の天・龍・鬼神、犍陀羅・阿須倫、迦留羅・眞陀羅・摩休勒などは、皆阿閼佛の、摩訶般泥洹に向ひたまはん時、是の人民及び諸天は、佛の威神の致す所を以て、悉く阿閼佛の摩訶般泥洹の時を見ん。』

『復次に、舍利弗、阿閼佛の摩訶般泥洹の時、諸天及び人民は、晝夜に常に愁憂して言はん、「阿閼佛の般泥洹は、大に疾く、己が爲に人民の娛樂を亡したまへり」と。復、欲する所を樂むを得ずして、意に愁憂して言はん、「阿閼佛の般泥洹は大に疾くして、人民の安隱を亡したまへり」と。意に愁憂して言はん、「天下の眼を亡へり」と。』

佛、舍利弗に語りたまはく、『若しは菩薩摩訶薩の、是の世界、若しは他方の世界に於て終じし、阿閼の佛刹に生るる有らんに、甞めて生るる時に當り、其の人、皆己が爲に決を受けて、一方より

【二】衆香手、異譯には香象に作る。
【三】羞洹那洹波頭摩、異譯は金蓮に作る。

【三】阿漸貨羅天、不明なり。異譯之を缺く。

【三】阿迦尼吒 (Akaniṣṭha) 色界竟天、色界最上の天。

の教令けうりやうに隨ひ、無上正眞道の最正覺じやうを成ずるに至ればなり。」と。

爾の時、阿難、心に念言ねんごんすらく、「我れ須菩提を試み、我に何等の言を報ずるやを知らんと欲す。」と。賢者阿難、賢者須菩提に問ひて言はく、「唯須菩提、阿闍佛及び諸の弟子等、并に其の佛刹ぶつせつを見つて爲すや不いなや。」と。須菩提、阿難に謂つて言はく、「汝上向して視るべし。」と。阿難答へて言はく、「仁者須菩提、我れ已に上向して視るも、上は皆是れ虚空こくうのみ。」と。須菩提、阿難に謂つて言はく、「仁者、上向して空を見るが如く、阿闍佛及び諸の弟子、并に其の佛刹を觀するに、當に是の如くなるべし。」と。

爾の時、賢者舍利弗、問ひて言はく、「天中の天所説に屬するが如く、此の間の菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの、決を受けたると、菩薩にして阿闍佛刹あせつぼつせつに生れたるとは、是れ適あたに等し。天中の天、何を以ての故に、等しくして等しきや。」と。佛、舍利弗に告げて言はく、「法ほふ、等しきを用ての故に等しきなり。」と。

二六 佛般泥洹品 第五

爾の時、賢者舍利弗、心に念言ねんごんすらく、「佛已に阿闍佛の、昔、菩薩道ぼさつだうを行じたまひける時の徳號をば説き、復、佛刹ぶつせつの善快を説き、亦復諸の弟子及び諸の菩薩の、所學成じたるをも説きたまへり。願はくは佛、當に復、阿闍佛の、摩訶般泥洹まかはんねいんしたまふ時、何の感應か有るやをば説きたまふべきを、天中の天。」と。

是に於て佛、即ち舍利弗の、心に念ずる所を知り、便ち舍利弗に告げて言はく、「阿闍佛の摩訶般泥洹したまふ是の日に、一切の三千大千世界の諸郡國に、變化して化人と作り、法の説くべき所——前に説く所の如き法——をば説かん。時に人民、復、阿羅漢道あらかんどうを行じて、復、上下あらず、便ち阿羅漢道に住せしめん。

【二六】 法、法界の謂。

【二七】 品名、異譯には、涅槃功德莊嚴品となす。

【二八】 摩訶(maha)大と譯す。

是の如く、天中の天、若し菩薩摩訶薩の、阿閼の佛刹に生るる有らんに、甫めて生るるに當り、是の人は、皆現に惡道を斷じて、復、弟子・緣一覺地に在らず、一の佛刹より、復、他の佛刹に遊び、當に佛・天中の天、及び弟子を樂みて、無上正眞道の最正覺を成ずるに至るべければなり。」と。

佛の言はく、「是の如し、舍利弗、若しは菩薩摩訶薩の、是の世界、若しは他方の世界に於て終亡して、阿閼の佛刹に生るる有らんに、爲に以て、現に弟子・緣一覺地に過ぎ、一の佛刹よりして復、一の佛刹に遊び、皆、諸の佛道の事を諷誦し、皆、面に諸の如來を見、無上正眞の道・最正覺を成ずるに至るなり。譬へば、舍利弗、須陀洹は、異道・惡法を度脱して、道を得ると、異有ること無し。是の如く、舍利弗、若し菩薩摩訶薩の、是の世界、若しは他方の世界に於て終亡し、阿閼の佛刹に往生する者有らんに、甫めて生るるに當り、其れ皆、復、無上正眞の道を離れず、一の佛刹よりして、復、一の佛刹に遊び、皆諸の佛道の事を諷誦し、常に佛・天中の天の無上正眞道を樂ひ、無上正眞道の最正覺を成ずるに至るなり」と。

賢者舍利弗、佛の白して言さく、「天中の天、是の間の斯陀含の、往來地に住すると、菩薩摩訶薩の、阿閼の佛刹に生れたるとは、是れ適に等し。天中の天、是の間の阿那含の、不復還地に住すると、菩薩摩訶薩の、阿閼の佛刹に生れたるとは、是れ適に等し。天中の天、是の間の阿羅漢の、無所著地に住すると、菩薩摩訶薩の、阿閼佛刹に生れたるとは、是れ適に等しきなり」と。

佛、賢者舍利弗に告げて言はく、「是の語を説くを得ること莫かれ。所以は何とならば、是の間の菩薩摩訶薩の、無上正眞道の決を受けたと、菩薩にして阿閼の佛刹に生れたるとは、是れ適に等し。復次に舍利弗、是の間の菩薩摩訶薩の、佛樹の下に坐すると、菩薩にして阿閼の佛刹に生れたるとは、是れ適に等し。所以は何とならば、舍利弗、菩薩摩訶薩は、如來を現するが爲に、慳魔も復、動搖する能はず、弟子・緣一覺地を過ぎ、一の佛刹より、復、一の佛刹に遊び、常に皆、諸佛

【三】 異道云云、聲聞の菩提を得て、惡趣に墮せず云云と云へり。

【四】 往來地、斯陀含の位に在る者は、天・人の間を一往すればなり。
【五】 不復還地、阿那含の位に至れる者は第六の欲天に生じて、この世に還らざればなり。

舍利弗、佛に白して言はく、「天中の天、我れ復、城郭の、能く勝れたる者有るを知らざるなり。其の刹の諸天及び人民は、邪道有ること無く、但た正道有るのみにして、極めて相娛樂す。所以は何とならば、我れ其の佛刹を見まつるに、皆、天物を以て、快く飲食し、相娛樂す。阿闍佛は中央に在はして、遍く諸弟子の爲に説法したまふ。譬へば、天中の天、人の大海の中央に在るに、東方の山、樹木の際を見ず、亦南西北方の樹木の際をも見ざるが如し。是の如く、天中の天、阿闍佛刹の諸弟子は、東方の涯を得べからず、亦復、南西北方の涯をも得べからずと、是の如くに思惟す。聞法の身も亦、動搖せず、天中の天、是に於て思惟す——定身は便ち動搖せずと。阿闍佛刹の諸弟子の、法を聴くの身は、動搖せずして定に坐す。是の如く、法を聞くの身は、亦動搖せざるなり。『若しは善男子・善女人の、是の三千大千世界に於て、七寶を滿たし、持つて施與・布施し已り、阿闍の佛刹に生るるを得なば、當に歡喜して、與に其の人、便ち安隱を得、阿闍佛刹の菩薩摩訶薩に生るるを得べし。所以は何とならば、其の人、是の如くにして、阿惟越致を爲すを得ればなり。譬へば、天中の天、人有り、王の書及び糧食を持ち、王印もて封せる書を以て、往いて他國に至るに、其の人、行いて他國の縣邑に至る中道に、殺す者有ること無く、亦能く燒す者有ること無く、獨り自ら往いて、還他無きが如くなり。』と。

佛の言はく、『是の如し、舍利弗、菩薩摩訶薩の、阿闍の佛刹に生るるや、甫めて生るるに當り、是の世界、若しは他方の世界に於て終亡して、阿闍の佛刹に生るれば、皆阿惟越致を得、便ち無上正眞の道を見、一の佛刹よりして、復一の佛刹に遊び、皆、佛道の事を諷誦し、常に佛・天中の天を樂ひ、無上正眞道の最正覺を成するに至るなり。』と。

舍利弗、佛に白して言さく、『天中の天、是の間の須陀洹道と、菩薩摩訶薩の、阿闍の佛刹に生れたる者とは、是れ適に等し。所以は何とならば、須陀洹は、惡道を斷截して、道跡に住すればなり。

【三】 道跡、道の果をいふ。

に當る能はざるべし。譬へば孤寡・恐懼の人、對家を畏れて、便ち往いて城中に至るに、即ち安きが如し。對家の人、之を奈何ともする無し。所以は何とならば、是の人、已に對人を離れて、安隱の處を得るが故なり。

『是の如く舍利弗、諸の菩薩摩訶薩の、阿閼の佛刹に生るゝ者は、以て魔及び魔天の道を斷すと爲す。其の三千大千世界の、慾魔及び魔天は、復、菩薩道及び弟子道を求むるの人を燒さず、及び阿閼佛刹の魔及び魔天は、復、魔事を起さず、亦復、燒さざるなり。』

『復次に舍利弗、若し菩薩有り、阿閼の佛刹に往生せんに、甫めて生るるに當つては、其の人、復、魔天の爲に燒されざるなり。所以は何とならば、阿閼佛の、昔、菩薩道を行じたる時、便ち是の願・徳本を作せり、「我をして無上正眞道の最正覺を成ぜしめば、我が佛刹の諸魔及び魔天をして、魔事を起して、燒亂する有ること無からしめんを。譬へば人の毒を飲み、復、除毒の藥を飲むに、其の飲食、便ち其の毒を消して行かざらしむるが如し。等願を以ての故に。』

『是の如く舍利弗、阿閼佛の、昔時、是の願・徳本を作し、乃至其の佛刹の諸魔及び魔の天子、復、事を起して燒亂せず。其の佛刹所有の徳は、等しく乃ち是の如くなり。』と。

爾の時、賢者舍利弗、心に念言すらく、「願はくは其の佛刹、及び阿閼佛、并に諸の弟子等を見まつらんと欲す。』と。是に於て佛、即ち舍利弗の、心に念する所を知りたまひ、即ち其の像の如く、三昧もて正受せしめたまふに、神足行もて、佛の所致を承けて、賢者舍利弗、其の座中に於て、阿閼佛刹及び弟子等を見たりき。

爾の時、佛、舍利弗に告げて言はく、『汝寧ろ阿閼佛及び諸の弟子、并に佛刹を見るや不や。』と。對へて言はく、『唯然り、之を見まつる。天中の天。』と。『云何が舍利弗、汝の意に知る所にて、寧ろ復、阿閼佛刹の諸天及び人より、勝れたるもの有りや不や。』と。

ば金を出すの地に、礫石無く、亦草木も無くして、中に紫磨の金有らんに、人即ち其の金を取り、火中に於て、試に消合し、以て諸の物を作つて之に著するが如し。

『是の如く舍利弗、阿闍佛刹の諸菩薩摩訶薩は、清淨微妙に住し、清淨に共に會す。是れ諸の菩薩摩訶薩の行なり。其れ阿闍の佛刹に生るゝ者有らんに、甫めて生るるに當つては、皆一種類にして、道行悉く等し。諸菩薩の、當に如來を成ずべきものは、其の人、諸の弟子・緣一覺地に過ぐるを以て、是を謂つて一類の道と爲し、衆の邪の異道有ること無し。菩薩にして、一類たるを得んと欲すれば、當に阿闍の佛刹に願生すべきなり。舍利弗、是の菩薩摩訶薩は阿惟越致を成ずとは爲し、阿闍佛より、決を受くとは爲す。我れ菩薩摩訶薩を遣はして、阿闍佛の所に、至らしめんと欲するにはあらざるを以てなり。

『譬へば舍利弗、轉輪王の遣はせる使者は、諸の小王の所に至り、王の寶物を持つて來らしむ。是に於て、王の使者を遣はし、諸の小王をして來らしむるを聞くや、便ち愁憂・涕泣するも、王の寶物たるを用ての故に、夫人・姪女及び太子は、聞いて、寶物を以ての故に、皆王を畏れ、便ち往いて、大王所居の城に至り、垣を堅くし、頓に其の中に止つて安隱を得、復、怨家・穀貴の苦を見るを恐れざるが如し。

『是の如く舍利弗、我れ諸の菩薩を遣はして、阿闍佛の所に至らしめんと欲するにはあらず。譬へば彼の王、寶物を以ての故に、諸の夫人・姪女及び太子をして、同等に愁憂して視んが如し。菩薩道を求むるの人は、當に大王の城の、有らゆる寶處・太子など、爲に恐難有ること無きが如し。阿闍の佛刹を觀ること、當に大王の如くなるべし。弊魔の、菩薩道を求むる者を見ること、是の如くにして、復、擾亂せず。

『譬へば王邊の臣には當り難きが如し。是の如く舍利弗、魔及び魔天の官屬も、如來無所著等正覺

【二六】 種類云云、異譯には皆一行を行じ、如來の行に住すと云へり。

【二七】 我れ云云、本文に以我不遣菩薩摩訶薩至阿闍佛所とあり。異譯には是の諸菩薩の、彼の佛刹に生るる者をば我れ捨せずと云へり。

【二八】 轉輪王云云、異譯には刹利の灌頂大王が、その敵國の來り侵さんとするを聞いて、其の姪后愛子をば、財寶と共に、宮城に收入し、怨敵の侵害を免るるを云へり。

【二九】 小王、轉輪王は千子有りと云はる、小生とはこの王子か。

【三〇】 大王、輪轉王なり。

【三一】 異譯には、債主を畏れて遠く邊國に往くことを述べたり。

如くにして、乃ち佛道を得、慾魔の毒を消除して、復人を燒さしめず。阿閼佛の、無上正眞道の最正覺を成じつる時、慾魔復、來つて燒す能はず、亦復、諸の菩薩摩訶薩、及び凡人をも燒す能はず、一切皆復、三千大千世界中の人を燒さじりき。

「是の如く、先に三昧の寂定に坐せる、自の威神を以て、和耶越致天に生れ、彼に於て、前世の因縁を以て、行廣普し、亦和耶越致天に於て、因縁三昧を以て、自の威神の寂寞を以て、是を以て、彼に於て説法するに、炎天之を聞き、聞き已つて、即ち信を得て歡喜し、來つて諸弟子を供養して、炎天の言はく、「乃ち是の無所著を作し、止足を知り、空閑處に行を作さん。」と、其の刹の諸魔、人を教へて出家學道せしめ、復人をば燒さず。舍利弗、是の阿閼佛刹の徳の善快たる、夜の初めて鼓するの時、先づ人民を哀念して、諸の菩薩を度脱せしめ、及び弟子并に凡人をして、安隱寂寞の行を學ばしめんと欲するなり。」と。

賢者舍利弗、佛に白して言さく、「唯天中の天、若しは善男子・善女人の、七寶の、三千大千世界に滿てるを持つて、用つて布施して、阿閼の佛刹に生るゝを得ば、其の人、當に惜むべからずして、便ち當に布施すべし。所以は何とならば、其の人は復、弟子・縁一覺の道に墮せざればなり。所以は何とならば、其の人は即ち爲に、不退轉地に立ち、一の佛刹よりして、復一の佛刹に至り、目に常に悉く諸佛を見まつり、皆悉く佛の道行を諷誦して、當に無上正眞道の最正覺を成すべく、常に當に若干百佛、若干千佛、若干億・那術百千の佛を見まつり、彼に於て徳本を積めばなり。」と。

舍利弗、佛に白して言はく、「天中の天、是を以ての故に、善男子・善女人、七寶の、三千大千世界に滿つるを以て布施し、阿閼の佛刹に生るゝを得なば、其の人、當に歡喜して與ふべく、便ち安隱に、其の佛刹に至らん。」と。

佛の言はく、「是の如し、舍利弗、菩薩摩訶薩は、爲に安隱に、阿閼の佛刹に生るゝを得ん。譬へ

【一】 先に三昧の云云、異譯に依れば、先業の所感に由りこの魔身を受けて、彼の天中に生じ云云とあり。
【二】 和耶越致。Vasavattinaの音寫なるべし、即ち他化自在天、即ち六欲天の第一。
【三】 炎天(Prethi)夜摩天ともいふ、欲界の第三重の天なり。
【四】 乃ち云云の句、異譯には「云何がして當に寂定に住し、少欲知足なるを得べき」とあり。

法語を持し、至る所、諸の佛刹ぶつせきに生れ、續いて之を念するなり。舍利弗せりぶつ、是を阿闍佛の善快とは爲す。所以は何とならば、昔の所願ぶつごんの如くに、自然じぜんに之を得たればなり。」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、「若し一世のあひだに、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつの、若干百佛、若干千佛、若干萬佛、若干億・那術百千佛を見んと欲する有らば、當に阿闍の佛刹ぶつせきに願生すべし。菩薩已に阿闍の佛刹ぶつせきに生ずれば、便ち若干百佛、若干千佛、若干億萬佛、若干億・那術百千佛を見、當に其の刹せきに於て、諸の徳本とくほんを種うゑ、當に無央數百千人、無央數百千億人、無央數億・那術萬千人の爲に說法し、亦當に徳本を種うゑしむべし。」と。

佛、舍利弗に言はく、「若しは菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ、是の毘陀劫中びだこくちゆうに於て、皆諸所の佛・天中の天を供養くわうやうし、衣被・飯食・牀・臥具・病瘦の醫藥を供養して、以て便ち出家學道しゆつげがくだうし、悉く是の諸佛・天中の天に於て、鬚髮を下して沙門しゃもんと爲らんも、若しは復、菩薩摩訶薩ぼさつまかさつ有り、阿闍の佛刹ぶつせきに、一世のあひだ、合會がふゑして度無極どむじやくを行じて得る福の多きには如かず。」と。

佛、舍利弗に言はく、「是の福徳善本の行、具足せること、百倍千倍、萬倍・巨億萬倍にして、與に等しからず。舍利弗、是を阿闍佛刹ぶつせきの善快とは爲す。」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、「若し一世の菩薩、是の世界、他方の世界に於て終亡しゆうはうし、阿闍の佛刹ぶつせきに生るゝ者、甫はじめて當に生ずべき者、皆阿惟越致あゐゑつしを得。所以は何とならば、其の佛刹ぶつせきには、魃魔あまの事、前に在つて立つ有ること無く、魃魔亦、人を燒さざるなり。」と。

佛、舍利弗に言はく、「譬へば人の、呪力じゆりきの語もて毒を呪し、蛇じやを呪して其の毒を除き、便ち放捨するに、其の力、勝るべからずして、無央數むゑうしゆの人の恐畏を救ひ、其の蛇、亦人を恐れず、亦人を燒や觸ふもせざらん。是の如く、其の人、但だ前世の禪三昧ぜんさいの行を以ての故に、自ら功徳を以て、蛇の毒を滅するを得るが如し。是の如く舍利弗、阿闍佛あせつぶつの、昔、菩薩道を求めける時、行願の徳本とくほん、是の

還つて阿閼如來の所に至りぬ。」と。

佛、舍利弗に語りたまはく、『是の毘陀劫の中には、當に千佛有るべし。甫始より四佛過ぎぬ。菩薩摩訶薩、是の諸佛を見んと欲すれば、當に阿閼の佛刹に願生すべし。若しは善男子・善女人有り、是の世界、若しは他方の世界に於て終亡し、阿閼の佛刹に 往生し、もしは甫て當に生すべき者は、即ち當に 弟子緣一覺地に住するを得べし。所以は何とならば、其れ因緣有つて、如來及び衆僧を見る有らんに、弊魔の羅網を斷じ去れるを以て、弟子緣一覺、及び佛地に近くを得、當に無上正眞道の最正覺を得、其の人、爲に以て如來を成じ、爲に以て諸の菩薩摩訶薩の事を見るべし。』

『菩薩の、阿閼佛刹に生ぜん者、其の行、皆清淨に住し、諸法を行することを爲し、諸法士に在ることを爲し、以て法に住することをなし、佛の道を爲して、動轉すべからず、復、當に堅く阿惟越致に住すべし。』と。

佛、舍利弗に語りたまはく、『若しは善男子・善女人の、是の世界、若しは他方の世界に於て終亡し、其の刹に往かん者の等輩は、諸佛の刹に入ることを得、其の菩薩、爲に覺意を得て、無恐懼に入る。覺意の菩薩、智慧度無極と合會し、在所に各同義にして、世尊を見、所住を知る。』と。

『其の佛刹の諸菩薩摩訶薩の、在家の者は高樓上に止り、出家して道を爲す者は、舍に在つて止まらす。』と。

佛、舍利弗に告げたまはく、『阿閼佛の法を説く時、諸の菩薩摩訶薩は、佛の威神を承け、皆法語を受けて、諷誦して之を持す。其の出家せざる菩薩摩訶薩は、面に見ざるも、佛所説の時、所坐の處に在つて、佛の威神を承け、皆亦法語を聞き、聞き已つて即ち諷誦して之を持す。其の出家せる菩薩摩訶薩は、身自ら面に、佛の説法するを見る時、及び行至し坐するの處に、亦佛の威神を承け、皆聞き、聞き已つて即ち受け、諷誦して持するなり。是の菩薩摩訶薩は、終亡已後にも、俱に

【五】 毘陀(Blaktra)賢劫と譯す。現在の劫をいふ。この劫に千佛の出世ありとせらる。

【六】 千佛、異譯には九百九十六佛とす。

【七】 往生、異譯には、若已生、若今生、若當生と云へり。

【八】 弟子云云、異譯には必ず諸聲聞地に信ぜずと云ひ、次行にも、二乘地に於て、永く相續を斷じ、無上菩提を得べきを云へり。

【九】 其の行云云、異譯に、彼の諸の衆生、終に退墮せず、引攝すべからず、亦退還すべからず云々と云へり。

【一〇】 智慧云云以下、異譯には、彼の菩薩の言議は、般若波羅蜜と相應し、互に相薄敬し、導師の想を起すと云へり。

【一一】 在家云云、異譯は、在家の者少く出家の者多しと云へり。

卷の 下

諸菩薩學成品 第四

爾の時、賢者舍利弗、心に念言すらく『佛已に弟子の學成する所をば説きたまへり。願はくは佛、當に復、諸菩薩の學成する所をば説きたまふべきを。所以は何とならば、皆當に是の諸菩薩所照の光明を學成すべければなり。』と。

時に佛、即ち賢者舍利弗の、心に念する所を知りて、即ち舍利弗に告げたまふらく、『其れ阿闍如來無所著等正覺の佛利には、若干百の菩薩、若干千の菩薩、若干億の菩薩、若干億百千の菩薩有りて、大會是の如くなり。』と。

佛、舍利弗に語りたまはく、『諸の菩薩摩訶薩、阿闍佛の所に於て、鬚髮を下すに、皆佛の威神を承け、悉く法語を受け、諷誦して之を持す。我の如きは、是所に於て說法すること、猶ほ薄少と爲す。』

『阿闍佛所説の法は、無央數にして、復計るべからず、我が所説の法に比するに、百倍・千倍・萬倍、萬億倍にして、計の中に在らず。舍利弗、是を阿闍如來の、昔、菩薩道を行じける時の所願——我れ無上正眞道の最正覺を成ぜん時、我が佛利の諸菩薩をして、我が説法の時、諸の菩薩をして、皆佛の威神を承け、悉く受けて諷誦して之を持せん——とは爲す。』と。

佛、舍利弗に語りたまはく、『爾の時、諸の菩薩摩訶薩は、皆佛の威神を承け、所説の法を受け、諷誦して持したり。是の諸の菩薩摩訶薩、自ら意念を生じて、其の利より、他方の世界に至らんと欲せんに、俱に諸如來の所に至つて、所説の法を聴き、諸佛世尊の爲に、禮を作して之を諷誦したり。復、重ねて意解を問ひ、諸佛の爲に禮を作して諷誦し已り、重ねて意解を問ひ已つて、便ち復、

【一】 大寶積經卷第二十。

【二】 品名、異譯に菩薩衆品となす。

【三】 猶。麗宋二本は由に作る、今元明本による。

【四】 意解を問ふ、異譯には、問難を爲すと云へり。

賢者舍利弗、佛に白して言さく「阿闍如來無所著等正覺の佛利の、諸弟子の所行は皆極まり無し」と。

阿闍佛國經卷上

弟子學成品第三

二五

者有るも、身に亦疲極を知らず、意にも亦疲極を念はざるなり。

「阿闍如來の、虚空中に於て、法を説くの時、諸の弟子は、悉く之を聴く。是の時、神足を得たる比丘も、未だ神足を得ざる比丘も、佛の威神を承けて、皆虚空の中に於て、行いて法を聴くなり。是の諸弟子は、虚空の中に於て、三品を以て行を爲す。何等か三なるとならば、一に住、二に行、三に坐なり。

「中には坐して般泥洹し、波藍坐居して般泥洹するもの有り。諸の弟子、皆般泥洹する時、地は即ち爲に大動し、般泥洹し已るに、諸天人民は、共に之を供養す。中には阿羅漢の、身中より自ら火を出し、還身を燒きて、般泥洹する有り。

「中には阿羅漢の般泥洹する時、自ら功德を以て、行くこと、疾風中に有るが如くなる有りて、譬へば五色の雲氣、空中に於て行くに、便ち復、處を知らざるが如し。中には弟子の、自ら功德を以て、便ち没し去りて、復、處を知らざる有り。般泥洹も是の如くなり。

「中には般泥洹の時、虚空に於て、身中より水を放つに、其の水地に墮ちず、便ち滅して現れざる有り。其の刹は、是の如くに清淨にして、身をして滅して現れしめずして、般泥洹す。諸の弟子の般泥洹は、是の如くなり。舍利弗、是を阿闍如來無所著等正覺の、昔、菩薩道を行じける時、所願を持つて、無上正眞道を成じたれば、諸の弟子は、是の三品を以て般泥洹するとは爲すなり」と。

「復次に舍利弗、阿闍如來の佛刹の諸弟子は、無央數、不可計にして、諸弟子の、四解の事を具足せざる者有ること少く、四解の事を得て、具足せる者有ること多し。諸弟子の、四神足の安隱行を得ざる者有ること少く、四神足の安隱行を得たる者有ること多し。舍利弗、是を阿闍如來の佛刹の、諸弟子所成の德行とは爲すなり」と。

【二三】神足、また神通といふ。

【二九】行、麗本經に作る、今三本に依る。

【二四】波藍(Paryanka)結跏趺座をいふ。

【二四】疾風中云云、異譯によれば滅度する時、空中を遊行すること、五色の雲の如く、須臾にして消散し云云と云へり。

【二四】三品、行、住、坐の三威儀をいふ。上の三段に示すが如し。
【二四】四解の事、異譯には四無所畏に作る。

佛、復、舍利弗に語りたまはく、「阿闍佛あしやくぶつの説法する時、諸の弟子は、便ちすなはち習欲しゆじゆくを度す。所以は何とならば、已に惡道を棄てたるが故に、其の刹しやくの諸の弟子は、終に貢高こうかう・憍慢きやうまん有ること無ければなり。

「此の刹の諸弟子の、精舍に於て律を行するが如くならずして、其の刹の弟子は、是の行を作す者有ること無し。所以は何となれば、舍利弗しやうりふつ、其の人民は、善本を具するを用ての故に、所説の法の悔過けいこ、各其の所を得たればなり。

「其の刹には五逆ごぎやくの事を説かず、一切皆諸逆を斷じたればなり。諸の弟子、飲食おんじきを食らず、亦衣鉢いふくを食らず、亦衆欲しゆじゆくを食らず、亦著しやくを食らず、善事を説くことを爲す。所以は何とならば、少欲しやうじやくなるを用て止足しそくすべきを知るが故なり。

「舍利弗しやうりふつ、阿闍佛あしやくぶつは、復、諸弟子に戒を授くること、我の此に於て、諸の弟子に、戒を授くるが如くにはあらず。所以は何とならば、其の刹には惡者有ること無し。是の諸の弟子は、但だ苦・空・非常くう・くう・ひじょう・非身を以て、是を以て戒と爲せばなり。

「其の刹には、亦受戒の事有ること無くして、譬へば此の刹の正士せいし、我が法中に於て、鬚髮しゆはつを剃除ていじゆし、少欲しやうじやくにして、我が戒を受くるが如くなり。所以は何とならば、其れ阿闍佛刹あしやくぶつしやくの諸弟子は、自在じざいに聚會くわいごするを得て、怨仇おんしゆ有ること無ければなり。

「舍利弗しやうりふつ、阿闍佛刹あしやくぶつしやくには、諸の弟子、共に行を作さず、便ちすなはち獨り道を行じて、共に行することを樂まず、但だ諸善を行するのみなり、其の刹には、過精進くわしじゆんの者有ること無く、亦懈怠またいの者を見るべからず。舍利弗しやうりふつ、是を阿闍如來あしやくにょらいの佛刹ぶつしやくなる、出家諸弟子の德行とくぎやうとは爲すなり」と。

佛、舍利弗しやうりふつに語りたまはく「阿闍如來あしやくにょらいは、諸弟子の爲に、説法するの時、弟子は左右さうぶを顧視こんしせずして、一心に經を聽き、中に住ちて經を聽く者有るも、身に疲極ひやくを知らず、中に坐して經を聽く

【二三】習、習は煩惱の餘氣。

【二五】非身、無我の謂。

【二三】正士、菩薩の謂。

【二七】疲、麗本罷ひに作る、今三本に依る。下同じ。

て忉利天に至るも、便ち樂んで忉利天人をば供養せず。所以は何とならば、我が天下には、佛、經を説きたまふ、我が天下所有の如きは、是の天上に無ければなり。我が天下の所有、我が天下の、樂んで供養する佛の有すには如かざればなり。

『忉利天は、天下の人民を見、天下の人は、遙に忉利天の宮殿を見ること、譬へば此の利の天下の人、遙に日月星辰の殿舎を見るが如くなり。是の如く舍利弗、其の佛利の天下の人、遙に諸天の宮殿を見ること、是の如く、及び天に行かんと欲すれば、佛威神の致す所を承く。是を阿闍如來の佛利所有の善快とは爲す』と。

佛、復、舍利弗に語りたまはく『阿闍如來の佛利には、三千大千世界に、皆說法の四輩弟子あり、三千大千世界に満ちて、空缺なし。阿闍の佛利にては、弟子意に念せず「今日當に何をか食すべき。今日誰か當に我に食を與ふべき」と。亦家に行いて乞ひもせざれど、時到れば、飯食便ち辦じ、鉢に満ちて自然に前に在り。即ち取つて食し、食し已るに、鉢便ち自然に去る。其の利の飯食、是の如し。

『諸の弟子は、復行いて衣鉢を求めず、亦衣を裁せず、亦衣を縫はず、亦衣を洗がず、亦衣を染めず、亦衣を作らず、亦人をして作らしめざれど、佛の威神の致す所を以て、同じく共に安樂に、自然に生ずるなり。

『阿闍如來は、諸の弟子の爲に、罪事を説くこと、我れ諸弟子の爲に、十四句の法を説くが如くならず。阿闍如來は諸弟子の爲に、是の如きの法は説かず。所以は何とならば、其の利には、惡行の者有ること無ければなり。阿闍佛は、復、諸の弟子に戒を授けず、所以は何とならば、其の佛利の人、短命の者有ること無く、亦蔽惡の人無く、穢濁の劫有ること無く、亦諸の結も有ること無く、穢濁有ること無し、其の利を見るに、諸惡・穢濁を除けるを以てなり』と。

【二三】佛、阿闍如來を指す。

【二三】以下の七段、異譯に相當文を缺く。

懈怠とは爲す。一坐の聽法を用て、阿羅漢道の證を作すが故なり。其の刹の須陀洹は、復七たび上下の生死をなさず、便ち人間の坐禪に於て、三昧須陀洹を得、即ち彼に於て、自ら威神力を以て、阿羅漢道の證を作す。

「其の刹の 斯陀含は、復、世間を往還せず。衆苦を棄つるを以て、便ち彼に於て、三昧 斯陀含を得、便ち其の刹に於て、自ら威神力を以て、阿羅漢道の證を作すなり。其の刹の 阿那含は、復、波羅尼蜜和耶越天に上生せず、便ち彼に於て、自ら威神力を以て、阿羅漢道の證をば作す。其の刹の阿羅漢は、上下せず、便ち彼に於て、無餘 泥洹界の般泥洹に至る。其の刹には、沙門の四道を説き、是の如くして、得道して住せしむるに至るなり」と。

佛、舍利弗に言はく「若しは善男子・善女人、法に於て自在なる者、復學住を失せず、亦餘事を學することを失せず、是の如く、不學地に於て、便ち般泥洹するなり。學する所無き地をば、是を阿羅漢地と謂ふ。舍利弗、是を阿闍如來無所著等正覺の刹の、諸の弟子、學成りて鹿立有ること無しとは爲すなり。上好要處に在る者、是を阿闍如來の刹の弟子衆、阿羅漢と謂ふ。生死已に斷じ、所作已に辦じ、當に爲すべき所として、以て重擔を脱し、便ち有らゆる勤苦・牢獄の事を盡壞するを得、中正の解を以て、復八 維無禪を知る、阿羅漢は、八維無禪を行すればなり。舍利弗、是を阿闍如來の刹の、弟子の善行とは爲し、是を阿羅漢の功德所爲の福行とは爲す。

「其の刹は三寶を梯陞と爲し、一に金、二に銀、三に琉璃にして、忉利天上より、閻浮利の地に至る。其の忉利天、阿闍如來の所に至らんと欲する時、是の梯陞より下るに、忉利天人、樂んで天下の人民を供養して言はく「我が天上の所有の如きは、天下の人民に比せんと欲するに、天上の所有大なるも、天下に如かず、及び復阿闍如來無所著等正覺の有すには」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「忉利天人は、樂んで天下の人民を供養するも、天下の人、若し上つ

【二四】 不一、多の謂。

【二五】 斯陀含(Sakragamin)一來と譯す。修惑の一部を斷ぜざるにより、天と人界とを一往來すと云はるる。今此の刹の斯陀含は第六天に生るるのみにて、人界に來らざるものとせらる。

【二六】 阿那含(Anāgamin)不還と譯す。即ち第六の欲天に生じて歸らざるの謂なれど、此の佛刹にては、この天にすら生ぜずと。

【二七】 波羅尼蜜和耶越(Pāra-nirmita-vasavartin)譯して他化自在天といふ。欲界六天の第六。

【二八】 泥洹は涅槃なり。無餘は餘依なき義。即ち化身滅智の涅槃を指す。

【二九】 法に於て云云、異譯には、能く此法を了すれば、諸識及び學地に住せずとあり。

【三〇】 不學地、無學地に同じ。學すべきところあらざる謂。

【三一】 維無、先の惟務に同じく Vinoksa の音寫なるべし。

佛、賢者舍利弗に告げたまはく「阿闍如來、若し郡國・縣邑に入るや、至到せらるる處、亦殿舎に入る時の如くにして、自然に千葉の金色の蓮華を生ず。若し善男子・善女人など、意に念じて、殿舎に入る足下に、自然に蓮華を生ぜしめ、皆蓮華をして、一處に合聚せしめんと欲すれば、便ち合聚し、意に上、虚空中に在らしめんと欲すれば、佛の威神を承けて、彼の蓮華、人民を用ての故に、便ち虚空中に在り、羅列して行くことを成す」と。

佛、復、舍利弗に語りたまはく「其の三千大千世界は乃ち是の如し。阿闍如來無所著等正覺の、若し化人を遣はして、他方の異なる世界に到らしめんとせば、彼に亦自然に生ず。佛の威神の致す所なるを以てなり。其の三千大千世界は、七寶の金色の蓮華を以て、之を莊嚴す」と。

弟子學成品 第三

佛、復、舍利弗に語りたまはく「阿闍如來說法の時、一一の說法の中に於て、不可計・無央數の人、律に隨ふの行至り、阿羅漢道の證を作す者有り、是の如き、無央數にも比すべき諸の弟子聚會し、及び復、八惟務禪を得る者ありて、阿弗如來佛刹の諸弟子衆は、復計るべからざるなり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「我れ都て、持計の者と校計との、巨ぞ能く其の衆會を計數せん者をば見ず。已に重擔を脱し、牢獄を離れたるもの、波頭型、阿羅羅型、阿比舍型、阿優陀型よりも速し。是の如く、舍利弗、衆會は不可計數の諸善男子なり。是の弟子の、智慧ある、無央數・不可計の衆は、須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢道に在り。若し懈怠の者も、須陀洹を得て、七生七死を爲す。是れ說法の時、其の人、上を得ざるが爲に、持つて七生七死を爲す。阿闍如來說法の時、第一の說法に、須陀洹道の證を爲し、第二の說法に、斯陀含道の證を作し、第三の說法に、阿那含道の證を作し、第四の說法に、阿羅漢道の證を作すなり。其の佛刹には、是の善男子を謂つて、

【二八】品名、異譯には聲聞衆品となす。

【二九】八惟務禪、八解脱をいふ。

【三〇】持計者と校計、計算師と算數となり。異譯には算師と算師弟子とす。

【三一】已、麗本、以に作る、今三本による。

【三二】以下の四、數目なるべし。初の波頭型は異譯に波頭摩とあり。Paṭṭana (跋)なり。次の二は共に阿羅漢、阿須婆に作るも、梵語不明なり。終は阿部多とあり、Arbuda (痂)ならん。

【三三】須陀洹(Sotā-gaṃma)預流と譯す。三界の見惑を斷じて、聖者の流に預參するの謂。この中の最も鈍根の者も、人と天とに各七返生じて羅漢果を得とせらる。

「舍利弗、阿閼の佛刹には、人民の、治生の者有ること無く、販賣往來の者も有ること無くして、人民は但だ、共に同じく快樂し、寂靜の行に安んず。其の佛刹の人は、愛欲・嫉妬に著せず、因縁を以て自然に愛樂す。其の刹には、風起きて梯・陛・樹を吹くに、便ち悲の音聲をば作す。舍利弗、極好の、五音聲も、阿閼佛刹の風の、梯陛樹木を吹くの音聲には及ばず。舍利弗、是れ阿閼如來の、昔、佛道を行じける時に、所願を持する有りたるが爲なり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「若し菩薩摩訶薩有り、嚴淨の佛刹を取らんと欲すれば、當に阿閼佛の、昔、菩薩道を行じたる時、願へる所の嚴淨もて、其の刹を取りたるが如くすべし」と。

佛、復、舍利弗に語りたまはく「阿閼の佛刹には、日・月の光明の照らす所無く、亦翳冥の處も有ること無く、亦罣礙も有ること無し。所以は何とならば、阿閼如來無所著等正覺の光明を用て、皆三千大千世界を照して、常に明るきこと、譬へば絞露の精舍、堅く門を閉して、風入るを得ざるも、好細に塗るに白堊を以てし、摩尼寶を持つて、其の中に著くれば、其の珠便ち、光明を以て照らし、其の中の諸の人民は、晝夜に其の光明を承くるが如し。是の如く、舍利弗、其の阿閼如來無所著等正覺の光明は、常に三千大千世界を照すなり。舍利弗、絞露の精舍とは、是の阿比羅提の世界を謂ひ、摩尼寶とは、是の阿閼如來を謂ひ、摩尼寶の光明とは、是の阿閼如來の光明を謂ひ、舍中の人と、是の阿閼佛刹中の人民の、安樂なる者を謂ふなり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「阿閼如來の、行きて至る處には、足跡下の地に、自然に、千葉の金色の蓮華を生ず。舍利弗、是阿閼如來の、昔、菩薩道を行じたる時、所願を而も持する有りたるが爲なり」と。

賢者舍利弗、佛に問ひまつて言さく「阿閼如來無所著等正覺の、殿舎に入りたまふ時も、自然に千葉の金色の蓮華生ずるや、所至の處に在つて、自然に生ずと爲すや」と。

【二四】治生の者、農業をなすものをいふか。

【二五】五音聲、宮・商・角・徵・羽の五種の音。

【二六】千葉の云云、異譯には、千葉の蓮華有つて、自然に足を承くと云へり。

【二七】持、麗本待に作り、宋元二本特に作るも、今明本に依る。

得るなれ』と。

佛、舍利弗に語りたまはく、『阿闍如來の佛利には、八味の水有り、是れ諸の人民の所爲にして、悉く共に之を用ふるなり。人民意に念じて、自然の浴池をして、八味の水有つて、其の中に満たしめんと欲せんに、人民の用なるが故に、即ち自然に浴池有り、八味の水有つて、其の中に満ち、意に念じて、水をして轉流行せしめんと欲すれば、便ち轉流行し、意に滅して現れざらしめんと欲すれば、即ち滅して現れず。其の佛利は、亦大に寒からず、亦大に熱からず、風徐に起つて、甚だ香快なり。是の風は、諸の天・龍・人民を用ての故に、念ずる所に隨つて、風便ち起るなり。若し一人念じて、風起きて自ら吹かしめんと欲すれば、風即ち獨のみ吹き、また意を念じて、風をして起らしむるを欲せざれば、風便ち起らざるなり。風の起る時、人身を動かさず、風は人の念ずる所に隨つて起るなり。是を阿闍如來佛利の善快と爲し、昔時の所願の如くなり』と。

佛、舍利弗に語りたまはく、『阿闍如來の佛利の女人は、意に二三珠璣・瓔珞を得んと欲すれば、便ち樹上より取つて之を著け、衣被を得んと欲すれば、亦樹上より取つて之を衣るなり。舍利弗、其の佛利の女人は、女人の態——我が刹中の女人の態の如き——有ること無し。舍利弗、我が刹の女人の態云何とならば、我が刹の女人は、悪色・醜惡の舌あり、法を嫉妬し、意を邪事に著く。我が刹の女人には、是の諸態有るも、彼の佛利の女人には、是の態有ること無し。所以は何とならば、阿闍如來の、昔時の願の致す所なるを用つてなり』と。

佛、復舍利弗に語りたまはく、『阿闍佛利の女人は、妊身して産する時、身疲極せず、意に疲極を念はず、但だ安隱にして、亦苦有ること無きを念ふ。其の女人は、一切亦、諸の苦有ること無く、亦臭處・惡露有ることも無し。舍利弗、是れ阿闍如來の、昔時の願の致す所として、是の善法を得たるが爲なり。其の佛利は、能く及ぶ者有ること無し。』

【二三】珠璣、ともにたまなり。璣は珠の圓ならざるもの。

ざるが如く、其の徳天女の如し。是の如く、舍利弗、其の佛刹の女人の徳をば、玉女の寶に比せんと欲するも、玉女の寶は、其の佛刹の女に及ばざること、百倍・千倍・萬倍・億倍・巨億萬倍するも、與に等しからず。人民は七寶を以て床と爲し、上布は好くして纏繞たり、これ悉く福徳の致すところにして、自然にして生を爲すなり。舍利弗、是れ阿闍如來無所著等正覺の、昔、菩薩道を行じける時、所願をば而も持する有りたるが爲なり。阿闍佛は福徳の致す所を以て、佛刹を成ずること、是の比の如くなり」と。

佛、復、舍利弗に語つて言はく「其の刹中の人民の飯食は、天人の飯食にも勝れ、其の食の色と香と味とも、亦天人の食する所に勝れたり。其の刹中には、王有ること無くして、但だ法王・佛・天中の天のみ有す」と。

佛の言はく「舍利弗、譬へば、鬱單越の天下の人民は、王の治する有ること無きが如く、是の如く、是の如く舍利弗、阿闍如來無所著等正覺の佛刹には、王の有ること無くして、但だ阿闍如來・天中の天・法王のみ有り。譬へば、忉利天の帝釋の、座に於て適に念を發すに、諸天使ち來つて、其の教を受くるが如くなり。舍利弗、是を阿闍如來の佛刹の善快とは爲す。

「其の刹の人民は、姪欲の事に從はず。所以は何とならば、是の阿闍如來、眞人・法御・天中の天の致す所なるを用てなり。舍利弗、是阿闍如來の、昔、菩薩道を行じける時の願の、致す所として、佛刹を善快ならしめたるが爲なり」と。

爾の時、異の比丘有り、彼の佛刹の功徳を聞きたまふを聞いて、即ち中に於て姪欲の意を起し、前んで佛に白して言さく「天中の天、我れ願はくは、彼の佛刹に往生せんと欲す」と。佛、便ち其の比丘に告げて言はく「癡人、汝は彼の佛刹に生るるを得ず。所以は何とならば、姪欲亂意を立つるを以ては、彼の佛刹に生るるを得ず、餘の善行の法、清淨の行を用てして、彼の佛刹に生るるを

【二三】鬱單越 (Uttarakuru) 須彌四州の中の北に住する一州。

樂して聞かんと欲す」と。

佛の言はく「阿闍如來の刹中には、三惡道有ること無く——何等をか三とは爲すとならば、一に泥犁、二に禽獸、三に【一〇】 薜荔——して、一切の人、皆善事を行ひ、其の地平正にして、樹木を生じ、高下有ること無く、山陵、峽谷も無く、亦礫石崩山有ること無し。其の地を行くに、足其の上を踏めば即ち【一〇五】 陷り、適に足を舉ぐれば、便ち還つて復故の如し。譬へば【一〇六】 宛纏たる枕に、頭を其の上に枕せば、即ち爲に陷り、適に頭を舉ぐれば、便ち還つて復、故の如くなるが如し。其の地も是の如し。

「其の佛利には、三の病有ること無く——何等をか三と爲すとならば、一に風、二に寒、三には氣——して、其の佛利の人、一切皆、惡色有る者無く、亦醜なる者有ること無し。其れ姪、怒、癡、薄く、其の佛利の人民、皆悉く牢獄・拘閉の事無く、一切皆、衆の異道有ること無し。其の刹中の樹木は、常に花・實有り、人民皆樹より取り、五色の衣を被、衆共に用て之を著く。其の衣被、甚だ【一〇七】 殊好にして、敗色の者無し」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「人民所著の衣の香は、譬へば天華の香の如く、其の飯食の香美なること、天樹の香の、絶ゆる時有ること無きが如し。諸の人民は、無央數・種種の衣被を著く。其の佛利の人民は、食せんと念する所に隨ひ、即ち自然に前に在り。譬へば舍利弗、切利天の人、食せんと念する所に隨ひ、即ち自然に前に在るが如く、是の如く、其の刹の人民も、何の食を得んと念欲する所に隨ひて、即ち自然に前に在り。人民にまた飲食を食する者有ることも無きなり。

「復次に舍利弗、其の佛利の人民、臥起する處は、七寶を以て、交露と爲せる精舎にして、満ちて空缺の處有ること無く、其の浴池の中には、八味の水有り、人民衆共に之を用ひ、其の水、轉相灌注す。諸の人民は、終に善法の行を失せず。譬へば舍利弗、玉女の寶は、凡女人に過踰して及ば

【一〇三】三、異譯には、地獄、畜生、閻摩界とす。

【一〇四】泥犁、泥犁耶(Niraya)の略、地獄。

【一〇五】薜荔、薜荔多(Pretia)の略、餓鬼の總名。

【一〇六】陷、麗本減に作るも、今三本による。

【一〇七】適、麗本、這に作るも、今三本による。この二字次も亦同じ。

【一〇八】三、異譯には三を、風黃痰所起の病とす。

【一〇九】異道、外道異學をいふ。

【一一〇】殊、美なり、柔なり。

【一一一】交露、殊を交錯して、幔を造り、其の形垂露の如きもの。

【一一二】八味の水、異譯に八功德水とあり。

術・億百千の諸天人は、虚空に於て住り、天華・天の梅檀・雜香・天の擣香・伎樂などもて、供養して阿閼佛の上に散じ、供養し已るに、其の天華・天香・天擣香・天梅檀香・天の雜香は、悉く虚空の中に於て、合住し、化して圓き華蓋を成じたり。舍利弗、是阿閼如來の、昔、菩薩道を行じける時、所願をば持する有りたるが爲なり。

『阿閼如來の光明は、皆照明して、三千大千世界は常に明に、阿閼如來の光明は、悉く日月の光明を蔽ひ、及び一切諸天の光明を、皆滅せしめて、人民をして、復日月の明を見ざらしめたり。舍利弗、是れ阿閼如來の、昔、菩薩道を行じける時、所願をば持する有りたるが爲なり』と。

賢者舍利弗、佛に白して言さく『天中の天、阿閼如來無所著等正覺の、昔、菩薩道を行じたまひける時、是の大僧那僧涅を被たまへるを以て、乃ち是の願を作したまへるなり』と。

佛の言はく『昔、菩薩道を行じける時、若干百千人の、復計るべからざる、無央數の人、徳本を積累し、無上正眞道に於て、是の積累せる徳本を持つて、佛道を作し、及び其の佛利を淨めんと願ひ、所願の如く、其の佛利を嚴らんと欲して、即ち亦其の願を具足したり。

『復次に舍利弗、阿閼の佛、刹の樹は、七寶を以て之を作し、高さ四十里、周匝二十里、其の枝葉は、旁に行くこと四十里、其の枝下垂し、其の欄楯、樹を遶ること、周匝五百六十里なり。阿閼如來は、其の樹下に於て、薩芸若の慧をば得たるなり』と。

佛、舍利弗に語りたまはく『世間の巧人の如きは、百種の音楽を鼓するも、其の聲は、阿閼佛刹中の、梯陞・樹木の音聲には如かず。風、適起つて、梯陞を吹くに、樹木相叩つて、悲聲を作すなり』。

佛、舍利弗に語りたまはく『阿閼如來無所著等正覺の、刹中の淨快を説くを聽かんとならば、諦に聽き善く之を思念せよ。今當に汝の爲に之を説くべし』と。賢者舍利弗の言はく『唯然り世尊、願

【一〇】刹、麗本缺、三本によつて加ふ。

【一一】悲聲、異譯には和雅の音と云へり。

つて、彼の佛刹の善快と、及び阿闍如來所現の教授とを聞きて、清淨の行を恭敬すればなり」と。

佛の言はく「善哉、善哉、舍利弗、問へる所甚だ善し。汝の佛に問へる善快は、乃ち是の如し。阿闍佛刹の善快を念するに、阿闍如來の、無上正眞道の最正覺を成じて、薩芸若の慧を得たる時、其の三千大千世界は、皆大明と爲り、地は六反震動したりき。阿闍如來の、最正覺を成じたる時、其の三千大千世界中の、諸の人民は、七日のあひだ、食飲せず、亦妄に食飲せず、亦妄に諛詔せず、身にも亦疲極の想無かりき。是の如くにして、想念と俱に安隱に、好喜もて相愛敬し、歡喜の意もて、以て時念を得たりき。

『爾の時、諸の人民と諸の欲天とは、皆穢濁の思想を棄てたり。所以は何とならば、阿闍如來の昔時の願の致す所を用て、是の德號を得たれば、其の三千大千世界の一切の人民も、又手して阿闍如來に向へばなり。其の佛刹是の如し。無央數の佛刹も、是の阿闍佛刹の善快は及ばず。舍利弗、是れ阿闍如來の、昔、菩薩道を行じたる時、所願をば持する有りたるが爲なり。諸の菩薩摩訶薩にして、所願を持する有らば、佛と佛刹とは、便ち善快なり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「我れ昔、菩薩道を行じける時、願じたる所の如く、今自然に之を得たり。阿闍如來の、無上正眞道の最正覺を成じける時、其の三千大千世界の、諸の人民の、天眼を得たる者も、未だ天眼を得ざる者も、皆其の光明を見たり。舍利弗、是を阿闍如來の、昔、菩薩道を行じける時、所願を而も持する有りたるが爲なり」と。

佛、復、舍利弗に語りたまはく「阿闍如來の、無上正眞道の最勝覺を成じて、佛樹に往詣したる時、諸の魘魔も、念を發す能はざりき。何に況んや當に復能く往いて、薩芸若の慧を燒さんことをや。舍利弗、是れ阿闍如來の、昔、菩薩道を行じける時、所願を而も持する有りたるが爲なり。

『復次に舍利弗、阿闍如來の、無上正眞道の最正覺を成じて、薩芸若の慧を得ける時、無央數、那

【九三】 善、歷本義に作るも、今三本に依る。

【九四】 亦云云の二句、異譯には無飢渴想と云へり。

【九五】 穢濁の思想、異譯によれば淫欲。

【九六】 所願云云、異譯によれば斯の弘誓の願を發し、此の佛刹の殊勝の莊嚴。

【九七】 而も持する云云、異譯には如來の本願成就して、有情をして此の功德を獲しむと云へり。

【九八】 念、障碍の想。

【九九】 那術(Naruta)、那由他とも寫す、數目の量。

是の應有るなり。菩薩の、母の腹中に在るの時や、都て臭處有ること無く、亦惡露も無く、亦不可意も無きなり」と。

時に佛、舍利弗に語りたまはく「譬へば神通比丘の、若しは絞露の精舎に入るも、虚空の中に、遊行周匝し、虚空中に行きて、絞露の精舎に於て、觸礙する所無きが如し。舍利弗、菩薩の、母の腹中に入るの時、虚空の中に在るが如くにして、遊觀周匝するも、觸礙する所無く、亦臭處も無し。其の阿闍如來、昔、菩薩の道を行じたまへる時、是の如くなりき。我も亦是の如くにて、無上正眞の道を行じける時、一切皆、魔事を破壊したり。我れも是の如くして、無上正眞道の最正覺を成じつ。阿闍の佛利に、菩薩道及び弟子道を求めん者、皆諸惡を破壊し、衆魔を降伏して、一切皆盡し、其の刹の人民も、復魔事を作さずして「我れ當に、是の佛道を修し、出家學道するを得るに至るべきを」と。」

佛、舍利弗に語りたまはく「阿闍如來無所著等正覺の、昔、菩薩道を行じ、説法を聽ける時、其の身に疲極を生ぜず、意に亦疲極を念はざりき。舍利弗、阿闍如來の、昔、菩薩道を求め、説法を聽ける時、是の如くに法を好み、我が佛利中の、諸菩薩摩訶薩をして、法を好むこと、是の如くならしめたり」と。

九二 阿闍佛利善快品 第二

賢者舍利弗、佛に白して言さく「是の阿闍如來無所著等正覺の、昔、德號を行じたまひける時、號を阿闍如來と成じたまへるを以て、甚だ善し天中の天、願はくは佛、當に復、其の佛利の善快を廣説したまはんを。所以は何とならば、若しは菩薩道を求むる者有つて、彼の佛利の善快と、及び阿闍如來の、現に行じたまへる所の教授とを、聞知し、若しは復、弟子の道を求むる未得度の者有

【九二】 絞露、交露に同じ。註一一〇参照。絞露の精舎に於ては、一四一頁を見よ。異譯には、單に宮殿とす。

【九三】 我が佛利云云、異譯相當文によれば、以下は不動如來の願の一にして、「法を好む云云」は、法身の圓滿を得ること、我の如くならしめんとあり。

【九四】 異譯、佛利功德嚴莊嚴品。

【九五】 佛利の善快、異譯には見今刹土功德嚴勝とあり。

に人の意に逆ひたまはざりき。

「舍利弗、阿闍如來の、初發意より、無上正眞道の最正覺を成するに至るまで、中に頭痛有らず、亦風氣上隔の病も無かりき。

「舍利弗、是の阿闍如來無所著等正覺の、昔菩薩道を行じたまへる時、甚だ及び難く、未曾有の法ありき。阿闍如來の、昔菩薩道を行じたまへる時、世世に如來を見まつりては、一切常に梵行を奉じ、世世に亦作したまへり。是を阿闍菩薩と名け、一の佛刹より、復一の佛刹に遊び、所至到の處に、目に常に、諸の天中の天の、彼に生じたまへるを見まつりぬ」と。

佛の言はく「舍利弗、譬へば轉輪王の、天下を得て、一觀より、復一觀に至るに、足未だ會て地を踏まず、至る所に、常に五樂を以て、自ら娛み、自在を得て盡壽に至るが如し。是の如く、舍利弗、阿闍如來の、菩薩道の行を行じたまふや、世世に常に自ら、如來無所著等正覺を見ては、常に梵行を修し、彼所に於て法を説くの時、一切皆、度無極を行じ、弟子の道を行する有ること少く、彼に所行の度無極もて、説法を爲し、佛道に立つ者有るや、便ち勸助して正を現することを爲さしめ、歡喜踊躍せしめ、皆無上正眞の道を修して、便ち是の大尊意を發さしめぬ。彼れ説法の時、諸所の徳本を以て、無上正眞道を作さんことを願持すらく、「我れ是の徳本を以て、無上正眞の道を願ひ、最正覺を成ぜん時、説法して、我が佛刹中の諸菩薩摩訶薩をして、佛説法の時、佛の威神を承け、皆受けて諷誦して之を持し、諷誦し已つて、是の諸の菩薩摩訶薩は、一の佛刹より、復一の佛刹に遊び、意に常に諸佛・天中の天を樂ひて、無上正眞道の最正覺を成するに至らんを。我も亦是の如く、一の佛刹より、復一の佛刹に遊びて、即ち兜術天に住し、一生補生處の法を得ん」と。

佛、復、舍利弗に語りたまはく「是の如く、諸の菩薩摩訶薩は、兜術天より、自ら神力を以て、下つて母の腹中に入り、右脇より生ず。菩薩の生れて地に墮つる時、地は爲に大動す。修行を以て、

【七〇】頭痛云云、異譯に、風、黃痰、及頭痛等都合の諸病無しと云へり。

【七〇】是を阿闍云云、異譯には、是の因縁に由つて、生生の處に、復本名をば、號して不動と爲すとあり。

【七一】轉輪王、この王、位に即く時、天より輪寶を感得し之を轉じて四方を平定すと云はる。異譯には刹利灌頂大王となす。

【七二】觀、宮殿の謂。

【七三】五樂、五欲の樂。

【七四】度無極を行じ、異譯には波羅蜜と相應しとあり。

【七五】弟子の道、聲聞法を行ずるをいふ。

【七六】即ち云云、異譯には兜率天宮の補處の位に至れるを除くと云へり。兜術天は又、三十三天といひ、帝釋の天なり。

【七七】一生補處、次の一生に於て佛處を補すべき位にある菩薩をいふ。

【七八】修行を以て云云、異譯には、最後身の菩薩には、是の如き瑞相有り」と云へり。

「復次に舍利弗、其の大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正覺道の決を授けたまへる時、諸の欲界の天は、悉く天の伎樂を鼓して供養したり。舍利弗、是れ阿闍菩薩摩訶薩の、決を受けたまへる時の、功德の爲なり」と。

賢者舍利弗、佛に白して言さく「及び難き天中の天、如來無所著正覺は、誠諦もて之を説きたまふ。諸の佛と佛との境界は、思議すべからず、神と神との境界は、思議すべからず、諸の龍と龍との境界は、思議すべからず。乃ち阿闍菩薩摩訶薩の、初めて意を發したまへるより、學して此の功德を受得したまふ。天中の天、是の阿闍菩薩摩訶薩の、決を授かりたまへる時も、亦思議すべからず」と。

是の時、賢者阿難、賢者舍利弗に謂ふらく「阿闍菩薩摩訶薩の、初めて意を發し、僧那を學したまへると、及び德號とは、是の如きなり」と。舍利弗、阿難に謂つて言はく「是れ皆因縁有つて致す所なり。阿闍菩薩摩訶薩の、初發意と、僧那を學したまへると、及び德號とをば、今佛當に、廣く之を解説したまふべし」と。

時に佛、舍利弗に告げて言はく「阿闍菩薩の、初めて是の意を發しける時、「願ふらく」一虚空をして異有らしむべきも、我が所結の願をば、異なること有らしむべからじ」と。彼の僧那僧涅も、乃ち是の如くなり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「阿闍菩薩摩訶薩所被の僧那僧涅の如く、寶英菩薩摩訶薩も、亦阿闍菩薩に從つて、學行したり。舍利弗、無央數の菩薩も、阿闍菩薩所被の僧那僧涅の、甚だ堅くして、德行を積累せること、乃ち是の如くなるを、及知する能はず。

「舍利弗、其の阿闍菩薩は、無上正覺道の最正覺を成じたるを以て、今現に阿比羅提世界に在り。阿闍如來無所著等正覺の、菩薩道を行じたまへる時、世世の人、手足及び頭目・肌肉を求むるに、終

【七】受、麗本、投に作る、今三本に依る。

【七二】及び難き、異譯には如來應正等覺は甚だ希有と爲すと云へり。

【七三】次に、麗本、不可思議諸龍之境界の九字あれど、今三本に依つて省く。

【七四】及び云云、異譯には、少分の功德を略説したるのみにて、猶ほ未だ盡したまはずと云へり。

【七五】德、麗本、得に作る。今三本に依る。

【七六】我が所結云云、異譯には我が弘誓は終に退轉する無けんとなり。

【七七】彼、麗本、被に作る、今三本に據る。

【七八】寶英、異譯は寶幢に作り、この菩薩所修の行も、不動（即ち阿闍）に比するに、少分中の一も及ばずと云へり。

及び三十億の諸天は、無上正眞道の意を發し、大目如來無所著等正覺は、皆其の決を授けたまへり。

「復次に舍利弗、大目如來無所著等正覺の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、其の大地に動き、自然に、優鉢華・蓮華・拘文華・分陀利華を生じて、其の地に布けること、譬へば我も亦是の如くにて、無上正眞道の最正覺を成じ、薩芸若の慧を得ける時、大地より自然に、優鉢華・蓮華・拘文華・分陀利華を生じて、其の地に布きたるがごとくなり。

「復次に舍利弗、大目如來無所著等正覺の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、若千百の天人、若干千の天、若干千の諸天人は、虚空に住り、天衣を以て、用て阿闍菩薩の上に散じ、即ち是の言を説きつ「菩薩摩訶薩は、當に疾く無上正眞道の最正覺を成すべし」と。

「復次に舍利弗、大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへるや、爾の時、諸天・阿須羅・世間の人民相愛して、父母の其の子を哀むよりも劇しかりき。譬へば我も亦是の如くにして、無上正眞道の最正覺を成じける時、諸天・阿修羅、世間の人民の、相愛すること、父母の其の子を哀むよりも劇しかりしがごとくなり。

「復次に舍利弗、大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、其の三千大千世界中の、諸天及び人民は、佛の威神を承けて、皆阿闍菩薩に決を授けたまふを聞きぬ。

「是の如く、舍利弗、昔菩薩に決を授けたまへる時、其れ此の國中の人民は、一心に布施して、福德と快の飲食とを爲し、若し求索する者有らんには、己が喜ぶ所をも施與したること、譬へば我も亦是の如くにて、無上正眞道の最正覺を成じける時、是の三千大千世界中の、諸天及び人民は、皆佛の威神を承けて、決を授けたまふを聞いたる時のごとくなり。是の如く、舍利弗、昔此の國中の人民は、一心に布施して、福德と快の飲食とを爲し、若し求索する者有らんには、己が喜ぶ所を施與したりき。

【六六】優鉢、優鉢羅 (Utpala) の略。

【六七】拘文、拘物頭 (Kumudān) の略。

【六八】疾、麗本、度に作るも、今三本に依る。

【六九】一心布施云云、異譯には種種の上服名衣、珍奇美膳を施すと云へり。

【七〇】譬へば云云、異譯には比丘が提月滿に、一切の諸人、悉く皆供養したるが如しと云へり。

とを得たるがごとくなりき。

『復次に舍利弗、大目如來無所著等正覺の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、三千大千世界の中に遍き、人・非人は、皆香を燒きぬ。譬へば我も亦是の如くにして、無上正眞道の最正覺を成じて、薩芸若の慧を得ける時、三千大千世界の中に遍き人・非人は、皆香を燒きたるがごとくなり』と。

賢者舍利弗、佛に白して言はく『阿闍菩薩摩訶薩は、乃ち是の無極の徳有り』と。佛、舍利弗に告げたまふらく『阿闍菩薩摩訶薩は、但にこの功德有るのみならず、獨り大目如來のみ、其の決を授けたまひたるにあらず。是の如くにして、不可稱説の無央數の功德あり、度無極を得つるなり。復次に舍利弗、大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、諸の天・阿須倫、世間の人は、其の意皆安隱にして、悉く其の時を得たること、譬へば我も亦是の如く、無上正眞道の最正覺を成じて、薩芸若の慧を得ける時、諸の天・阿修羅、世間の人の意、皆安隱を得、悉く其の時を得たるがごとくなり。』

『復次に舍利弗、其の大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、和夷羅鬼神は、常に後に隨ひて之を護りぬ。譬へば我も亦是の如くにして、無上正眞道の最正覺を成じ、薩芸若の慧を得ける時、和夷羅鬼神は、我が後に隨ひて行けるがごとくなり。』

『復次に舍利弗、大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道と、薩芸若の慧を得るとの決を』授けたまへる時、諸の天・阿修羅、世間の人は、天華・天香を以て、之を供養したること、譬へば我も亦是の如くにして、無上正眞道の最正覺を成じ、薩芸若の慧を得ける時、諸の天・阿修羅、世間の人は、天華と天香とを以て、來つて供養したるがごとくなり。』

『復次に舍利弗、大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、二十億の人、

【六四】獨り以下、異譯には、又能く無邊の功德の彼岸に到れりとなす。

【五】和夷羅。Vajra の音寫、詳しくは Vajraṅga-yakṣa 手に金剛を執れる鬼神をいふ。異譯には、大夜叉手持金剛に作る。

とならんこと、亦 提洹竭佛の、我に決を授けたまへるが如くなり」と。

時に佛、舍利弗に語りたまはく『大目如來の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、其の三千大千世界は、皆大明と爲りたること、譬へば我も亦是の如くにて、無上正眞道の決を授けられたる時、其の三千大千世界は、皆大明と爲りたるがごとくなりき。

『復次に舍利弗、其の阿闍菩薩摩訶薩の、無上正眞道の最正覺を成じ、薩芸若の慧を得たる時、其の三千大千世界は、六反震動したり、譬へば我も亦是の如くにて、無上正眞道を成じ、薩芸の慧を得たる時は、三千大千世界は、爲に六反震動したるがごとくなりき。

『復次に舍利弗、阿闍菩薩摩訶薩の、無上正眞道の決を授けられたる時、是の三千大千世界中の、諸藥・樹木は、一切皆、自ら曲低して、阿闍菩薩に向つて禮を作しぬ。譬へば我も亦、是の如くにして、無上正眞道の最正覺を成じて、薩芸若の慧を得ける時、是の三千大千世界の、諸藥樹木は、一切皆、自ら曲低し、我に向つて禮を作したるがごとくなりき。

『復次に舍利弗、其の大目如來無所著等正覺の、阿闍菩薩摩訶薩に無上正眞道の決を授けたまへる時、其の三千大千世界中の、諸天・龍・鬼神、毘香𤑔・阿須倫・迦留維・眞陀羅・摩休勒など、一切皆、阿闍菩薩に向ひ、又手して禮を作しつ。譬へば我も亦是の如くにて、無上正眞道の最正覺を成じ、薩芸若の慧を得る時、三千大千世界の、諸の天・龍・鬼神、毘陀羅・阿須輪・迦留維・眞陀羅・摩除勒など、皆我に向つて、又手して禮を作したるがごとくなり。

『復次に舍利弗、其の大目如來無所著等正覺の、阿闍菩薩摩訶薩に、無上正眞道の決を授けたまへる時、三千大千世界に遍き、諸の妊身の女人は、皆安隱に産み、盲者は視ることを得、聾者は聽くことを得たり。譬へば我も亦是の如くにして、無上正眞道の最正覺を成じて、薩芸若の慧を得ける時、是の三千大千世界なる、諸の妊身の女は、皆安隱に産み、盲者は視ることを得、聾者は聽くこ

【五八】 提洹竭 (Dipatikara) 燃燈佛と譯す。釋迦佛因位の時第二劫の滿時に、此の佛の出世に値ひて、作佛の記を受けたりと云はる。

【五九】 諸藥樹木、異譯には卉木叢林となす。

【六〇】 毘香𤑔 (Gandharva) また乾闥婆、毘陀羅に作る。帝釋の樂神、尋香、香食など譯す。
 【六一】 迦留維 (Garda) また迦樓羅に作る。譯金翅鳥。
 【六二】 眞陀羅 (Kimnara) 緊那羅とも寫し、人非人と譯す。
 【六三】 摩休勒 (Muhuriga) 摩睺羅伽、摩睺勒とも寫す。大蟒神なり。

しめたり。阿闍菩薩摩訶薩の感動する所、語の如くにして、異有ること無かりき」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「若し菩薩有りて、無上正眞道の最正覺を成ぜんと欲すれば、當に阿闍菩薩摩訶薩の行を學ぶべし。菩薩摩訶薩にして、以て阿闍菩薩の行を學ばんには、久しからずして、當に即ち佛刹土を取り、當に復、無上正眞道の最正覺をば成すべし」と。

爾の時、賢者舍利弗、佛に問ひまつて言はく「天中の天、阿闍菩薩摩訶薩の、初發意の時、幾何の天か有つて、會の中に在りたる」と。佛、舍利弗に告げたまはく「阿闍菩薩の、初めて意を發して學しける時、三千大千世界中の、四天王・天帝釋及び、四四 魃魔・梵三鉢など、一切皆、阿闍菩薩に向ひ、又手して是の語をば説きつ「昔より聞かざる所の、是の僧那をば、諸天は聞いて以て、便ち説いて言ふ、阿闍菩薩は、無上の正眞道を成ぜん。若し人有り、其の佛刹に生れんには、是の人の福德、小からじ」と」。

賢者舍利弗、佛に白して言はく「未だ曾て聞かず、餘の菩薩摩訶薩の、是の色像を以て、僧那を學するを、我れ亦、阿闍菩薩摩訶薩の如く、及び天中の天の、是の如きの名を爲作したまへるを、見ず亦聞かず」と。

佛の言はく「是の如くなり、舍利弗、菩薩摩訶薩有り、是の色像を以て、僧那及び無上正眞道を學したること、阿闍菩薩摩訶薩の如くなるもの少し。

是に於て、舍利弗、五五 陂陀劫中の、諸の菩薩摩訶薩は、其の徳、阿闍菩薩摩訶薩の功徳に及ばざるなり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「爾の時、其の大目如來無所著等正覺は、阿闍菩薩に、無上正眞道の決を授けたまふらく「汝は、五七 當來に佛と作り、阿闍如來無所著等正覺と號し、慧の行を成じて、師父と爲り、世間を安定ならしめ、無上の大人として、法の御と爲り、天上天下の尊、佛・天中の天

【五五】 魃魔、魔王。

【五五】 陂陀劫(Bhadrakāśpa)賢劫と譯す。現在の劫の名。

【五六】 決、豫言の謂、また記號といふ。

【五七】 當來云云、本文に汝爲當來佛、とあるも、今三本の當來作佛とあるに依る。

れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、我をして最正覺を成ぜしめん時、其の刹の有らゆる比丘・比丘尼、僧婆塞・優婆夷の、若しは罪惡の者、及び罪惡を譏する者有らば、我れ是の諸佛世尊、——不可計・無央數、不可思議・無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまふをば、欺きまつるとは爲す。

「復次に天中の天、我れ當に修行して、乃至無上正眞道の最正覺を成ぜんに、我が佛刹の諸弟子をして、一切皆罪惡有る者無からしむべし。我れ當に、佛道を修し、佛刹をして嚴淨ならしむるに至るべし。唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、我れ若し夢中に於て精を失し、乃至最正覺を成ぜんとならば、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數、不可思議無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまへるをば、欺きまつるとは爲す。

「復次に天中の天、我れ當に修行して、乃至無上正眞道の最正覺を成ぜんに、我が佛刹中の諸の菩薩の、出家して道を爲さん者をして、夢中に於て精を失せざらしむべし。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願す、無上正眞の道を爲さんも、世間の母人、諸の惡露有り。我れ最正覺を成ぜん時、我が佛刹中の母人、諸の惡露有らば、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數、不可思議無量世界中の諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまへるをば、欺きまつるとは爲す」と。是を菩薩の法事、如意所念の行とは爲す」と。佛亦爲に應の如く說法したまへり。

佛、舍利弗に語りたまはく「爾の時、一の比丘有り、阿闍菩薩摩訶薩に謂ふらく「乃し是の結願をば作しつ、若し退轉せざらしめんには、當に右指を以て地を案じ、大に震動せしむべし」と。爾の時、阿闍菩薩、時に應じて、佛の威神を承け、自ら高明の力を蒙り、乃ち地をして六反震動せ

【四〇】時、異譯には無上菩提を證するに至る中間となす。

【五一】世間の云云、異譯には、我が佛刹中の諸女人、女の過失有ること、餘の土の如くならんには、終に正覺を取らじ、若し正覺を取らば、諸佛を欺くと爲すと云へり。

【五二】惡露、身より出づる不淨の津液。

【五三】是を以下、異譯は、舍利弗に對する說法と爲し、菩薩若し此の大願の種子を成就せば、出生するに隨つて、是の如き諸法を念じ衆生の爲に、種々の教を説かんと云へり。

【五四】六反、また六種震動といふ。異譯には、動、大動、遍動、搖、大搖、遍搖を擧ぐ。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發し、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、世世に、若しは手を擧げて説法し、世世に餘の菩薩を見て、佛心を發さず、世世に若しは意を發して、外の異道の人を供養せんことを念じて、諸の如來を捨て、世世に若しは、坐上に在つて法を聽き、乃至最正覺を成ぜんとせんには、我れ是の諸佛世尊、——諸の不可計・無央數、不可思議・無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に説法したまへるをば、欺きまつるとは爲す。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、世世に若しは意を發して、我れ當に布施して、某に與ふべし、布施して某に與へざらんと念じ、世世に若しは意を發し、我れ當に某處に於て福施を立て、某處に於ては福施を立てじと念じ、世世に若しは意を發して、我れ常に法を持して、某に施與せん、法を持して某に施與せざらんと念じ、世世に孤窮を見るも、其の人を用ての故に、身命を分たずして、乃至最正覺を成ぜんとならば、我れ是の諸佛世尊、——諸の不可計・無央數、不可思議・無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に説法したまへるをば、欺きまつるとは爲す。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、我れ世世に、諸の菩薩の所に於て、意に異有ること無くば、無上正眞の最正覺に至るなり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「爾の時、其の比丘、是の如く「思念しつ」、「如來無所著等正覺は、爲に保任を作したまはん。若し如來にして、爲に保任を作したまはば、諸天・阿須倫、世間の人民も、亦爲に保任を作さん」と。爾の時、大目如來、爲に保任に作したまへば、時に諸天・阿須倫、世間の人民も、亦爲に保任を作しぬ。佛の言はく「若し復比丘・菩薩摩訶薩など有り、是の色像僧那を以て、無上正眞の道を求めんには、皆當に無上正眞道の最正覺を成すべきなり」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「其の阿闍菩薩、大目如來無所著等正覺に白すらく「唯天中の天、我

【四二】 孤窮云云、異譯には「諸の罪人の、將に刑罰せられんとするを見、身命を捨て、彼を救護せざらん」とあり。

【四三】 この一節、異譯は缺く。

【四四】 其の比丘、異譯には、一比丘の思念としたり。

【四五】 思念の文字、文中に無し、私に加ふる所なり。

【四六】 保任、異譯は、證、又は證見に作る。

【四七】 阿須倫、阿修羅なり。

【四八】 佛、大目如來を指す。

【四九】 色像僧那、色像は身の謂なり、身に四弘誓行するを色像を以て僧那を學すと名く。

ひ、四天王も、亦是を名と爲すを歡樂し三五天帝釋及び三六梵三鉢三七も、亦是を名とは作すを歡樂したり』と。

佛、舍利弗に語りたまはく「其の阿闍菩薩摩訶薩、大目如來無所著等正覺に白して言はく「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發し、審に是の如くして、願を離れざらん。無上正眞道の爲に、今語る所の如くに奉行せず、常に律の行跡を捨得せず、薩芸若の意を發さずして、而も佛を成ぜんことを欲念し、世世に常に沙門と作らず、世世に常に補納の衣を著せず、世世に沙門と作るも、三九以て三の法衣具せずして、乃至最正覺を成せんとせんには、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數・不可思議・無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまへるをば、欺きまつるとは爲す。

「我れ薩芸若の意を發し、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、世世に常に、人の爲に說法せず、世世に常に法師と作らず、世世に所説の事。罣碍せらるる無き、高明の行有らず、世世に無量の高明の智有らず、世世に沙門と作つて、常に分衛を行ぜずして、乃至最正覺を成せんとならば、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數、不可思議無量世界中の、諸佛・天中の天——の今現在に說法したまへるをば、欺きまつるとは爲す。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發し、審に是の如くに願す、無上正眞道の爲に、世世に沙門と作り已つて、常に樹下に在つて坐せず、世世に常に、精進して三事を行ぜず——何等をか三なる、一に經行、二に坐、三には住なり——、世世に若しは、意を發して、罪本を念じ、妄語もて人を欺き、誹謗讒言し、世世に女人の爲に法を説き、及び食飲の因縁もて、若しは想を起して笑に著し、說法を爲して、乃至最正覺を成せんとならば、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數、不可思議無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまへるをば、欺きまつるとは爲す。

【三五】 天帝釋、初利天の主、須彌山の頂に在りて、他の三十二天を領す。

【三六】 梵三鉢(Brahma-rāhi)は、娑婆世界の主、梵天。

【三七】 律の云云、本文に不捨得律行迹とあり。捨得とは、律に禁じたる所を捨して不犯を得するの謂か。

【三八】 補納の衣、衣片を補納したるもの、糞掃衣なり。

【三九】 三の法衣、佛所制の三種の衣、即ち僧伽梨、鬱多羅僧、安陀會なり。

【四〇】 分衛、乞食、托鉢なり。

如くに願ず、無上正眞道の爲に、一切の人民、蜎飛蠅動の類に於て、是の瞋恚を起し、「第一」、意に若し、弟子、緣一覺の意を發し「第二」、唯意に疑欲を念じ「第三」、若しは意を發して、睡眠を念じ、衆想を念じて、猶豫し「第四」、意を發して、狐疑を念じ「第五」、乃至最正覺を成せんとせんには、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數、不可思議無量世界中の、諸佛・天中の天——の、現在說法したまへるをば欺くとは爲さん。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願ず、無上正眞道の爲なり、若しは我れ、意を發して、殺生を念じ「第一」、若しは意を發して、他人の財物を盜取し「第二」、若しは意を發して、非梵行を念じ「第三」、若くは意を發して、妄言を念じ「第四」、若しは意を發して、悔恨を念じ「第五」て、乃至最正覺を成せんとならば、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無數數、不可思議無量世界中の、諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまへるをば、欺くとは爲さん。

「唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發して、審に是の如くに願ず、無上正眞道の爲に、若しは我れ、意を發して罵詈を念じ「第一」、若しは意を發して惡口を念じ「第二」、愚癡たり「第三」、若しは意を發して、綺語を念じ「第四」、若しは意を發して邪見を念じ「第五」て、乃至最正覺を成せんとならば、我れ是の諸佛世尊——諸の不可計・無央數、不可思議無量世界中の諸佛・天中の天——の、今現在に說法したまへるをば欺くとは爲す」と。

佛、舍利弗に語りたまはく「其の比丘は、是の如くに、己が爲に、是の大僧那僧涅を被りつ。菩薩摩訶薩の、初めて是の意を發すや、乃ち一切の人民、蜎飛・蠅動の類に於て、意に瞋怒無く、亦志恨も無かりき。

「舍利弗、爾の時、其の菩薩摩訶薩、瞋恚無きを用ての故に、之を名けて、阿闍とは爲しぬ。瞋恚無きを用ての故に、阿闍地に住しつ。其の大目如來・無所著等正覺も、亦是を名と作すを歡樂したま

【二六】 第一、本文には、文中に在るも、今は之を割弧内に置く。以下第五まで、皆然り。異譯は、第一、第二と、特に記載せずして、一切諸佛を誦く云云の部分、各項に加へたり。

【二七】 弟子、緣一覺、異譯には聲聞・緣覺に作る。

【二八】 睡眠云云の項、異譯には缺けたり。

【二九】 猶豫、麗本、由譽に作る。今三本に依る。猶豫は躊躇の義。

【三〇】 綺語、雜穢の語。

【三一】 其の比丘云云の一句、異譯には、他の比丘あつて、是の如くに思念したりとなす。

【三二】 僧那僧涅異譯には被精進甲に作る。

【三三】 阿闍、異譯、不動に作る。

【三四】 阿闍地、菩薩十地の第八。

佛の言はく「善い哉、賢者舍利弗、問へる所、甚だ善し。汝乃ち過去の諸菩薩摩訶薩の、所願と及び照明を行じたと、并に僧那とを問ひて、所就に至らしめんとせるは、諸の當來の菩薩を念じて、之を受取せしめんとしたればなり。諦に是を聽け、舍利弗、善く之を思念せよ、汝の爲に、過去の諸菩薩摩訶薩の、所施の行を解説すべし」と。舍利弗の言はく「唯然り、世尊、願樂して聞きまつらんと欲す」と。

佛、舍利弗に告げたまはく「世界有り、阿比羅提と名け、其の佛を大目と名く。彼に於て、諸の菩薩摩訶薩の爲に、法及び六度無極の行をば説きたまふ」と。爾の時、賢者舍利弗、心に念言すらく「我れ如來・天中の天に問ひまつらんと欲す。何所にか是れ阿比羅提世界あり、及び大目如來無所著等正覺、諸の菩薩摩訶薩の爲に、法及び六度無極の行をば説きたまふやを」と。

時に佛、即ち賢者舍利弗の、心に念する所を知りたまひ、舍利弗に告げて言はく「東方に、是を去ること千の佛刹にして、世界有り、阿比羅提とは名け、其の佛をば大目如來・無所著等正覺と名け、諸の菩薩の爲に、法及び六度無極の行を説きたまふなり。

「時に比丘有り、坐より起ち、衣服を正し、右膝を地に著け、大目如來に向ひ、又手して、大目如來に白して言はく「唯天中の天、我れ菩薩の結願の如く、當に學すべき所をば、學せんと欲す」と。是の如く、舍利弗、其の大目如來は、其の比丘に告げて言はく「結願の如く、諸の菩薩の道を學せんこと、甚だ亦難し。所以は何とならば、菩薩は、一切の人民、及び蜻飛・蟬動の類に於て、瞋・悲有るを得ざればなり」と。

「是の如く、舍利弗、其の比丘、大目如來に白して言はく「天中の天、我れ今より已往、無上正眞の道意を發し、意を以て勸助し、之を離れず、用て無上正眞の道を願ひ、當に諛語無からしめ、語る所、至誠に、言ふ所、異なること無からん。唯天中の天、我れ是の薩芸若の意を發し、審に是の

【一四】僧那、具さに僧那僧涅 (Sāṃhānasaṃnāda) といふ。菩薩の四弘誓を以て誓ふを云ひ、或は僧那は鎧、僧涅は著にて、被甲と譯し、菩薩の四弘誓に喩へしなりといふ。

【一五】聞かん者、異譯に依れば、此の法を聞かん者の謂。

【一六】阿惟越致、Avyanti-ka) また阿毘跋致に作る、不退轉と譯す。

【一七】所揚功云云、異譯相當文には闍揚功德とあり。

【一八】受取、同に攝受とす。

【一九】阿比羅提、Abhirati) また阿羅羅提に作る。異譯は妙喜と譯す。

【二〇】大目、異譯は廣目に作る。

【二一】法及び云云、異譯には、微妙の法を説き、六波羅蜜に従ふを首と爲すと云へり。

【二二】我れ云云、異譯相當文には「如佛所説、菩薩法教、志願修行」とあり。

【二三】結願、所願といはんに同じ。

【二四】蜻飛、とびあるく虫。蟬動は蛆虫。

【二五】薩芸若、Śākyajñāna) 切智と譯す。

佛說阿閼佛國經

卷の上

後漢月支國三藏支婁迦讖譯

發意受慧品 第一

是の如きを聞きぬ。一時、佛、羅閱祇なる耆闍崛山の中に在し、大比丘衆千二百五十人と俱なり。皆阿羅漢なり、生死已に斷ちて、復結有ること無く、悉く牢獄を壞ちて、已に自在の意を得、已に善解の智慧あり、諸天龍王を度せんと爲せば、皆之が爲に伏せらる。所作已に辦じ、諸の當に爲すべきものも、已に重擔を脱し、便ち所有用正の慧解を得、意に自在を得て、度無極に所りき。獨り阿難のみ、未だしからざりき。

爾の時、賢者舍利弗、起ちて長跪し、又手して、佛に白して言さく「善い哉、天中の天、昔、諸の菩薩、無上正眞の道を求めたるもの、徳軌を行じて意を發し、便ち至號を得たり。是の諸の菩薩は、義を以て哀念し、諸天及び世間の人を安隱ならしめ、安滯を爲作して、安隱ならしむる所多く、衆の人民に於て、義を以ての故に、哀念して安定ならしめ、大身を以て、世間に於て、無蓋に、諸天及び人を哀傷したり。今現在し、及び過去なる、諸菩薩摩訶薩には、爲に光明を現じ、乃至法の明もて、爲に照明を作して、佛の光明に至らしめて、而も名有ること無かりき。

「若し菩薩道を求むる者有らんには、當に昔の諸菩薩の所願、及び照明并に、僧那を行じたるが如くにして、徳號に入らしむべく、以て聞かん者は、當に是の如くに學して、之を奉行すべし。是の如きを學するは、即ち阿惟越致と及び無上正眞の道とを成ぜんが爲なり」と。

發意受慧品第一

【一】 大寶積經第六會（卷第十九、第二十）參照。
 【二】 同上卷第十九、不動如來會第六の一、授記莊嚴品第一。

【三】 羅閱祇 Rajinika の音寫、王舍城なり。

【四】 悉く牢獄……伏せらる。流支譯には「心慧解脱して、自在無碍なること、猶し大龍の如し」とあり。

【五】 諸の當に……自在を得、流支譯には「速得已利、盡諸有結正教通達」とあり。

【六】 度無極、波羅蜜多 Parimita の譯。

【七】 獨り阿難のみ云云、他は皆、無學地に在るに、阿難のみ、猶ほ學地に在りしを云ふ。

【八】 長跪、或は胡跪といふ。兩膝を地に著け、兩脛を空に上げて、兩足の指頭、地を柱へ、身を挺して立つをいふ。

【九】 又手、合掌して中指を交又するをいふ。

【一〇】 天中の天、佛の尊號。
 【一一】 徳號、異譯相當文には清淨の行に作る。

【一二】 至號を得たり、無上菩提に於て不退轉を得たるをいふ。
 【一三】 過去、異譯相當文には、未來に作る。

功德を細説して、これを書寫すべきことを述べて終る(卷下)のであつて、本經には所謂經の流通分を缺いてゐる。異譯には之を具存して、この稱讚の法門を演説

し、聞くことを得るは、皆如來威神力の然らしむる所で、釋迦佛の滅後には、諸天の加護により諸の法師之を宣すべく、阿闍如來を念じその名號を稱すれば、天

地の諸災害をも除くことが諸天の供養、帝釋・諸天の彼の刹を見ることを云ひ、最後に佛の授記ありて終るのである。

昭和七年九月廿九日

譯者 蓮澤成淳 識

足の有無に拘らず住まつて聽き、般泥洹するにも種種の狀あり、阿閼の弟子には、四無畏四神足を得ざる者も少きことなど、諸弟子の極まり無き所以を述べてある(卷上)。

諸菩薩學成品第四

先に弟子の學成する所を云つたので、今は菩薩のそれを述べ、阿閼佛所説の法は無央數であり、この國の菩薩は、その至らんとする所に至るを得ること、阿閼佛の法を聞く時、菩薩は皆法語を受けて誦し、亡終後も諸の佛刹に生れて之を念ずること、阿閼の佛刹に生ずれば無數の佛を見るを得、其の刹に於て説法を爲し、徳本を植ゆべきこと、阿閼の佛刹に生るる者は阿惟越致を成すべく、彼の刹では魔も人を燒さずして出家學道せしむること、阿閼佛刹の諸菩薩は清淨微妙にして、共に會するを以て、如來の行

に住せんとする者は、この佛刹に願生すべきことをば、諸の譬喩を以て詳説される。

そこで舍利弗は、阿閼の佛刹と佛と其の弟子等を見んと願ひ、佛力によつて、其の土の廣大の莊嚴を見、見て之を説き、佛は此の世間の菩薩にして無上道の決を受けたるもの、乃至は佛樹の下に坐せる者と、彼の刹に生れたる菩薩との等しきことを述べられる。

佛般泥洹品第五

阿閼佛の願行と其の成就された刹と衆生とが示されたので、今度は佛の般泥洹に就いて述べ、佛の終りに臨んでは衆香手菩薩に成佛(金色蓮華と名く)記を授けられることを始めとして、世界の動搖、樹木の作禮、天・人の憂愁などを説き、彼の刹に生れん者は皆決を受け、不退轉地に住し、法行の者と菩薩とは、等しく阿

閼佛の願行を行じて、その刹に生れんと、阿閼佛般泥洹の狀態を述べ、この佛刹に往生せる者、その命過ぐるに當つて見る所、爲す所を擧げ、佛の滅後、かの佛所説の法、世に住すること百千劫にして、やがて隱滅せんことを云ひ、菩薩にして阿閼佛國に生れんには、阿閼菩薩として、昔行ひたる所を學ぶべきを、重ねて説き、善男子善女人は、かの阿閼の名を聞くに、その佛刹に生ずべき因となるを教へ、善男子善女人の念すべき三事を説き、此の善根に依つて、かの刹に生れ得べきを示し、阿閼佛刹の諸弟子の數多きを述べ、彼等は皆この徳號の法經を聞いては受持し、更に之を他方に廣説すべく、これを聞いて、かの國に生れんと願ふ者は、臨終に阿閼佛の爲に念ぜられる、阿閼佛は遠くに住するも、よく他方の衆生とその意を知り、之を護念したまふを説く。次でこの徳號の法經を聞いて受持する

千世界の惱める者は安きを得、或者は香を燒き、或者は金剛を執つて其の後に隨ひ、或者は天華を降らし、諸天は人を愛し、天と人とはかの授決の聲を聞き、國中の人民は一心に布施し、供養したることなどが説かれる。

次で、阿閼の初發意と、僧那を學せると、徳號とに就て説き、阿閼如來は無上道を成じて今阿毘闍提世界におはすが、その菩薩道を行じける時は、世々の人に頭目肌肉を與へ、世々に如來を見ては梵行を奉じ、一の佛刹より他の佛刹に渡り、佛の所説を聞いて、之を行すると共に人にも勸めて、兜率天に生れ、茲より降つて右脇より生じたること、またその説法を聞ける時、身に疲根を生ぜず、意に疲厭の想も無かつたことなどを縷述される。

阿閼佛刹善快品第二

既に阿閼佛の發願と、その行を成じて阿閼なる徳號を得られたことを述べたので、その佛國の莊嚴を説くのが今の品であつて、菩薩が薩芸若の慧を成ぜられた時は、三千界は大明と作り、人民は想念共に安く、穢濁の想を棄てて、此の光明を見、その菩提樹に往詣された時は、魔も障碍の念を起さず、諸天は供養したることなどを云ひ、是れ皆菩薩の行を行じたまへる時、所願を持したるが爲なりとし、進んで阿閼の佛刹を述べて、樹は七寶たり、三惡の道有ることなく、三病・三態・三毒無く、刹中の樹木は常に花實有り、取つて食すべく、食は念に隨つて至り、七寶の床、八徳の水を用ひ、善法の行を失せず、阿閼法王以外に王のあること無く、姪欲の事も無い、珠玉は直に樹より得べく、衣被も樹より取つて衣れば足り、この國の女の如き態、惱無く、商賣するものも無く、日月の光明も無く、阿閼佛の至

る所、自然に千葉の蓮華を生じ、若し化人を他に遣はさんと欲したまふに、彼は自然に生ずるを得しむることなどを述べる。

弟子學成品第三

次には阿閼佛説法の時、四果を得る者無數であり、かの刹の須流の者は往來することなく、四回の説法にて阿羅漢道を證するものは、むしろ懈怠の者であり、不還の者は往還せず、一來の者は天に生ぜず、阿羅漢は無餘涅槃に入り、八解脱を得ること、かの刹は忉利天にも過ぎたこと、かの佛の威神に依つて、その刹の人民は、諸天の宮殿を見、その刹に滿てる四輩弟子は、時至れば食自ら辨じ、戒律を説くの要なく、憍慢無く、善本を具し、一切の諸逆を離れて、戒の受授もなく、過精進と懈怠とも無く、佛説法の時、一心に聽き、虛心中に在る者は、神

佛說阿閼佛國經解題

この經には三譯あつて、今の阿閼佛國經は、後漢の建和元年に洛陽に於て、支婁迦讖の譯したものが、其の第一譯で、

茲に出したものが即ち是であり、第二譯は東晋の沙門支道根の阿閼佛刹諸菩薩學成

品三卷である。これは經と名づけずして、品を以て呼び、諸菩薩學成といふ品は、支讖譯の第四品と同名であるから、或は該品の別譯かとも考へられるが、卷を分

つこと三であるのと、この一經は大寶積經第六の不同如來會と同本である（開元錄十四）と注してあり、支讖譯本にも一名佛刹諸菩薩學成經（內典錄九）、或は阿閼佛刹諸菩薩學成經並に阿閼佛經（出三藏記二）などと、注してあるから、これは部分譯では無くて、全譯であつたと見ねばならない。第三譯は、大寶積經第六

會に存する、唐の菩提流支の譯にかゝるもので、初後兩譯は現存し、第二譯は早く既に失せてしまつたらしい。

經の内容は、阿閼菩薩が願と行とに依つて成佛し、其の佛刹は現に東方に存することを示したもので、大要は次の如くである。

發意受慧品第一

經は羅閱祇（王舍城）耆闍崛山の說法で、初に舍利弗が、過去の諸菩薩の發起した願行と僧那（弘誓）とを説かれんことを請ふので、佛は東方なる阿比羅提世界の大目如來の所で、一比丘が、薩芸若（一切智）の意を發し、瞋恚と二乗の意と、淫欲と睡眠と狐疑とを離れ、殺生と盜取と非梵行と妄言と悔恨とを捨し、罵詈・惡

口・愚癡・綺語・邪見を斷ぜんとする大弘誓を發し、瞋恚無きを以て名を阿閼と爲して、阿閼地に住せることを述べ、更に阿閼比丘が無上道を成ずるに至るまで、爲すべき所として擧げた所を詳にし、更に阿閼の成佛したる時に於ける阿閼佛とその國の状態——比丘比丘尼等の、罪ある者無く、佛刹を嚴淨ならしめ、夢中に精を失せず、母人に惡露無く——に就ての願を説き、菩薩有つて、無上道を成ぜんとすれば、阿閼の所行を學ぶべきことを述べ、阿閼の如く、身にかゝる大弘誓を實行したる者無きを説いて、大目如來はこの菩薩の爲に當來作佛して、阿閼如來となるべき記別を授けられた事や、この授記の折、三千世界が大明もて照らされ、六返震動し、一切の鬼神樹木が、菩薩に向つて禮を作した事などを物語り、進んで阿閼が、但に大目如來から記を受けたばかりでなく、不可稱説の功德あつて、三

勝鬘師子吼一乘大方便廣經終

へり。

【三二】生死…説く、外道・小乘・及び餘の大乗の人、如來藏に依らずして、生死有りとするに對す。既に藏に由つて生死有りとせば、藏は本際無始なれば、生死も亦本際不可知なるを説く。

【三三】太子の疏には以下を顛倒眞實章とす。

【三三】前には、生死も、如來藏によりて生ずることを説き、次に如來藏の本體は、生死を離るることを説く。

【三四】依云云、體無爲常住なれば、衆生所依の處となり、連持して斷ぜざらしめ、始終して成佛するを得しむるをいふ。異譯には不離解脫智藏といへり。

【三五】不離云云、如來藏の體これ無爲にして離るべからず、繫縛の法に非ざれば斷ずべからず、有爲に非ざれば脱すべからず、千變萬化にも其の體改まざれば不異なり。

【三六】心法の智、普寂は、六識の上にかかる厭欣等の心所とす。異譯には所知に作る。

【三七】前際云云、本有の義なり。本有なれば始起・修滅無し。

【三八】我云云、外道の觀を以て眞實とするものなり。

勝量師子吼一乘大方便廣經

【三二】身見、虛妄の法を執じて、我有り、我所有りとするをいふ。身見に墮せる衆生は、眞實に如來藏を解せず、凡夫・外道これなり。

【三三】顛倒、如來藏の常樂我淨に於て無常、苦、無我、不淨の想を起すをいふ。これ有るものを二乘とす。

【三四】空亂意、異譯は空見とす。空觀を習ふて眞解を亂すをいふ。初學大乘の人なりとす。

【三五】太子の疏には、以下を自性清淨章とす。

【三六】如來藏等、一切諸法は如來の自性を出でざるをいふ。法界藏とは、聖人の四念處等、この性を取つて境界とし、法界は正法を正する因なるに就て云ふ。法身藏とは、一切の聖人を以て法身の果德を得しむるに就いて云ひ、出世間上上藏とは、この佛性は一切世間の過失を離れて眞實不壞なるに就て云ひ、自性清淨藏とは、一切法の性に隨順するるときは正しく、この理に違する時は邪なるに就て云へるなり。

【三七】客塵、無始の無明を謂ふ。本性淨心に對して云ふ。

【三八】上煩惱、現起の煩惱。

【三六】不思議…境界、上智のみ能く知ることを示す。

【三七】剎那云云、前の句は淨有りて垢なく、後の句は垢有つて淨無きを示し、共に染の義を成せず。善心有る時は煩惱無く、煩惱有る時は善心無くして互に相觸れず。

【三八】然かも云云、上來は煩惱染心の義を求むるも不可得なり。而も衆生に於ては煩惱等有り、不染にして而も染なるを指す。

【三九】大成成就の菩薩、種性以上の菩薩なりと。

【四〇】隨信、信増上、隨順法智の三を菩薩の階級に配すること、諸説あり、一定せず。一説によれば、信増上を初二・三地に配し、隨信を其の方便として地前に配し、隨順法智を四・五・六地に配して、前二を信忍とし、後一を順忍とす。而して究竟を得るは、順忍の究竟にして第七地を指すと。異譯にはたゞ増上信者、隨順法智とのみ云へり。

【四一】根等、六根と六識と六境とを謂ふ。即ち十八界なり。

【四二】阿羅漢の眠、寢窟に一説を擧げて、阿羅漢は無明住地の煩惱なほ在るが故に眠と名くと云へり。

【四三】巧便、巧方便の略、この五種の觀、能く相を離るる故に巧方便の觀と名く。

【四四】大乘の道、八地以上の無生法忍を指す、七地以下の信・順二忍は大乘の因なり。

【四五】以下、太子の疏には如來眞子章とす。

【四六】毀傷を離れ、義に於て誘せざるをいふ、前の信忍の人、次に示す仰いで世尊を推す人なり。

【四七】大功徳を生ず、正道を出生するをいふ。前の順忍の人、次にいふ隨順法智の人。

【四八】大乘の道に入る、諸佛の果徳に入るをいふ。無生忍の人、次にいふ甚深法智の人。

【四九】太子の疏には、この章を設けず。

【五〇】諸の餘、上の三善人に對して、總じて惡人を擧ぐ。此理を以て伏すべきものなり。

【五一】非法、異譯に怨敵とす、多羅(Tha)樹名、高さ七八十尺、を計量に用ふ。

【五二】友稱王(Mitrayasas)勝量の夫にして、阿踰闍の國王。

【五三】祇洹林(Jethavana)舍衛國の祇洹精舍なり、前の給孤獨園に同じ、佛歸還し給ふなり。

【五四】橋尸迦(Kaustika)にして帝釋を謂ふ。

佛言はく、『此の經をば歎如來眞實第一義功德といふ、是くの如く受持せよ。不思議攝受正法といふ、是くの如く受持せよ。一切願攝大願といふ、是くの如く受持せよ。說不思議攝受正法といふ、是くの如く受持せよ。說入一乘といふ、是くの如く受持せよ。說無邊聖諦といふ、是くの如く受持せよ。說如來藏といふ、是くの如く受持せよ。說法身といふ、是くの如く受持せよ。說空義隱覆眞實といふ、是くの如く受持せよ。說一諦といふ、是くの如く受持せよ。說常住安隱一依といふ、是くの如く受持せよ。說自性清淨心隱覆といふ、是くの如く受持せよ。說勝鬘夫人師子吼といふ、是くの如く受持せよ。說如來眞子といふ、是くの如く受持せよ。說勝鬘夫人師子吼といふ、是くの如く受持せよ。』

『復次に橋戸迦、此の經の所說、斷一切疑決定義入一乘道といふ。橋戸迦、今此の說勝鬘夫人師子吼經を以て、汝に付囑す、乃至法の住には、受持讀誦し、廣く分別して説くべし』と。
 帝釋、佛に白して言さく、『善哉、世尊、尊教を頂受しまつる』と。
 時に天帝釋、長老阿難、及び諸の大會の天人、阿修羅、乾闥婆等、佛の所說を聞いて、歡喜奉行したりき。

- 異譯に、過二諸分別及下劣見、由三諸愚夫、妄生三異想、顛倒執着、謂斷謂常。
- 【九九】淨智、凡夫の二見及顛倒の垢に對して淨智といふ。
- 【一〇〇】一切智の境界、一諦の理。
- 【一〇一】佛口より生ず、佛口の教に從て信を生ずる故に。
- 【一〇二】餘財、或は大志なりと云ひ、或は法寶なりとし、又少分の解といふ。
- 【一〇三】太子の疏には以下を一依章とす。
- 【一〇四】淨智、上の二乘無學果の智なり。
- 【一〇五】智波羅蜜、二乘は無漏智を満足して、四智、究竟するをいふ。
- 【一〇六】滅諦、無作の滅諦。
- 【一〇七】況んや……をや、異譯に況苦滅諦、是四入流智之所行とあり。即ち依を入流に作る。次下の四依、一依亦同じ。
- 【一〇八】四依智、四諦に依つて生ずる智にして、見思を斷ずる因中行の智なり。二乘の果位なほその境界に非ず、況んや因中の智、之を知ることをや。
- 【一〇九】三乘の初業、二乘がその涅槃を觀したる所を指す。先に一乘章に於て羅漢辟支佛が、その所得の地に於て、大乘究竟の法に愚ならず、當に無上正眞道を得べきことを云へるを謂ふ。
- 【一一〇】四依、二乘所依の四諦の謂。是に對して、無作の滅諦は眞の所依たるを一依と云

爾の時、世尊、勝光明を放ち、普く大衆を照し、身、虚空に昇ること高さ七、多羅樹、足虚空を歩みて、舍衛國に還りたまへり。

時に勝鬘夫人、諸の眷屬と、合掌して佛に向ひまつり、觀るに厭足無く、目暫くも捨てず。眼の境を過ぎ已りて、踊躍、歡喜し、各各に如來の功德を稱歎しまつり、具足して佛を念じまつり、還りて城中に入り、友稱王に向ひて大乘を稱嘆す。城中の女人の、七歳已上なるをば、化するに大乘を以てし、友稱大王も、亦大乘を以て、諸の男子の七歳已上のものを化し、國を擧げて人民、皆大乘に向ひぬ。

爾の時、世尊、祇洹林に入り、長老阿難に告げ、及び天帝釋を念じたまふ。時に應じて帝釋、諸の眷屬と、忽然として至り、佛前に住す。

爾の時、世尊、天帝釋及び長老阿難に向ひて、廣く此の經を説き、説き已りて、帝釋に告げて言はく、『汝、當に此の經を受持し、讀誦すべし。』橋戸迦、善男子善女人有りて、恒沙の劫に於て、菩提の行を修し、六波羅蜜を行ぜん。若し復、善男子善女人ありて、聽受し讀誦し、乃至經卷を執持せんに、福彼れより多からん、何に況んや廣く人の爲に説くをや。是の故に、橋戸迦、當に此の經を讀誦して、三十三天の爲に、分別して廣説すべし』と。

復阿難に告げたまはく、『汝も亦受持し讀誦して、四衆のために廣く説くべし。』

時に天帝釋、佛に白して言さく、『世尊、當に何んが此の經を名づけ、云何んが奉持すべき』と。

佛、帝釋に告げたまはく、『此の經は、無量無邊の功德を成就せり、一切の聲聞緣覺は、究竟して、觀察し知見すること能はず。橋戸迦、當に知るべし、此の經は、甚深微妙にして大功徳聚なり。今當に汝が爲に、略して其の名を説かん。諦に聽き、諦に聽け、善く之を思念せよ』と。

時に天帝釋、及び長老阿難、佛に白して言さく、『善い哉、世尊、唯然り、教を受けん。』

故に如來藏を照破するの智（即ち如來藏智）は、即ち法身を開顯するの智（即ち如來空智）たり。空智は法身を照するの智をいふ。能照の智、相を離るるが故なり。

【一八三】見ざる等、解せざるの謂。得ざるとは證せざるの謂。

【一八四】太子疏には、以下を空義隱覆眞實章と云へり。

【一八五】二種の如來藏空智、空如來藏と、不空如來藏との二種。この二藏を知るの智は、體無相なる故に空智といふ。

空とは妄法が虛誑中空にして眞實の如來藏無きを指し、不空とは恒沙の佛法、體有つて空「からざる」を謂ふ。

【一八六】空如來藏……煩惱藏なり。異譯に所謂離相不解智一切煩惱に作る。

【一八九】四不顛倒、如來藏の性は常・樂・我・淨なるをいふ。この常等の四境に於て、無常等の倒を起すを轉といふ。

【一八八】本見ざる云云、如來藏を見ず、得ざるなり。

【一八九】四聖諦の中、苦集道の三は無常有爲なり、唯一苦滅諦のみ、常住無爲なり。一滅諦とは歸する所、如來藏なりと示す。

【一九〇】虛妄、異譯に破壞に作る。

【一九一】諦、眞諦の謂。

たり。法智に隨順するとは、根と意解と境界とを、觀察し、施設し、業報を觀察し、阿羅漢の眼を觀察し、心自在の樂、禪の樂を觀察し、阿羅漢と辟支佛と、大力の菩薩との、聖自在通とを觀察するなり。此の五種の巧便の觀、成就して、我が滅後の未來世の中に於て、若し我が弟子の、隨信、信増上のもの、明信に依りて法智に隨順するものは、自性清淨心、彼の煩惱の爲に染汚せられて、而も究竟することを得ん。是の究竟は、大乘の道に入るの因なり。如來を信ずるものは、是くの如きの大利益ありて、深義を謗ぜず」と。

爾の時、勝鬘、佛に白して言さく、「更に餘の大利益あり、我れ當に佛の威神を承けて、復斯の義を説かんと。」佛、言はく、「便ち説け」と。

勝鬘、佛に白して言さく、「三種の善男子善女人、甚深の義に於て、自の毀傷を離れ、大功德を生じ、大乘の道に入る。何等をか三となすとならば、謂はく若しは善男子善女人の、自ら甚深の法智を成就すると、若しは善男子善女人の、隨順の法智を成就すると、若しは善男子善女人の、諸の深法に於て、自ら了知せずして、仰いで世尊に推しまつり、我が境界に非ず、唯佛の所知なりといふ、是を善男子善女人、仰いで如來に推しまつると名づく。此の諸の善男子善女人を除き已る。

勝鬘章 第十五

諸の餘の衆生の、諸の深法に於て、妄説に堅著し、正法に違背し、諸の外道の腐敗の種子を習ふものは、當に王力及び、天龍鬼神の力を以て、之を調伏すべし」と。

爾の時、勝鬘、諸の眷屬と、佛足を頂禮しまつる。佛言はく、「善い哉、善い哉、勝鬘、甚深の法に於て、方便守護して、非法を降伏すること、善く其の宜しきを得たり。汝已に百千億の佛に親近して、能く此の義を説けり。」と。

是に従つて、皆受と云ふと。

【七】下中上の法、大乘と二乗とを差別したるの法。

【七】涅槃、大般涅槃。

【七】未來の苦を知る、佛は現在の習を斷盡すれば未來の報起らざるをいふ。

【七】一切の煩惱、無明住地なり。上煩惱とは恒沙及び四住地。

【七】意生身、今は初地以上の變易の身。

【七】非壞の法、二乗の得るは壞法の滅なり、今は妙有常住たるなり。

【七】無作、生の因によつて造作せられざるなり。

【七】無起、本無今有に非ず。

【七】太子の疏は。以下を法身章とす。

【八】不離等、法身が恒沙の煩惱と相纏繞して、一にして二、二にして一なる状態を指す。異譯は具解脫智に作る。

【八】空義云云、空・苦・無常、無我等の小乘の教義を指す、從來小乘の空義等を説いて、乘生本具の如來藏を隱覆して説かざりし理由を明すを此の章とす。

【八】如來藏智云云、異譯には如來藏、即是如來空性智とあり。煩惱に纏繞せられて衆生の中にあるを如來藏といひ、是が開顯したる法身とす。

此の六識及び心法の智に於て、此の七法は、利那も住せず、衆苦を種えず、苦を厭ひ、涅槃を樂求することを得ず。

『世尊、如來藏とは、前際無く、起らず、滅せず、法、諸の苦を種え、苦を厭ひ、涅槃を樂求することを得。世尊、如來藏は、我にあらず、衆生に非ず、命に非ず、人に非ず。如來藏とは、一身に見に墮する衆生と、顛倒の衆生と、空亂意の衆生とは、其の境界に非ず。

『世尊、如來藏とは、是れ法界藏なり、法身藏なり、出世間上上藏なり、自性清淨藏なり。此の性清淨の如來藏、而かも客塵煩惱と上煩惱とに染せらる、不思議の如來の境界なり。何を以ての故にとならば、利那の善心は煩惱の所染に非ず。利那の不善心も亦煩惱の所染にあらず。煩惱は心に觸れず、心は煩惱に觸れず。云何ぞ觸れざるに、法而かも能く心を染することを得んや。世尊、然かも煩惱あり、煩惱の心を染すること有り。自性清淨心にして染あること、了知すべきこと難し。唯佛世尊のみ、實眼と實智とをもて、法の根本と爲り、通達の法と爲り、正法の依と爲り、實の如く知見したまふ』と。

勝鬘夫人、是の難解の法を説きて、佛に問ひまつる時、佛即ち隨喜したまひ、『是くの如く、是くの如し、自性清淨の心にして、而も染汚有ること、了知すべきこと難し。二法ありて了知すべきこと難し。謂はく自性清淨心は了知すべきこと難く、彼の心、煩惱の爲に染せらるること、亦了知すべきこと難し。是くの如きの二法、汝及び大法を成就せる菩薩摩訶薩、乃ち能く聽受す。諸餘の聲聞は唯佛語を信す。

如來眞子章 第十四

『若し我が弟子、隨信、信増上の者、明信に依り已りて、法智に隨順するものは、而も究竟を得

【六】出づる、眞如の煩惱中に在るを如來藏といひ、煩惱を出でたるを法身とす。

【六二】方便の説、如來藏・法身の權と實とを説くをいふ。

【六三】二の聖諦、諦の權・實をいふ。次の作と無作との八諦を指す。作・無作は有爲・無爲と云はん同じ。有爲の相の上に四諦を見るを作の四諦をいひ、無爲の一道的上に、自然任運の四諦を觀するを無作の四諦といふ。この二を又有量と無量とを以ても分つ。

【六四】有量、無量に對す。異譯には不圓滿に作る。一切を究竟して知り盡すに非ず。

【六五】他、外界の事相を指す。「他に因つて」は異譯に「由他護」とあり。

【六六】是の故に以下、異譯には是故不知、有爲無爲、及於涅槃と云へり。

【六七】有爲と無爲、分段と變易とを指す。

【六八】有餘と無餘、有餘不盡なると、復餘果無きとなり。即ち小乘の涅槃と大乘の涅槃と云はんが如し。

【六九】自力云云、自己本具の理の上に觀するなり。是は一念に一切を具すれば無量なり。

【七〇】受、實窟によれば、變易の苦は、これ受性なるべし、

と名づく。何を以ての故にとならば、如來の法身はつしんは、是れ常波羅蜜、樂波羅蜜、我波羅蜜、淨波羅蜜じやうはらみなり。佛の法身はつしんに於て、此の見を作すものは、是れを正見しやうけんと名づく。正見しやうけんの者は、是れ佛の眞子まことなり、佛口より生じ、正法より生じ、法化はふけより生じて、法の餘財ほのあまひを得るなり。

【世尊、淨智じやうちとは、一切阿羅漢、辟支佛びやくしはつの智波羅蜜ちはらみなり、此の淨智じやうちとは、淨智じやうちといふと雖も、彼の滅諦めつたいに於ては、なほ境界けいがいに非ず、況んや四依智しゆいちをや。何を以ての故にとならば、三乘さんじやうの初業しゆじやうは、法に愚ならず、彼の義ぎに於て當覺たうかく・當得たうとくなり。

【彼れが爲の故に、世尊せそん 四依しゆいを説きたまふ。世尊せそん、此の四依しゆいとは、是れ世間の法はふなり。世尊せそん、一依いちいとは、一切の依いの上うへなり、出世間しゆつけん上じやうじやう上の第一義だいいちぎの依いなり、所謂滅諦めつたいなり。

自性清淨藏 第十三

【世尊せそん、生死しじゆとは、如來藏にょらいざうに依る、如來藏にょらいざうを以ての故に、本際ほんさい不可知ふかちと説く。世尊せそん、如來藏にょらいざうあるが故に生死しじゆを説く、是れを善説ぜんたうと名づく。世尊せそん、生死しじゆとは諸受根しよじゆの没ぼつして、次第じだいに根こんの起ることを受けざる、是を生死しじゆと名づく。

【世尊せそん、生死しじゆとは、此の二法にほふは、是れ如來藏にょらいざうなり、世間の言説ごんたうの故に、死し有り生しやう有り。死しとは謂はく根こんの壞くわいするなり、生しやうとは新しんに諸根しよこんの起るなり。如來藏にょらいざうに、生しやう有り死し有るには非ず、如來藏にょらいざうは有爲うゐの相さうを離る、如來藏にょらいざうは常住じやうじゆにして不變ふへんなり。是の故に如來藏にょらいざうは、是れ依いたり、是れ持ぢたり、是れ建立たうりたり。

【世尊せそん、不離ふり・不斷ふたん・不脱ふだつ・不異ふい・不思議ふしぎの佛法はふふなり。世尊せそん、斷だんと脱だつと異いとの外の、有爲うゐ法の依い・持ぢ・建立たうりたるもの、是れ如來藏にょらいざうなり。

【世尊せそん、若し如來藏にょらいざう無くんば、苦くを厭いとひ、涅槃ねはんを樂求らくきゆすることを得ず。何を以ての故にとならば、

善了ぜんりやうこ知こち此四法義しほふと云へり。
【一】出世間しゆつけん上じやうじやう上じやうじやう智ち、二乘にじやうが有作うさくを觀くわんするた對し、無作むさくを觀くわんする佛智はつちをいふ。
【二】漸ぜん至し、四智しちになほ未到みだう達たうの餘地じよち有る意。
【三】善ぜん、四諦しだいを謂ふ。四諦しだいに於て、なほ未盡みじんの餘地じよち有るを四勝しじやうの漸ぜん至しと云ふ。
【四】金剛こんかう喻よ、佛智はつちの堅固けんこなるを云ふ。
【五】以下いげに小乘しよじやうの四聖諦しじやうたいは有量うりやう有作うさくの聖諦じやうたいなり、大乘だいじやうの四聖諦しじやうたいは無量むりやう無作むさくなり、無量むりやう無作むさくの聖諦じやうたいの體たいは、衆生しゆじやう本具ほんぐの如來藏にょらいざうなりと開顯かいけんす。
【六】如來藏にょらいざう、Tathagatahan 佛性論はつじやうろんに三義さんぎを以て説けり。一、一切染淨しつじやうの法はふ、悉しつく如來の性じやう（即ち眞如しんじゆ）に攝しやくせらるれば如來藏にょらいざうといひ、如來一切法にょらいしつじやうを藏ざうするを示す。二、眞如しんじゆが煩惱ぼんなんの中に在る時は、煩惱ぼんなんの爲に如來の性德じやうとくを隱覆いんぷくして顯現けんげんせしめざれば如來藏にょらいざうと名く、即ち衆生しゆじやうの煩惱ぼんなん、如來を藏ざうするなり。三、眞如しんじゆは煩惱ぼんなん中に在つて、如來一切の果地くわちの功德くわんとくを含攝くわんしやくすれば如來藏にょらいざうと名く。
【七】如來藏にょらいざう處ちよに聖諦じやうたいの義ぎを説く、如來藏にょらいざうは不染ふせんにして染せんなるを、苦く・集諦じふたいと爲し、非淨ひじやうにして淨じやうなるを滅めつ・道諦だうたいと爲す。

【九二】は諦に非ず・常に非ず・依に非ず。是の故に苦諦・集諦・道諦は、第一義諦に非ず・常に非ず・依に非ず。

一 依章 第十一

【一】の苦滅諦は有爲の相を離る、有爲の相を離るる者は、是れ常なり、常なるものは虚妄の法に非ず、虚妄の法に非ざるものは、是れ諦なり、是れ常なり、是れ依なり。是の故に滅諦は是れ第一義なり。」

顛倒眞實章 第十二

【不思議、是れ滅諦にして、一切衆生の心識の所縁に過ぎたり、亦一切の阿羅漢、辟支佛の智慧の境界にも非ず。譬へば生育の、衆色を見ず、七日の嬰兒の、日輪を見ざるが如し。苦滅も亦復斯くの如く、一切凡夫心識の所縁にあらず、亦二乗の智慧の境界にもあらず。

【凡夫の識は、二見顛倒し、一切阿羅漢、辟支佛智は、即ち是れ清淨なり。邊見とは、凡夫、五受陰に於て、我見妄想計著して二見を生ず、是を邊見と名づく。所謂常見・斷見なり。諸行は無常なりと見るは、是れ斷見にして正見に非ず、涅槃は常なりと見るは、是れ常見にして正見に非ず、妄想の故に、是くの如きの見を作すなり。

【身の諸根に於て、分別思惟して、現法の壞するを見、相續あるに於ては、見ずして斷見を起す、妄想の見なるが故なり。心の相續に於て、愚闇にして解せず知らず、刹那の間の意識の境界を知らずして常見を起す、妄想の見なるが故なり。此の妄想の見は、彼の義に於て、若しは過ぎ、若しは及ばずして、異想の分別を作す、若しは斷、若しは常なり。顛倒の衆生、五受陰に於て、無常に常想有り、苦に樂想有り、無我に我想有り、不淨に淨想有り。

【一切の阿羅漢、辟支佛の淨智とは、一切智の境界、及び如來の法身に於て、本見ざる所なり。或は衆生あり、佛語を信するが故に、常想・樂想・我想・淨想を起す。顛倒の見には非ず、是れを正見

竟に非ず。次下に云ふ「一乗の法」と區別すべし。

【望】以下一體三寶これ究竟なるを明す。

【異】此の二の歸依……第一義とは、異譯に、由法津潤、信入歸依、如來者、非法津潤、信入歸依、言如來者、是眞實依、此二歸依、以眞實義とあり。

【四】第一義云云、「法・僧の二歸依は是れ果德にして第一義なり、この第一義に歸依するもの」の謂。

【四】異の云云、法・僧は如來に異ならず、如來と三寶と即一なるを顯はす。異譯には如來不異此二歸依とあり。

【四】四無所畏、佛德を四方面より云へるもの、能持無所畏、知根無所畏、決疑無所畏、答報無所畏の四〇。

【五】一智、一有作諦智をいふ。無作の諦智に對す。蓋し聖智にも有作と無作とを分ち、智にもこの二を分つて、二乘と佛とを分つ。

【五】住地、四住地の惑なり。此の煩惱を斷する智を四斷智とす。

【五】功德作證、煩惱を斷じて得たる無爲の功德なり。【五】四聖諦を指す。已上、異譯には、非ず一智、斷諸住地、亦非一智、證四無所畏、亦非一法、能

を以ての故に。如來・應・等正覺は、無作の四聖諦の義に於て、事實竟し給ふ。一切の如來・應・等正覺は、一切未來の苦を知り、一切の煩惱、上煩惱に攝受せらるゝ、一切の集を斷じ、一切の意生身の陰を滅し、一切の苦滅を作證したまふを以てなり。世尊、非壞の法なるが故に、名けて苦滅となす。言ふ所の苦滅とは、無始、無作、無起と名づく。無盡なり、離盡なれば常住なり、自性清淨にして、一切の煩惱藏を離れたり。

『世尊、恒沙に過ぎたる不離・不脫・不異・不思議佛法の成就するを、如來の法身と名づく。世尊、是くの如きの如來法身は、煩惱藏を離れざるを如來藏と名づく。』

空義隱覆眞實章 第九

『世尊、如來藏智は、是れ如來空智なり。世尊、如來藏とは、一切の阿羅漢、辟支佛、大力の菩薩の、本見ざるところ、本得ざる所なり。』

『世尊、二種の如來藏空智あり。世尊、空如來藏は、若しは離、若しは脫、若しは異、一切煩惱藏なり。世尊、不空如來藏は、恒沙に過ぐる、不離・不脫・不異・不思議の佛法なり。』

『世尊、此の二空智に於て、諸大聲聞は、能く如來を信ず、一切の阿羅漢、辟支佛の空智は、四不顛倒の境界に於て轉ず。是の故に、一切の阿羅漢、辟支佛は、本見ざる所、本得ざる所なり。一切の苦滅は、唯佛のみ得證したまふ、一切の煩惱藏を壞し、一切の滅苦の道を修したまふ。』

一諦章 第十

『世尊、此の四聖諦は、三は是れ無常、一は是れ常なり。何を以ての故にとならば、三諦は有爲の相に入る。有爲の相に入る者は、是れ無常なり、無常なるものは、是れ虛妄の法なり、虛妄の法と

【一三】一切爾始……由らず、異譯には於一切法無碍觀察と云へり。

【一四】第一云云、二乘に取つて第一なり。佛に對すれば實は究竟せるものに非ず。異譯にはこの句を「觀ぜず」と否定の語に作る。

【一五】彼れ先の……由らず、異譯には彼等於三未證地、不遇ノ法故、能自解了、とあり。

【一六】法、大乘究竟の法。
【一七】阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksaṃbodhi) は譯して無上正眞道と云ふ、無上は絶對なり、正眞は邪偽に對す、道は本體に名く。

【一八】こゝに二乘を會して一乘に入るの義趣を見るべし。

【一九】無邊不斷、異譯相當文に即離相續とあり。

【二〇】以下二段、如來即ち一乘と云ひ、如來に歸するは即ち三寶に歸する所以なるを説く、之を同體三寶の説とす。始に別體の三寶は究竟に非ざるを示す。

【二一】未度、異譯は無護に作る。

【二二】法云云、寶窟によれば、法とは昔の教法、即ち三乘の法なり。次句の一乘道とは佛果なり、三乘の法は、この一乘の佛果の因たるが故に道といふ。故に「一乘の道」は究

一切世間の、信する能はざる所なり。何を以ての故にとならば、此の甚深なる如來の藏を説けばなり。^{一五九}如來藏とは、是れ如來の境界なり、一切の聲聞・緣覺の所知に非ず。^{一六〇}如來藏處に、聖諦の義を説く、如來藏處は、甚深なるが故に、聖諦も亦、甚深なりと説く。微細にして知り難く、思量の境界に非ず、是れ知者の所知にして、一切世間の信する能はざる所なり。

法身章 第八

『若し無量の煩惱藏所纏の如來藏に於て、疑惑せざるものは、無量の煩惱藏を、出づる法身に於て、亦疑惑無し。如來藏と、如來の法身との、不思議の佛の境界を説き、及び方便の説とに於て、心に決定を得たる者、此れ則ち、二の聖諦の義を説くことを信解す。』

『是くの如く、知り難く解し難きは、謂はく、二の聖諦の義を説けばなり。何等をか、二の聖諦の義を説くと爲すとならば、謂はく、作の聖諦の義を説くと、無作の聖諦の義を説くとなり。』

『作の聖諦の義を説くととは、是れ、有量の四聖諦の義を説くなり。何を以ての故にとならば、他に因りて、能く一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修するには非ず。是の故に世尊、有爲の生死と無爲の生死とあり、涅槃も亦是くの如く、有餘と及び無餘となり。』

『無作の聖諦の義を説くととは、無量の四聖諦の義を説くなり。何を以ての故にとならば、能く自力を以て一切の受苦を知り、一切の受集を斷じ、一切の受滅を證し、一切の受滅の道を修す。是の如きの八聖諦をもて、如來は四聖諦を説きたまふ。』

『是の如きの無作の四聖諦の義は、唯如來・應・等正覺のみ、事實竟したまへり。阿羅漢・辟支佛は、事實竟するに非ず。何を以ての故にとならば、下中上の法は、涅槃を得るに非ざればなり。何

總名なり。上とは覆ひ障ゆるの意、止は定、觀は慧の根本なり。禪は八禪ともいひ、或は四禪とも解す。正受(異譯は薩三摩鉢底に作る)は滅盡定ともいひ、或は三三昧等ともいふ。方便(異譯は加行に作る)と智は慧の果なり。果は涅槃、得(異譯は證に作る)は菩提。力と無畏とは共に菩提の一方面を指すのみ。【二九】一向に記説す、二乘は下に對すれば得と云ひ得るも、上に對すれば不得なり、之を兩向説といふ。如來は唯下に對して、得と説くのみなれば一向に記説すといふ。【三〇】二種、佛の不受後有智と二乘の夫となり。【三一】四魔とは、天魔、煩惱魔、陰魔、死魔なり、天魔と煩惱魔とは惡果を招感せしむる因緣、陰魔と死魔とは、之によりて受けたる惡結果なり。陰魔の陰は五陰にして、即ち現に受け得たる心身を指す。【三二】不思議の法身、眞如身なり。【三三】爾始地、智を生ずる境界をいふ。註十五參照。この句、異譯には於所知地・得法自在……不見更有二所證之地といふ。【三四】十力、佛所具の十種の智力。

説なり。

「若し如來、彼の所欲に隨ひ、方便をもて説きたまへることは、即ち是れ大乘なり、二乗あることなし。二乗は一乗に入る、一乗とは即ち是れ第一義乘なり。」

無邊聖諦章 第六

世尊、聲聞・緣覺の初めて聖諦を觀するや、一智を以て、諸の住地を斷ず、一智と、四斷智と、功德作證とを以ても、亦善く此の四法の義を知る。世尊、出世間の上上智有ること無し、四智の漸至と、及び四縁の漸至となり。無漸至の法は、是れ出世間の上上智なり。世尊、金剛喩とは、是れ第一義智なり。

「世尊、聲聞・緣覺の、無明住地を斷ぜざる、初めの聖諦智は、是れ第一義智に非ず。世尊、無二の聖諦智を以て、諸の住地を斷ず。世尊、如來・應・等正覺は、一切の聲聞・緣覺の境界に非ず、不思議空智をもて、一切の煩惱藏を斷ず。世尊、若し一切の煩惱藏を壊せば、究竟の智なり、是れを第一義智と名づく。初めの聖諦智は、究竟智に非ず、阿耨多羅三藐三菩提に向する智なり。」
「世尊、聖の義とは、一切の聲聞・緣覺に非ず、聲聞・緣覺は、有量の功德を成就し、聲聞・緣覺は、少分の功德を成就するが故に、之を名けて聖となす。聖諦とは、聲聞・緣覺の諦に非ず、亦聲聞・緣覺の功德にも非ず。世尊、此の諦は、如來・應・等正覺、初め始めて覺知し、然る後に、無明蔽藏の世間の爲に、開現し、演説したまふところなり。是の故に聖諦とは名づく。」

如來藏章 第七

聖諦とは、甚深の義を説き、微細にして知り難し、思量の境界に非ず。是れ智者の所知にして、

【一七】身の生、分段の生。
 【一八】縁となる云云、無明は獨り意生身に對して縁となるのみならず、身の生に對しても縁となることあるをいふ。
 【一九】初句は三地三種の身に對して縁となることを云ひ、次句は身生に對しても縁となることをいふ。
 【二〇】無漏盡きざる、二乗の無漏は無明を盡す能はざるを云ふ。異譯には於三漏盡力に作る。
 【二一】無漏……住地なり、異譯には世尊言漏盡之增語とあり。
 【二二】最後身、最後の生に於て、未だ成佛せざる菩薩をいふ。
 【二三】向ふ、所謂「向」にして「果」に非ず。
 【二四】五蘊壞、分段の世間。
 【二五】無常壞、變易の世間、病とは生滅の患。
 【二六】無覆護、佛以外に覆護する者無き分段世間。
 【二七】無依、佛の外依るべき無き變易の世間。
 【二八】法に優劣無き、寶窟には、如來は法身・般若・解脱の三事平等なるを示すといふ。
 【二九】異譯は於三語法中、見高下者不證涅槃と云へり。
 【三〇】上の煩惱、これ煩惱の

亦自ら有餘の地を得て、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を得べきを知る。

『何を以ての故にか、聲聞・緣覺・乘は、皆大乘に入るとならば、大乘とは即ち是れ佛乘なり、是の故に三乘は、即ち是れ一乘なり。一乘を得るものは、阿耨多羅三藐三菩提を得、阿耨多羅三藐三菩提とは、即ち是れ涅槃界なり、涅槃界とは即ち是れ如來の法身なり、究竟の法身を得るとは、則ち究竟の一乘なり。異の如來なく、異の法身なし、如來は即ち是れ法身なり。究竟法身を得るとは、則ち究竟一乘なり、究竟とは即ち是れ無邊不斷なり。』

『世尊、如來は限齊の時有ること無くして住す、如來・應・等正覺は、後際と等しく住す。如來は限齊無ければ、大悲も亦、限齊無くして、世間を安慰す。無限の大悲、無限に世間を安慰す。是の説をなすもの、是を善く如來を説くとは名づく。若しは復説いて、無盡の法なり、常住の法なり、一切世間の所歸依なりと言はゞ、亦善く如來を説くと名づく。是の故に未度の世間、無依の世間に、後際と等しく、無盡の歸依を作さん。常住の歸依とは、謂はく如來の應・等・正覺なり。法とは、即ち是れ一乘の道を説くなり、僧とは是れ三乘衆なり。此の二の歸依は究竟の歸依にあらず、少分の歸依と名づく。何を以ての故にとならば、一乘道の法は、能く究竟法身を得ると説いて、上に於て更に一乘の法を説くこと無ければなり。三乘の衆とは、恐怖ありて如來に歸依し、出でんと求め、修學して阿耨多羅三藐三菩提に向す、是の故に二依は究竟の依にあらず、是れ有限依なり。』

『若し衆生ありて、如來に調伏せられ、如來に歸依し、法の津澤を得、信樂の心を生じて、法・僧に歸依する、是の二の歸依は、此の二の歸依に非ず、是れ如來に歸依するなり。第一義に歸依するは、是れ如來に歸依するなり。此の二の歸依と、第一義とは、是れ究竟して、如來に歸依するなり。何を以ての故にとならば、異の如來なく、異の二無ければなり。如來に歸依するは、即ち三の歸依なり。何を以ての故にとならば、一乘の道を説きたまへばなり。如來 四無畏成就師子吼の

要住地とす。

【〇七】起煩惱、此の四住地より起る見思の現行を云ふ。起は初起をいふ、心王と心所と相應じて、起るに初あり。刹那心は心王にして、刹那相應は心所なり。之に反して無明は初めなし、故に「心不相應にして無始なり」といふ。

【〇八】一切の上の煩惱、四住の起す所の煩惱は、麤強なれば上といふ。又諸佛の上法を覆ふが故に上といふ。

【〇九】數、四住地の煩惱の前三を指す、これ第四の有愛の品數なればなり。

【一〇】取、寶窟には三説を擧ぐ、一に愛の別稱、二に取支三に四取の義なりと。

【一一】漏、煩惱の異名。

【一二】三有は欲界、色界、無色界の三界なり。

【一三】無漏業云、三界の内(有漏に對するが故に、三界の外なるを、無漏と名くるなり。

【一四】意生身、Manomaya、衆生濟度の爲、意の如く受生し得る身。

【一五】此の三地、阿羅漢等の此の世間の三乘地。

【一六】彼の三種、三乘變易の三種の果、無漏業を因として生ずる故に、次に無漏業生と云ふ。

得上の煩惱、力上の煩惱、無畏上の煩惱を生ず。是の如く恒沙等に過ぎたる上の煩惱は、如來菩提智の所斷なり。一切皆、無明住地に依りて建立する所にして、一切の上の煩惱の起るは、皆無明住地を因とし、無明住地を縁とするなり。

『世尊、此の起煩惱に於て、刹那心と刹那と相應す。世尊、心の不相應なるは、無始の無明住地なり。世尊、若し復、恒沙に過ぎたる、如來菩提智の、應に斷すべき所の法は、一切皆是れ、無明住地に持せられ、建立する所なり。譬へば、一切の種子は皆地によりて生じ、建立し、増長し、若し地、壞すれば、彼も亦隨ひて壞するが如く、是くの如く、恒沙等に過ぎたる、如來菩提智の、應に斷すべき所の法は、一切皆、無明住地に依りて生じ、建立し、増長す。若し無明住地斷すれば、恒沙等に過ぎたる、如來菩提智の、應に斷すべき所の法も、皆亦隨ひて斷す。

『是くの如く、一切の煩惱、上の煩惱を斷すれば、恒沙等に過ぎたる、如來所得の一切の諸法は、通達無礙なり。一切知見は、一切の過惡を離れ、一切の功德を得、法王、法主にして、自在を得、一切法自在の地に登り、如來・應・等正覺として師子吼す。『我が生已に盡き、梵行已に立し、所作已に辨じ、後有を受けず。是の故に世尊、師子吼を以て、了義により、一向に記説したまふ。』

『世尊、不受後有智に、二種あり、謂はく、如來は、無上の調御を以て、四魔を降伏し、一切世間を出でて、一切衆生の、瞻仰する所と爲りたまふ。不思議の法身を得て、一切爾焰地に於て、無礙法と自在とを得、上に於て更に所作無く、所得無き地を得、十力勇猛にして、第一無上無畏の地に昇り、一切爾焰と無礙智とをもて觀じて他に由らず、不受後有智をもて師子吼したまふ。

『世尊、阿羅漢、辟支佛は、生死の畏を度り、次第に解脱の樂を得んに、是の念を作さん、『我れ生死の恐怖を離れ、生死の苦を受けず』と。世尊、阿羅漢、辟支佛の、觀察する時、不受後有を得て、第一蘇息處の涅槃地を觀ず。世尊、彼れ先の所得の地にして、法に愚ならず、他に由らずして、

長短あり、故に分段といふ。二乘は三界を超越し、分段を出で、以て寂滅に歸り、無生界を得たりとなす。而かも三界の外になほ受生の所あり、こゝにて一種の生死を受く、之を不思議變易生死といふ。故に二乘は、未だ眞に生死を斷盡したるものにはあらず。【〇三】大力菩薩、過去の業により、繫縛せられて生死を受けず、自己の意により、自在を受生するを大力といひ、其の受生の身を意生身といふ。これまた變易生死なり。但し菩薩、分段を出で、變易を受くる位に就いては種種の説あり。【〇四】乃至無上菩提を究竟す佛へ無上菩提を究竟すに至るまでの因位の菩薩は皆生起なり。即ち菩薩最高の位を命剛心の菩薩といひ、此の究竟菩薩、なほ變易生死を受くるをいふ。【〇五】七種の學人、三果・四向をいふ。【〇六】住地の四種、一は見惑(智識上の誤解に基く惑)なり之を見一切處住地とす。二に思惑(感情上の惑)、見惑を斷じたる後、更に思惟を加へて漸く斷ずる惑なり。此の思惑の中、欲界にて斷せらるるを欲愛住地とし、色界にあるを色愛住地、無色界にあるを有

地を離るゝに異り、佛地の所斷なり、佛菩提智の所斷なり。何を以ての故にとならば、阿羅漢・辟支佛は、四種の住地を斷ずれども、無漏盡きざるを以て、自在力を得ず、亦證を作さず。無漏盡きざるは、即ち是れ無明住地なり。

『世尊、阿羅漢と、辟支佛と、最後身の菩薩とは、無明住地の爲に、覆障せらるゝが故に、彼彼の法に於て、不知不覺なり。知見せざるを以ての故に、應に斷すべき所を斷ぜず、究竟せず。斷ぜざるを以ての故に、有餘過の解脫と名づく、一切過を離れたる解脫にはあらず。有餘清淨と名づく、一切清淨なるには非ず。有餘の功德を成就すと名づく、一切の功德には非ず。有餘の解脫と、有餘の清淨と、有餘の功德とを成就するを以ての故に、有餘の苦を知り、有餘の集を斷じ、有餘の滅を證し、有餘の道を修す、是を少分の涅槃を得とは名づく。』

『少分の涅槃を得たる者は、涅槃界に向ふと名づく。若し一切の苦を知り、一切の集を斷じ、一切の滅を證し、一切の道を修すれば、無常にて壞ある世間と、無常にて病ある世間とに於て、常住の涅槃を得、無覆護の世間と、無依の世間とに於て、護と爲り、依と爲る。何を以ての故にとならば、法に優劣無きが故に涅槃を得、智慧等しきが故に涅槃を得、解脫等しきが故に涅槃を得、清淨等しきが故に涅槃を得。是の故に、涅槃は一味なり、等味なり、謂はく解脫味なり。』

『世尊、若し無明住地を、斷ぜず・究竟せざる者は、一味、等味、謂はく明解脫味を得ず。何を以ての故にとならば、無明住地を、斷ぜず・究竟せざる者は、恒沙等に過ぎたる、應に斷すべき所の法を、斷ぜず・究竟せず。恒沙等に過ぎたる、應に斷すべき所の法を、斷ぜざるが故に、恒沙等に過ぎたる法の、應に得べきを得ず、應に證すべきを證せず。』

『是の故に、無明住地、積聚して、一切の修道斷の煩惱、上の煩惱を生ず。彼れ、心上の煩惱、止上の煩惱、觀上の煩惱、禪上の煩惱、正受上の煩惱、方便上の煩惱、智上の煩惱、果上の煩惱、

〔有餘〕を證して、所成有るも、變易の因果有るが故に不純といふ。梵行已立究竟せず。〔九七〕 事實究竟せず、修道を明すに分段對治と變易對治とありをいふ。所作已辨の智、圓かならず。〔九八〕 彼、集を明すにも分段變易の二因有り。今前者を斷ずるも、後者なほ有り。〔彼〕とは此の後者を指す。不受後有の智、完からず。〔九七〕 此の節、異譯は、文簡なり。

〔九八〕 一切の功德、無量の功德、不可思議の功德、第一清淨の功德の四を擧ぐ、寶窟には之を廣狹、淺深、麤細、清淨不清淨の四對に配せり。而して終りの所瞻仰を總結とす。又佛性論を引いて、一切は第八地、無量は第九地、一切は第十地、第一清淨は佛地の功德なりともいへり。

〔九八〕 四智、我生已盡、梵行已立、所作已辨、不受後有を阿羅漢の四智といふ。〔九〇〕 蘇息處、灰身滅智の涅槃。〔〇一〕 有餘不了義、義を明すこと盡さず、盡理の説にあらざるをいふ。〔〇二〕 分段の死、三界内の生死にして、身に大小あり、壽に

より未だ作さざる所の、虚偽の煩惱を斷ずるが故に、所作已辦と説きたまふ。阿羅漢、辟支佛の所斷の煩惱は、更に後有を受くること能はざるが故に、不受後有と説きたまふ。一切の煩惱を盡すにあらず、一切の受生を盡すが故に、不受後有と説きたまふにはあらず。何を以ての故にとならば、煩惱あり、是れ阿羅漢、辟支佛の斷ずる能はざる所なればなり。

『煩惱に二種有り。何等をか二となすとせば、謂はく、住地の煩惱と起煩惱となり。住地に四種あり。何等をか四となすとせば、謂はく見一切處住地、欲愛住地、色愛住地、有愛住地なり。此の四種の住地は、一切の起煩惱を生ず、起とは、刹那心と刹那相應となり。世尊、心の不相應なるは、無始の無明住地なり。世尊此の四住地の力は、一切の上の煩惱の、依・種たるも、無明住地に比するに、算數譬喩も及ぶ能はざる所なり。』

『世尊、是くの如く、無明住地の力は、有愛と數との四住地に於て、無明住地は、其の力最も大なり。譬へば惡魔波旬の、他化自在天に於て、色力・壽命・眷屬・衆具の、自在殊勝なるが如く、是くの如く、無明住地の力は、有愛と數との四住地に於て、其の力、最勝なり。恒沙に等しき數の上の煩惱の依たり、亦四種の煩惱をして久しく住せしむ。阿羅漢、辟支佛智の斷ずる能はざる所に於て、唯如來の菩提智のみ能く斷ずる所なり。是くの如く、世尊、無明住地は最も大力となす。』

『世尊、又取を縁とし、有漏の業を因として、三有を生ずるが如く、是くの如く、無明住地を縁とし、無漏の業を因として、阿羅漢と、辟支佛と、大力の菩薩との三種の意生身を生ず。此の三地と、彼の三種の意生と、身の生と及び無漏業の生とは、無明住地に依りて、縁となること有り、縁となること無きに非ず。是の故に、三種の意生身と及び無漏の業とは、無明住地を縁とするなり。』

『世尊、是くの如く、有愛住地と數との四住地は、無明住地の業と同じからず。無明住地は、四住

ざらんや。

【六六】阿聲漢云云、阿羅漢には大乘と別なる出家等、有ることなきをいふ。

【六七】如來に依つて云云、異譯には不爲。如來一出家受具足と故とあり。

【六八】以上は因行に就て、二乗も大乘を離れて存ぜざるを明し、以下は二乗の果を擧げて大乘に會するなり。即ち小乘究竟の果は、還ち是れ大乘の因なるを示すなり。

【六九】歸依す、阿羅漢は徳圓がならざるを示す。

【七〇】恐怖云云、煩惱未だ盡きざるが故に恐怖あり。二乗は見思の煩惱を斷じて分段生死の恐怖無けれど、なほ餘習有つて變易生死を受くれば恐怖ありといふ。

【七一】無行、二乗は三界分段の生死を脱する行あるも、三界外の治道の智無きをいふ。一切無行、異譯には於一切行に作る。

【七二】阿羅漢云云、異譯に依不取依と云へり。

【七三】有餘、變易の生死、なほ在るが故に有餘といふ。我以下已盡の智、未だ圓かならず、以下の三句、異譯には生法有餘、梵行未立、所作未辦とあり。

【七四】有餘の梵行云云、分段

を以ての故に如來に依るなり。

『世尊、阿羅漢と辟支佛とは怖畏有り、是の故に、阿羅漢と辟支佛とは、有餘の生法盡きず、故に生あり。有餘の梵行成ずるが故に純ならず。事、究竟せざるが故に、當に所作あるべし。彼を度せざるが故に、當に所斷有るべし。斷ぜざるを以ての故に、涅槃界を去ること遠し。』

『何を以ての故にとらば、唯、如來・應・正等覺のみありて、般涅槃を得たまふ。一切の功德を成就したまふが故に。阿羅漢と辟支佛とは一切の功德を成就せず。涅槃を得ると言ふは、是れ佛の方便なり。唯、如來のみ有りて、般涅槃を得たまふ、無量の功德を成就したまふが故に。阿羅漢と辟支佛とは、有量の功德を成就す、涅槃を得ると言ふは、是れ佛の方便なり。唯、如來のみ有りて般涅槃を得たまふ、不可思議の功德を成就したまふが故に。阿羅漢と辟支佛とは思議の功德を成就す。涅槃を得ると言ふは、是れ佛の方便なり。唯、如來のみ有りて般涅槃を得たまふ、一切の斷すべき所の過は、皆悉く斷滅して、第一清淨を成就したまふが故に。阿羅漢と辟支佛とは、餘過あり、第一清淨にあらず。涅槃を得ると言ふは、是れ佛の方便なり。唯如來のみ有りて、般涅槃を得たまひ、一切衆生の瞻仰する所となりて、阿羅漢、辟支佛、菩薩の境界を出過す。是の故に、阿羅漢と辟支佛とは、涅槃界を去ること遠し。』

『阿羅漢、辟支佛の、觀察し、解脱し、四智究竟して、蘇息處を得るとは、亦是れ如來の方便、有餘不了義の説なり。何を以ての故にとらば、二種の死あり。何等をか二となすとらば、謂はく、分段の死と、不思議變易の死となり。分段の死とは、謂はく虚偽の衆生なり。不思議變易の死とは、謂はく、阿羅漢、辟支佛、大力の菩薩の意生身と、乃至無上菩提を究竟するなり。』
『二種の死の中、分段の死を以ての故に、阿羅漢と辟支佛の智を我生已盡と説きたまふ。有餘の果證を得るが故に、梵行已立を説きたまふ。凡夫人天の辦する能はざる所なり。七種の學人は、先

諸大河の源泉と想像せらる。或は曰く、今雪山北境西藏の山地に此の池ありと。

【八二】大乘の外に別に二乘無く、小乗とは即ちこれ大乘麗近の法なればなり。

【八三】正法住と正法滅、時により教に興・衰あるをいふ。佛滅後五百年間は正法世に住し、以後は正法滅すと云ふ。これ普通に小乗に就て云はるるも、大乘の外に小乗無ければ、これ實に大乘の正法住、正法滅なり。

【八四】波羅提木叉、Pratimokṣa、別解脱と譯す、得善なり。毘尼 Vinaya は滅惡といふ。この二は戒に得・離あるを示す。この二は小乘戒に就て云はるるも、大乘の外に小乘無しと見る故、大乘戒の得離たり。

【八五】出家、入道の初、受具足は具足戒を受けて比丘の資格を完うするなり。これ人に始終あるを示す。この二亦先に始終なきことを示す。以上の三、共に小乗の因行は畢竟大乘の外に存せざるを明して大乘を大乘に會するなり。

【八六】毘尼とは……大乘の學なり。小乗の人とても、大乘の佛に依つて出家受戒すれば、所學の毘尼も亦これ大乘に非

言さく「善い哉、世尊、唯然り」と。

教を受けて、即ち佛に白して言さく、

「世尊、攝受正法とは、即ち是れ 摩訶衍なり。何を以ての故にとならば、摩訶衍は、一切の聲聞・緣覺・世間・出世間の善法を出生すればなり。世尊 阿耨達池の、八大河を出すが如く、是くの如く、摩訶衍は、一切の聲聞・緣覺・世間・出世間の善法を出生す。

「世尊、又一切の種子は、皆地に依りて、生長することを得るが如く、是くの如く、一切の聲聞・緣覺、世間・世出間の善法は、大乘に依りて增長することを得。是の故に世尊、大乘に住して、大乘を攝受するは、即ち是れ、二乗に住して、二乗と一切の世間・出世間の善法とを攝受するなり。

「世尊の六處を説きたまふが如し。何等をか六と爲すとならば、謂はく正法の住と正法の滅と、波羅提木叉と毘尼と、出家と受具足となり。大乘の爲の故に、此の六處を説く。何を以ての故にとならば、正法の住とは、大乘の爲の故に説く、大乘滅すれば即ち正法も滅するなり。

「波羅提木叉と毘尼との、此の二法は、義は一にして名は異なり。毘尼とは即ち大乘の學なり。何を以ての故にとならば、佛に依りて出家し、具足を受くるを以てなり。是の故に、大乘の威儀戒は是れ毘尼なりと説く。是れ出家なり、是れ受具足なり。是の故に、阿羅漢は出家と受具足と無し。何を以ての故にとならば、阿羅漢は、如來に依りて出家して具足を受くるが故なり。

「阿羅漢は佛に 歸依す、阿羅漢は 恐怖することあり。何を以ての故に。阿羅漢は、一切 無行に於て、怖畏の想に住すること、人の劍を執り、來りて己を害せんと欲するが如し。是の故に、阿羅漢には究竟の樂なし。何を以ての故にとならば、世尊は依にして不求依なり、衆生は依無れば、

彼彼に恐怖す、恐怖を以ての故に則ち歸依を求むるが如し。是くの如く、阿羅漢は怖畏有り、恐怖

【四】 是其の女性にして近事女と譯す。

【七】 法朋の中に入る、諸の有徳の菩薩の數に入るをいふ。

【七】 通達法、一切を了達したまふをいふ。この句以下、異譯に爲し引導法に作る。

【七】 正法の依、能く正法を以て衆生に授與したまふをいふ。

【七】 大精進力、萬行を起し、遍く群衆に趣いて、念々法流するをいふ。

【七】 少しく云云、異譯には微觸未、摩、とあり。

【七】 須彌山、印度の傳説にて、世界の中心に立てる高山とす。世界は此の高山を廻りて四方に存すと想像せらる。

原音蘇迷盧(Sumera)譯して妙高といふ。

【七】 初めて大乘に住す、初めて大乘を學するの謂なり。

【八】 大刹等、是を前文に對すれば、大刹は、理の正法、四乗を出生するをいひ、大福は六度の行を得し、大果は三を捨して三を得るを云ふ。

【九】 摩訶衍(Mahayana)は譯して大乘といふ、これ根本の道、絶對の道、道の本體なり。一切の道と善法とは悉く之より生ず。

【一〇】 阿耨達池、Anavatapta清凉、無熱惱と譯す、印度の

を攝受して、法朋の中に入れん。法朋に入るものは、必ず諸佛の授記する所と爲らん。世尊、我れ攝受正法の、是くの如きの大力あるを見る。佛は實眼・實智たり、法の根本たり、通達法たり、正法の依たり。亦悉く知見し給ふ」と。

爾の時、世尊、勝鬘所説の攝受正法の、大精進力に於て、隨喜の心を起したまふらく、「是くの如し。勝鬘、汝の所説の如し、攝受正法の、大精進力は、大力士の、少しく身分に觸るるも、大苦痛を生ずるが如く、是くの如く、勝鬘、少しの攝受正法も、魔をして苦惱せしむ。我れ餘の一の善法も、魔をして憂苦せしむること、少しの攝受正法の如くなるをば見す。

「又牛王の、形色無比にして、一切の牛に勝ぐるるが如く、是くの如く、大乘の少しの攝受正法も、一切の二乗の善根に勝れたり、廣大なるを以ての故に。

「又、須彌山王の端嚴殊特にして、衆山に勝るるが如し。

「是くの如く大乘に身と命と財とを捨し、以て心を攝取し、正法を攝受するは、身・命・財を捨てずして、初めて大乘に住する、一切の善根に勝ぐれたり、何に況んや二乗をや。廣大なるを以ての故なり」。

「是の故に勝鬘、當に攝受正法を以て衆生を開示し、衆生を教化し、衆生を建立すべし。是くの如く勝鬘、攝受正法は、是くの如きの、大刹、是くの如きの大福、是くの如きの大果あり。勝鬘、我れ阿僧祇阿僧祇劫に於て、攝受正法の功徳義利を説くとも邊際を得ず。是の故に勝鬘、攝受正法に、無量無邊の功徳あり」と。

一乘章 第五

佛、勝鬘に告げたまはく「汝今、更に一切諸佛所説の攝受正法を説くべし」と。勝鬘、佛に白して

論、因明論、聲明論、醫方論、工巧論をいふと。此の五は明智を生ずる處なれず明處といふ。第五は事に就て之を習ふ。故に前四と分つて、次に工巧を別出したたり。

【六七】以下、果を攝受することを明し、人と果法と二無きことを示すものにして無常の三分を捨て、常の三分を得ること、八地以上在り。故に法は人に異ならず、人は法に異ならず。天下の文に攝受正法の善男子等は、是れ攝受正法なりといふ所以たり。

【六八】後、實際、實際には多説を擧げ、自らは後際を以て未來實際の義に解したり。

【六九】等しく、異譯には「證す」に作る。

【七〇】以下、寶窟によれば、護法を明し、上の三節に理・行・果を示したるに對し、今は教を示すと。

【七一】比丘 (bhikkhu) 譯して乞士といふ、僧侶、道を修するもの。毎日村落に出でて食を乞ひ、日に一食す、故に乞食といひまた乞士と呼ぶ。比丘尼 (bhikkhuni) は其の女性なり、乞士女と譯す。優婆塞 (Upāsaka) は、譯して近事男といふ、道を慕うて出家人に近づき事へ、同じく道を修する在家人なり。優婆夷 (Upāsika)

「應に禪を以て成熟すべきものには、彼の衆生に於て、不亂心、不外向心、第一正念、乃至久時所作、久時所説を以て、終に忘失せず、將に彼の意を護して、之を成熟せんとす。成熟する所の衆生、正法を建立す、是を禪波羅蜜と名く。

「應に智慧を以て成熟すべきものには、彼の諸の衆生、一切義を問はば、無畏心を以て、爲めに一切の論と、一切の工巧とを演説して、明處と乃至種種の工巧の諸事とを究竟して、將に彼の意を護して、之を成熟せんとす。彼の成熟する所の衆生、正法を建立す、是を般若波羅蜜と名く。是の故に世尊、異の波羅蜜なく、異の攝受正法なし、攝受正法は即ち是れ波羅蜜なり（波羅蜜は即ち是れ攝受正法なり）」と。

「世尊、我れ今佛の威神を承けて更に大義を説かん」と。佛言はく、「便ち説け」と。

勝鬘、佛に白して言さく、「攝受の正法と攝受正法とは、異の攝受の正法なし。異の攝受正法なしとは、攝受正法の善男子善女人は、即ち是れ攝受正法なり。何を以ての故に。若し攝受正法の善男子善女人は、攝受正法の爲めに三種の分を捨す。何等をか三となすとすれば、謂はく身と命と財となり。善男子善女人の、身を捨すとは、生死と、後際と、等しく、老病死を離れて、不壞常住と無有變易と、不可思議功德と、如來の法身とを得るなり。命を捨すとは、生死と後際と等しく、畢竟して考病死を離れ、無邊と、常住と、不可思議功德とを得て、一切甚深の佛法に通達するなり。財を捨すとは、生死と後際と等しく、一切衆生に共ざる、無盡、無減、畢竟常住不可思議の具足功德を得ると、一切衆生の殊勝の供養を得るとなり。世尊、是の如く三分を捨する善男子善女人は、正法を攝受して、常に一切諸佛の爲めに記せられ、一切衆生の瞻仰する所たり。

「世尊、又善男子善女人の正法を攝受するものは、法の滅せんと欲する時、比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷、朋黨評説し、破壞離散せんに、不詔曲、不欺誑、不幻偽を以て、正法を愛樂し、正法

(Dhāra)の略、譯して布施とす。戒は持戒、尸は尸羅(Vīra)の略、譯して戒といふ。忍は忍辱、屬提(Kṣānti)の譯、毘梨耶(Vīrya)の譯して精進といふ。禪は禪那(Dhyāna)の譯して靜慮といふ、禪定なり。般若(Prajñā)譯して智慧となす。以上を六波羅蜜と名づく。【五】彼の意を護すとは、能く機縁に順ずるをいふ。護、異譯には隨順に作る。下同じ。【五下】建立、異譯に安住せしむとあり。【六〇】饑益心、菩薩は打罵せらるるとも、慈心を起して、其の人を饒益せんとするをいふ。【六一】第一忍力、忍辱の徳は、持戒苦行も及ぶ能はざる所に於て、第一の道なるを表す。【六二】大欲心、諸の善法を修せんとするの意をいふ。【六三】第一精進、心の精進をいふ。之に對して、次の四威儀は身の精進なり。【六四】不亂心等、心一境に住するをいひ、不外向心とは、第一正念とは、生・法・空の理を以て自ら安するをいふ。此の諸句、異譯に以て無散亂心・成熟正念・會所作事、修不妄忘失とあり。【六五】一切の論、寶窟には内

は中價、四には下價なり。是を大地の四種の寶藏と名づく。是の如く、攝受正法の善男子善女人も、大地を建立して、衆生の四種の最上の大寶を得るなり。何等をか四となすとせば、攝受正法の善男子善女人は、無聞非法の衆生には、人天の功德善根を以て之を授與し、聲聞を求むるものには聲聞乘を授け、緣覺を求むるものには、緣覺乘を授け、大乘を求むるものには、授くるに大乘を以てす。是の如くに大寶を得る衆生は皆攝受正法の善男子善女人に由つて、此の奇特希有の功德を得るなり。世尊、大寶藏とは、即ち是れ攝受正法なり。

『世尊、攝受の正法と攝受正法とは、異の正法無く、異の攝受正法無し。正法とは即ち是れ攝受正法なり、(攝受正法とは、即ち是れ正法なり)。世尊、異の波羅蜜無く、異の攝受正法無し、攝受正法は、即ち是れ波羅蜜なり、(波羅蜜は即ち是れ攝受正法なり)』

『何を以ての故に。攝受正法の善男子善女人は、應に施を以て成熟すべきものには、施を以て成熟し、乃至身の支節を捨し、將に彼の意を護し、之を成熟せんとす。彼の成熟する所の衆生、正法を建立す、是を檀波羅蜜と名く。』

『應に戒を以て成熟すべきものには、六根を守護し、身口意業を淨め、乃至正威儀を正して、將に彼の意を護して、之を成熟せんとす。彼の成熟する所の衆生、正法を建立す、之を尸波羅蜜と名く。』

『應に忍を以て成熟すべきものには、若し彼の衆生、罵詈毀辱し、誹謗恐怖せんに、無恚心と、饒益心と、第一忍力と、乃至顔色無變とを以て、將に彼の意を護して、之を成熟せんとす、彼の成熟する所の衆生、正法を建立す、是を屬提波羅蜜と名く。』

『應に精進を以て成熟すべきものには、彼の衆生に於て、懈心を起さず、大欲心を生ぜん、第一精進、乃至若しは四威儀もて、將に彼の意を護して、之を成熟せんとす。彼の成熟する所の衆生、正法を建立す、之を毘梨耶波羅蜜と名く。』

一願に歸す。

【五二】攝受正法の云云、これ八地已上の大士を指す。

【五三】不請の友、大悲を以て、先方の請を待たずして、説くをいふ。

【五四】無價、無上の價あるなり。異譯は無頂に作る。

【五五】原文には「攝受正法、攝受正法者無異正法」云云とあり。前の攝受正法は攝受の正法にして、攝受せらるる正法なり。次の攝受正法は、正法を攝受する心にして、即ち攝受正法の心なり。太子疏によれば、八地已上に在りては、萬行正法を以て心となし、心を以て萬行正法となし、心法一體、無二にして別相なき、これ正法即ち攝受正法、攝受正法即ち正法なり。寶窟には、この句、智と理と異無きを明すとす。

【五六】攝受云云、和に加ふ。次の刮孤亦然り。

【五七】異の波羅蜜云云、既に道と冥契せる攝受正法の心は、自然に一切の萬行を流出し萬行と心と無別なり。一切の萬行は、之を六波羅蜜に包括して、攝受正法即ち六波羅蜜なり。寶窟には、この句、智と行と異無きを明すとす云々。

【五八】施は布施、檀は檀那

ゆる功德を説かんに、邊際を得ず、如來の智慧辯才も、亦邊際なし。何を以ての故にとならば、是の攝受正法は、大功徳あり、大利益あればなり」と。

勝鬘、佛に白さく、「我れ、當に佛の神力を承けて、更に復、攝受正法廣大の義を演説すべし」と。佛の言はく、「便ち説け」と。

勝鬘、佛に白して言さく、「攝受正法廣大の義とは、即ち是れ無量なり。一切の佛法を得て、八萬四千の法門を攝するなり。譬へば、劫の初めて成ずる時、普く大雲を興して、衆色の雨、及び種種の寶を雨らすが如し。是くの如く、攝受正法も、無量の福報と、無量の善根の雨とを雨らす。

『世尊、又劫の初めて成ずる時、大水の聚まることありて、三千大千世界藏と、及び四百億の種種の類洲とを出生するが如し。是くの如く、攝受正法も、大乘の無量界藏と、一切菩薩の神通の力と、一切世間の安穩快樂と、一切世間の如意自在と、及び出世間の安樂とを出生す。劫成にも、乃至天人にも、本より未だ得ざる所、皆中に於て出づ。

『又大地の四の重擔を持するが如し。何等をか四となす。一には大海、二には諸山、三には草木、四には衆生なり。是くの如く、攝受正法の善男子善女人は、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能なること、喩へば彼の大地のごとし。何等をか四とは爲すとならば、謂はく、善智識を離れたる、無聞非法の衆生には、人天の功徳善根を以て、之を成熟し、聲聞を求むるものには、聲聞乘を授け、緣覺を求むるものには、緣覺乘を授け、大乘を求むるものには、授くるに大乘を以てす、是れを攝受正法の善男子善女人は、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能なりとは名づく。世尊、是くの如く攝受正法の善男子善女人は、大地を建立して、四種の重任を荷負するに堪能にて、普く衆生の爲めに、不請の友となり、大悲をもて衆生を安慰し、哀愍し、世の法母となる。』

『又大地に四種の寶藏あるが如し、何等をか四となすとせば、一には無價、二には上價、三に

智の願と名く。第一の正法智が發して利他説法の用となるをいふ。

【四七】 第三の大願、同に護法の願と名く。正法を護持して、自ら金剛の身を得、他をして是を得せしむることを誓へるなり。身命財を捨すること後段(一〇〇頁)參照。

【四八】 上來の三章は、勝鬘自ら願行を興すことを示し、此より以下は正しく他の爲に法を説くなり。而も以上の所説は有用の自分行にして、自己の作爲するところ、即ち七地已下の行たり。八地已上にては、道の當體より任運に流出するの行なれば、無功用の行なり。勝鬘は七地に在れば、八地已上の行を説く能はず。故に佛の神力を説くとは云ふ。説く所、勝鬘の口より出づるも、實は佛説なるを表はす。

【四九】 調伏云云、實相の理を證すれば、煩惱も滯淨なるが故に調伏といふ。異なる無しとは、理に稱ひて佛説と異なるなきを示す。

【五〇】 攝受正法は、八地已上一念無功用の用なれば、七地已下有功用恒沙の諸願も、皆此の願中に入る。大乘佛教の目的は一に此の宇宙の根本義に體達するにあり、其の他幾多の諸願、萬行、畢竟唯此の

願して言はく、「恒に勝鬘と與に、常に共に俱に會して、其の所行を同じうせん」と。
世尊悉く「一切の大衆は、其の所願の如くならん」と記したまへり。

三大願章 第三

爾の時、勝鬘、復、佛前に於て、三の大願を發し、此の言を作しぬ「此の實願を以て、無量無邊の衆生を安慰せん。此の善根を以て、一切生に於て正法智を得ん。是を第一の大願と名づく。

「我れ、正法智を得已り、無厭心を以て衆生の爲に説かん、是を第二の大願と名づく。

「我れ攝受正法に於て、身命財を捨し、正法を護持せん、是を第三の大願と名づく」と。

爾の時世尊、即ち勝鬘に記したまふらく、「三つの大誓願は、一切の色、悉く空界に入るが如し。是の如く、菩薩恒沙の諸願は、皆悉く此の三大願の中に入る、此の三願は眞實にして廣大なり」と。

攝受正法章 第四

爾の時、勝鬘、佛に白して言さく、「我れ今當に、復、佛の威神を承け、調伏の大願の眞實にし、異なることなきを説かん」と。佛、勝鬘に告げたまはく、「恣に汝に説くを聽す」と。

勝鬘、佛に白して言さく、「菩薩の有らゆる恒沙の諸願は、一切皆、一大願中に入る、所謂攝受正法なり。攝受正法をば、眞に大願とは爲す」と。

佛、勝鬘を讚へたまはく、「善い哉、善い哉、智慧方便、甚深にして微妙なり。汝既に長夜に、諸の善本を植ゑたり。來世の衆生の、久しく善根を植ゑたらんものは、乃ち能く汝が所説を解らん。汝が所説の攝受正法は、皆是れ、過去・未來・現在の諸佛の、已に説き、今説き、當に説くべき所なり。我れ、今無上善規を得て、亦常に此の攝受正法を説くべし。是の如く、我れ攝受正法の、有ら

いていふ。太子疏に、勝鬘七地の位にあり、故に八地已上を得んと願ふ、此の誓ある所以なりと。

【三】波羅蜜(Arhanita)。到彼岸と譯す、迷界を此岸とし、涅槃界を彼岸とす、迷の此岸より涅槃の彼岸に到達すべき道、之を波羅蜜と名づく。

【四】菩薩摩訶薩、菩薩は菩提薩埵(Bodhisattva)の略にして覺有情といひ、また大士といふ。摩訶薩は摩訶薩埵(Mahāsattva)にして、大有情と譯す。覺有情は利他心を以て、他の有情をして、眞理を覺知せしむる有情の義。大士は大心の士にして、大心は利他心をいふ。

【四】度し難し、異譯には成就し難しとあり。

【四】非義を以て云云、同じ習不善法、受諸苦惱とあり。

【四】大願、異譯は弘願に作る。

【四】第一の大願、寶窟には求正法智一願と名く。正法智とは宇宙の根本義に體達するの智にして、之をまた寶智といふ。寶智は利他方便の作用あり、之を權智と名け、此の二智を合せたるを正法智とし、この智を求むるを第一大願とす。

【四】第二の大願、寶窟に説

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、若し捕と養と、衆の惡律儀と及び諸の犯戒とを見ては、終に棄捨せずして、我れ力を得ん時、彼彼の處に於て、此の衆生を見ては、應に折伏すべきものは、之を折伏し、應に攝受すべきものは、之を攝受せん。何を以ての故にとならば、折伏・攝受を以ての故に、法をして久住せしむればなり。法、久住せば、天人充滿し、惡道減少して、能く如來所轉の法輪に於て、而かも隨轉することを得。是の利を見るが故に、救攝して捨せし。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、正法を攝受して終に忘れせし。何を以ての故にとならば、法を忘失するものは大乘を忘る、大乘を忘るるものは、則ち波羅蜜を忘る、波羅蜜を忘るるものは、則ち大乘を欲せず。若し菩薩にして、大乘を決定せざらんには、則ち正法を攝受せんとするの欲を得ること能はず。所樂に隨ひて入らんとするに、永く凡夫地を越ゆるに堪忍せざればなり。我れ是くの如きの無量の太過を見、又未來に正法を攝受する菩薩摩訶薩の無量の福利を見るが故に、此の大受をば受くるなり。

「法主世尊、現に我が爲に證したまはんを。佛世尊、現前に證知し給ふと雖も、而も諸の衆生は善根微薄にして、或は疑網を起さん。十大受は極めて度し難きを以ての故に。彼れ或は長夜に、非義をもて饒益し、安樂を得ざらん。彼を安んぜんが爲の故に、今佛前に於て誠實の誓を説く、我れ此の十大受を受け、説の如く行じなば、此の誓を以ての故に、大衆の中に於て、當に天華を雨らし、天の妙音を出すべし」と。

是の語を説ける時、虚空の中より、衆の天華を雨らし、妙聲を出して言く、
「是の如し、是の如し、汝が所説の如く、眞實にして異なる無けん」と。
彼の妙華を見、及び音聲を聞いて、一切の衆會、疑惑悉く除き、喜踊すること無量なり。而も發

少食一と云へり。

【三〇】成熟、同には濟ふことを爲さんとあり。

【三一】自ら己が爲に、同に求む恩報に作る。

【三二】四攝とは布施、愛語、利行、同事なり。布施は法財二施をいひ、愛語は親愛の語、利行は、身口意三業の行を以て利益を與へ、同事は、衆生の境遇に同じ、自己を彼と同一地位に投ずること。以上の四を以て、衆生を親近ならしめ之を化度する手段とするを四攝法といふ。

【三三】義、同に善に作る。

【三四】捨、苦脫の後は、其の所任に任せて、妨げざるをいふ。

【三五】捕と養、鳥を捕へ、羊牛を養ふをいふ。

【三六】惡律儀、屠殺等の事を總じて云ふ。

【三七】折伏すべきもの、剛強の惡人をいふ。伏して惡を離れしむるは、智慧の爲す所なり。異譯は調伏に作る。

【三八】攝受すべきもの、柔軟の善人を指す。攝して善に住せしむるは、慈悲の所爲たり。

【三九】正法、諸法實相の理、即ち道なり。この法を證して心に在るを攝受といふ。これ第八地已上の菩薩にして、所謂攝受正法は八地已上の位に就

べし。彼の佛の國土には、諸の惡趣、老病、衰敗、不滿意の苦無く、亦不善惡業道の名も無けん。彼の國の衆生は、色力、壽命、五欲の樂具、皆悉く快樂にして、他化自在の諸天に勝らん。彼の諸の衆生は、純一大乘にして、有らゆる善根を修習する衆生、皆彼に集まらん」と。

勝鬘夫人、受記を得たる時、無量の衆生、諸天及び人など、彼の國に生れんと願ふに、世尊悉く記したまひて「皆當に往生すべし」と。

十受章 第二

爾の時、勝鬘、受記を聞き已り、恭敬して、十大受を受けぬ。

「世尊、我今日より乃し、菩提に至るまで、所受の戒に於て、犯心を起さじ。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、諸の尊長に於て、慢心を起さじ。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、諸の衆生に於て、恚心を起さじ。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、他の身色及び外の衆具に於て、嫉心を起さじ。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、内外の法に於て、慳心を起さじ、

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、自ら己が爲に財物を受蓄せじ、凡て受くる所有れば、

貧苦の衆生を、成熟せしむることを爲さん。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、自ら己がために、四攝法を行ぜじ。一切衆生の

爲めの故に、無愛染の心、無厭足の心、無罣礙の心を以て、衆生を攝受せん。

「世尊、我今日より、乃し菩提に至るまで、若しは孤獨、幽繫、疾病、種種の厄難、困苦の衆生

を見んに、終に暫らくも捨せず、必ず安穩ならしめんと欲し、義を以て饒益し、衆苦を脱せ

しめ、然る後に捨せん。

勝鬘師子吼一乘大方便廣經

三

【三】 應・正遍知、應供、正遍知の略。佛を大應供といひ、或は正遍知といふ、佛の異名十種中の一なり。

【四】 他化自在、欲界最上の天にして快樂極まりなしと云はる。

【五】 彼の諸衆生云云、異譯には彼諸衆生、皆趣大乘、諸有如是學大乘者、悉來出生彼云云へり。

【六】 十大受、戒は是れ行者の領納し、要心攝持する所たるを以て受といふ。異譯には十弘誓を發すと云へり。十項の中、一より五に至るまでは、自己の行爲に就いて防非止惡を誓ふ、これ攝律儀戒なり。六より九に至るまでは、専ら利他を誓ふ、これ攝衆生戒なり。第十は上の二の止惡を主とするに對し、作善を旨とするが故に之を攝善法戒となす。凡そ戒の條目を擧ぐるに種種の説あるも、大乘菩薩戒は總べて此の三種に盡く、之を三聚淨戒と名く。梵網經、

【七】 菩提bodhi譯して覺といふ、智を以て理を開顯覺了せし佛果を指す。

【八】 彼の身色云云、異譯には於諸勝己及諸勝事」と云へり。

【九】 内外の法、同に雖有

【一】如來の妙色身は、無比にして不思議なり、

如來の色は無盡なり、

【二】一切の法に常住したまふ、

【三】心の過惡と、身の四種とを降伏して、

一切の 爾焰を知りたまひ、

【四】一切の法を攝持したまふ、

過稱量を敬禮し、

【五】無邊法を敬禮し、

哀愍して我を覆護し、

【六】此の世及び後生に、

【七】我は久しく汝を安立し、

今復汝を攝受す、

【八】我已に功德を作しぬ、

是くの如きの衆の善本あり、

爾の時、勝鬘及び諸の眷屬、頭面をもて、佛を禮しぬ。

佛、衆中に於て、即ち爲に受記したまはく、「汝、如來の眞實の功德を歎じぬ。此の善根を以て、

當に無量阿僧祇劫に於て、天人の中に於て、自在王となるべし。一切の生處に於て、常に我を見

ることを得、現前に讚歎せんこと、今の如くにして、異なることなかるべし。當に復、無量阿僧祇

劫の佛を供養し、二萬阿僧祇劫を過ぎて、當に作佛することを得て、普光如來、應・正遍知と號す

世間に與に等しきものなし、

是の故に今敬禮しまつる。

智慧も亦復然なり、

是の故に我れ歸依しまつる。

已に 難伏地に到りたまふ故に法王を禮しまつる。

【九】智慧の身自在にして、

是の故に今敬禮しまつる。

無警類を敬禮し、

難思議を敬禮しまつる。

法種をして増長せしめ、

願はくは佛常に攝受したまはんを」と。

前世に既に開覺したり、

未來の生にも亦然り」と。

現在及び餘世に、

唯願はくは攝受したまはんを」と。

此の因と果とを降伏する意。身の四種とは生老病死の四なり。

【四】難伏地は佛果の異名。能く衆果を伏して、衆果の爲に伏せられざるが故に、爾か云ふ。異譯には不思議地と云へり。

【五】爾焰 (arāya) 知らるるもの、智慧の對境たる點より所知、智境と譯し、是を逆に

見て、智を生ずるものとして智母と譯す。

【六】智慧身自在、智慧を攬つて以て身を成じ、よく遠觀するをいふ。

【七】一切法を攝持す、佛心は一切の境を練知せざるなきを云ふ。

【八】過稱量、稱量の境界を過ぎたるもの、即ち佛徳を歎じていふ。次亦爾り。

【九】無邊法、自在にして繫縛を離れ、邊表無きをいふ。異譯には法自在に作る。

【一〇】此の世及び後生、異譯には速ニ及最後身、常在ニ如來前ニ云へり。

【一一】我れ久しくの四句、これ佛の詞なり。異譯には、是の相當文、次下の、勝鬘等證佛の句の次に出でたり。

【一二】阿僧祇、Asaṅkhaに譯して無數、無量數等といふ。

勝鬘師子吼一乘大方便廣經

宋・中印度三藏・求那跋陀羅譯

如來眞實義功德章 第一

是の如く我聞きぬ。一時、佛、舍衛國の祇樹給孤獨園に住したまへり。時に波斯匿王と及び末利夫人とは、法を信すること未だ久しからず、共に相謂ひて言はく、「勝鬘夫人は是れ我が女、聰慧にして利根、通敏にして悟り易し。若し佛を見まつらんには、必ず速に法を解して、心疑無きことを得ん。宜しく時に、信を遣はして其の道意を發すべし」と。夫人、白して言さく「今正に是れ時なり」と。

王及び夫人、勝鬘に書を與へ、略して如來の無量の功德を讚し、即ち内人の旃提維と名くるものを遣せり。使人書を奉じて阿踰闍に至り、其の宮内に入り、敬みて勝鬘に授け奉る。勝鬘、書を得て歡喜・頂受し、讀誦・受持し、希有の心を生じて、旃提維に向ひ、偈を説いて言く、

「我聞く、佛の音聲は、

言ふ所にして眞實ならば
仰いで惟みれば佛世尊は、

亦應に哀愍を垂れて、

即ち此の念を生じたる時、

普く淨光明を放ちて、

勝鬘及び眷屬は、

咸く清淨の心を以て、

世に未曾有なる所なりと、

應當に供養を修すべし。

普く世間の爲めに出で給ふ、

必ず我をして見ることを得せしめたまふべし」と。

佛空中に於て現じ、

無比の身を顯示したまへり。

頭面をもて足に接して禮し、

佛の實の功德を歎じまつりぬ。

勝鬘師子吼一乘大方便廣經

【一】大寶積經第四十八會(勝鬘夫人會)參照。

【二】序品。

【三】舍衛、梵にŚrāvastī、波斯匿王の治下、憍薩羅國 Kośala の一部なり。

【四】波斯匿 Prasenajit 末利は Malika

【五】法を……久しからず、異譯に初説ノ法已ト云ヘリ。

【六】勝鬘室利摩羅(Śrīmālā)と寫し、憍薩羅王波斯匿と末利との間に生れし子にして、阿踰闍王友稱の妃なり。

【七】信を遣はす、異譯に「令善論者發其誠信」と云ヘリ。

【八】旃提維、同に眞提維に作る。奄人と譯す。宦官なり。

【九】阿踰闍、Ayodhya、無生又は不可戰と譯す。異譯に無闍城と云ヘリ。

其の王を友稱王といひ、勝鬘は其の妃なり。

【一〇】應當に云云、異譯に當賜汝衣服」とあり。

【一一】以下嘆佛眞實功德章とする説もあり。

【一二】一切の法常住は、上に色、智を歎ずるも、未だ餘の徳を具するを言はざれば今一切の徳を具することを明すなり。

【一三】心の過惡は、未來の果を招感する原因、身の四種は、過去の因により招感せし結果

り、自性清淨の如來藏である。而もこの如來藏は、染・淨の法の依・持・建立たるもので、煩惱中に在るもその自性は不變である旨を示し、この理を見る者を以て佛子なりとしてある。

かく本經が主として説く所を、試に要約すると、佛に比して二乗を貶すこと、二乗を會して一乘に歸すること、法身の常住を説くこと、如來藏を説いて衆生本具の旨を顯はすことなどを擧げ得る。而して此等の各は、夫と維摩經、法華經、涅槃經、華嚴經及び起信論などが高調する所のものであつて、本經の思想内容から見れば、此等の經典内容と密接な關係を示すものである事が知られる。

更に注意すべきことは、此等の高遠な思想が勝鬘なる一夫人の口によつて述べ

昭和七年九月廿八日

られてゐる事であつて、此の點は在野の一居士維摩が方丈に在つて、諸大聲聞に堂々の論陣を張つたと好一對をなすものである。佛の威神を受けて説くとは云ふものの形式の上から見れば全く勝鬘の所説のみである。宜なるかな、勝鬘師子吼一乘大方便廣經の題號の存することや。

多數の經典の中、女人の口から教法の説かれる例は、枚擧に遑が無い。然し其の多くは、會衆の所問によつて、後に佛がその本生を示されるのが普通であるのに、獨り本經に於ては、夫人の宣説終るや、佛是を記したまふのみで終つてゐる。流石に夫人の説く所だけあつて、痛烈骨を刺すが如きものは無いけれども、所論堂々、一經の體裁、簡にして要を得たること、能く諸多の思想をこなして自家藥籠中のものとし、佛に向つて之を説いて、

些の澁滯無きは、所信の強く、所得の深きものに非ずんば、爲し能はざる所である。本經の注者、夫人を以て八地を證したものとす。亦所以ありと言はねばならぬ。更に翻つて思ふに、本經の如きは、所謂小乘に對する大乘運動が、再轉して大小二乗の相即相入を認むる大理想を示したもので、印度大乘思想最高潮の産物であり、上述の諸經論と緊密な關係にあるだけ、その成立も是等の諸經と相前後するものと見ねばならぬ。本經譯出の時代は、また支那佛教の隆盛期にあつたから、譯出後直に講説が行はれ、注疏が作られるに至つた。其の茲に至つた所以のものは、本經の内容が然らしめたものであつて、隋唐の世に於ける判教に於ても、維摩經と共に、一方の代表と見られたものである。但し佛教經典史に於ける本經の地位と、支那佛教の判教に於けるそれは自ら別であることは言ふまでも無い。

知し難いところで、汝及び大法成就の菩薩のみ、能く聽受すべきを説かれる(第十百三性清淨章)。

佛は更に語を續けて、隨信、信増上と隨順法智とを擧げ、此等の者は五種の觀を成就して、佛滅後に、自性清淨の心が、煩惱に染せらるゝを究め得んことを説き、是を以て大乘の道に入るの因(菩薩の階級を説くに地前地上の二大別の上に、地上を七地以前と、八地以上とに分つのが、本經注釋家の説であつて、七地以下を大乘に入るの因とし、八地以上をば、大乘の道と見てゐる)とされると、勝鬘は更に、甚深法智と、隨順法智と、仰推智(前の隨信と信増上の者)の三種の善男子善女人が、大乘の道に入ることを述べる(第十四、如來眞子章)。

最後に勝鬘は此等三種の人を除く以外は、以て調伏すべきを述べると、佛も之に讚したまひ、終つて勝光明を放つて虚空

中から舍衛國へ還御される。勝鬘並に眷屬は遙に之を見送つて城中に入り、夫の友稱王に大乘をたゞえ、城中の老若男女を化するに大乘を以てする。

佛は祇洹林に歸りたまふて、帝釋に此の經を附屬し、更に十五種の名を以て、此の經に名けられて終るのである(第十五勝鬘章)。

因に前節に於て、本經注家の、分章に就て一言したが、今節に注記した章名は、勿論底本によるもので、他の分章分科に就は、文本に於て、之を注記したに止めた。

七

前節に見た如く、初に勝鬘夫人が、三聚淨戒を堅持すべきを誓ひ、更に三大願を立て、共に攝受正法を高調し、更にこの正法とは大乘であつて、此の一乘の外に二乘三乘無く、大乘の外に別な小乘無ければ、之を亦眞の大乘とも眞の一乘と

も云ひ、此の理を示すことが、本經の主眼であつて、攝受正法の一語、正に本經の歸著を示すものである。

而して經は是の理を示す爲に、小乘と大乘とを比較して、各其の所説を述べて、畢竟大乘は小乘を超越する所以を示すと共に、二乘を止揚して一乘に歸し、聲聞乘と緣覺乘とを會通して竟には一佛乘に入らしめ、この一乘は如來究竟の法身の開顯なるを説いてゐる。

經はその後半に入つて、如來藏の思想を力説してゐる。即ち二乘の四聖諦は、眞の聖諦ではなく、一切の煩惱を斷ずる第一義智の開説する所こそ、眞の聖諦であり、衆生の本より具する如來藏が即ち是であつて、煩惱藏中に在るを如來藏と名くるが、若し是が開顯せらるれば、即ちこれ如來の法身であり、二乘の空智は、未だこの如來藏を見るを得ず、佛の證見したまふ滅諦こそ、これ如來の法身であ

乘の境を超えた、智者の所智で、如來藏處が甚深なる故に、聖諦も亦甚深なる旨が説かれて居る(第七、如來藏章)。

かゝる聖諦には有作と無作、有量と無

量との二種があり、有作・有量の四聖諦は二乗の夫であり、無作・無量の四聖諦は如來の夫である。この二種の聖諦の義を信解する者は、無量の煩惱所纏の如來藏を疑惑せず、無量の煩惱藏を出づる法身を疑惑せざる者である。如來の法身は過恒沙の不思議の佛法の成就する所で、如來藏とはこの法身が、煩惱に包藏せられた所を指し、この如來藏の開顯したるを法身とする事を述べてゐる(第八、法身章)。

既に衆生は、如來藏に於て、法身を具する旨を述べたが、從來小乗の空義等を説いて、衆生がこの如來藏を具有することゝを説かなかつた理由を、次に述べて居る。即ち如來藏に空と不空との兩面があり、空如來藏とは、一切の妄染の中には、如

來藏無くして、虚誑であることを指し、不空如來藏とは、恒沙の萬徳を具する方面に就いて述べたものであるが、二乗は未だ眞の空智を得ず、従つて二乗の空智では、未だこの如來藏を見る能はざるを示して居る(第九、空義隱覆眞實章)。

四聖諦の中で、たゞ一の滅諦のみ、有爲の相を離れた常住の第一義諦であつて、他の三諦は未だ有爲の相に入り、無常虚妄であることを述べ(第十、一諦章)、この一滅諦のみ、第一義の依たるを説いて居る(第十一、一依章)。

この一滅諦は、不思議で、衆生の心識を超越したものである。二乗に比すれば、凡夫は我見・妄想に執じて、斷常の二見に墮して居り、佛に比すれば、二乗も亦この二邊見に囚はれて居る。諸行を無常と見、涅槃を常なりと見るのは、生死即涅槃、涅槃即生死の見知からすれば、尙ほ未だ二邊に墮せるものである。衆生は五

陰に於て、常樂我淨の四顛倒があり、二乗は佛の四諦を説きたまふを聞くも、未だ一諦の理及び如來の法身を見ない。若し佛語を信じて、顛倒の見を離れ、常樂我淨の正見を起さんには、如來の法身即ちこれ常樂我淨の四波羅蜜なるを知るもので、これ即ち佛の眞子であり、佛により生じ、正法より生じたる者と云ふ(第十二顛倒、眞實章)。

次で獨り世出世の善法のみならず、生死の迷法も、亦如來藏に依ることを示し、如來藏あるが故に生死と説き、如來藏こそ有爲法の、依たり・持たり・建立たるの義と、如來藏有るが故に苦を厭ひ涅槃を樂求するの義とを述べ、この如來藏は、既に煩惱に纏繞せらるゝも、其の本體は煩惱と交渉なく、煩惱の中にありつゝも、其の自性は清淨なる所以を述べると、佛は、心の自性が清淨なることゝ、この清淨の心が煩惱に染せらるゝことゝは、了

神を受けて、恒沙の諸願が皆その中に入る一の大願、即ち攝受正法の大願を述べ、この攝受正法には、大功德と大利益とのあることをば、譬喩を擧げて説き、正法と攝受正法とが二而不二なる旨と、攝受正法と菩薩の行たる六波羅蜜とも、亦二にして不二なる所以を述べ、身命財を捨する者は、正法を攝受して、常に一切諸佛の爲に記せられ、一切衆生の瞻仰する所となり、正法を攝受する者は、未來によく法を護るべきを説くと、佛はこの攝受正法の大精進力を稱し、大乘に身命財を捨して、正法を攝受するの大利大福大果を説き、この攝受正法を以て、衆生を開示し教化すべきことを勧められる(第四、攝受正法章)。

次に佛は勝鬘をして、諸佛所説の攝受正法を説くべきを命ぜられるので、勝鬘は、攝受正法とは即ちこれ大乘であり、この大乘こそ、一切の聲聞・緣覺・世間出

世間の所依となるもので、佛の嘗て説かれた三乗の法も、要するに大乘の爲であり、二乗の果と雖も大乘と別なものでなく、阿羅漢・辟支佛の説も實は佛の方便に出でたもので、佛の眞意在つては、聲聞・緣覺の二乗はやがて大乘に入るの階梯であり、一乗の外に別に三乗有ること無く、三乗即一佛乗で、この一乗を得る者は無上正遍智を得、涅槃界に至り、如來の法身を得るもので、この究竟の一乗こそ、正にこれ佛の説かんとしたまふ所である。従つて三寶を單に三寶として歸依するは、有限の依であつて、未だ究竟せるものではない、三寶は三にして一、言ひ換へれば、三寶に歸依するはこれ如來に歸依することであり、その如來は即ち一乗であり、この一乗はまた三乗を會入した第一義乗である所以を述べて居る。

而して是を説くのに、先づ阿羅漢に恐怖あるのは、其の得たる果が究竟のものではないからであつて、彼が涅槃を得たといふのも、實は眞の涅槃界を去ること遠いとて、分段と不思議變易との二種の生死を説き、更にこの二種の存するのは、煩惱に住地と起との二種が存するに依ることを示し、二乗の果とはこの煩惱の一分を斷じて得たるものであるが、彼等は、其の得たる所に於ても、尙ほ大乘の法に愚ならず、他に由らずして、自らは有餘の地を得たること、やがては無上正遍智を得べきを知ると云つて、三乗を會して一乘に歸して居る(第五、一乘章)。

次で二乗の聖諦と佛の聖諦とを比較し、二乗の聖諦は無明住地の煩惱を斷ぜざるものであつて、これは無上正遍智に向する智に過ぎないが、如來の聖諦は無量の功德を成就せるものであることを述べる(第六、無邊聖諦章)。

此の如來の聖諦は、甚深の如來藏を説くもので、微細にして知り難く、凡夫二

はり十五章に分け、前の十三章を正說法とし、後の二章は勸信・護法を明すものと云ひ、前十三の中でも、初三を起説の方便と見、後の十三章が正說法であると解してゐる。

太子の御疏では、正宗分に十四章を分け、初の五章は乗の體を明して、萬善皆乗の體と爲し、次の八章は、乗の境を示すもので、有作・無作の八聖諦は、皆乗の境であると考へ、後の一章は、乗を行ずる人を示すもので、三忍の菩薩が、この乘に御して行ずと見るのである。而も初の五章の中、前三章は七地の行を明し、次の二章は八地の上行を明すもので、これが一乗の正體であるとされてゐる。

六

今十五章に分たれた經の内容を一瞥すると、佛の教を受けた波斯匿王と末利夫人とが、阿踰闍國王友稱の許に嫁して居

る女の勝鬘は、聰慧利根で、悟り易いから、佛法に歸依せしめやうとして、旃提羅を使として彼の女の許へ送る。勝鬘は旃提羅の齋した兩親の手紙を讀んで、佛を讃へると、佛は淨光明を放つて、彼の女の前に無比の身を現はしたまふ。勝鬘は重ねて佛身を歎じ、佛に歸依する辭を述べて、此世並に後世に攝受したまはんことを願ふので、佛は彼の女に記別を授けて、二萬阿僧祇劫の後、作佛して普光如來と號すべきこと、並にその佛利の有様を説かれる(第一如來實義功德章)。

勝鬘は記を受けると、恭敬して十大章即ち十種の弘誓を發し、犯心・慢心・恚心・嫉心・慳心を起さず。(以上攝律儀戒に當る)、自己の爲に四攝の法を行ぜず、困苦の衆生を見ては、之を饒益して衆苦を脱せしめ、諸の惡律儀と犯戒の者の中、折伏すべきものは折伏し、攝受すべきものは攝受して、惡道を滅せしめ、(以上攝衆

生戒に當る)、能く正法を攝受して、波羅蜜を忘れず、大乘を決定せん(攝善法戒に當る)ことを誓ひ、更に佛前に於て誠實の誓を立て、この十大受を受けて説の如く行ぜば、この大衆の中に於て天華を雨らし、妙音を出さんことを述べると、果して虚空中から天華が降り、其の眞實なるべきを説く妙聲が聞える。是を見聞して、會に在つた一切の衆も、勝鬘と所行を同じうせんことを發願すると、佛が又是に記を授けられる(第二、十大受章)。次で勝鬘はまた佛前で(一)此の善根もて、一切生に正法智を得ん、(二)正法智を得ては、衆生に説いて厭くこと無く、(三)身命財を捨して、この正法を護持せんとする三大願を發す。すると佛は、此の三大願は眞實にして廣大であつて、菩薩の恒沙の諸願も、悉くこの三大願の中に入ることを説かれる(第三、三大願章)。すると勝鬘は更に一步を進め、佛の威

門に入らんとするが、入ることが出来な
い。この騒ぎで王が覺め、事の次第を聞
いて、彼女の處置を賞し、大名に乞ふて
舍衛城に迎へ、王(勝光即ち波斯匿)の第
一夫人とした。勝鬘はよく王を扶け、國
政學つて人民豐樂、彼女は屢々王と共に
祇園に至つて佛の說法を聞き、厚く之を
信受したといふのである。(四分律十八に
も、同様の説話を載せ、末利夫人と呼ん
でゐる)。

然るに五分律二十二では、波斯匿王が、
その強力を恃んで、使を舍夷國に送り、
強要して釋種の女を娶らんとしたが、舍
夷國は、舊典を遵んで、一切の異族と婚
姻を肯んじない。然し波斯匿の勢を畏れ、
合議の結果、妾色の勝れた一好婢を選ん
で、是を釋種の女なりとして、王に送る
ことに決し、結局、一好婢がその選に當
つた、是が即ち勝鬘で、王に迎へられて、
その夫人となつたとある。

解 題

何れにするも、波斯匿王の夫人とする
ことは一であつて、本經の如く王の女と
するとは異つて居る。王の夫人末利は、
信佛の念厚かつたので、智度論三十三な
どにも、其の名が見ゆるが、本經に云ふ
勝鬘の名は極めて稀で、恐らく本經にの
み出で來るものであらう。蓋し經の内容
は、王の夫人たる女たるに何の關係
も無く、むしろ後に述ぶるが如く、本經
の勝鬘夫人とは、史的の存在たるよりも、
更に別の意義を持つものであつて、かの
維摩經に於ける維摩居士と同じく、大乘
の菩薩を具體化したるものに非ざれば、
大乘精神に然えた、自由主義の一女性を
示すもので、其の口を假つて述ぶる所は、
正しく二乗を超え、三乗を會入した、唯
一大乗の實説に外ならないのである。

五

國譯底本の麗藏は、本經を十五章に分

つてゐるが、他の諸本にはこの事がない。
尤も經の終、流通分に、本經の名を出すこ
と十五に及んで居り、それ等は順次、そ
れ／＼本經の内容と一致するものである
から、麗藏では、この流通分の經名によ
つて、本經に十五章を設けたものに依つ
たものと解せられるが、此等十五の分章
解釋に於ては、諸師各一致してゐないか
ら、今その二三を見ることにする。

先づ慧遠法師は、其の疏に於て、本經
に十五章を立て、前十四章は自利の行を
示し、第十五章は利他の行を明すものと
見、前十四の中でも、初め十三章は一乘
の體を顯はし、第十四章は信順の益を示
すものであるとして居る。

嘉祥大師の寶窟では、流通分にある「此
經所説、斷一切疑、決定了義」とある
をも、亦一の名と解して十六名を出だす
と見、經には十六名を擧げてゐるが、第
十六は別立すべからざるものとして、や

五

乗る人を明すものとしてある。書中「本義に云はく」として引用してある所は、まゝ寶窟に引く古注と合するものがある所を以て見ると、義疏は必ずしも太子の創見のみに依つたものではあるまいと云はれる。太子は人も知る如く、佛教を高麗の慧慈に學ばれたから、この義疏も、その説に依られたものであらう。何れにするも、注の文は簡潔ではあるが、極めて要領を得てゐる。普寂は、この疏を評して、慧遠・吉藏の判に比するに、更に深く經旨を顯はせりと云つて居る。

太子の三經の研究に努め、自ら三經學士と稱した。東大寺の凝然は、この太子の義疏に就て、勝鬘經疏詳玄記十八卷を著はして居る。またこの太子の義疏が、支那に傳はり、天台の湛然の門下、明空が之に注して勝鬘經私鈔といひ、六卷ある。此の書によると、唐の代宗の太曆七年(七七二)、我が僧使誠明、得證等八人

が、太子の法華義疏と共に、之を支那に傳へて、揚州の龍興寺靈祐に與へたのに始まり、我が慈覺大師が、入唐の折に携へ歸つたものであるといふ。

降つて徳川時代には普寂律師の勝鬘經顯宗鈔三卷がある。太子の義疏と、寶窟の説とを引用し、自己の見を述べて、多く太子の説に讚し、「性藏の體義を究め、權實の幽頤を探るは、聖皇の義疏、獨り其の善を擅にす」と述べ、從來本經を解するもの、餘りに寶窟を依用する事の多きを慨して居る。

四

本經はその題號の示すが如く、勝鬘夫人が一乘大方便の義を師子吼するのであるが、その説者たる勝鬘は、經では波斯匿王とその夫人末利との間に生れた女で、現に阿踰闍國の友稱王の許に嫁して居るのである。即ち本經では勝鬘は波斯匿王

の女であるが、他にまた之を玉の夫人とする説がある。

四

有部毘那耶雜事第七によると、迦毘羅衛國の一村邑の知事に、聰明にして儀容の勝れた、明月といふ一女があつた。父の死後、迦毘羅城主の釋子大名(Mahāpāṇḍita 摩訶男)に養はれるやうになつた。明月は常に衆の花を採つて鬘と爲し、之を主人の大名に進めるのを務としたので、勝鬘と名けた。一日彼の女は、佛の行乞に遇ひ、深く恭敬の心を生じ、飯を捧げて佛を禮し、去つて園中に居ると、勝光大王(波斯匿の譯)が、田獵の途次、園中に入り來つて、勝鬘を見て、水を求めた。勝鬘は思ふ所あつて、洗足には温水を持ち、洗面には半温水を持ち、飲用には冷水を齎した。王はひそかに彼の女の才智を喜ぶ。時に疲勞を覺えて、王が眠ると、王の身に禍のあらん事を慮つて、固く門を閉ぢた。暫くして四兵來りて、

たことは、間接に本經の價値を物語るものである。

本經の注疏の中、現存するものでは、淨影寺慧遠の勝鬘經義記二卷、嘉祥大師吉藏の勝鬘經寶窟三卷、慈恩大師窺基の説、門人義令記の勝鬘述記二卷、唐の明空の勝鬘經私鈔などが、支那撰述の重なるものであつて、先に擧げた諸師の注疏は多く失せて傳はらない。而して嘉祥大師の寶窟が、此等の間に在つて、獨り頭角を顯はしてゐる。蓋し大師は、本經の注釋に特に力を盡し、其の卷首には「余、翫味既に重く、鑑鑽年を累ね、古今を拮拾し、經論を搜檢し、其の玄文を扶し、勅して三軸と爲す」と云つてゐる所から見て、自ら恃む所大きく、古來の注疏また、多くその見る所となつたことがわかる。即ち本經を解するに當つて、當時行はれた大乘の諸經・論・釋を自在に引用する外、經の注疏をも引き、たと古注云、

舊說云、有人云、第一師說乃至第五師說など、と、説のみを擧げてゐるものゝ外、馥法師・瑠師・雲法師・旻師・無臂林・彬師・安師・宗師・曇達師など、多數の名を出して、その説を述べて居るのである。徳川時代の普寂が「事義文釋を詳にし、創學の識智を擴むるは、寶窟より精なるは無し」と云つたのも、當然である。寶窟の著者は、云ふまでも無く、三論宗の祖であるから、解釋の際、まゝその宗義を出し、經文の如來藏を注するに因んで、眞如緣起説を明した如きは、古來三論宗の緣起説として有名なものである。明空の私鈔六卷は、我が上宮太子の義疏を注したものと云はれるから、次に述べることにする。

三

我が國では、先づ指を聖徳太子の勝鬘經義疏に屈しなければならぬ。太子は義疏を製作される前に、經を講讀されて居

る。それは推古天皇の十四年の條に、日本書紀は「秋七月、天皇、皇太子に請ひ、勝鬘經を講ぜしむ、三日にして説き竟んぬ」と云つてゐるので、此の十四年に就ては異説も無いではないが、普通、書紀の説が用ひられて居る様であつて、その講讀の場所は橘の宮、即ち今の橘寺の所在地であると傳へられ、天皇は、講經の勞に酬ゆる爲、播磨の佐勢の地を賜ふたといひ、法隆寺聖靈院の太子の尊像は、この勝鬘經講讀の時の像であるといふ。

この講讀の事があつた後、先づ勝鬘經の義疏が作られ、次で維摩、法華の疏が出来たので、一説によると、推古天皇十七年の四月から約二ヶ年（己巳四月八日、始製勝鬘經疏、辛未年正月廿五日了）を費して居られる。この義疏では、經を詳しく分科し、要文を釋し、一經を十四章に分つ中、初の五は乘の體を明し、次の八は乘の境を明し、後の身子章は、乘に

であり、慧觀は維什門下の英俊で、當時關中四傑の一と云はれ、學の博きこと、當時無比と稱せられた。斯かる學匠の助に依つて、求那跋陀羅の譯が成されたのであつて、明帝の大始四年(四六八)七十五歳で終るまで、求那跋陀羅の在支は、三十餘年に及んで居る。

二

本經の註疏で今に傳はつてゐるもの、極めて少ないが、僧傳に見えたところは、決して少數では無いのみならず、譯經後幾ばくならずして、早くも諸師が註を作つて居る。

求那跋陀羅と同代の法瑤は、元嘉年中、武康の小山寺にあること前後十有九年、毎歲開講して、學者の笈を負ふもの、衢に盈ちたと云はれるが、涅槃・法華・小品等と共に本經の義疏を著はしたとあり、道生の弟子道猷(宋元徽中「四七三—四

七七)卒)は、新に勝鬘經の譯出を見て、師の是を見るに及ばざりしを歎じ、經に註して遺訓を墾宣して五卷とした(然し文煩なるが故に行はれなかつたといふ)。後に豫州の道慈法師が、この道猷の義を祖述し、彼が注した五卷を、分つて兩卷としたものが、世に行はれたとある。譯經の執筆、慧觀の弟子である僧馥には、亦本經の注があり、宋の昇明年中(四七八)に卒した慧通も、小品・勝鬘・雜心・毘曇等の義疏を製し、齊の永明七年(四八九)歿の法瑗、また本經を注し、梁の武帝(五〇二—五四九)も、親しく本經の義疏を制し、壽光殿に於て之を班べたと傳へられ、僧範(北齊の天保六年、西紀五五五歿)は、花嚴・維摩の諸經と共に、本經の疏記が有り、慧超は高士雁門の周續の爲に、經を注したと云はれる。隋に至ると延興寺の曇延には、寶性・勝鬘等の疏があつたといひ、演宗寺の靈裕は、央

二

掘・勝鬘等疏記を爲り、唐では弘福寺の僧辯にも本經の疏記があつて、廣く世に行はれたとあり、靈潤も亦、緣に隨つて維摩、勝鬘等の經を講じ、各疏部有りと傳へ、知玄には經疏四卷、僧徹には師子吼經疏の著の有つたことが見えてゐる。この外、新羅の元曉には疏二卷、遁倫に疏一卷、靖邁にもまた一卷の疏があつた。

注疏の述作は無かつたが、劉宋時代の屈指の學者、曇斌は勝鬘を研究し、斌の弟子僧宗は、涅槃・勝鬘・維摩等を善くし、講說すること約百遍、毎に、聽者千人に垂んとしたと云はれ、梁の寶亮(天監八年「五〇九」卒)は、勝鬘經を講ずること四十二遍に及んだといふ。梁の僧旻(四六七—五二七)は、武帝の命に依つて、慧輪殿に於て、本經を講じ、のち梁の僧暹(一—五七三)、また詔によつて、帝の義疏を敷述したと傳へられる。譯經後幾許ならずして、かく講說と注疏との行はれ

勝鬘師子吼一乘大方便廣經解題

一

勝鬘師子吼一乘大方便廣經 *Sūtra*

[*devī*] *śiṅhanāda sūtra* は、經錄に依る

と前後三譯があつた。第一譯は北涼の曇無讖(西紀四二二—四三三)の譯で、勝

鬘經一卷、亦云勝鬘師子吼一乘大方便

とあるものであり、第二譯は宋の元嘉十

三年(西紀四三七)に求那跋陀羅が揚州で

譯したものであり、第三譯は唐の菩提流

志に出づるものである。第一譯は既に早

く失はれ(開元錄第十四)、第三譯は、菩

提流志が譯述編成した大寶積經四十九會

(その中二十三會は、前代の譯者の譯を

採り二十九會をば流志が新に譯出した)

の第四十八會に存するもの、即ち是であ

る。而して求那跋陀羅の第二譯が則ち今

の經であつて、その内容を流志譯の勝鬘夫人會と對照すると、全く同本の異譯であることがわかる。三譯の内、二譯が現存し、初譯を聞いてゐるのである。

本經譯者求那跋陀羅 (*Guṇabhadra* 功德賢と譯す) は、中天竺の人で、大乘の學に深かりしが故に、世に號して摩訶衍と呼んだといふ。もと婆羅門であつたが、偶ま阿毘曇雜心論を見て驚悟し、乃ち深く佛法を崇め、後小乘の師を辭して大乘を學び、進んで菩薩戒を受け、其の父母にも勸めて、正法に歸せしめたと云はれる。其の人となり、慈和恭恪で、師に事へて禮を盡したといふ。

後師子國(錫蘭)に渡り、東亞に縁あるを感じて、船を汎べて、海路廣州に著い

たのが、宋の元嘉十二年(西紀四三六)であつた。文帝は名僧慧觀等を遣はして之を迎へ、厚く遇したと云はれ、彭城王義康なども師事した。多くは祇洹寺に於て諸經を譯出したが、勝鬘經は元嘉十三年(四三七)、丹陽郡で、楞伽經と共に譯出された(出三藏記一四)のであるが、慈法師の勝鬘經序に依ると、本經の譯出は、丹陽の尹であり、佛法の標越であつた優婆塞何尙之の請に出でたものとある。慧觀作とある經序では、求那跋陀羅が、手に正本を執り、口に梵音を宣べ、釋寶雲がこれを宋語と爲し、德行の諸僧慧嚴等百餘人が、音義を考へて、厥の文を定め、八月の十四日に初めて梵輪を轉じ、月の終に訖つたとあるが、出三藏記第十四では、徒衆七百餘人、寶雲が傳譯し、慧觀が執筆したことを述べてゐる。寶雲は嘗て入竺し、親しく彼の國の狀況を見、梵音を熟し、歸つて後諸經を譯出した名僧

の力によつて心正念に住するを謂ひ、隱の義に依れば、一心歸命の一念に既に正定聚に住して、往生の業事成辦したるが故に、臨終の善惡を問はざる難思議往生を示すものとす。

【九七】釋尊の選擇念佛。

【九八】六方段、六方諸佛の證誠は、第十七願の諸佛稱揚の願の實現たり(第一東方。唐譯には十方を列ぬ。他佛證誠を引き衆生の疑を除く。智圓は以下流通とす、非也。

【九九】總じては依正莊嚴、別しては名號。

【一〇〇】阿耨鞞 (Aksobhya)。不動と譯す。

【一〇一】須彌相 (Sumerudhivajra)。

【一〇二】大須彌 (Maha Sumeru)。

【一〇三】須彌光 (Sumeruprabhasa)。

【一〇四】恒河又は恒伽河 (Gangā)。

【一〇五】ガンヂス河のこと。

【一〇六】無量劫來不虛妄の徳に依つてこの相を得。誠實を表す。言虛妄ならば舌遮入せずして障礙すべしとす。

【一〇七】この經名、所詮は念佛往生。

【一〇八】第二南方。

【一〇九】第三西方。

【一〇一〇】第四北方。

【一〇一一】第五下方。

【一〇一二】達摩 (Dharma)。法と譯す。

【一〇一三】第六上方。

【一〇一四】梵音 (Brahmaphosa)。

【一〇一五】娑羅樹王 (Salendranāyaka)。

【一〇一六】經名に約して三世の利益を顯はす。慈恩義記は以下流通とす。

【一〇一七】異本に開此經受持者及開諸佛名者とす。これによらば諸佛名、本文は彌陀名とす

る妥當也。

【一〇一八】異本共之に作る。

【一〇一九】阿耨多羅三藐三菩提 (Anuttarasamyaksambodhi)。

無上正遍知と譯す。

【一〇二〇】大經下、開此經者於無上道終不退轉の意。

【一〇二一】過去發願せるものは已に生じ、今世發願せるものは順次に生じ、未來世に發願するものはその順次に往生すべきを發願往生の三世因果とす。

【一〇二二】實に發願せば三心を具し持名必生す。*この發願は、顯の義にては、第二十願の係念我國にて、自力の發願たり。隱の義を以てせば第十八願の、至心、信樂を含める欲生我國たり。共に念佛を離れぬ發願なりとす。

【一〇二三】諸佛、釋尊を讚す。

【一〇二四】六方段を云ふ。彼は諸佛彌陀を讚するものなるが、

果徳同證の故に此方釋迦より云へば諸佛所讚ともなる。

【一〇二五】釋迦牟尼 (Śakyamuni)。

能仁寂默と譯す。

【一〇二六】娑婆 (Saha-loka-dhātu)。

堪忍世界、此土等と譯す。

【一〇二七】五濁。即ち惡世。

【一〇二八】劫滅の時諸惡増す、故に劫濁と云。

【一〇二九】身見邪見等競ひ起る故。

【一〇三〇】貪瞋癡慢等思慮盛なる故。

【一〇三一】人身の量力色等減ずる故。

【一〇三二】命弱く壽促む故。

【一〇三三】他力念佛の法門。大經下若開斯經信樂受持難中之難無過此難等參照。

【一〇三四】大經上、序分八相示現等。

【一〇三五】大文第三流通分。

【一〇三六】阿修羅 (Asura)。非天と譯す。八部の一。

に生ずべし。

舍利弗われいま、諸佛の不可思議功德を稱讚するがごとく、彼の諸佛等もまた我が不可思議功德を稱説して、是の言を作したまはく、

釋迦牟尼佛よく甚難希有の事を爲して、よく、娑婆國土の上、願成壽命長久、第三壽命無量願、第五眷屬長壽願、上、願成文。

五濁惡世の 劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の中において阿耨多羅三藐三菩提を得て、諸の衆生の爲に是の一切世間、難信の法を説くと、舍利弗まさに知るべし、我れ五濁惡世において此の難事を行じて阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切世間の爲に此の難信の法を説く、是れを甚難とす。佛この經を説き終りたまふに、舍利弗および諸の比丘一切世間天人、阿修羅等佛の所説を聞き奉りて、歡喜し信受して禮を作して去りき。

願成。【七】阿羅漢(Arhan)。無生、應供と譯す。【七】正報も依報相應の故に極樂功德成就の中とす。【七】菩薩所得を明す。【七】阿鞞跋致(Avivihaṭṭha)。不退轉と譯す。始は虛不退、進みては位と行と念との不退。*此土不退の説をなす。大經下卷の首、第十一願成就の文參照。【七】最後の等覺の一生、佛位を補ふ。第廿二必至補處願。下願成、補處究竟。【七】上來極樂依正功德を稱讚す。【八】以下衆生をして欣慕せしめ、念佛往生を明す。

【八二】先づ願。發願即ち願生彼國なり。【八三】次に念佛の行を明すに際し雜善を簡ぶ。【八四】往生の因に眞實方便を分ち、往生の果に報化二土を立つるを以て、今一生することを得べからず」とあるは、報土の謂なりと見る。蓋し第十九願に諸功德を修して往生すとあるは、化土往生を示すものなればなり。

【八五】有戒無戒の善人を云ふも善導は廣く一切造惡の凡夫と釋せり。觀經下三品の意。又大經第十八願并下卷願成及び三輩の一向專念無量壽佛の意を以て見るべし。【八六】禮贊に云ふ一心稱佛不

亂と。*執持すなはち一心なり、一心すなはち信心なり」とも説き、第十八願の三心を含める一心、所謂他力の信仰とす。【八七】一日より増して七日乃至一生これ多善根を明す。一日七日は尋常別行にして臨終に通ず。【八八】起行の一心、念佛專稱無間、安心の一心即ち横具三心。*顯の義を以てすれば、第二十願自力の念佛を修するを謂ひ、隱の義に依れば第十八願の「乃至十念」と同じく、他力の信心に催されて起る自然の念佛なりとす。【八九】襄陽石刻經「一心不亂の下に專持名號以稱名故諸罪消

滅即是多善根福德因緣の廿一字あり。【九〇】第十九來迎引接願。大經下三輩觀經九品差別參照。【九一】阿彌陀佛……現に其の前に在します」は臨終の來迎を謂ふ。これ第十九願の諸行往生に誓はれたることなるが、第二十願の念佛往生も、自力に依るが故に來迎あり、第十九願の他方信心の往生に來迎無しと解す。これ顯の義に依るなり。若し隱の義に依れば、臨命終時は如く、時に臨むまでと謂はんが如く、一度佛に歸命して後は大悲無偽常照我の意有り。【九二】慈悲加祐の故に*水心不顛倒是顯の義に依れば、來迎

ごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、遍く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさは是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

舍利弗北方世界に焰肩佛、最勝音佛、難沮佛、日生佛、網明佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、遍く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさは是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

舍利弗下方世界に師子佛、名聞佛、名光佛、達摩佛、法幢佛、持法佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、遍く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさは是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

舍利弗上方世界に梵音佛、宿王佛、香上佛、香光佛、大焰肩佛、雜色寶華嚴身佛、娑羅樹王佛、寶華德佛、見一切義佛、如須彌山佛かくのごとき等の恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、遍く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさは是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

舍利弗なむちが意においていかに、何が故ぞ名づけて一切諸佛所護念經とする。舍利弗もし善男子善女人ありて、是の諸佛所説の名および經の名を聞かむ者は、是の諸の善男子善女人みな一切諸佛に共に護念せられて、みな阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得む。是のゆゑに舍利弗なむちら皆まさに我が語および諸佛の所説を信受すべし。舍利弗もし人ありて、已に發願し

いま發願し、當に發願して、阿彌陀佛國に生ぜむと欲せむ者は、是の諸人等みた阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得て、彼の國土において若しは已に生じ、若しはいま生じ、若しは當に生ぜむ。是のゆゑに舍利弗もろの善男子善女人もし信することあらむ者はまさに發願して彼の國土

物如の文を見よ。

【五】 第九神境通願。大經下神變自在。

【五】 大經上飲食自然盈滿。

【五】 經行。行道、散步也。

【五】 遊行と思惟と少病と消食と得定との五益あり。

【五】 四に化鳥演法風樹作樂。觀經第八像觀參照。

【五】 舍利 (Sattika)。秦聲、鶯鶯等と譯す。

【五】 迦陵頻伽 (Kalavinka)。妙音鳥と譯す。

【五】 共命 (Twinjivako)。兩首一身。

【六】 呂律の調子蓋へるなり。

【六】 五根五力とは信、進、念、定、慧の根と力。七菩提分とは念、擇法、精進、喜、輕安、定、捨の覺支。

【六】 八聖道分とは正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定。

【六】 三歸を深くす。入道の初中後共に念佛念法念僧の三歸に外ならざれば也。

【六】 第一無三惡趣願。同上願成。

【六】 大經上第十六離諸不善願。上願成。

【六】 上寶樹寶樹參照。

【六】 以下正報に就て莊嚴を明す。阿彌陀の稱。

【六】 彌陀を無量光 (Amita-

ごとし。舍利弗かの佛の國土には是のごとき 功德莊嚴を成就せり。

また舍利弗極樂國土には衆生生ずる者は皆これ 阿鞞跋致なり。其の中に多く 一生補處あり。

其の數はなほだ多し、是れ算數のよく知るところにあらず、ただ無量無邊阿僧祇劫をもて説くべし。

舍利弗衆生さかむ者はまさに 發願して彼の國に生ぜむと願すべし。ゆゑはいかに。是のごとき

諸の上善人と俱に一處に會することを得ればなり。舍利弗 少善根福德の因縁を以ては彼の國に

生ずることを得べからず。

舍利弗もし 善男子善女人ありて、阿彌陀佛を説くを聞きて名號を 執持すること、若しは一日、

若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日 一心みだれずば、

其の人 いのち終はる時に臨みて、阿彌陀佛もろもろの聖衆とともに現に其の前に在します。是

の人をはる時 ころ顛倒せず、即ち阿彌陀佛の極樂國土に往生することを得む。舍利弗 われ是

の利を見るがゆゑに此の言を説く。若し衆生ありて是の説を聞かむ者はまさに發願して彼の國土に

生ずべし。

舍利弗われいま阿彌陀佛の 不可思議功德を讚歎するがごとく、東方にまた 阿閼鞞佛、須彌相

佛、大須彌佛、須彌光佛、妙音佛かくのごとき等の 恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國に

おいて 廣長の舌相を出だして、遍く三千大千世界を覆ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生ま

さに是の 稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

舍利弗南方世界に日月燈佛、名聞光佛、大焰肩佛、須彌燈佛、無量精進佛かくのごとき等の

恒河沙數の諸佛まします。おのおの其の國において廣長の舌相を出だして、遍く三千大千世界を覆

ひて誠實の言を説きたまふ。汝ら衆生まさに是の稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經を信すべし。

舍利弗西方世界に無量壽佛、無量相佛、無量幢佛、大光佛、大明佛、寶相佛、淨光佛かくの

佛說阿彌陀經

同じ。

【三六】 極樂は須摩提(Sukhāvatī) 大經には安樂と云ひ、

又安養、清泰、妙意(Sammiti) と云ふ。

【三七】 梵本には(Amitāyus) とせり無量壽也。

【三八】 身にも心にも憂苦なし。

【三九】 以下四段依報莊嚴を舉げて極樂を明かにす。一に寶樹、大經上寶樹周滿、觀經第四寶樹觀詳説。

【四〇】 二に寶池樓閣蓮華。寶池は大經上寶池德水、觀經第五寶池觀參照。

【四一】 七寶は次に云ふ金銀等なり。大經は赤珠を珊瑚とす。

【四二】 八功德とは澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤澤、安和、除飢渴諸患、長養諸根。

【四三】 觀經第六寶樓閣觀。

【四四】 大經上蓮華放光。

【四五】 三に天樂、金地、雨華、供佛、經行。

【四六】 觀經第六寶樓觀に細説す。鼓せざるに自ら鳴る。

【四七】 大經上七寶爲地。觀經第二水想觀瑠璃地。

【四八】 大經上香華敷地參照。

【四九】 曼陀羅(Mandāra)。曼陀羅而雨曼陀羅華は異本雨天に作る可なり。

【五〇】 一足ある華を盛る器。

【五一】 第二十三供養諸佛觀。大經下讚偈億の如來等。同、供

舍利弗極樂國土には是のごとき功德莊嚴を成就せり。

また舍利弗かの佛の國土には常に天樂を作す。黄金を地とせり。晝夜六時に曼陀羅華を雨らす。其の國の衆生常に清旦を以ておのおの衣衾を以て諸の妙華を盛りて、他方十萬億の佛を供養す。即ち食時を以て還りて本國に到りて飯食し經行す。舍利弗極樂國土には是のごとき功德莊嚴を成就せり。

また次ぎに舍利弗かの國には常に種種の奇妙なる雜色の鳥あり、白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。是の諸のとり晝夜六時に和雅の音を出だす、其のこゑ五根五力七菩提分、八聖道分かくのごとき等の法を演暢す。其の土の衆生この音を聞きをはりて、皆ごとごとく、佛を念じ法を念じ僧を念す。舍利弗なむち此の鳥は實に是れ罪報の所生なりと謂ふことなかれ。

ゆゑはいかに。彼の佛の國土には三惡趣なし。舍利弗その佛の國土にはなほ三惡趣の名もなし、いかにいはむや實あらむや。是のもろもろの鳥は皆これ阿彌陀佛の法音をして宣流せしめむと欲して變化して作したまへるところなり。舍利弗かの佛の國土には微風ふきて、諸の寶行樹および寶羅網を動かして、微妙の音を出だせり。譬ふれば百千種の樂を同時に俱に作すがごとし。是の音を聞く者はみな自然に念佛念法念僧の心を生ず。舍利弗その佛の國土には是のごとき功德莊嚴を成就せり。

舍利弗なむちが意においていかに、彼の佛を何がゆゑぞ阿彌陀と號づけたてまつれる。舍利弗かの佛の光明無量にして十方の國を照らして障礙するところなし、是のゆゑに號づけて阿彌陀とせり。また舍利弗かの佛の壽命および其の人民無量無邊、阿僧祇劫なり、故に阿彌陀と名づく。舍利弗阿彌陀佛成佛よりこのかた、今において十劫なり。また舍利弗かの佛に無量無邊の聲聞弟子あり、みな阿羅漢なり、是れ算數のよく知るところにあらず。諸の菩薩衆も亦また是の

成就せり。

- [一三] Mahākāśyapa
- [一四] Mahākātyāyana
- [一五] Mahākauśhīna
- [一六] Revata
- [一七] Suddhi-paṇṭhaka, Cū-
- [一八] Nanda
- [一九] Ananda
- [二〇] Rāhula
- [二一] Gavāṃpati
- [二二] Pīṭhola-Bhārad vāja
- [二三] Kāśhāpya
- [二四] Mahākapphina
- [二五] Vāṅkula
- [二六] Anuruddha
- [二七] Bodhisattva 覺有情と譯す。
- [二八] Mahāsattva 大士と譯す。
- [二九] Mañjārī-kumārābhūta
- [三〇] Aśhva bodhisattva
- [三一] Gaṇḍhāśvāṭṭh, bodhisattva
- [三二] 釋提桓因 (Śakra) Deva-nāmanḍava。帝釋天王と譯す。
- [三三] 大文第二正宗分。今の如く請問なくして説く經を無問自説經として大悲と深智の流出とす。
- [三四] 南閻浮提にありて西を定む。一方を指すは亂想を絶つなり。西は後方未來を表す。
- [三五] 一大千世界を一佛土とし十萬億に及ぶ、大經上に現在西方去此十萬億刹と云ふに

佛說阿彌陀經

姚秦龜茲三藏鳩摩羅什譯

是のときを我れ聞きき。一時佛舎衛國の祇樹給孤獨園に在しまして、大比丘衆千二百

五十人と俱なりき。皆これ大阿羅漢なり、衆に知識せられたり。長老、舍利弗、摩訶目犍連、

摩訶迦葉、摩訶迦旃延、摩訶俱絺羅、難婆多、周利槃陀伽、難陀、阿難陀、羅睺羅、憍梵波提、

賓頭盧頗羅墮、迦留陀夷、摩訶劫賓那、薄拘羅、阿菟樓駄かくのとき等の諸の大弟子なり。な

らびに諸の菩薩、摩訶薩あり、文殊師利法王子、阿逸多菩薩、乾陀訶提菩薩、常精進菩薩かく

のとき等の諸の大菩薩および釋提桓因等の無量の諸天大衆と俱なりき。

爾の時佛長老舍利弗に告げたまはく、「是れより西方十萬億の佛土を過ぎて世界あり、名づ

けて極樂といふ。其の土に佛まします、阿彌陀と號づけたてまつる。いま現に在しまして説法し

たまへり。舍利弗かの土を何がゆるぞ名づけて極樂とする。其の國の衆生もろもの苦あること

なく、ただ諸の樂のみを受く、ゆるに極樂と名づく。

また舍利弗極樂國土には七重の欄楯七重の羅網ある七重の行樹あり。皆これ四寶をもて周匝し圍

遶せり。是のゆるに彼の國を名づけて極樂といふ。

また舍利弗極樂國土には七寶の池あり。八功德水の中に充滿せり。池の底には純ら金沙を以

て地に布けり。四邊に階道あり。金・銀・瑠璃・玻璃をもて合成せり。上に樓閣あり、また金・銀・瑠

璃・玻璃・磔磔・赤珠・瑪瑙を以て而もこれを嚴飾せり。池の中に蓮華あり、大さ車輪のごとし、青

色には青光あり、黄色には黃光あり、赤色には赤光あり、白色には白光あり、微妙香潔なり。

佛說阿彌陀經

一

- 【一】この經極樂依正、願生念佛、諸佛證誠を説く。念佛を宗とし、往生を體とす。依正の主、所歸の佛、所證の體を擧げて經名とす。本文には稱讚不可思議功德一切諸佛所護念經と名く。*此の經は、釋尊出世の本懷を顯はさんところ、文間自説したまへるところ、文には第二十願の意を述べ、自力念佛の往生を示したれば、諸行往生の方便假門(要門)に對して眞門と名く。
- 【二】大文第一序分。證信序。
- 【三】以下發起序。
- 【四】舎衛(Savathi)。閉國實、又は豐徳と譯す。これ國名に非ず中央北憍薩羅國の都城の名。
- 【五】祇樹又は逝多林(Jeta-vana)。勝林と譯す。
- 【六】比丘(Bhikkhu)。乞士と譯す。衆は僧伽、和合團なり。
- 【七】千二百五十人を擧ぐるは三迦葉の弟子一千人を舍利弗目連の弟子二百五十人を併せ度するに基き大衆の代表とす。
- 【八】阿羅漢(Arhan)應供と譯す。
- 【九】徳高く望み重く名天下に滿つ。
- 【一〇】長老。舍利弗以下十六人年長じ徳高き上座なれば也。
- 【一一】Sripautan
- 【一二】Mahamandgalyayana

定散二善偏に念佛往生の正機を顯示せしものに外ならずとす。

【三〇二】王宮會終る。
【三〇三】大文第五着聞會。初に序分。

【三〇四】正宗分。
【三〇五】流通分。化前序聲聞菩薩ありて雜類なく、今雜類あ

りて聲聞菩薩なし互に顯はす。
【三五】夜叉(夜叉)勇健、暴惡と譯す。八部の一。

佛說觀無量壽經終

照。

【三五】第七下品上生。造十惡經罪の凡夫。

【三六】謗法の重罪なきも十惡等を作すの意。

【三七】愚人。善惡因果の理を辨ぜざるを愚とす。

【三九】小乘に十二部ありや否や異説あるも、大乘には十二部を具すとす。大乘十二部經は即ち大乘經也。

【四〇】首題。南無大方廣佛華嚴經南無妙法蓮華經等を云ふ。

【四一】稱名念佛の明文、下下品及び付屬文參照。南無阿彌陀佛は歸命無量覺なり無量壽

(Amitayus)無量光(Amitabha)なれば Namah amitayubudhan なるも俗化の Ananta (無量壽)としし Kamut-ami-tabudhan なるか。

【四二】「佛名を稱するが故に」とあれば、稱名往生たり。但し隱の義によれば、開稱是一であり、開即信なるが故に、信心往生に外ならず。次の下中、下下兩品の往生亦然り。

【四三】諸法實相の教理。

【四四】下三品三具足の念佛によりて往生し生後菩提心を發す。

【四五】天台所覽本には以下往生を得までの文なし。善導はこの文を重舉行者之益、非但

念佛獨得往生、法信通念亦得去也と釋せり。三寶通念の機も往生することを顯はす。

【四六】第八下品中生。破戒次罪の凡夫人。

【四七】僧祇(Sanghata)。僧衆に屬する物四あり。一常住常住物、寺院田園穀財等常住

大衆のみ受用すべきもの。二十方常住物粥飯等作相して十方往來僧共に受用すべきもの。

今住祇物と云ふは此の二なり。三現前現前物、施主が現在僧物施主作相して十方衆僧に供養するもの。

【四八】前項の三と四となり。

【四九】不淨說法。名利の爲にする說法。佛藏經五過を擧ぐ。

【五〇】獲湯罐炭鎔銅鐵丸等あるを以て衆火と云ふ。

【五一】十力とは知是處非處力、業智力、定力、根力、欲力、眼力、至處道力、宿命力、天眼力、漏盡力。

【五二】大經上威神光明最尊の説參照。

【五三】五分法身。前三因德後二果德即ち戒定慧三學究竟して涅槃菩提を成就するなり。

又是れ大經下の五眼、下の五智に相應する佛德なり。

【五四】淨華を吹散す。

【五五】この二句或は上に屬し

て罰せば、即ち七寶池の中の蓮花の内に往生するを得となす。

【五六】五清淨なるを梵音と云ふ。正直、和雅、清徹、深滿、遠聞。

【五七】第九下品下生。具造五逆重罪の凡夫。

【五八】五逆は殺父、殺母、殺阿羅漢、破和合僧、惡心出佛身血にして願文に往生を除くも、阿闍世に禁父禁母等あり、提婆に逆罪あり、今經の由致となる。故に當品に逆者往生を明す。

【五九】領解して佛名を念する逆なし。

【六〇】念より稱を行ずるは尙難く、稱より念を起すの易きを示す。

【六一】至心とは助け給へを云ふなり、三心なり。

【六二】この品滅罪三。一往生障十念即ち滅す。二見佛障、滿十大劫滅。三發心障、今開法除滅す。

【六三】大經下三輩の下參照。

【六四】大文第三得益分。

【六五】一經始終を開く。

【六六】序分欣淨緣の光臺現國。

【六七】第七觀の初に見たる住立空中の三尊。

【六八】往生の授記。

【六九】往生以後諸佛の目前に

現在するを見ること。

【七〇】大文第四流通分。

【七一】一に經宗を問ふ。

【七二】二に經宗を問ふ。

【七三】初六觀依報。

【七四】第九觀七八ここに攝す。

【七五】第十觀。

【七六】第十一觀。

【七七】第十觀。

【七八】兩三昧を宗とするも先づ定觀を勸む。定觀多きも三尊を主とす。

【七九】觀察憶持忘れざる也。

【八〇】散善流通。散善申稱名最たるが故に特に念佛を賺す。

【八一】分陀利(Pundarikaka)。白蓮と譯す。花中之最。

【八二】道場。佛果の異名。

【八三】諸佛の家。極樂のこと。諸佛同等より名く。

【八四】付屬念佛。廣く定散を説くも、獨り念佛持名を付屬するは、彌陀の本願釋迦の本意なればなり。定散諸行は、要門第十九願の意に當るを以て、方便化土に往生し、念佛は弘願第十八願の意に當るを以て、眞實報土に往生す。今此の付屬の文に於ては、定散兩門の益を措きて、念佛持名の要法を銘肝せしむ。是れ即ち弘願大經の妙法出でて、要門自力の諸善と比較顯勝し、

生死の罪を除く、いかにいはむや。憶念せむをや。若し念佛せむ者はまさに知るべし、此の人は是れ人中の分陀利華なり、觀世音菩薩大勢至菩薩をの勝友と爲る、當に道場に坐すべきをもて諸佛の家に生ずべし。』

佛阿難に告げたまはく、『汝よく是の語を持つとは即ち是れ無量壽佛の名を持つなり。佛この語を説きたまふとき、尊者目犍連阿難および韋提希等、佛の所説を聞きたてまつりてみな大に歡喜す。』

爾のとき世尊みあし虚空を歩みて耆闍崛山に還りたまふ。爾のとき阿難ひろく大衆の爲に上のごとき事を説く。無量の諸天および龍夜叉佛の所説を聞きたてまつりて、みな大に歡喜して佛を禮したてまつりて退きさき。

ひ、或は前品の深信因果に同じきを亦信と云ふ。
【三六】佛果菩提を求むる心。
【三七】瓔珞經所説十信各々十ありて百法明門とす。十地經初地所成とす。或は云ふ五位百法に三諦に達すと。前説可照。
【三八】大經下の始、上輩等參照。
【三九】第四中品上生。小乘根性上善の凡夫。
【四〇】五戒。不殺、不盜、不淫、不妄語、不飲酒。
【四一】八戒と齋食。八戒は五戒に不著華鬘瓔珞香油、不歌舞及觀聽、不坐高廣大牀を加ふ。五と八とは在家二衆の戒。

【三三】諸戒。五八十具の戒。十戒具足戒は出家五衆の戒。
【三四】苦空等を説き出家を讚する皆小乘根機なればなり。
【三五】四諦とは苦、集、滅、道。
【三六】阿羅漢(Arhan)。應供と譯す。無學究竟の位。
【三七】三明。又三達とも云ふ。宿住智證明、過去に通ず。死生智證明、未來に通ず。漏盡智證明、現在の事に通ず。
【三八】六通とは天眼、天耳、神足、他心、宿命、漏盡。
【三九】八解脫とは内有色外觀色、内無色外觀色、不淨相、空處、識處、無所有處、非非

想所、滅盡。
【四〇】第五中品中生。小乗下善の凡夫人。
【四一】齋日に在家が一日一夜を期して出家の八戒を持つ故に八戒を一日夜戒とも云ふ。
【四二】沙彌の十戒比丘の具足戒は生涯受持すべきもの、今臨終の一日一夜受持を云ふ。
【四三】沙彌(Saṃghaṇa)。息慈、勸策と譯す。小沙門、十戒を持す。十戒は八戒齋と根寶戒。
【四四】具足戒。大僧大尼所受の戒、二百五十等なり。
【四五】威儀。大乘に八萬、小乘に三千の威儀細則あり。

【四六】諸佛の教。三世諸佛通じて斷惡修善の持戒を勸む。謂ゆる通誠偈、諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛教と。
【四七】須陀洹(Śrotāpanna)。預流と譯す。小乘初果。
【四八】第六中品下生。世善上福の凡夫。
【四九】善知識。指導者、以下四品等しく臨終回心なれば善知識は教へて淨土の旨趣を明すを要す。
【五〇】大經上の值遇發心參照。
【五一】大經上の願文參照。
【五二】大經下、三輩の中參照。

【三〇】淨土に晝夜なく華の開合を晝夜とす。今此方の一夜を宿とし華合すとす。
【三一】阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyaṅsambodhi)。無上正偏知と譯す。
【三二】不退。往生に處不退を得たり。今は三賢位不退たるべし。
【三三】大般若四一四の三摩地品に百十三三昧を列釋す、參照。
【三四】第三上品下生。大乘下善の凡夫。
【三五】或信或不信を亦信と云

十惡を作りて諸の不善を具す。かくの如き愚人惡業を以てのゆゑに、まさに惡道に墮して多劫を經歷して苦を受くること窮まりなかるべし。是の如き愚人命終の時に臨みて、善知識の種種に安慰して、爲に妙法を説きて教へて念佛せしむるに遇へり。此の人苦に逼められて、念佛するに違あらず、善友つけて言はく、「汝もし、念することあたはずば、まさに無量壽佛と稱すべし」と。是のごとく至心に聲をして絶えさらしめ、十念を具足して南無阿彌陀佛と稱す。佛名を稱するがゆゑに、念念の申において八十億劫の生死の罪を除く。命終のとき金蓮華の猶し日輪のごとくなるが、其の人の前に住せるを見る。一念の頃のごときに即ち極樂世界に往生することを得。蓮華の中において十二大劫を満じて、蓮華まさに開く。觀世音大勢至大悲の音聲を以て其れが爲に廣く諸法實相、除滅罪の法を説く、聞きをはりて歡喜して、時に應じて即ち菩提の心を發こす。是れを下品下生の者と名づく。是れを、下輩生想と名づけ、第十六の觀と名づく。」

是の語を説きたまふとき、韋提希五百の侍女とともに、佛の所説を聞き、時に應じて即ち、極樂世界の廣長の相を見、佛身および二菩薩を見ることを得て、心に歡喜を生じて未曾有なりと歎じて、廓然として大悟して無生忍を得。五百の侍女阿耨多羅三藐三菩提心を發こして、彼の國に生ぜむと願す。世尊、『ことごとく皆まさに往生すべし、彼の國に生じをはりなば、諸佛現前三昧を得む』と記したまふ。無量の諸天は無上道心を發こしぬ。

爾のとき阿難すなはち座より起ちて、前みて佛に白して言さく、『世尊まさにいかに此の經を名づくべき。此の法の要をばまさにいかに受持すべきか。』佛阿難に告げたまはく、『此の經を觀極樂國土、無量壽佛、觀世音菩薩、大勢至菩薩と名づけ、また、淨除業障生諸佛前と名づくべし。汝まさに受持して忘失せしむることなかるべし。此の三昧を行ぜむ者は、現身に無量壽佛および二大士を見ることを得む。若し善男子善女人ただ佛の名二菩薩の名を聞くに、無量劫の

- 【〇六】第九命終時聖來迎接不同去時遲疾を明す。
- 【〇七】第十到彼華開遲疾不同を明す、今は華合の障なし。
- 【〇八】第十一華開以後得益。後の八品文に具缺あるも等く十一門あるべしとは善導の説なり。
- 【〇九】陀羅尼(Dharani)。總持と譯す。
- 【一〇】第十二總結。
- 【一一】第二上品中生。大乘次善の凡夫。
- 【一二】讀不讀あるを云ふ。若し横には品品萬行あるも豈には上上の三種の中讀誦を受法とし、上中これに對して不必讀誦と云ふ。
- 【一三】義趣。經旨即ち大乘空義。
- 【一四】第一義。緣起無自性の空也第二に對する第一にあらす。
- 【一五】因果は世出世に通ず。善惡苦樂因果と、解脫道果となり。
- 【一六】謗法は最重の罪、五逆よりも重し。
- 【一七】法子。佛法中に智解を生ずる故に法の子なり。
- 【一八】大乘の義これ第一義。
- 【一九】合掌又手。十指相又て掌を合するを云ふ。歸命合掌金剛合掌とも名く。

彌陀佛と稱せしむ。(二五八) 佛名を稱するがゆゑに五十億劫生死の罪を除く。爾の時の佛すなはち化佛けがふ化觀世音化大勢至を遣はして、行者の前に至らしめて讚じて言たまはく、「善男子なむち佛名を稱するがゆゑに諸罪消滅せり、我れ來りて汝を迎ふ」と。是の語を作しをはりたまふに、行者すなはち化佛の光明の其の室に遍滿せるを見る。見をはりて歡喜してすなはち命終す。寶蓮華に乗じて化佛の後に隨ひて寶池の中に生ず。七七日を経て蓮華すなはち敷く、華の敷く時にあたりて、大悲觀世音菩薩および大勢至、大光明を放ちて其の人の前に住して、爲に甚深の十二部經を説く。聞きをはりて信解して、無上道心を發こし、十小劫を経て百法明門を具して、初地に入ることを得。これを下品上生の者と名づく。佛名法名を聞き、および僧名を聞くことをえ、三寶の名を開きて即ち往生を得。」

佛阿難および章提希に告げたまはく、「下品中生の者とは、或は衆生ありて五戒八戒および具足戒を毀犯す。かくのごとき愚人、僧祇物を偷み、現前僧物を盗み、不淨說法して慚愧あることなく、諸の惡業を以て自ら莊嚴す。かくのごとき罪人惡業を以てのゆゑにまさに地獄に墮すべし。命をはらむと欲するとき地獄の衆火一時に俱に至る、善知識の大慈悲を以て爲に阿彌陀佛の十力威徳を説き、廣く彼の佛の光明神力を説き、また戒定慧解脱解脫知見を讚するに遇へり。此の人さゝをはりて八十億劫の生死の罪を除く。地獄の猛火化して清凉の風と爲りて諸の天華を吹く。華の上になん化佛菩薩ありて此の人を迎接したまふ。一念の頃のごときに即ち往生を得。」

七寶池の中に蓮華の内にして六劫を経て蓮華すなはち敷く。華の敷く時にあたりて觀世音大勢至梵音聲を以て彼の人を安慰して、爲に大乘甚深の經典を説く。此の法を聞きをはりて、時に應じて即ち無上道心を發こす。是れを下品中生の者と名づく。」

佛阿難および章提希に告げたまはく、「下品下生の者とは、或は衆生ありて不善の業たる五逆

義を以てすれば、即と便とを分ち他力の往生を即往生し、自力の往生を便往生とす。

【二五】 第四に辨定三心以爲正因。

【二六】 至誠等は第十八願の至心信樂欲生我國の文に當る。至誠とは三業二利、制修皆眞實なるを云ふ。

【二七】 深心。信ずる心、機に凡夫自ら出離の緣なしと信じ、法に彌陀本願三佛三經を信ず。

【二八】 廻向發願心。過現三業一切の善を眞實信心中に廻向して往生せんと願する也。

【二九】 第五に正明簡機堪與不堪。去行實に三種のみにあらず、横に萬行に通ず。

【三〇】 第六に受法不同。序の三願と比するに今三福を第一に攝め、行福中の讀經を第二に、六念を別開して第三とす。

【三一】 初の不殺を擧げて修十善業を攝し慈下を示して孝養奉事の敬上を顯はす。

【三二】 諸大乘戒佛敎的徳徳を該釋す。

【三三】 六念とは佛、法、僧、戒、捨、天を念す。

【三四】 今第七。十一門義第八廻所修行願生彌陀佛國なり。

【三五】 今第八。十一門義第七修業時節延促有異。通じては一發心後畢命爲期無有退轉な

じて即ち、阿羅漢道をえ、三明、六通ありて、八解脱を具す。是れを中品上生の者と名づく。

【二四】中品中生の者とは、若し衆生ありて若しは、一日一夜八戒齋を受持し、若しは、一日一夜、沙彌戒を持ち、若しは一日一夜、具足戒を持ち、威儀缺くることなし。此の功德を以て迴向して極樂國に生ぜむと願求す。戒香薫修するをもて此のごとき行者いのちをばらむと欲するとき、阿彌陀佛もろもろの眷屬とともに金色の光りを放ち、七寶の蓮華を持して行者の前に至りたまふを見る。

行者みづから聞けば空中に聲ありて讃じて言はく、「善男子なむちがごとき善人、三世諸佛の教へに隨順するがゆゑに、我れ來りて汝を迎ふ」と。行者みづから見れば蓮華の上に坐す。蓮華すなはち合す、西方極樂世界に生じて寶池の中に在り、七日を経て蓮華すなはち敷く。華すでに敷きをはりぬれば目を開き合掌して世尊を讚歎し、法を聞きて歡喜して、須陀洹をえ、半劫を經をはりて阿羅漢を成す。是れを中品中生の者と名づく。

【二五】中下生の者とは、若し善男子善女人ありて父母に孝養し、世の仁慈を行ぜむに、此の人のうち終はらむと欲するとき、善知識の其れが爲めに廣く阿彌陀佛の國土の樂事を説き、また法藏比丘の四十八願を説くに遇へり、此の事を聞きをはりてすなはち命終す。譬ふれば壯士の臂を屈伸する頃のごときに、即ち西方極樂世界に生ず。生じて七日を経て、觀世音および大勢至に遇ひ、法を聞きて歡喜す。一小劫を経て阿羅漢を成す。是れを中品下生の者と名づく。是れを、中輩生想と名づけ、第十五の觀と名づく。」

【二六】佛阿難および韋提希に告げたまはく、「下品上生の者とは、或は衆生ありて、衆の惡業を作る、方等經典を誹謗せずといへども、此のごとき、愚人おほく衆惡を造りて慚愧あることなし。命をはらむと欲するとき、善知識のために、大乘十二部經の、首題の名字を讚するに遇へり。是のごとき諸經の名を聞くを以てのゆゑに、千劫の極重の惡業を除卻す。智者また教へて合掌叉手して、南無阿

【二八】第九觀。

【二九】第七觀。

【三〇】觀音八尺なれば勢至も八尺等。

【三一】首相。觀音の頂上には化佛あり、勢至の頂上には寶瓶あるを云ふ。

【三二】上來定善依正十三觀終る韋提の致請に答ふるもの盡く。

【三三】異本想字なし。

【三四】上來定善依正十三觀終る韋提の致請に答ふるもの盡く。

【三五】上品上生。以下善導疏第四散善義廣説す。散機を攝せんが爲に三福九品を説く。

【三六】九品の機は大經の三輩に同じ。諸師は十六皆定とするも善導は散善とし如來自説の法門とす。各品に十一門義ありとし、今第一總明告命。

【三七】機の上中下に各三別すれば九品となる、所生の土別ならず。第二に辨定其位、往生の品類なり。諸師上品は上位菩薩とするも、善導は九品悉く凡夫とし、遇大の緣勝るを以て大乘上善とするのみ。

【三八】第三に總舉有緣之類。具三心者なり。

【三九】總相欣求心。

【四〇】すなはち(即便)は、顯の義に依れば異時即にして、即と便とを分たざるも、隱の

て、遍く十方に至りて諸佛に歷事し、諸佛の所において諸の三昧を修し、一小劫を経て無生忍をえ、現前に授記せらる。是れを上品中生の者と名づく。

上品下生の者とは、また因果を信じて大乘を誘ぜず、たゞ無上道心を發こす。此の功德を以て迴向して、極樂國に生ぜむと願求す。行者のち終はらむと欲するとき、阿彌陀佛および觀世音大勢至もろもろの眷屬とともに、金蓮華を持して五百の化佛を化作して、來りて此の人を迎へたまふ。五百の化佛一時に手を授けて讚じて言たまはく、「法子なむぢいま清淨にして無上道心を發こす、我れ來りて汝を迎ふ」と。此の事を見るとき、即ち自ら身を見れば金蓮華に坐す、坐しをはれば華合し、世尊の後に隨ひて即ち七寶池の中に往生することをえ、一日一夜にして蓮華すなはち開く。七日の中に乃ち佛を見てまつることを得。佛身を見るといへども、諸の相好においてこゝろ明了ならず。三七日の後において乃ち了として見たてまつる。衆の音聲のみな妙法を演ぶるを聞く、十方に遊歴して諸佛を供養し、諸佛の前において甚深の法を聞く、三小劫を経て百法明門をえて歡喜地に住す。是れを上品下生の者と名づく。是れを上輩生想と名づけ、第十四の觀と名づく。

佛阿難および韋提希に告げたまはく、「中品上生の者とは、若し衆生ありて五戒を受持し、八戒齋を持ち、諸戒を修行して、五逆を造らず、衆の過患なからむ。此の善根を以て迴向して西方極樂世界に生ぜむと願求す。命終の時に臨みて、阿彌陀佛もろもろの比丘とともに、眷屬に圍遶せられて、金色の光りを放ちて、其の人の所に至りて、苦空無常無我を演説し、出家の衆苦を離るゝことを得ることを讚歎したまふ。行者見をはりてこゝろ大に歡喜す。自ら己身を見れば蓮華臺に坐せり、長跪合掌して佛のために禮を作す、未だ頭を擧げざる頃に、即ち極樂世界に往生することを得。蓮華すなはち開く。華の開く時にあたりて衆の音聲の四諦を讚歎するを聞く、時に應

主伴を具觀せるも往生の爲なり。故にこの觀あり。

【七】勝解作意して觀想を運ぶ。

【七】この處經文略なり。自心起すとは命終の想をなし、聖衆來迎すと思ひ、蓮華臺に乗じて往生すとの想ひを作し等の文意ありと知るべし。

【七】十二分數。修多、祇夜、和伽羅那、伽陀、優陀那、尼陀那、阿波陀那、伊帝浮陀達磨、優波提舍の十二、もと聖教の區分なるが、今は淨土の三部經を云ふ。

【七】第十三雜觀。依正通別真假總雜して觀する故に雜觀と云ふ。或は小心下機の次第觀なる故に漸觀と云ふ。

【七】前の十二觀成ぜざるも求生の意彌と加はる。

【七】第九佛身觀。

【七】身量無邊。前に六十萬億等と云ふも實に無邊なり。

【七】如來願力にて凡夫も眞觀成就するものありとの意を明す。他力觀成なり。

【七】宿願力。三力中の大誓願力。これに三昧定力、本功德力を加へて三力とす。

【七】丈六像觀と眞身觀との比較。

【七】大身。六十萬億身。

【七】丈六八尺身即ち今の觀

精進勇猛なるがゆゑに、阿彌陀如來觀世音大勢至無數の化佛、百千の比丘聲聞大衆無數の諸天、七寶の宮殿ともなり。觀世音菩薩は金剛臺を執り、大勢至菩薩とともに行者の前に至り、阿彌陀佛は大光明を放ちて行者の身を照らし、諸の菩薩とともに手を授けて迎接したまふ。觀世音大勢至無數の菩薩とともに行者を讚歎して、其の心を勸進す、行者見をはりて歡喜踊躍し、自らその身を見れば、金剛臺に乗じて佛後に隨從す。彈指の頃のごときに彼の國に往生す。彼の國に生じをはりて、佛の色身の衆相具足したまへるを見たてまつり、諸の菩薩の色相具足せるを見る。光明寶林妙法を演説す、聞きをはりて即ち無生法忍を悟る。須臾の間を経て諸佛に歷事して十方界に通じ、諸佛の前において次第に授記せられ、還りて本國に到りて無量百千の陀羅尼門を得。これを上品上生の者と名づく。

上品中生の者とは、必ずしも方等經典を受持し讀誦せずとも、善く義趣を解して、第一義においてこゝろ驚動せず、深く因果を信じて、大乘を誘せず。此の功德をもて迴向して極樂國に生ぜむと願求す。此の行を行する者のうち終はらむと欲するとき、阿彌陀佛觀世音大勢至無量の大衆とともに、眷屬に圍遶せられて、紫金臺を持して行者の前に至りたまひ、讚じて言たまはく、法子なむぢ、大乘を行じて第一義を解す、是のゆゑに我れいま來りて汝を迎接す」と。千の化佛とも一時に手を授けたまふ。行者みづから見れば紫金臺に坐せり、合掌又手して諸佛を讚歎したてまつる。一念の頃のごときに即ち彼の國の七寶池の中に生ず。此の紫金臺は大寶華のごとし、宿を経て則ち開く、行者の身紫摩金色と作る。足下にまた七寶の蓮華あり。佛および菩薩俱時に光明を放ちて行者の身を照らしたまふ。目すなはち開明なり。前の宿習に因りて普く衆聲を聞くに純ら甚深の第一義諦を説く。即ち金臺より下りて佛を禮し、合掌して世尊を讚歎したてまつる。七日を経て時に應じて即ち阿耨多羅三藐三菩提において不退轉を得。ときに應じて即ち能く飛行し

の盛美に喩ふ。異本臂を臂とす。然らば「臂は」とて臂相を觀することとなる。

【三六】 足下に四相十六好八文あり千輪の相せり。

【三五】 無見頂。八十種好の一。肉髻は大相。無見頂は小相。

【二〇】 不遇諸過淨除障障は現益、無數劫等は當益。

【二六】 第十一勢至觀。

【二二】 勢至結緣の輩。勢至圓通に我本因地以念佛心入無生忍今於此界攝念佛人歸於淨土。

【二三】 勢至の光明の德勝ぐるるを説く。

【二四】 彌陀十二光の一號と同じ。

【二五】 他經に至を志とす、悲華經の如し。今は勢力至極の義。

【二六】 蓋頭摩(Padma)。紅蓮と譯す。

【二七】 坐時十方の震動を明すが故にここに「動搖せずと云ふことなし」の一句を加へよ。

【二八】 苦。極樂に實苦なきも。下位を上位に望めて苦と云ふ。

【二九】 胞胎。三界四生の生死を人界に於て胞胎と云、又三界繫處、又疑惑の胎生を云ふ。

【三〇】 左右悲智具備する故に。【三一】 第十二普觀想。具さには普往生觀なり。極樂の依正

坐し、蓮華合する想ひを作し、蓮華ひらく想ひを作せ。蓮華ひらくとき五百色の光りありて來りて身を照らすと想へ、眼目ひらくと想へ、佛菩薩の虚空の中に満ちたまへるを見るとき、水鳥樹林および諸佛の出だすところの音聲みな妙法を演ぶ、十二部經と合す、出定るとき憶持して失せざれ。此の事を見をはるを無量壽佛の極樂世界を見ると名づく、是れを普觀想とし、第十二の觀と名づく。無量壽佛化身無數にして觀世音大勢至とともに、常に此の行人の所に來至したまふ。」

佛阿難および韋提希に告げたまはく、「若し至心ありて西方に生ぜむと欲せば、先づまことに一の丈六の像の池水の上に在しますを觀すべし。先の所説のごとく無量壽佛は身量無邊なり、是れ凡夫心力の及ぶところにあらず。然るに彼の如來宿願力のゆゑに、憶想することあらば必ず成就することを得む。ただ佛像を想ふだに無量の福を得、いかにいはむや佛の具足せる身相を觀ぜむをや。阿彌陀佛の神通如意にして十方の國において變現したまふこと自在なり、或は大身を現すれば虚空の中に満ち、或は小身を現すれば丈六八尺なり、現するところの形みな眞金色なり。圓光の化佛および寶蓮華は上に説くところのごとし。觀世音菩薩および大勢至、一切の處において身おなじ。衆生たゞ首相を觀て是れ觀世音と知り、これ大勢至と知る。此の二菩薩阿彌陀佛を助けて普く一切を化す。是れを雜想の觀とし、第十三の觀と名づく。」

佛阿難および韋提希に告げたまはく、「上品上生の者とは、若し衆生ありて彼の國に生ぜむと願せば、三種の心を發こすべし。すなはち往生す。何らをか三とする。一つには至誠心、二つには深心、三つには迴向發願心なり。三心を具する者は必ず彼の國に生ず。また三種の衆生あり、まさに往生を得べし。何らかを三とする。一つには慈心にして殺さず、諸の戒行を具す。二つには大乘方等經典を讀誦す。三つには六念を修行す。迴向發願して彼の國に生ぜむと願す。此の功德を具して一日乃至七日すれば即ち往生を得。かの國に生する時、この人

經念佛觀佛兩三昧を宗とする根據なり。

【四】一切の佛身。彌陀を觀ずのみ、別に一切佛身を所觀とするにあらず。

【五】佛心は佛にあらざれば知らざるも、大悲の相好を見るを佛心と云。

【六】大悲悲。無限量の慈悲平等甚深なるを云ふ。

【七】無緣。法緣衆生緣は法と衆生とに寄せて起す故に有緣、相實相應して無限に緣せざるなく緣じて緣する心なきを以て無緣とす。

【八】第三觀同文参照。因行に順するが故に多くこの觀を勸む。

【九】近くは往生、遠くは成佛を記す。

【十】第十、觀音觀。異本那由他の下恒河沙の三字を加ふ却つて佛身より高きこととなる。非數量の量のみ。

【十一】肉髻。佛頂一層の高處蓋拳の如きものなり。

【十二】縱橫各各なり。生、人、天の五とす。菩薩大悲能化の故にこれを現す。

【十三】七寶の色。毫相純白色なるに七寶の光澤ある也。

【十四】化佛侍者の多きを紅蓮

の餘の衆相また次第にこれを觀じて、また明了なること掌中を觀るがごとくならしめよ。是の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。

次にまたまた大勢至菩薩を觀すべし。此の菩薩の身量大小また觀世音のごとし。圓光は面おのおの百二十五由旬なり、二百五十由旬を照らす。擧身の光明十方の國を照らすに、紫金の色を作せり、有縁の衆生はみな悉く見ることを得む。ただ此の菩薩の一毛孔の光りを見れば、即ち十方無量の諸佛の淨妙の光明を見たてまつらむ。是のゆゑに此の菩薩を號して無邊光と名づく。智慧の光りを以て普く一切を照らし、三塗を離れしむるに無上力を得たり、是のゆゑに此の菩薩を號して大勢至と名づく。此の菩薩の天冠に五百の寶華あり、一一の寶華に五百の寶臺あり、一一の臺の中に十方諸佛の淨妙の國土の廣長の相、みな中において現す。頂上の肉髻は、盞頭摩華のごとし、肉髻の上において一つの寶餅あり、諸の光明を盛れて普く佛事を現す。餘の諸の身相は觀世音のごとく、等しくして異なることあることなし。此の菩薩ゆくととき十方の世界一切震動す、地の動する處に當たりて五百億の寶華あり、一一の寶華莊嚴高顯なること極樂世界のごとし。此の菩薩坐するとき七寶の國土一時に動搖す、下方の金光佛刹より、乃し上方の光明王佛刹に至るまで。其中間において無量塵數の分身の無量壽佛、分身の觀世音大勢至みな悉く雲のごとく極樂國土に集まり、空中に側だち塞がりて蓮華座に坐し、妙法を演説して、苦の衆生を度したまふ。此の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。大勢至菩薩を見る、是れを大勢至の色身を觀する想とし、第十一の觀と名づく。此の菩薩を觀ぜむ者は無量劫阿僧祇の生死の罪を除かむ、是の觀を作さむ者は胞胎に處せず、常に諸佛淨妙の國土に遊ばむ。此の觀成じをはるる名づけて、具足して觀世音大勢至を觀すとす。

此の事を見る時まさに、自心を起こすべし。西方極樂世界に生じて、蓮華の中において結跏趺

を謂ふ。
【一三】第九佛身觀。彌陀の眞身を觀す。十三定善觀中の最上なり。

【一四】六十萬億那由他恒河沙由旬の佛身は、顯の義を以てすれば化身、隱の義に依れば光壽無量の報身なりとす。

【一五】那由他(Nayuta)。千萬億と譯す。

【一六】由旬(Yojana)。四十里。

【一七】白毫。三十二相の一。眉の間に玉の如く、その毛白く、柔脆にして右旋す。

【一八】五須彌。一須彌の高量八萬由旬なれば四十萬由旬。

【一九】四大海。一海の縱廣八萬四千由旬。但しこれ等は非數量を假説する也。

【二〇】圓光。佛頂の光相。

【二一】八萬四千。報身相なり。

【二二】報身相の常光周徧。

【二三】西山には色光周徧を分たす、本文を「光明遍十方世界の念佛衆生を照らし攝取して捨てたまはず」とす。

【二四】心光唯念佛者を攝するを明す。念佛は觀稱に通ずるも今の念佛を稱名と定む。

【二五】佛佛平等の故に一佛を見れば一切佛を見る。

【二六】この念佛は前の像觀の念佛三昧と同じく觀佛三昧と定む。念佛衆生と流通の若念佛者との念佛は稱名なり。此

名づく。此の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『無量壽佛を見たてまつることを了了分明にしをはりなば、次に復たまたに觀世音菩薩を觀すべし。此の菩薩の身のたけ八十萬億那由他由旬なり。身は紫金色なり、頂に肉髻あり、項に圓光あり、面のおの百千由旬なり、其の圓光の中に五百の化佛あり、釋迦牟尼佛のごとし、一一の化佛に五百の化菩薩あり、無量の諸天を以て侍者とせり、擧身の光中に五道の衆生の一切の色相みな中において現す。頂上には毗楞伽摩尼寶を以て天冠とせり、其の天冠の中に一の立てる化佛あり、高さ二十五由旬なり。觀世音菩薩の面は閻浮檀金の色のごとし。眉間の毫相に七寶の色を備へたり、八萬四千種の光明を流出す、一一の光明に無量無數百千の化佛あり、一一の化佛無數の化菩薩を以て侍者とせり、變現自在にして十方世界に滿つ、譬ふれば紅蓮華の色のごとし。八十億の光明あり、以つて瓔珞と爲り、其の瓔珞の中に普く一切の諸の莊嚴の事を現す。手掌には五百億の雜蓮華の色を作せり。手の十指の端一一の指端に八萬四千の畫あり、猶し印文のごとし、一一の畫に八萬四千の色あり、一一の色に八萬四千の光りあり、其の光り柔軟にして普く一切を照らす、此の寶手を以て衆生を接引す。足を擧ぐる時、足下に千輻輪の相あり、自然に化して五百億の光明臺と成る、足を下すとき金剛摩尼の華あり、一切に布散して彌滿せずといふことなし。其餘の身相衆好具足せること佛のごとくにして異なることなし。ただ頂上の肉髻とおよび無見頂相のみ世尊に及ばず。是れを觀世音菩薩の眞實の色身を觀する想とし、第十の觀と名づく、佛阿難に告げたまはく、『若し觀世音菩薩を觀むと欲せむ者あらば、まさに是の觀を作すべし、是の觀を作さむ者は諸禍に遇はず、業障を淨除し、無數劫の生死の罪を除かむ。此のごとき菩薩はただ其の名を聞くに無量の福を獲む、いかにいはむや諦かに觀せむをや。若し觀世音菩薩を觀せむと欲せむ者あらば、先づ頂上の肉髻を觀じ、次に天冠を觀ぜよ、其

法の如く普く一切法を正しく知る。

【二】多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀 (Tathagata-arhan-sam-yaksambuddha)。如來應供等正覺と譯す。

【三】想像。方便觀として、金色等身の佛座像を觀するなり。

【四】閉目は眼見、閉目は思想位、未だ粗見にも達せず。【五】閻浮檀金 (amratanuvarna)。黄金、帶紫色。

【六】心眼ひらく。正受三昧と成りて現するなり。【七】以下二菩薩觀、第十一觀の豫習。

【八】以下多身觀、この觀想觀には三轉觀あり、觀佛、觀二菩薩、成多身觀。今第三也。【九】水鳥。彌陀經廣說參照。

【一〇】出定は散心なるも定力餘勢あるを以て閉く。【一一】修多羅 (sutra)。契經と譯す。定中所聞と經中所說と比較して合すれば正しく、合せざれば妄想なるを以て懺悔更に觀すべし。

【一二】正受觀なるも後の眞身觀に比して麤想と云ふ。【一三】現身。その一生の中。

【一四】第九佛身觀成就を云ふ。即ち觀佛を佛念と云へるなり。

【一五】毘盧の義に従へば、稱名念佛

持して捨てず、修多羅と合せしめよ。若し合せざらむをば名づけて妄想とす。若し合することあらむをば名づけて、塵想をもて極樂世界を見るとき。是れを像想とし、第八の觀と名づく。是の觀を作さむ者は無量億劫の生死の罪を除き、現身の中において、念佛三昧を得む。」

佛阿難および韋提希に告げたまはく、「此の相成じをはりなば、次ぎにまさに更に無量壽佛の身相光明を觀すべし。阿難まさに知るべし。無量壽佛の身は百千萬億の夜摩天の閻浮檀金の色のごとし。佛身の高さ六十萬億。那由他恒河沙。由旬なり。眉間の白毫は右に旋りに宛轉せり、五須彌山のごとし。佛眼は四大海水のごとし、青白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出すること須彌山のごとし。彼の佛の圓光は百億三千大千世界のごとし、圓光の中において百萬億那由他恒河沙の化佛あり、一一の化佛にまた衆多無數の化菩薩ありて、以て侍者とせり。無量壽佛に八萬四千の相あり、一一の相におのおの八萬四千の隨形好あり、一一の好にまた八萬四千の光明あり、一一の光明あまねく十方世界を照らして、念佛の衆生を攝取して捨てたまはず。其の光明相好および化佛つばさに説くべからず。ただまさに憶想して心眼をして見せしむべし。此の事を見る者は、即ち十方一切の諸佛を見たまつるを以てのゆゑに、念佛三昧と名づく。是の觀を作すをば、一切の佛身を觀すと名づく。佛身を觀るを以てのゆゑにまた佛心を見る、佛心とは大慈悲これなり、無緣の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。

此の觀を作さむ者は、身を他世に捨てて諸佛の前に生じて無生忍を得む。是のゆゑに智者まさに心を繫けて諦かに無量壽佛を觀すべし。無量壽佛を觀せむ者は一の相好より入れ。ただ眉間の白毫を觀じて極めて明了ならしめよ。眉間の白毫を見たまつる者には八萬四千の相好自然にまさに現すべし。無量壽佛を見たまつる者は即ち十方無量の諸佛を見たまつる。無量の諸佛を見ることを得るがゆゑに、諸佛現前に授記したまふ。是れを遍く一切の色身を觀する相とし、第九の觀と

陀を法界身と云ふ。
【二〇】衆生見んと願すれば佛これを知り想心若くは夢定中に現するを云ふ。

【二一】佛身相好が衆生心中に現するに佛心即ち三十二相等と云ふ。佛と心と不離なり。若し觀を云ふ諸師は、不二の即とし、この凡心の當體を佛とす。

【二二】報身の八萬四千相好を觀るに根本たる三十二相あり。頂上肉髻、頭髮右旋、額廣平、眉間白毫、眼色紺青、眼睫如牛王、四十齒具足、齒齊密、齒根深、齒白淨、咽中津液得上味、摩訶師子、舌覆面至髮際、摩兩腋滿相、皮膚細滑、正立不屈、二手過膝、上身如師子、身縱廣等如諸羅陀、身毛上生青色、柔軟、毛上靡、陰藏如馬王、足跟圓好、足不露踝、手足柔軟、手足綆綯、指纖長、手足具千輪輪、足下安平、足跖高隆、脇如鹿王。
【二三】八十隨形好。瓜如赤銅色等佛相に應ずる衆好なり。
【二四】作佛。自の信心を以て佛の相好を緣じ思惟す。
【二五】是佛。前は思惟位、これは正受位、想心の外に佛なく、佛身全現す。
【二六】正徧知海。次の三藐三佛陀なり、又等正覺と云ふ。

一にこれを觀すべし、一一の葉、一一の珠、一一の光り、一一の臺、一一の幢みな分明ならしめむこと、鏡中において自ら而像を見るがごとくせよ。此の想成ぜむ者は、五萬劫の生死の罪を滅除して、必定してまさに極樂世界に生ずべし。是の觀をなすをば名づけて正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。』

佛阿難および韋提希に告げたまはく、『此の事を見をばりなば、次にまさに佛を想ふべし。

ゆゑはいかに。諸佛如來は是れ法界身なり、一切衆生の心想の中に入りたまふ。是のゆゑに汝ら心に佛を想ふとき、是の心すなはち是れ三十二相八十隨形好なり、是のころ佛を作る、是のころ是れ佛なり。諸佛正遍知海は心想より生ず、是のゆゑにまさに一心に念ひを繋けて、諦かに彼の佛多陀阿伽度阿羅訶三藐三佛陀を觀すべし。彼の佛を想はむ者は先づまに像を想ふべし。目を閉ぢ目を開くにも一つの寶像、閻浮檀金の色のごとくにして、彼の華の上に坐したまへるを見よ。像の坐したまへるを見をばりなば、心眼ひらくことを得て、了了分明に極樂國の七寶の莊嚴寶地寶池寶樹行列し、諸天の寶幢の上に彌覆し、衆寶の羅網虚空の中に満つるを見る。此のごとき事を見ば、極めて明了なること掌中を觀るがごとくならしめよ。此

の事を見をばりなば、復たまた更に一つの大蓮華を作して、佛の左邊に在くべし、前の蓮華のごとく等しくして異なることあることなし。また一つの大蓮華を作して佛の右邊に在け。一の觀世音菩薩の像の左の華座に坐せるを想へ。また金光を放つこと前のごとくにして異なることなし。一の大勢至菩薩の像の右の華座に坐せるを想へ。此の想成するとき、佛菩薩の像みな光明を放つ。其の光り金色にして諸の寶樹を照らす、一一の樹下にまた三蓮華あり、諸の蓮華の上におのの佛

二菩薩の像ありて、彼の國に遍滿す。此の想成するとき、行者まさに水流光明および諸の寶樹、鳥鴈鴛鴦みな妙法を説くを聞くべし、出定入定に恒に妙法を聞かむ。行者の所聞出定のとき憶

とす。

【四】序分欣淨緣の光臺現國參照。

【五】序分末段の韋提の請問參照。

【六】釋迦毗楞加。能勝。前出。

【七】甄叔伽(Kimśuka)赤色と譯す。甄叔伽樹の美華に擬して寶珠の名とす。

【八】梵摩尼(Brahmani)淨如意と譯す。

【九】夜摩(Tāmas)又は焰摩天、欲界第三善時天、須彌の如き寶幢の上に寶幢横に張ること須彌上に夜摩懸るに似たり。

【一〇】十方。極樂の十方。

【一一】觀者の意樂。

【一二】八相示現作佛受記等。

【一三】第三十二國土嚴飾願。

【一四】後の第九佛身觀。

【一五】五萬劫。或本五百億劫と作す。地觀八十億劫今五萬多少あるは觀功の多少にあらざ機罪の多少に隨ふ。

【一六】第八、像想觀、眞佛初心者に直觀し難きが故に先づ形像を觀する也。

【一七】この佛は第九觀に云ふ眞身なり。

【一八】諸佛等く法界普遍の體あれば此に諸佛と云ふ。

【一九】法界身。理法界ならば清淨眞如、事法界は衆生界、十界。今この法界を廣する彌

佛阿難および韋提希に告げたまはく、「諦かに聽き、諦かに聽け、善くこれを思念せよ。佛まさに汝が爲に、苦惱を除く法を分別し解説すべし、汝ら憶持して廣く大衆の爲に分別し解説せよ。」是の語を説きたまふとき、無量壽佛空中に住立したまふ、觀世音大勢至の二大士左右に侍立したまふ。光明熾盛なり具さに見るべからず、百千の閻浮檀金の色も比へんとすることを得ず。時に韋提希無量壽佛を見たまつりをはりて、足を接して禮を作し、佛に白して言さく、「世尊われいま佛力に因るがゆゑに、無量壽佛および二菩薩を見たまつることを得たり。未來の衆生まさにいかに無量壽佛および二菩薩を觀たてまつるべきか。佛韋提希に告げたまはく、「彼の佛を觀むと欲せばまさに想念を起こすべし。七寶の地の上において蓮華の想を作せ、其の蓮華の一一の葉をして百寶の色を作さしめよ、八萬四千の脈あり、猶し天の畫のごとし、脈に八萬四千の光りあり、了了分明にしてみな見ることを得しめよ、華葉の小なるものは縱廣二百五十由旬なり、是くのごとき蓮華に八萬四千の葉あり、一一の葉の間におのの百億の摩尼珠王ありて、以て映飾とせり、一一の摩尼より千の光明を放つ、其の光り蓋のごとくにして七寶合成せり、遍く地上に覆へり、釋迦毗楞伽寶を以て其の臺とす、此の蓮華臺は八萬の金剛、甄叔迦寶、梵摩尼寶、眞珠網を以つて交飾とせり、其の臺の上において自然に四柱の寶幢あり、一一の寶幢百千萬億の須彌山のごとし、幢上の寶帳は夜摩天宮のごとし、五百億の微妙の寶珠ありて以て映飾とせり、一一の寶珠に八萬四千の光りあり、一一の光り八萬四千の異種の金色を作す、一一の金色その寶土に遍し、處處に變化しておのおの異相を作す、或は金剛臺となり、或は眞珠網と作り、或は雜華雲と作りて、十方の面において、意に隨ひて變現して、佛事を施作す。是れを華座の想とし、第七の觀と名づく。佛阿難に告げたまはく、「此くのごとき妙華は、これ本と法藏比丘の願力の所成なり。若し彼の佛を念はむと欲せば、まさに先づこの華座の想を作すべし。此の想を作さむとき雜觀することを得され。皆まさに一

- 【三】 八功德ある池水の義、所說參照のこと大經上、小經德を云ふは阿耨達池にその説あればなり。
- 【四】 本池を廻る十四道の支渠各々に於ての意。
- 【五】 波羅蜜 (Paramita) 六度十度等にして岸を度る意。
- 【六】 化鳥。小經に詳也。參照。
- 【七】 第六寶樓觀。
- 【八】 正受の定觀を粗見と云ふに就て定中の影像たると後觀の勝境に比するるとよりほぼと云ふ。
- 【九】 前の三觀と合して云ふにあらず、樓閣觀には地樹池も現ずるも、名は依報觀の終結なるより來る。
- 【一〇】 上來假二眞四の六觀、通の依報終る。
- 【一一】 第七華座觀。これ彌陀の受用する別依報なり。
- 【一二】 前に韋提無憂惱處を求め所見の土に就て請ふ。故に定善示觀緣の諸觀等より前段六觀を以て能請に應じ終るも佛意は依正俱說せんとす、別依は正報觀の由序なり、此に重ねて諸觀等と云ふ。
- 【一三】 苦惱を除く法は、經の顯文より云へば、次下に示す華座の觀法なるも、佛の密意よりすれば、念佛の要法なり

るものなり。此の諸の寶樹行行あひ當たり、葉葉あひ次げり、衆葉の間に於いて諸の妙華を生ず、華の上に自然に七寶の果あり、一一の樹葉縱廣正等にして二十五由旬なり、其の葉千色にして百種の畫あり、天の瓔珞のごとし。衆の妙華あり、閻浮檀金の色を作せり、旋火輪のごとく葉の間に婉轉す。涌生せる諸果帝釋の餅のごとし、大光明あり化して幢旛無量の寶蓋と成る、是の寶蓋の中に三千大千世界の一切の佛事を映現す。十方の佛國また中において現す。此の樹を見をはりなば亦まさに次第に一一にこれを觀すべし、樹莖枝葉華果を觀見してみな分明ならしめよ。是れを樹想とし、第四の觀と名づく。

次にまさしに水を想ふべし。水を想ふとは極樂國土に八池水あり、一一の池水七寶の所成なり。其のたから柔軟にして如意珠王より生ず、分かれて十四支と爲る。一一の支七寶のいろを作す、黄金を渠とす、渠の下にはみな雜色の金剛をもて以て底沙とす、一一の水の中に六十億の七寶の蓮華あり、一一の蓮華圓正等にして十二由旬なり。其の摩尼の水、はなの間に流れ注ぎて樹を尋ねて上下す、其のころ微妙にして苦空無常無我諸波羅蜜を演説す、また諸佛の相好を讚歎するものあり。如意珠王より金色微妙の光明を油出す、其の光り化して百寶色の鳥と爲る、和鳴哀雅にして常に念佛念法念僧を讚す、是れを八功德水の想とし、第五の觀と名づく。

衆寶國土の一一の界の上に五百億の寶樓閣あり、其の樓閣の中に無量の諸天ありて天の伎樂を作す。また樂器あり虚空に懸處せり、天の寶幢のごとく鼓せざるに自ら鳴る。此の衆の音の中にみな念佛念法念比丘僧を説く。此の想成じをはるを名づけて、ほど極樂世界の寶樹寶地寶池を見る。是れを總觀の想とし、第六の觀と名づく。若し此れを見む者は、無量億劫の極重の惡業を除きて、命終の後かならず彼の國に生ぜむ。是の觀を作すをば名づけて、正觀とし、若し他觀せむをば名づけて邪觀とす。』

- 【一】 觀想によらず觀成を云ふ。但苦は苦苦壞苦行苦を觀じ、空無常を明にし、無我に達せしむ、故に緣生無我を説くと解するも可なり。
- 【二】 冰想瑠璃想あるも本に就て水想とし。
- 【三】 第三地想觀、地の眞觀なり。文は前觀と聯接す。
- 【四】 正受、等待等と譯す。
- 【五】 極樂を本國とし娑婆を他世とす。若し一身を捨てて他世に」とせば捨身を娑婆現身、他世は未來極樂となる。
- 【六】 觀想の時愛見等を離れば妄境現ず、これを妄想又は邪觀と云ふ。
- 【七】 第四寶樹觀。前に所依能持を觀ず、以下能依所持に就て、先づ林樹を觀す。
- 【八】 寶樹は大經上末說小經また七重行樹を説く、參照。
- 【九】 釋迦毘楞伽摩尼(Sakya-tibhagamamuhurtra)。譯、能勝、帝釋執の所の寶。
- 【十】 閻浮檀金(Jambunad-amburana)。
- 【十一】 旋火輪。圓轉の相に喩ふ。
- 【十二】 第五寶池觀。
- 【十三】 或は水を池に作る。此の觀は極樂の池水にして單なる水想にあらず。又此土の水にあらず。

の色ありて瑠璃地に映ず、億千の日のごとくにして具さに見るべからず。瑠璃地の上には黄金の繩を以て雜、廁間錯せり、七寶を以て界ひて分齊分明なり。一一の寶の中に五百色の光りあり、其の光り華のごとく、また星月に似たり、虚空に懸處して光明臺と成る、樓閣千萬あり、百寶をもて合成せり、臺の兩邊においておのおの百億の華幢無量の樂器あり、以て莊嚴とす。八種の清風光明より出で、此の樂器を鼓らして、苦空無常無我の音を演說せしむ。是れを水想とし、第二の觀と名づく。此の想成じたらむとき、一一にこれを觀じて極めて了了ならしめよ、目を閉ぢ目を開くにも散失せしめざれ、たゞ睡時を除きて恒に此の事を憶へ、此のごとく想するを名づけて、ほゞ極樂國の地を見るとき。若し 三昧を得ば彼の國地を見ることが了了分明ならむ。具さに説くべからず。是れを地想とし、第三の觀と名づく。佛阿難に告げたまはく、「なむぢ佛語を持して、未來世の一切大衆の苦を脱せむと欲せむ者の爲に、是の觀地の法を説け。若し是の地を觀ぜむ者は八十億劫生死の罪を除き、身を他世に捨て、かならず淨國に生ぜむ、心に疑ひなきことを得よ。是の觀を作すをば名づけて正觀とし、若し 他觀せむをば名づけて邪觀とす。」

佛阿難および韋提希に告げたまはく、「地想成じをはりなば、次ぎに 寶樹を觀ぜよ。寶樹を觀ずとは一一にこれを觀じて七重行樹の想ひを作せ。一一の樹の高さ八千由旬なり。其の諸の寶樹七寶の華葉具足せずといふことなし、一一の華葉異の寶色を作す、瑠璃色の中より金色の光りを出だし、玻璃色の中より紅色の光りを出だし、瑪瑙色の中より硨磲の光りを出だし、硨磲色の中より綠眞珠の光りを出だす、珊瑚琥珀一切の衆寶もて映飾とせり。妙眞珠の網ろあきの上に彌覆せり、一一の樹の上に七重の網あり、一一の網の間に五百億の妙華宮殿あり、梵王宮のごとし。諸の天子童子自然の中にあり、一一の童子五百億の釋迦毘楞伽摩尼寶を以て瓔珞とせり、其の摩尼の光り百由旬を照らす、猶し百億の日月を和合せるのごとし、具さに名づくべからず、衆寶間錯して色中の上れた

便の開説を懇請す。本經の序分究竟す。

【五〇】 五苦は生、老、病、死、愛別離。

【五一】 大文第二正宗分。分ちて十六觀、前三定善は善導疏第三定善義廣説す。後三散善。十三中前十二次第觀後一略觀。今第一日想觀。

【五二】 善導は身一、心一、週向一、處一、境界一、相續一、歸依一、正念一にして想成就し正受を得と釋せり。

【五三】 日觀は假觀にして直接極樂のことならざるが、これ識境住心、識知業障、識知極樂超日の爲なりと。

【五四】 懸鼓。周代樂器の名。

【五五】 この日は定中の日にして心見、法處の日なり、單なる太陽にあらず。

【五六】 第二水想觀。これ又假觀なるが、日觀の如く十二觀に通ぜず、第三寶地觀に係る假觀なり。

【五七】 水と氷と瑠璃との三種は轉觀にして平坦透徹を觀るなり。

【五八】 楞は角。

【五九】 直道を表す。

【六〇】 廁。雜也。

【六一】 四方四維の八方を八種とす。

【六二】 身受心法の四念處に常樂我淨の四倒なき四眞を説くの義不淨を云はずして空を舉

は過去・未來・現在、三世諸佛の淨業の正因なり。』

五二 佛阿難および韋提希に告げたまはく、『諦かに聽き諦かに聽け、善くこれを思念せよ、如來いま未來世の一切衆生の煩惱の賊に害せられむ者の爲に清淨業を説かむ。善きかな韋提希こゝろよく此の事を聞へり。阿難なむぢまさに受持して廣く多衆の爲めに佛語を宣説すべし。如來いま韋提希および未來世の一切衆生をして西方極樂世界を觀せしめむ、佛力を以てのゆゑにまさに彼の清淨國土を見ることを得むこと、明鏡を執りて自ら面像を見るがごとくなるべし。彼の國土の極妙の樂事を見て、こゝろ歡喜するがゆゑに、時に應じて即ち無生法忍を得む。』佛韋提希に告げたまはく、『汝は是れ凡夫にして心想羸劣なり、未だ天眼を得ざれば遠く觀ることあたはず、諸佛如來に異の方便あり、汝をして見ることを得しめむ。』時に韋提希佛に白して言さく、『世尊わがごときはいま佛力を以てのゆゑに彼の國土を見たてまつる。若し佛滅後の諸の衆生等は濁惡不善にして五苦に逼められむ、いかにまさに阿彌陀佛の極樂世界を見たてまつるべきか。』

佛韋提希に告げたまはく、『汝および衆生まさに心を專にして、念ひを一處に繋けて西方を想ふべし。いかにか想を作さむ。凡そ想を作すとは一切衆生生盲にあらざるよりは、目ある徒みな目の淺するを見よ。まさに想念を起こして正坐して西へ向ひ、諦かに目を觀すべし。心をして堅住し想を專にして移さざらしめて、日の没せむと欲してかたち懸鼓のごとくなるを見よ、既に日を見をはりなば、目を閉ぢ目を開かむにみな明了ならしめよ。此れを日想とし、名づけて初觀といふ。

次に水想を作せ、水の激清なるを見てまた明了にして分散の意なからしめよ。既に水を見をはりなばまさに冰想を起こすべし。冰の映徹せるを見て 瑠璃の想ひを作せ。此の想成じをはりなば、瑠璃地の内外映徹せるを見よ。下に金剛の七寶の金幢ありて瑠璃地を擎ぐ、其の幢八方にして八楞具足せり、一一の方面百寶の所成なり。一一の寶珠に千の光明あり、一一の光明に八萬四千

【四〇】極樂は十萬億土の西と云ふに今不遠とするは分齊不遠、去時一念即到、定境相應常見の三義に由る。

【四一】觀の觀想也。

【四二】今の三福後の第四十觀上品上生に出す三種衆生と比較すべし。

【四三】世福、後の第十五觀中品下生參照。

【四四】十善・不殺・不盜・不邪行・不妄語・不綺語・不惡罵・不兩舌・不貪・不瞋・不邪見。

【四五】戒福、中品上生中生參照。

【四六】三歸、歸依佛法僧。

【四七】行福、上品參照。

【四八】この菩提心は願行に通ず。

【四九】世出世の因果なり。

【五〇】大乘・華嚴・大集・般若・法華・涅槃等の大乘經典。

【五一】勸進、聖道淨土の法門を説くと作善修福との勸進あり。

【五二】發起序第七定善示觀緣。

【五三】後の流通文書開會と照應せり。

【五四】他力觀にして聖道自力と異なるを示す。

【五五】無生を悟る智。その位次の高下あるも十信無生と定む。

【五六】この凡夫をば、從果向因の還相の菩薩と見たり。

【五七】未來衆生の爲に正受方

を樂はず。此の濁惡の處には地獄餓鬼畜生盈滿して不善業おほし。願はくは我れ未來に惡聲を聞かず、惡人を見ざらむ。いま世尊に向ひて五體を地に投じて、哀を求めて懺悔す。唯ねがはくは佛日われをして清淨業の處を觀せしめたまへ。爾の時に世尊眉間の光りを放ちたまふ。其の光り金色にして、遍く十方無量の世界を照らし、佛頂に還り住まりて化して金臺と爲る、須彌山のごとし。十方諸佛の淨妙の國土みな中において現す、或は國土あり七寶をもて合成せり。また國土あり純らこれ蓮華なり、また國土あり自在天宮のごとし、また國土あり玻璃鏡のごとし、十方の國土みな中において現す。是のごとき等の無量の諸佛國土の嚴巖にして觀つべきありて、韋提希をして見せしめたまふ。時に韋提希佛に白して言さく、「世尊この諸の佛土また清淨にしてみな光明ありといへども、我れいま極樂世界の阿彌陀佛の所に生ぜむことを樂ふ。唯ねがはくは世尊われに思惟を教へたまへ、我れに正受を教へたまへ。」

爾のとき世尊すなはち微笑したまふに、五色の光りありて佛口より出づ、一一の光り頻婆娑羅の頂を照らす。爾のとき大王幽閉に在りといへども、心眼さはりなくして遙かに世尊を見たてまつり、頭面に禮を作すに、自然に増進して阿那含を成す。

爾のとき世尊韋提希に告げたまはく、「汝いま知るやいなや、阿彌陀佛こゝを去ること遠からず、汝まさに念ひを繋けて諦かに彼の國を觀すべし。淨業成ぜむものなり。我れいま汝が爲に廣く衆の譬へを説かむ、また未來世の一切凡夫の淨業を修せむと欲せむ者をして、西方極樂國土に生ずることを得しめむ。彼の國に生ぜむと欲せむ者は、當に三福を修すべし。一つには父母に孝養し、師長に奉事し、慈心にして殺さず、十善業を修す。二つには三歸を受持し、衆戒を具足して、威儀を犯せず。三つには菩提心を發こし、深く因果を信じ、大乘を讀誦し、行者を勸進す。此のごとき三事を名づけて淨業とす。佛韋提希に告げたまはく、「汝いま知るやいなや、此の三種の業

- 【一】 刹利 (Ksatryah)。田主と譯す、印度四種姓の第一、君主貴族。
- 【二】 旃陀羅 (Chandala)。屠兒と譯す、五種姓の劣等。
- 【三】 卻行。アトスザリ。
- 【四】 發起序第四厭苦緣。
- 【五】 阿難 (Ananda) 慶喜と譯す。
- 【六】 發起序第五欣淨緣。初に十方の淨土を通請す。
- 【七】 闍浮提 (Ambudvīpa)。勝金山と譯す。此の世界の名。
- 【八】 金臺の形、須彌 (Sumeru) の山に似たり。
- 【九】 これを光臺現國と云ふ。
- 【十】 別して彌陀の極樂を選ぶ。
- 【十一】 正しく別行思惟正受を求む。
- 【十二】 思惟勝境を想念す。＊
- 【十三】 思惟とは淨土方便の行、即ち定散二善なりとす。
- 【十四】 正受。心勝境に契ふ、定也。＊正受は淨土眞實の信、即ち他方の一心を指す。
- 【十五】 發起序第六散華顯行緣の中先づ佛光父王を益するを明す。
- 【十六】 阿那含 (Anāgāmi)。不還生死と譯す。小乘第三果。
- 【十七】 韋提の致請に應じ許説するに當り世戒行の三福を説く。三福は後の九品の行業と開合の異。

あり、名づけて月光といふ、聰明多智なり、及び 耆婆とともに、王の爲に禮を作して白して言さく、「大王、臣、毘陀論經の説を聞くに、劫初よりこのかた諸の惡王あり、國位を貪るがゆゑに、其の父を殺害せしこと一萬八千なり、未だ會て無道にして母を害せしことあることを聞かず、王い
 ます此の殺逆の事を爲さば、刹利種を汚さむ、臣さくに忍びず、是れ 旃陀羅なり、宜しく此に住
 ましむべからず。」時に二大臣この語を説きはりて、手を以て劍を按へて 卻行して退く。時に
 阿闍世、驚怖惶懼して、耆婆に告げて言はく、「汝わが爲にせずや。」耆婆まをして言さく、「大王、つ
 つしみて母を害することなかれ。」王この語を聞きて、懺悔して救はむことを求む。すなはち劍を捨
 て、止めて母を害せず、内官に勅語し、深宮に閉置して、また出ださしめず。

時に韋提希幽閉せられをはりて、愁憂憔悴して遙かに耆闍崛山に向ひて、佛の爲に禮を作して是
 の言を作さく、「如來世尊むかしの時は恒に 阿難を遣はして來して我れを慰問したまひき。我れい
 ま愁憂す、世尊は威おもくして見たてまつることを得るに由なし。願はくは目連尊者阿難をして我
 がために相見せしめたまへ。」此の語を作しをはりて、悲泣して涙を雨らし、遙かに佛に向ひて禮し
 たてまつる。未だ頭を擧げざる頃に、爾の時に世尊者耆闍崛山に在しまして、韋提希の心の所念を知
 ろしめして、即ち大目犍連および阿難に 勅して空より來らしめ、佛は耆闍崛山より没して王宮に
 おいで出でたまふ。時に韋提希禮しをはりて頭を擧ぐるに、世尊釋迦牟尼佛の身は紫金色にして百
 寶の蓮華に坐し、目連は左に侍し、阿難は右にあり、釋梵護世の諸天は虛空の中にありて、普く天
 華を雨らしめても供養せるを見る。時に韋提希佛世尊を見たてまつりて、自ら瓔珞を絶ち擧身地に
 投じ、號泣して佛に向ひて白して言さく、「世尊われ宿なれの罪ありてか此の惡子を生める、世尊ま
 たなごらの因縁ありてか提婆達多と共に眷屬と爲りたまへる。

唯ねがはくは世尊わが爲に廣く憂惱なき處を説きたまへ、我れ當に往生すべし。閻浮提の濁惡世

有情と譯す。

【七】 文殊師利(Mañjuśrī)。妙吉祥又は妙徳と譯す。(Kumarabhadra)法王子、如來の跡を補ふ處。

【八】 以下發起序第二禁父縁。

【九】 阿闍世(Aśoka)。影堅王の長子。未生怨と譯す。

【一〇】 調達。具さに調婆達多又は提婆達多(Devadatta)天授と譯す。佛の從弟、會て佛門に入り、後背きて敵となる。

【一一】 頻婆娑羅(Bimbisara)。影堅王と譯す。阿闍世の父。

【一二】 大夫人。正后これ影堅の妃、阿闍世の母。

【一三】 韋提希(Vaidhi)。思惟と譯す。

【一四】 酥蜜。牛羊の乳酪より精製せるもの。

【一五】 麩。乾飯の粉末。

【一六】 漿。藥水。

【一七】 Maharaudgalyayana。八戒とは、一日一夜不殺、不盜、不淫、不妄語、不飲酒、下脂粉塗身、不歌舞及觀聽、不坐高廣大牀なり。

【一八】 Parā。發起序第三禁母縁。

【一九】 沙門(Sramana)。勤勞と譯す。出家の行者。

【二〇】 耆婆(Trīṇa)。固活と譯す。阿闍世の庶兄、名醫。

【二一】 毘陀(Devā)。四吠陀のこと。

佛說觀無量壽經

宋元嘉中罽良耶舍譯

是のごときを我れ聞きき。一時佛王舍城の耆闍崛山の中に在しまして、大比丘衆千二百五十人と俱なりき。菩薩三萬二千あり、文殊師利法王子を上首とす。

爾のとき王舍大城に一の太子あり、阿闍世と名づく、調達、悪友の教へに隨順して、父王頻婆娑羅を收執し、幽閉して七重の室内に置けり、諸の群臣を制して、も往くことを得ざらしむ。國の大夫夫人を韋提希と名づく、大王を恭敬して、深浴清淨にして、酥蜜を以て麩に和して用て其の身に塗り、諸の瓔珞の中に葡萄の漿を盛れて、密かに以て王にたてまつる。爾のとき大王麩を食し、漿を飲み、水を求めて口を漱ぐ。口を漱ぎをはりて、合掌恭敬して、耆闍崛山に向ひて、遙かに世尊を禮して、是の言を作さく、『大目犍連は是れわが親友なり、願はくは慈悲を興として、我れに八戒を授けしめたまへ。』時に目犍連、鷹隼の飛ぶがごとく、疾く王の所に至る。日日かくのごとく、王に八戒を授く。世尊また尊者富樓那を遣はして、王の爲に法を説かしむ。是のごとき時の間に三七日を経たり。王麩蜜を食し、法を聞くことを得るがゆゑに、顔色和悦せり。

時に阿闍世、守門の者に問はく、『父王いまなほ存在せりや。』時に守門の人まをして言さく、『大王、くこの大夫夫人は身に麩蜜を塗り、瓔珞に漿を盛れて、もて王にたてまつり、沙門目連および富樓那は空より來りて、王の爲に説法す。禁制すべからず。』時に阿闍世この語を聞きをはりて、其の母を怒りて曰はく、『我が母はこれ賊なり、賊と伴たればなり。沙門は悪人なり、幻惑呪術をもて、この悪王をして多日に死せざらしむ。』と。即ち利劍を執りて、其の母を害せむと欲す。時に一の臣

佛說觀無量壽經

【一】觀無量壽經。無量壽觀經、或は觀無量壽佛經と作せるもあり。此經の末には觀極樂國土無量壽佛觀世音菩薩大勢至菩薩と云へるが從を主に依を正に攝して觀無量壽と云ふ。又淨除業障生諸佛前とも名く。此の經を何ふに始より順次終に向へ本意とす、是れ要門釋迦教の意。若し附屬の文に居して進見の二善にして、彌陀弘願教の意となる。即ち「大經」に説かれたる眞實の教を受くる眞實の機を示し、他力の教が凡夫の爲なる所以を述べたるものとす。

【二】大文第一序分。善導疏第二序分義廣説す。この經王宮耆闍の兩會あり、王宮會に序、正、得益、流通の四を分つ。序に證信發起の二とするか、化前を加へて三とするか、如き定散の法を王宮に於て佛より親く聞けりと。

【三】時處大乘等これ發起序の第一化前序、前經の始を見よ。

【四】耆闍崛(Grāhnikuta)。靈鷲と譯す。

【五】比丘(Bhikṣu)。乞士と譯す。

【六】菩薩(Pośhadvā)。覺

佛說無量壽經終

佛說無量壽經卷下

世ニニホ 經道滅盡せむにに、我れ慈悲を以て哀愍あひみんしてひとり此の經を留めて止住しぢゆうすること百歳ならしめむ。其れ衆生ありて斯の經に値はむものは意の所願しよらんに隨ひてみな得度とくどすべし。佛彌勒びやくりやくに語けたまはく、『如來の興世きよせには値ひがたく見がたし、諸佛の經道は得がたく聞きがたし、菩薩の勝法しょうぼう諸波羅蜜じよはらみつくことを得むこと亦かたし、善知識ぜんちしきに遇ひて法を聞きて能く行ぜむことこれ亦かたしとす、若し斯の經を聞きて信樂しんらくし受持じゆぢせむこと、難が申の難なり、この難に過ぎたるはなし。是のゆゑに我が法は是のごとく作し、是のごとく説き、是のごとく教ふ。まさに信順しんじゆんして如法じよぼうに修行すべし。』

爾のとき世尊この經法を説きたまへるに、無量の衆生みな無上正覺の心を發おこし、萬二千那由他の人、清淨法眼しやうじやうほふけんをえ、二十二億の諸天人民、阿那含果あなごんがくをえ、八十萬の比丘漏盡意解りゆくじゆんいげし、四十億の菩薩不退轉ふたいてんをえたり、弘誓の功德を以て自ら莊嚴しやうげんし、將來の世において當に正覺を成すべし。爾のとき三千大千世界六種に震動しんどうし、大光あまねく十方の國土を照らし、百千の音樂自然じぜんにして作し、無量の妙華紛紛めうけふんぶんぶんとして降る。佛經を説きたまふこと已はりて、彌勒菩薩びやくりやくおよび十方來の諸の菩薩衆、長老阿難あなんもろもろの大聲聞、一切の大衆佛の所説を聞きたてまつりて、歡喜くわんぎせずといふことなかりき。

【二六】經道滅盡。末法萬年の後諸遺教悉く滅す。
【二七】難中之難。他力易行の法門は信じ難きを云ふ。易往而無人たる所以なり。

【二八】清淨法眼。平等の慧眼の上に法界差別を觀る。

【二九】阿那含果。第三果、不還果。

五百億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第八の佛を名づけて離垢光といふ、彼しこに八十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第九の佛を名づけて徳首といふ、彼しこに六十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第十の佛を名づけて妙徳山といふ、彼しこに六十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第十一の佛を名づけて人王といふ、彼しこに十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第十二の佛を名づけて無上華といふ、彼しこに無數不可稱計の諸の菩薩衆あり、みな不退轉にして智慧勇猛なり、已に會て無量の諸佛を供養して、七日の中において即ちよく百千億劫に大士の修するところの堅固の法を攝取せり、斯れらの菩薩みなまさに往生すべし。其の第十三の佛を名づけて無畏といふ、彼しこに七百九十億の大菩薩衆あり、諸の小菩薩および比丘等あげて計ふべからず、皆まさに往生すべし。佛彌勒に語けたまはく、「たゞ此の十四佛國の中の諸の菩薩等のみまさに往生すべきにあらず、十方世界の無量の佛國より其の往生せむ者またまた是のごとく甚だ多くして無數なり。我れたゞ十方諸佛の名號および菩薩比丘の彼の國に生ぜむ者を説くこと晝夜一劫すとも尙いまだ竟はることあたはず、我れいま汝がために略してこれを説けるのみ。」

三三 佛彌勒に語けたまはく、「其れ彼の佛の名號を聞くことを得ることありて、歡喜踊躍して乃至一念せむに、まさに知るべし、此の人は大利を得たりとす、則ち是れ無上の功德を具足す。是のゆゑに彌勒、たとひ大火三千大千世界に充滿することありとも、要す當にこれを過ぎて是の經法を聞きて、歡喜信樂し受持し讀誦し説のごとく修行すべし。ゆゑはいかに。多く菩薩ありて此の經を聞かむと欲すれども得ることあたはず、若し衆生ありて此の經を聞かむ者は無上道において終に退轉せじ、是のゆゑにまさに専心に信受し持誦し説行すべし。」佛の言たまはく、「吾れいま諸の衆生の爲に此の經法を説き、無量壽佛および其の國土の一切の所有を見せしむ。當に爲すべきところのものば皆これを求むべし。我が滅度の後たるをもてまた疑惑を生ずることをうるることなかれ。當來の

【三四】以下流通分。念佛の大
利無上功德たるを示す。
【三五】上の成就の文に在つ
ては、一念は信に就て云へる
も、今は行の一念として、一
聲の念佛を謂ふとす。

なきがごとくならむ。意においていかにぞ、此の諸の王子むしろ彼の處を樂はむやいなや。」對へて曰さく、「不なり、たゞ種種に方便して諸の大力を求めて自ら免れ出でむことを欲せむ。」佛彌勒に告げたまはく、「此の諸の衆生も亦またかくのごとし。佛智を疑惑せしを以てのゆゑに、彼の宮殿に生じて刑罰乃至一念の惡事あることなく、たゞ五百歳の中において三寶を見たてまつらず、供養して諸の善本を修むることをえず、此れを以て苦とす、餘樂ありといへども猶かの處を樂はず。若し此の衆生その本罪を識りて、深く自ら悔責して、彼の處を離れむことを求めば、即ち意のごとく無量壽佛の所に往詣して恭敬し供養することを得、また遍く無量無數の諸餘の佛の所に至りて諸の功徳を修むることを得む。彌勒まさに知るべし、其れ菩薩ありて疑惑を生ずる者は大利を失せりとす。是のゆゑに當に明かに諸佛の無上智慧を信すべし。」

二二三 彌勒菩薩佛に白して言さく、「世尊この世界においていくばく所の不退の菩薩ありてか彼の佛國に生ぜむ。」佛彌勒に告げたまはく、「此の世界に六十七億の不退の菩薩ありて彼の國に往生せむ。

一一の菩薩すでに會て無數の諸佛を供養せしこと、次ぎに彌勒のごとき者なり。諸の小行の菩薩および少功徳を修習せし者あげて計ふべからず、皆まさに往生すべし。」佛彌勒に告げたまはく、「ただ我が利の諸の菩薩のみ、彼の國に往生するにあらず、他方の佛土も亦またかくのごとし。其の第一の佛を名づけて遠照といふ、彼しこに百八十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第二の佛を名づけて寶藏といふ、彼しこに九十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第三の佛を名づけて無量音といふ、彼しこに二百二十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第四の佛を名づけて甘露味といふ、彼しこに二百五十億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第五の佛を名づけて勝といふ、彼しこに十四億の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第六の佛を名づけて勝力といふ、彼しこに萬四千の菩薩あり、皆まさに往生すべし。其の第七の佛を名づけて師子といふ、彼しこに

【二三】菩薩の往生を擧げて凡夫を勸む。

あるは百由旬、あるは五百由旬、おのおの其の中において諸の快樂を受くること切利天上のごとくにして亦みな自然なり。」

三〇 爾のとき慈氏菩薩佛に白して言さく、「世尊なにの因なにの縁ありてか彼の國の人民胎生化する。佛慈氏に告げたまはく、『若し衆生ありて疑惑の心を以て諸の功德を修めて彼の國に生ぜむと願はむに、佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智を了ぜず、此の諸の智において疑惑して信ぜず。然れどもなほ罪福を信するをもて善本を修習して其の國に生ぜむと願はむに、此の諸の衆生かの宮殿に生じて壽五百歳までに常に佛を見たてまつらず、經法を聞きたてまつらず、菩薩聲聞聖衆を見たてまつらざらむ、是のゆゑに彼の國土においてこれを胎生といふ。若し衆生ありて明かに佛智乃至勝智を信じて、諸の功德を作して信心回向せば、此の諸の衆生七寶の華の中において自然に化生して、跏趺して坐し、須臾の頃に身相光明智慧功德もろもろの菩薩のごとく具足し成就せむ。』

復つぎに慈氏、他方佛國の諸の大菩薩發心して無量壽佛を見たてまつり、及び諸の菩薩聲聞の衆を恭敬し供養せむと欲せば、彼の菩薩ら命終して無量壽國に生ずることをえて、七寶の華の中において自然に化生せむ。彌勒まさに知るべし、彼の化生の者は智慧すぐれたるがゆゑなり。其の胎生の者はみな智慧なきをもて五百歳の中において常に佛を見たてまつらず、經法を聞かず、菩薩もろもろの聲聞衆を見ず、佛を供養するに由なし、菩薩の法式を知らず、功德を修習することをえず。當に知るべし、此の人は宿世のとき智慧あることなくして疑惑せしが致すところなり。」

三二 佛彌勒に告げたまはく、「譬へば轉輪聖王の別に七寶の宮室ありて、種種に莊嚴し牀帳を張設し諸の結廬を懸けたらむに、若し諸の小王子ありて罪を王に得ば、輒ち彼の宮中に内れて繋ぐに金鎖を以てせられ、飲食衣服牀褥華香妓樂を供給すること轉輪王のごとくにして、乏少するところ

【二〇】胎生化生を辨じて信疑の得失を述ぶ。

【二二】佛智は總、不思議智以下の四は別、如來の五智なり。

【二三】喻に寄せて胎生の過を説く。

薩合掌して白して言さく、「佛の所説はなはだ苦なり、世人まことに爾なり、如來普慈をもて哀愍して悉く度脱せしめたまふ、佛の重誨を受けて敢て違失せじ。」

佛阿難に告げたまはく、「なむち起ちて更に衣服を整へ、合掌し恭敬して無量壽佛を禮したてまつるべし、十方國土の諸佛如來に共に彼の佛の無著無礙を稱揚し讚歎したまへり。」是において、阿難たちて衣服を整へ、正身西面し恭敬し合掌して、五體を地に投じて無量壽佛を禮したてまつる。白してまをさく、「世尊、ねがはくは彼の佛の安樂國土および諸の菩薩聲聞大衆を見たてまつらむ。」是の語を説きはるに、即時に無量壽佛大光明を放ちて普く一切の諸佛世界を照らしたまふ、金剛圍山須彌山王大小の諸山一切の所有みな同じく一色なり。譬ふれば劫水の世界に彌滿して、その中の萬物沈没して現せず、混濁滯汗としてたゞ大水のみを見るがごとし。彼の佛の光明も亦また是のごとし。聲聞菩薩一切の光明みな悉く隱蔽して、たゞ佛光の明曜顯赫なるを見たてまつる。爾の時に阿難すなはち無量壽佛を見たてまつるに、威德巍巍たること須彌山王の高く一切の諸の世界の上に出でたるがごとし、相好光明照耀せずといふことなし。此の會の四衆一時に悉く見たてまつる、彼しこより此の土を見ることも亦また是のごとし。

爾の時佛阿難および慈氏菩薩に告げたまはく、「汝かの國を見るに地より已上淨居天に至るまで其の中のあらゆる微妙嚴淨自然の物ごとく見たりとせむやいなや。」阿難こたへて曰さく、「唯しかり、すでに見たてまつりぬ。」「汝いかにまた無量壽佛の大音一切世界に宣布して衆生を化したまへるを聞きたてまつりやいなや。」阿難こたへて曰さく、「唯しかり、已に聞きたてまつりぬ。」「彼の國の人民百千由旬の七寶の宮殿に乘じて、障礙あることなく普く十方に至りて諸佛を供養せり、汝また見たりやいなや。」對へて曰さく、「已に見たてまつりぬ。」「彼の國の人民胎生の者あり、汝また見たりやいなや。」對へて曰さく、「已に見たてまつりぬ、其の胎生の者の處るところの宮殿

【三〇六】第七智慧を明す。上來の悲化、彌陀の五智によるを以てこれを信ずべきを説く。

【三〇七】混濁滯汗。ヒロクタダヨヘル漫漫たる大水。

【三〇八】四衆とは發起、影響、當機、結緣。

【三〇九】極樂の觀見を審かにして化生胎生に及ぶ。

せよ、うたゝあひ勅令しておのおの自ら端しく守るべし。聖を尊び善を敬ひ仁慈ありて博く愛せよ、佛語の教誨あへて虧負することなかれ、當に度世を求めて生死衆惡の本を拔斷すべし、當に三塗無量の憂畏苦痛の道を離るべし。汝ら是において廣く徳本を植ゑよ、恩を布き施惠して道禁を犯すことなく、忍辱と精進と一心と智慧とを以てすべし、うたゝあひ教化して徳を爲し善を立てよ。正心正意にして齋戒清淨なること。一日一夜すれば、無量壽國に在りて善を爲すこと百歳するに勝れたり。ゆゑはいかに。彼の佛の國土は無爲自然にして、みな衆善を積みて毛髮の惡なし。此において善を修むること。十日十夜すれば、他方諸佛の國土において善を爲すこと千歳するに勝れたり。ゆゑはいかに。他方の佛國は善を爲す者は多く惡を爲す者は少し、福德自然にして造惡なき地なり、唯この間のみ惡おほくして自然なることあることなく、勤苦求欲してうたゝあひ欺給す、こころ勞し形くるしみて苦を飲み毒を食ふ、是のごとく忽務して未だ嘗て寧息せざればなり。吾れ汝ら天人の類を哀みて、ねむごころに誨諭して教へて善を修めしめ、器に隨ひて開導して經法を授與するに承用せずといふことなし。意の所願にありてみな得道せしむ。佛の遊履するところの國邑丘聚化を蒙らずといふことなし、天下和順し日月清明なり、風雨ときを以てして災厲おこらず、國ゆたかに民やすくして兵戈もちゐることなし、徳を崇め仁を興こして務めて禮讓を修む。』

佛の言たまはく、『我れ汝ら諸天人民を哀愍すること父母の子を念ふよりも甚し、今われ此の世間において作佛して、五惡を降化し五痛を消除し五燒を絶滅し、善を以て惡を攻め生死の苦を抜き、五徳を獲て無爲の安きに昇らしむ。吾れ世を去りてのち經道やうやく滅び、人民詭僞にしてまた衆惡を爲し、五燒五痛かへりて前の法のごとくならむ、久しくして後うたゝ劇し、悉く説くべからず、我れたゞ汝がために略してこれを言へるのみ。』佛彌勒に語げたまはく、『汝らおのおの善くこれを思ひ、うたゝあひ教誨して佛の經法のごとくせよ、犯すことを得ることなかれ。』是において彌勒苦

【〇三】穢土一日の善は淨土百歳に優る。

【〇四】般舟三昧經十日念佛を佛く。十夜説。

【〇五】斯經護國として重んぜらるる點。

【〇五】修捨總結。

のみ。教語開示するに信用する者は少し、生死やまず惡道たえず、かくのごとき世人つぶさに盡くすべきことかたし。ゆゑに自然の三塗無量の苦惱あり、其の中に展轉して世世累劫に出期あることなし、解脫を得がたし、痛み言ふべからず。是れを五大惡五痛五燒とす。勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し念ひを正しくし、言行あひ副ひ所作至誠にして、所語語のごとく心口轉ぜず、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福德度世上天泥洹の道を獲得。これを五大善とす。」

佛彌勒に告げたまはく、「吾れ汝らに語る、此の世の五惡勤苦することかくのごとし。五痛五燒展轉してあひ生ず、ただ衆惡を作して善本を修めず、皆ことごとく自然に諸の惡趣に入る。或は其の今世に先づ殊病を被りて、死を求むるに得ず生を求むるに得ず、罪惡の招くところ示にして衆これを見る、身死すれば行ひに隨ひて三惡道に入る、苦毒無量にして自らあひ焦然せらる。其の久しくして後に至りて共に怨結を作す、小微より起りて遂に大惡と成る、みな財色を貪著して施惠することあたはざるに由りてなり。癡欲に迫められ心の思想に隨ひて煩惱結縛して解け已むことあることなし。己れを厚くし利を諍ひて省録するところなし、富貴榮華ときに當たりて快意して忍辱することあたはず、務めて善を修めず。威勢いくばくもなければ隨ひて以て磨滅す、身勞苦を坐けて久しくしてのち大に劇し、天道 施張して自然に糺舉するに綱紀維綱上下相應す、笑笑、松松として當に其の中に入るべし。古今これより、痛ましきかな傷むべし。」

佛彌勒に語けたまはく、「世間かくのごとし、佛皆これを哀む、威神力をもて衆惡を摧滅して悉く善に就かしむ、所思を棄捐して經戒を奉持し、道法を受行して違失するところなく、終に度世泥洹の道を得しむ。」佛の言たまはく、「汝いま諸天人民および後世の人、佛の經語を得てまさにつらつらこれと思ひて能く其の中において心を端し行ひを正しくすべし。主上善を爲して其の下を率化

【九】再び上述の五惡を捨つべきを説く。

【九】施張。正直。
【一〇】鞞鞞松松。孤獨無依。

【一〇】佛道を持し五善を修すべきを説く。

す、家室眷屬飢寒困苦し、父母教誨すれば目を顧らして怒りて讐ふ、言令不和にして違戻反逆す。譬ふれば怨家のごとし、子ながらむにはしかじ。取與節なくして衆ともに患へ厭ふ、恩に負き義に違ひて報償の心あることなし、貧窮困乏にしてまた得ることあたはず、辜較縱奪にしてほしいままでに遊散す、しばしば唐らに得るに申ひて用て自ら賑給す。酒に耽り美を嗜みて飲食はかりなし、肆心に蕩逸し、魯扈低突して人情を識らず、強ひて抑制せむことを欲す、人の善あるを見ては憎嫉してこれを惡む、義なく禮なくして顧難するところなし、自ら用て職當して諫曉すべからず。六親眷屬の所資の有無憂念することあたはず、父母の恩を惟はず、師友の義を存ぜず、心つねに惡を念ひ、口つねに惡を言ひ、身つねに惡を行ひて曾て一善もなし。先聖諸佛の經法を信ぜず、道を行ひて度世を得べきことを信ぜず、死してのち神明さらに生ぜむことを信ぜず、善を作して善をえ惡を爲して惡をうることを信ぜず、眞人を殺し衆僧を鬪亂せむと欲し、父母兄弟眷屬を害せむと欲す。六親憎惡して其れをして死せしめむことを願ふ。是のごとき世人心意ともに然り、愚癡瞶昧にして自ら智慧を以てして、生の從來するところ死の趣向するところを知らず、不仁不順にして天地に惡逆す、而もその中において悖望僥倖して長生を求めむと欲すれども會すまさに死に歸すべし。慈心をもて教誨して其れをして善を念はしめ、生死善惡の趣自然に是れあることを開示すれども肯てこれを信ぜず。ねんごろに與に語れども其の人に益なし、心中閉塞してこころ開解せず、大命まことに終はらむとして悔懼もごもいたる、豫め善を修めず窮まりに臨みて方に悔ゆ。これを後に悔ゆともはたなにぞ及ばむ。天地の間に五道分明なり、恢廓窈窕浩浩茫茫たり、善惡報應して禍福あひ承く、身みづからこれを當く誰れも代はる者なし、數の自然なるをもて其の所行に應ず、殃咎命を追ひて縱捨することを得ることなし。善人は善を行ひて樂より樂に入り明より明に入る、惡人は惡を行ひて苦より苦に入り冥より冥に入る、誰れか能く知るものあらむ、ひとり佛のみ知りたまふ

【一九七】辜較は猶苛劔と言ふがごとし。

【一九八】魯扈は魯鈍にして跋扈。

【一九九】職當。自高これを掌る。

勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚焼するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福德度世上天泥洹の道を獲む。これを三大善とす。」

佛の言たまはく、『その四惡とは、世間の人民善を修めむことを念はず、うたあひ教令して共に衆惡を爲すに、**一八六** 兩舌 惡口 妄言 綺語す。讒賊鬪亂して善人を憎嫉し賢明を敗壞し、**一八九** 傍において快喜して、二親に孝せず、師長を輕慢し、朋友に信なくして誠實を得がたし。尊貴自大にして己れ道ありと謂ひて横に威勢を行ひて人を侵易す、自ら知ることあたはず、惡を爲して恥づることなし、自ら強健なるをもて人の敬難を欲す。天地神明日月を畏れず、背て善を作さず、降化すべきことかたく、自ら用て 僂僂して常に爾るべしと謂へり、憂懼するところなくして常に橋慢を懷けり。かくのごとき衆惡天神記識す。其の前世に頗る福德を作ししに頼りて、小善扶接し營護してこれを助く。今世に惡を爲して福德盡滅す、諸の善鬼神のおの共にこれを離れて、身ひとり空しく立ちてまた依るところなし。壽命終盡して諸惡の歸するところなり、自然に迫促して共に趣きてこれに頼る。又その名籍神明に記在せり、殃咎牽引して當に往きて趣向すべし、罪報自然にして捨離するところなし、ただ前行に得りて火鑊に入る、身心摧碎して精神痛苦す、斯の時に當たりて悔ゆとも復なにぞ及ばむ。天道自然にして蹉跌することをえず、ゆゑに自然の三塗無量の苦惱あり、その中に展轉して世世累劫に出期あることなし、解脱を得がたし、痛みいふべからず。是れを四大惡四痛四燒とす、勤苦することかくのごとし、譬ふれば大火の人身を焚焼するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福德度世上天泥洹の道を獲む。これを四大善とす。』

佛の言たまはく、『その五惡とは、世間の人民 徒倚懈惰して、背て善を作し身を治め業を修め

【一八六】第四惡。欺妄不信。

【一八七】兩舌。離間語。

【一八八】惡口。產惡語、毀譽。

【一八九】妄言。虛誑語、心口各異。

【一九〇】綺語。雜穢語、染心所發。

【一九一】夫婦のみ傍室に快喜放逸なるなり。

【一九二】僂僂は猶憍傲と言ふが如し。

【一九三】第五惡、飲酒無智。

【一九四】徒倚。徘徊。

間の人民じんみんこころ愚おろかに智ちすくなくして善ぜんを見ては憎にく誘さうして慕ほひ及およびむことを思おもはず、ただ惡あくを爲なさむと欲ほして妄みだりに非法ひふぽうを作つくし、常に盜心たうしんを懷いだきて他の利りを怖おそ望ぼうす、消散さんさんし糜み盡じんしてまた求もと索さくす。邪心じあしんただしからずして人の色いろあらむことを懼おそる、豫あらかめ思おもひ計はからず事こといたりて乃すなち悔くゆ。今世こんぜに現あらに王法わうぽうの牢獄らうごくあり、罪つみに隨したがひて趣向しゆかうしてその殃罰あやばちを受うく、その前世ぜんぜいに道徳だうとくを信まぜず善本ぜんぽんを修しゆめざりしに因よりて今また惡あくを爲なす、天神てんしん別識べつしきしてその名籍なみせきを別わかかつ、壽じゆをはり神かみゆきて惡道あくだうに下くだり入いる。ゆゑに自然じねんの三塗さんず無量むりやうの苦惱くなんあり、その中に展轉てんてんして世世累劫せせらいきやくに出現しゆげんあることなし、解脫げだつを得えがたし、痛いたみ言いふべからず。これを二大惡にだいく二痛にいたう二燒にせんとす。勤苦こんくすることかくのごとし、譬たとふれば大火だいふの人身じんしんを焚燒ふんせんするがごとし。人ひとよく中ちゆうにおいて、一心いっしんに意いを制せいし、身みを端たし行ぎやうひを正ただしくして、ひとり諸善しよぜんを作つくして衆惡しゆあくを爲なさずば、身みひとり度脫だつだつしてその福德ふくどく度世たふせ上天じやうてん泥洹にいつわんの道だうを獲とむ。これを二大善にだישぜんとす。

【一三】佛ぶつの言ことたまはく、「その三惡さんあくとは、世間の人民じんみんあひ因よりて寄生きしやうして共に天地てんちの間に居ゐる、處年壽じゆねんじゆ命いのちよくいくばくなることなし。上に賢明けんめい長者ちやうじやう尊貴そんき豪富かうふあり、下に貧窮びんきやう斯賤しせん厖愚むうぐ夫とあり、中に不善ふぜんの人ひとあり。常に邪惡じあくを懷いだけり、ただ姪妹いんめいを念おもじて煩わづひ胷むね中に滿みつ、愛欲あいよく交亂かうらんして坐起ざきやすからず、貪意こんい守し惜じやくしてただ唐たうらに得えむことを欲ほす、細色さいしきを眇み昧まいして邪態じたいほかに逸はなり、自妻じゆさいをば厭憎えんじゆうして私ひそかに妄みだりに入い出し、家財けさいを費損ひさいして事非法じひふぽうを爲なす、こもごも聚會じゆえを結びて師しを興おこしてあひ伐ひつ、攻劫こうきやく殺戮さつりやくして強奪きやうだつ不道ふだうたり、惡心あくしんほかに在ありて自ら業ごうを修しゆめず、盜竊たうせうして趣おもかに得えれば欲繫よくけいことを成なす、恐熱こんねつ迫お迫おせしめて妻子けしに歸給ききつす、恣心しじん快意くわいいして身みを極ごくめて樂らくを作つくす、或あるは親屬しんじゆくにおいて尊卑そんひを避よけざるをもて家室けしつ中ちゆう外げうれへてこれを苦くるしむ、亦またまた王法わうぽうの禁令こんれいを畏おそれず。かくのごとき惡あくは人鬼じんきに著ちやくされ、日月にげつ照見しやうけんし神明じんめい記識きしきす、ゆゑに自然じねんの三塗さんず無量むりやうの苦惱くなんあり、其そのの中に展轉てんてんして世世累劫せせらいきやくに出現しゆげんあることなし、解脫げだつを得えがたし、痛いたみ言いふべからず。これを三大惡さんだいく三痛さんいたう三燒さんせんとす。

【一三】第三惡は姪妹不禮。

【一四】眇昧。傍視。

【一五】恐怖熱惱脅迫して得る所を妻子に給し正業を事とせず。

惱あり、その身を轉質し形を改め道を易ふ、受くるところの壽命あるは長く、あるは短し、魂神精識自然にこれに趣く、當にひとり値ひ向ひあひ従ひて共に生ずべし、たがひに報復して絶え已むことあることなし、殃惡いまだ盡きざればあひ難るることをえず、其の中に展轉して出期あることなし。解脱を得がたし、痛み言ふべからず。天地の間に自然にこれあり。即時にたちまちに應至せずとも善惡の道かならず當にこれに歸すべし。これを一大惡一痛一燒とす。勤苦することは是のごとし、譬ふれば大火の人身を焚燒するがごとし。人よく中において、一心に意を制し、身を端し行ひを正しくして、ひとり諸善を作して衆惡を爲さずば、身ひとり度脱してその福德度世上天泥洹の道を獲む。これを一大善とす。』

佛の言たまはく、『その二惡とは、世間の人民・父子・兄弟・室家・夫婦すべて義理なく法度に順ぜず、奢姪憍縱にしておのおの快意せむと欲す、心に任せて自らほしいままにし、たがひに欺惑し、心口おのおの異にして言念實なし、佞諂不忠にして言を巧みにして諛ひ媚び、賢を嫉み善を謗りて冤枉におとし入る。主上あきらかならずして臣下を任用す、臣下自在にして機偽多端なり、一己の能行してその形勢を知る。位に在りて正しからざれば其れに欺かる、妄りに忠良を損じて天心に當たらす、臣はその君を欺き子はその父を欺く、兄弟夫婦中外の知識たがひに欺誑す。おのおの貪欲瞋恚愚癡を懷きて、自ら己れを厚くせむと欲して多く有らむことを欲貪す。尊卑上下ところ俱に同じく然なり。家を破り身を亡ほし前後を顧みず、親屬内外これに坐りて滅ぶ。或ときは室家の知識郷黨市里の愚民野人うたたともに事に従ふ、たがひに利害して忿り成り怨むすほる。富有なれども慳惜して背て施與せず、寶を愛し重きを貪りてところ勞し身くるしむ。かくのごとくして竟りに至りて恃怙するところなし、ひとり來りひとり去りて一も隨ふものなし、善惡禍福命を追ひて生ずるところなり。或は樂處に在り或は苦處に入る、然して後に乃ち悔ゆともまさに復なにぞ及ぶべき。世

【二八】第二惡、劫盜不義。

【二九】君情を伺ひ便佞已に厚くせんとす。或は法度を履む。

き、また貪意愚癡苦惱の患へなからむ。壽は一劫百劫千萬億劫ならむと欲せば、自在に意に隨ひて皆これを得べし、無爲自然にして泥洹の道に次げり。汝ら宜しくおのおの精進して心の所願を求むべし。疑惑し中悔して、自ら過咎を爲すことを得ることなかれ。彼の邊地の七寶の宮殿に生じなば五百歳の中に諸の厄を受けなむ。彌勒佛に白して言さく、「佛の重誨を受けたり、專精に修學して教へのごとく奉行して敢て疑ふことあらじ。」

佛彌勒に告げたまはく、「汝ら能く此の世において、端心正意にして衆惡を作さざるを甚だ至徳とす、十方世界最も倫匹なし。ゆゑはいかに。諸佛國土の天人の類は、自然に善を作して大に惡を爲さず、開化すべきこと易し。今われ此の世間において作佛して、五惡五痛五燒の中に處すること最も劇苦なりとす。群生を教化して五惡を捨てしめ五痛を去らしめ五燒を離れしめ、其の意を降化して五善を持ちて、其の福德度世長壽泥洹の道を獲しむ。」佛の言たまはく、「なにか五惡なにか五痛なにか五燒なる。なにか五惡を消化し五善を持ちて其の福德度世長壽泥洹の道を獲しむる。」

佛の言たまはく、「その一惡とは、諸天人民蟻動の類衆惡を爲さむと欲す、皆しからずといふことなし。強きものは弱きを伏し、うたたあひ刺賊し、殘害殺戮して迭ひにあひ呑噬す、善を修むることを知らず、惡逆無道なり、後に殃罰を受けて自然に趣向す、神明記識して犯せる者を赦るさず。ゆゑに貧窮下賤乞、尙孤獨聾盲瘖瘂愚癡弊惡なるものあり、疴狂不逮のたぐひあるに至る。また尊貴豪富高才明達なるものあり、みな宿世の慈善修善積徳の致すところによる。世に常の道の王法の牢獄あれども、肯て畏れ慎まず、惡を爲し罪に入りてその殃罰を受く、解脱を求め望めども免れ出づることを得がたし。世間にこの目前に見る事あり。壽をはりて後世に尤だ深く尤だ劇し。その幽冥に入りて生を轉じて身を受く、譬へば王法の痛苦極刑のごとし。故に自然の三塗無量の苦

【六七】佛智を疑ふもの邊地七寶宮殿に胎生す、後に細説あり。

【六八】重誨。愍重に修捨を勧め給へるを云ふ。

【六九】以下五惡段、三毒所起の五惡を消除すべきを説く。

若王法爲本、仁義以先の旨を開示し、また觀經閉筵の弄引をなすものなり。

【七〇】匹は輩也。

【七一】此土五濁惡なるも、他土然らず、後文参照。

【七二】序分八相成道參照。

【七三】五惡は殺、盜、邪淫、妄語、飲酒、五惡是れ因業。

【七四】五痛は惡業により現世に罪せられ又厄に逢ふ、是れ華報。

【七五】五燒は惡業により來世に惡趣に墮す、是れ果報。

【七六】五善。五惡に反する五正行。

【七一】第一惡、殺生不仁。

【七九】尙。貧にして乞ふ者。

【七八】疴は短少なり、又僕也。

【八〇】不逮は事に觸れ人後にあり。

動の類もみな慈恩を蒙りて憂苦を解脱す。佛語の教誡はなほだ深く甚だ善し、智慧明見にして八方
 上下去來今のこと究暢したまはずといふことなし。今われ衆等度脱を得ることを蒙るゆゑは、皆佛
 の前世上に道を求めたまひしとき、謙苦せしが致すところなり。恩徳あまねく覆ひて福祿巍巍たり。
 光明徹照して空に達すること極まりなし、泥洹に開入し教授典攬し、威制をもて消化して十方を
 感動せしめたまふこと無窮無極なり。佛は法王たるをもて尊きこと衆生に超えたまへり、普く一切
 天人の師と爲りて、心の所願に隨ひてみな道を得しめたまふ。今佛に値ひたてまつることを得、ま
 た無量壽佛の名を聞きたてまつりて、歡喜せずといふことなし、こころ開明することを得たり。』
 佛彌勒菩薩に告げたまはく、『汝が言是なり。若し佛を恭敬することあらむ者は實に大善たらむ。
 天下久々にして乃ち復佛まします。今われ此の世において作佛して、經法を演説し道教を宣布し
 て、諸の疑網を斷ち、愛欲の本を抜き衆惡の源を杜ぐ、三界に遊歩して拘礙するところなし、典
 攬の智慧は衆道の要なり、綱維を執持して照然分明なり、五趣を開示し未度の者を度し、生死泥
 洹の道を決正す。彌勒まさに知るべし、なむち無數劫よりこのかた菩薩の行を修して、衆生を度せ
 むと欲したること其れ已に久遠なり、汝に従ひて道をえ泥洹に至りしもの數を稱るべからず。汝お
 よび十方の諸天人民一切の四衆、永劫よりこのかた五道に展轉して憂畏勤苦すること具さに言
 ふべからず、乃至今世まで生死たえず、佛とあひ値ひて經法を聽受し、又また無量壽佛を聞くこと
 を得たり。快きかな甚だ善し。我れ汝を助けて喜ばしむ。汝いま亦みづから生死老病の痛苦を厭ふ
 べし、惡露不淨にして樂しむべきものなし、宜しく自ら決斷すべし。身を端し行ひを正しくして
 ますます諸善を作し、己れを修め體を潔くし、心垢を洗除し、言行忠信にして表裏相應すべし。
 人よく自ら度して轉あひ拯濟し、精明に求願して善本を積累せば、一世の勤苦は須臾の間なりとい
 へども、後には無量壽佛の國に生じて快樂きはまりなく、長く道徳と合明し、永く生死の根本を拔

【二六】前の釋尊讀偈に云ふ若人無善本不得聞此經等の意。

【二六】重ねて懇に修捨を勸む。

【二六】經典を解釋して衆義を攬知す。

【二七】五趣は天、人、鬼、畜、地獄。五道之に同じ。

【二八】四衆は僧、尼、信男、信女。出家在家の男女。

【二九】五道。五趣に同じ。

【三〇】惡露。老病者の出す穢物。

だ傷むべし。或ときは室家・父子・兄弟・夫婦一は死し一は生じて更ひにあひ哀愍し、恩愛思慕して憂念結縛し、心意痛著して迭ひにあひ顧戀す、日を窮め歳を卒へて解け已むことあることなし。道德を教誨すれどもこころ開明せず、恩好を思想して情欲を離れず、昏瞶閉塞して愚惑に覆はる。深く思ひつらつら計りて、心みづから端正にして專精に道を行ひ、世事を決斷することあたはず、便旋して竟りに至る。年壽をはり盡くれども道を得ることあたはず、いかにともすべきことなし。總猥憤擾してみな愛欲を貪る。道に惑へる者は衆くこれを悟る者は寡く。世間忽忽として、膠頼すべきことなし、尊卑・上下・貧富・貴賤・勤苦・怠惰して、おのおの殺毒を懷く。惡氣窳冥にして妄りに事を興こさむとす、天地に違逆し、人心に従はず、自然の非惡まづ隨ひてこれに與す、恣に所爲を聽るして其の罪の極まるを待つ。其の壽いまだ盡きざるに、たちまちこれを奪ひて惡道に下し入れて、累世に勤苦せしむ、其の中に展轉して數千億劫出期あることなし、痛み言ふべからず、甚だ哀愍すべし。」

佛彌勒菩薩諸天人等に告げたまはく、「我れいま汝に語る。世間のこと人これを用てのゆゑに、坐りて道を得ず。當につらつら思ひ計りて、衆惡を遠離し、其の善きものを擇びて勤めてこれを行ふべし。愛欲榮華つねに保つべからず、皆まさに別離すべし、楽しむべきものなし。佛の在世に曼びてまさに勤精進すべし。其れ至心ありて安樂國に生れんと願はんものは、智慧明達に功德殊勝なることを得べし。心の所欲に隨ひて經戒に虧負して、人の後に在ることを得ることなかれ。もし疑意ありて經を解せずば具さに佛に問ふべし、當に爲にこれを説くべし。」彌勒菩薩長跪して白して言さく、「佛は威神尊重にして所説快善なり。佛の經語を聽きたてまつりて、貫心にこれを思ふに、世人實に爾なり、佛の言たまふところのごとし。今佛慈愍をもて大道を顯示したまふに、耳目開明にしてながく度脱をえたり、佛の所説を聞きたてまつりて歡喜せずといふことなし、諸天人民、

【五二】決斷。放捨。

【五三】總は濫也。

【五四】憤は闇也。

【五五】慳は聊と同じ、頼也。

【五六】上に三毒の狀態を説く、今修捨を勸む。

【五七】虧負は缺達也。

【五八】貫心。通心、熟慮。

【五九】蟲行の貌。蠕動の類は衆生の類。

至らむ。ゆゑはいかに。世間の事たがひにあひ患者す、即時に急かにあひ破すべからずといへども、
 然も毒を含み怒りを畜へ、憤りを精神に結びて、自然に刻識してあひ離るることをえず。皆まさに
 【四一】對生して更ひにあひ報復すべし。人世間愛欲の中にありて、ひとり生じひとり死しひとり去りひ
 とり來る、行ひを當ひて苦樂の地に至り趣く、身みづからこれを當く、代はる者あることなし、善
 惡變化し殃福とを異にし、あらかじめ嚴かに待つ、當にひとり趣入すべし。遠く他所に到りぬ
 れば能く見るものなし、善惡自然にして行ひを追ひて生ずるところなり、窈窕冥冥として別離
 すること久長なり、道路おなじからざれば會見期なし、甚だ難く甚だ難し、復あひ値ふことを得むや。
 何ぞ衆事を棄てて、おのおの強健の時に曼びてつとめて善を勤修し、精進に度世を願はざる。極長
 生を得べし、いかにぞ道を求めざる、安にまつべきところぞ、なにの樂みをか欲する。是の如き世
 人善を作して善をえ、道を爲して道を得ることを信ぜず、人死して更に生じ、惠施して福を得るこ
 とを信ぜず、善惡の事すべてこれを信ぜず、これを然らずと謂ひて終に是とすることあることなし。
 ただ此れに坐るが故に且みづからこれを見る、更ひにあひ瞻視して先後おなじく然り、うたた
 あひ承受するに、父教令をのこす、先人祖父もとより善を爲さず、道德を識らず、身おろかに神
 くらく、心ふさがり意とちて、死生の趣善惡の道みづから見ることもあたはず、語るものあることな
 し、吉凶福禍きそひておのおの作れども、一つとして怪しむことなし。生死の常の道うたあひ
 嗣立す、或は父子を哭し、或は子父を哭し、兄弟夫婦たがひにあひ哭泣す、顛倒上下無常の根本な
 り。皆まさに過ぎ去るべし、常に保つべからず、教語開導すれどもこれを信するものは少し、是を
 以て生死の流轉休止あることなし。かくのごとき人、矇冥抵突して經法を信ぜず、心に遠慮なくし
 ておのおの快意せむと欲す、愛欲に癡惑せられて道德に達らず、瞋怒に迷没して財色を貪狼す、こ
 れに坐りて道をえず、常に惡趣の苦に更りて、生死きはまり已むことなかるべし。哀れなるかな甚

- 【二五】 五惡趣は地獄、餓鬼、畜生、人、天。
- 【二六】 出離の道德なき行爲生活。
- 【二七】 極長生。出離道德の結果。
- 【二八】 世人諍ふ所、有無俱に苦なるを辨じて、厭離せしむ。
- 【二九】 瑜伽四十四に六苦、因苦果苦財位苦勤守護苦無厭足苦變壞苦を擧ぐ。
- 【三〇】 六畜は牛馬鶏犬羊豕。
- 【三一】 松松は遠邊也心動也。
- 【三二】 解一本解に作る。
- 【三三】 正くは怨家、諸難をも含む。
- 【三四】 田あるも宅なきの類。
- 【三五】 彼此具足して等一。
- 【三六】 敵者相對して一處に生ず。
- 【三七】 窈窕は幽遠。
- 【三八】 上述の善惡因果を信ぜず恨結びて解けず、惡を造りて悔いざるなり。
- 【三九】 道を信ぜず、却て邪見の謬執を抱く。
- 【四〇】 子の無知は父の邪言を受く。
- 【五一】 矇は眸子ありて見るなきもの、抵突は唐突也、了知なきなり。

【一三六】世事を棄てて勤行して道徳を求めざる。極長生を獲て壽樂きはまりあることなかるべし。
 【一三九】然るに世人薄俗にして共に不急の事を諍ふ。此の劇惡極苦の中において勤身營務して以て自ら給濟す、尊となく卑となく貧となく富となく、少長男女ともに錢財を憂ふること有無おなじく然り、憂思まさに等し、屏營として愁苦して念を累ね慮りを積む、心に走使せられて、安き時あることなし。田あれば田を憂へ、宅あれば宅を憂へ、牛馬・六畜・奴婢・錢財・衣食・什物また共にこれを憂ふ、思ひを重ね息を累ねて憂念愁怖す。横に非常の水火・盜賊・怨家・債主に焚漂し劫奪せられて、消散し磨滅す。憂毒、松松として、解くる時あることなし、憤りを心中に結びて憂惱を離れず、ころ堅くころ固くして適ひて縱捨することなし、或は摧碎に坐りて身ほろび、命をはりぬればこれを棄捐して去る、誰れの隨ふものなし、尊貴豪富も亦この患へあり、憂苦萬端にして勤苦すること此のごとし、衆の寒熱を結びて痛と共に居す。貧窮下劣は困乏にして常に無し、田なければまた憂へて田あらむことを欲し、宅なければまた憂へて宅あらむことを欲し、牛馬・六畜・奴婢・錢財・衣食・什物なければまた憂へてこれあらむことを欲す、たまたま一あればまた一を少き、是れあれば是れを少く、齊等あらむことを思ふ、欲するに適ひて具さなければ便ちまた墮散す。かくのごとく憂苦す、當にまた求索すれども時に得ることあたはず、思想して益なし、身心ともに勞して坐起やすからず、憂念あひ隨ひて勤苦することかくのごとし、また衆の寒熱を結びて痛と共に居す。或時はこれに坐りて身を終へ命を夭ぼす、背て善を爲し道を行ひ徳に進まず、壽をはり身死して當にひとり遠く去るべし、趣向するところあれども、善惡の道よく知るものなし。世間の人民・父子・兄弟・夫婦・家室・中外の親屬まさにあひ敬愛してあひ憎嫉することなく、有無あひ通じて貪惜することを得ることなく、言色つねに和してあひ違戾することなかるべし。或ときはころ諍ひて悲怒するところあり、今世の恨みのころ微しくあひ憎嫉せば、後世にうたた劇しくして大怨と成るに

【一四四】 意力。如理作意。
 【一四二】 願力。求菩提心。
 【一四七】 方便。手段を立て加行す。

【一四八】 常力。無間修行。
 【一四九】 善力。捨惡正修。
 【一五〇】 定力。止行成就。
 【一五一】 慧力。所行成就。
 【一五二】 多聞。親聞妙解。
 【一五三】 正念。捨相入實。
 【一五四】 正觀。離癡見性。
 【一五五】 通明。六通三明。
 【一五六】 第三願。
 【一五七】 第三十一願。
 【一五八】 第二十九。第三十願。
 【一五九】 氷以上に衆生往生の因果を説きたる。また「易往」の旨を明したるものといふべし。以下「無人」の義を説くものと見るを得。下文「往き易くして入無」の一句之を示す。
 【一六〇】 以下總じて能依人と所依土との勝を明す。
 【一六一】 彌勒(Maitreya)。慈氏菩薩なり。この菩薩在會のこととは序分に出づるもの、今まで阿難に對告するに、以下慈氏に告ぐることに注意すべし。
 【一六二】 土勝未だ説かず。土卷終の國土莊嚴當卷初に相説するを指すか。
 【一六三】 衆生の無道をとがめ、以善對惡念佛生を説く。
 【一六四】 道は出離の道即ち念佛往生。

ゑに。金翅鳥のごとし、外道を威伏するがゆゑに。衆の遊禽のごとし、藏積するところなきがゆゑに。猶し牛王のごとし、能く勝つものがなきがゆゑに。猶し象王のごとし、善く調伏するがゆゑに。師子王のごとし、畏るるところなきがゆゑに。曠きこと虚空のごとし、大慈ひとしきがゆゑに。嫉心を摧滅して、勝れたるを忌まざるがゆゑに。専ら法を樂求して心に厭足なし、常に廣説を欲してころざし疲倦なし。法鼓を撃ち、法幢を建て、慧日を曜かし、癩闇を除き、六和敬を修す。常に法施を行じ、志勇精進にしてころ退弱せず。世の燈明と爲りて最勝の福田なり。常に導師と爲りて等しくして憎愛なし。ただ正道を樂ひて餘の欣戚なし、諸の欲刺を抜き以て群生を安んず。功・慧殊勝にして、尊敬せられずといふことなし。三垢の障りを滅して諸の神通に遊ぶ。因力・緣力・意力・願力・方便の力・常力・善力・定力・慧力・多聞の力、施戒忍辱精進禪定智慧の力・正念・正觀もろもの。通明の力・如法に諸の衆生を調伏する力、かくのごとき等の力一切具足せり。身色・相好功德・辯才具足し、莊嚴してともに等しきものなし。無量の諸佛を恭敬し、供養して、常に諸佛に共に稱歎せらる。菩薩の諸波羅蜜を究竟し、空無相無願三昧と、不生不滅との諸の三昧門を修めて、聲聞緣覺の地を遠離せり。阿難、かの諸の菩薩は是のごとき無量の功德を成就せり。我れただ汝がために略してこれを説くのみ、若し廣く説かば百千萬劫にも窮盡することあたはじ。

佛說無量壽經卷下

- 【九五】 苦惑二道の餘殘。習氣一乘。一佛乘。
- 【九六】 屍を斷じて實理を證す。その智は心に由り能く佛法を該ぬ、深廣なること大海の如し。
- 【九七】 慧所依の定體なり。異心なきは平等心なり。
- 【九八】 座は五塵、勞は勞役。
- 【九九】 廣勞は思惑煩惱。
- 【一〇〇】 大乘。大車。
- 【一〇一】 金剛山。洲外の鐵圍山。
- 【一〇二】 梵天は娑婆の主にして最も善を喜ぶとす。
- 【一〇三】 尼拘須(Nigrodha)。無節と譯す。縱廣葉樹。子小にして樹大、能く五百乘車を蔽す。
- 【一〇四】 優曇鉢(Udumbara)。靈瑞。輪王出世の時現ずと。
- 【一〇五】 金翅鳥即ち迦樓羅日に一大龍王五百小龍を食すと。
- 【一〇六】 象王は小象諸獸を調伏すと。
- 【一〇七】 六和敬は同戒和敬、同見和敬、同行和敬、語慈和敬、意慈和敬、身慈和敬、語慈和敬、意慈和敬。
- 【一〇八】 能生物善故。
- 【一〇九】 能生物善故。
- 【一一〇】 欣戚。スキキレヒ。
- 【一一一】 欲刺。五欲人を惱ます。針刺の如し。
- 【一一二】 慧一本徳に作る。
- 【一一三】 因力。宿世善根。
- 【一一四】 緣力。親近知識。

軟に調伏して忿恨の心なし、離蓋清淨にして厭怠の心なし、等心、勝心、深心、定心、愛法樂法、喜法の心のみあり、諸の煩惱を滅して惡趣の心を離れ、一切菩薩の所行を究竟せり、無量の功德を具足し成就す。深禪定と諸の通、明と慧とを得て、志を、七覺に遊ばしめ、心を佛法に修す。肉眼清徹にして分了ならずといふことなく、天眼通達して無量無限なり、法眼觀察して諸道を究竟す、慧眼眞を見てよく彼岸に度る、佛眼具足して法性を覺了す。無礙智を以て人のために演説す。等しく三界は空なり、無所有なりと觀じて、佛法を志求し、諸の辯才を具して衆生の煩惱の患へを除滅す。如來より生じて、法の如如を解し、善く、習滅音聲の方便を知りて、世語を欣はず、正論に樂在す。諸の善本を修めて、こころざし佛道を崇む。一切の法はみな悉く寂滅なりと知りて、生身と煩惱と、二餘ともに盡くせり。甚深の法を聞きて心に疑懼せず、常に能く修行す、其の大悲は深遠微妙にして、覆載せずといふことなし。一乘を究竟して彼岸に至り、疑網を決斷して、慧こころに由りて出づ、佛の教法において該羅して外なし、智慧は大海のごとく、三昧は山王のごとし。慧光明淨にして日月に超踰せり。清白の法具足し、圓滿すること猶し雪山のごとし、諸の功德を照らすこと等一にして清きがゆゑに。猶し大地のごとし、淨穢好惡、異心なきがゆゑに。猶し淨水のごとし、塵勞もろもろの垢染を洗除するがゆゑに。猶し火王のごとし、一切の煩惱の薪を燒滅するがゆゑに。猶し大風のごとし、諸の世界を行くに障礙なきがゆゑに。猶し虚空のごとし、一切の有において所善なきがゆゑに。猶し蓮華のごとし、諸の世間において汗染なきがゆゑに。猶し大乘のごとし、羣萌を運載して生死を出だすがゆゑに。猶し重雲のごとし、大法雷を震ひて未覺を覺するがゆゑに。猶し大雨のごとし、甘露の法を雨らして衆生を潤すがゆゑに。金剛山のごとし、衆魔外道も動すること能はざるがゆゑに。梵天王のごとし、諸の善法において最上首なるがゆゑに。尼拘類樹のごとし、普く一切を覆ふがゆゑに。優曇鉢華のごとし、希有にして遇ひ難きがゆゑに。

- 【七四】 離蓋。五蓋煩惱を離る。
- 【七五】 等心。諸行等修の心。
- 【七六】 勝心。所修勝上の心。
- 【七七】 深心。向上懇敬の心。
- 【七八】 愛法。聞思修の三慧法體を證得する心。
- 【七九】 深禪定。四禪四空定。
- 【八〇】 明は三通。
- 【八一】 慧は三慧。
- 【八二】 七覺は擇法、精進、喜、輕安、定、捨、念なり。
- 【八三】 五眼の徳を述ぶ。この徳佛徳なるも因に一分を成ずるを説くなり。
- 【八四】 法眼。俗諦差別十界三乘道法を知る。
- 【八五】 慧眼。眞諦平等空理を知る。
- 【八六】 四眼佛果に至れば等しく佛眼なり中道を緣する一切種智なり、無緣究竟の大慈悲なり。
- 【八七】 法義詞辯の四無礙。
- 【八八】 諸法緣生の故に空なり、實有とすべきなし。
- 【八九】 菩薩の解行は佛口より生ず、佛子とも云ふ。
- 【九〇】 空無所有にして而も有なり。この如實に知見せる理智を如如と云ふ。
- 【九一】 習滅。習善滅惡、苦因滅。
- 【九二】 生身は苦、煩惱は惑、三道の中業は苦惑に含む。

て、示現して彼れに同すること、我が國のごとくならむをば除く。」

佛阿難に告げたまはく、「彼の國の菩薩、佛の威神を承けて、一食のあひだに十方無量の世界に往詣して、諸佛世尊を恭敬し供養す。心の所念に隨ひて、華香・伎樂・繪蓋・幢幡・無數無量の供養の具、自然に化生して念に應じて即ち至る。珍妙殊特にして世の所有にあらず、輒ち以て諸佛菩薩聲聞大衆に奉散す。虚空の中に在りて化して華蓋と成る、光色、早燦として、香氣あまねく薫す。其のな周圓四百里なるものあり、是のごとく轉偈して、乃ち三千大千世界を覆ふ。其の前後に隨ひて次でを以て化没す。其の諸の菩薩、僉然として欣悅す。虚空の中において共に天樂を奏し、微妙の音を以て佛徳を歌歎す。經法を聽受して、歡喜すること無量なり。佛を供養しをはりて、未だ食せざる前に忽然として、輕舉して其の本國に還る。」

佛阿難に告げたまはく、「無量壽佛もろの聲聞菩薩大衆のために法を 班宣したまふとき、都べて悉く七寶の講堂に集會して、廣く道教を宣べ、妙法を演暢したまふに、歡喜し心解し得道せずといふことなし。即ち時に四方より自然に風おこりて、普く寶樹を吹きて、五音の聲を出だし、無量の妙華を雨らして、風に隨ひて周遍す。自然の供養かくのごとく絶えず、一切の諸天みな天上百千の華香萬種の伎樂を齎て、其の佛および諸の菩薩聲聞大衆を供養し、普く華香を散じ、諸の音樂を奏し、前後に來往してかはるがはるあひ 開避す。斯の時にあたりて 灑怡快樂いふにたふべからず。」

佛阿難に語けたまはく、「彼の佛國に生ぜる諸の菩薩等講説すべきところあれば常に正法を宣ふ、智慧に隨順して違ふことなく、失ることなし。其の國土のあらゆる萬物において、我所の心なく染著の心なし、去來進止情に係るところなし、意に隨ひて自在にして、適莫するところなし、彼れもなく我れもなく、競ふことなく、訟ふることなし。諸の衆生において大慈悲饒益の心を得たり、柔

【五七】 第二十三供養諸佛願所成。

【五八】 第九神境通願所成。

【五九】 第二十四供具如意願所成。

【六〇】 奉散。散じて供養する也。

【六一】 昱は煜なり、火光盛明。

【六二】 僉、皆也。

【六三】 神通飛化輕く速疾也。

【六四】 上來他土、以下極樂自土事。

【六五】 第三十智辨無窮願所成。

【六六】 班は遍也。

【六七】 上卷寶樹の説相參照。

【六八】 開避。アケテワタス。

【六九】 灑怡は和悅也。

【七〇】 第二十五説一切智願所成。

【七一】 第十漏盡願所成。我所とは自我を認めその所有所作とす故に食愛染著す。

【七二】 適莫。適適たる親なく、莫莫たる疏なし、厚薄親疎なきなり。

【七三】 財物を訟争す。

二乗の測るところにあらす、

たとひ一切の人、

淨慧ありて 本空を知り、

力を窮め講説を極めて、

佛慧は邊際なし、

壽命はなはだ得がたく、

人 信慧あること難し、

法を聞きてよく忘れず、

即ち我が善き親友なり、

たとひ世界に滿てらむ火をも、

會ず當に佛道を成じて、

ただ佛のみひとり明了なり。

具足してみな道をえ、

億劫に佛智を思はむに、

壽を盡くすともなほ知らじ、

是のごとく清淨なることを致す。

佛世また値ひ難し、

若し聞かば精進に求めよ。

見ては敬ひ得ては大に慶ぶべし、

是のゆゑに當に意を發こそすべし。

必ず過ぎて要す法を聞け、

廣く生死の流れを 濟ふべし。』

佛阿難に告げたまはく、『彼の國の菩薩みな當に一生補處を究竟すべし。其の本願ありて衆生の爲の故に、弘誓の功德を以て自ら莊嚴して、普く一切衆生を度脱せむと欲せむをば除く。阿難、かの佛國の中の諸の聲聞衆は、身光一尋なり。菩薩の光明は百由旬を照らす。二菩薩あり、最尊第一なり、威神の光明あまねく三千大千世界を照らす。』阿難佛に白さく、『彼の二菩薩、その號いかにぞ。』佛の言たまはく、『一をば觀世音と名づけ、二をば大勢至と名づく。是の二菩薩この國土におきて、菩薩の行を修し、命終轉化して彼の佛國に生ぜり。阿難、それ衆生ありて彼の國に生ぜむ者は、みな悉く三十二相を具足す、智慧成滿して深く諸法に入り、要妙を究暢し、神通無礙にして諸根明利ならむ。其の鈍根のものは、二忍を成就し、其の利根のものは不可計の無生法忍を得む。又かの菩薩乃至成佛まで惡趣に更らず、神通自在にして、常に宿命を識らむ。他方の五濁惡世に生じ

【四二】 本空。人法畢竟空。

【四三】 佛世等。序分無量億劫難值難見と同意。

【四四】 聞て疑はざるは信、思擇して正解を得るは慧。

【四五】 濟。一本度に作る。

【四六】 樂事を説き極樂を欣ばしむ。衆生往生の果を説くものとす。

【四七】 第二十二必至補處願所成。

【四八】 實は一樣なるも教門暫く差別して説く。

【四九】 寶積經悲華經觀世音授記經如幻三摩地經等に觀音勢至此土發心修行往生極樂を説く。

【五〇】 第二十一具足諸相願所成。

【五一】 第三十智辨無窮願。

【五二】 第二十五說一切智願所成。

【五三】 第五以下第十、第四十一願參照。

【五四】 第四十八得三法忍願。

【五五】 二忍。音響忍、柔順忍。

【五六】 第二不更惡趣願所成。

専ら淨佛土を求む、

諸佛は菩薩に告げて、

法を聞きて樂受して行じて、

彼の嚴淨の國に至らば、

必ず無量尊において、

其の佛の本願のちから、

皆ことごとく 彼の國に到りて、

菩薩至願を興こすらく、

普く一切を度し、

億の如來に奉事するに、

恭敬し歡喜して去りて、

若し人善本なくば、

清淨にして 戒を有てらむもの、

會て更に世尊を見たてまつりしもの、

謙敬して聞きて奉行し、

憍慢と弊と懈怠とは、

宿世に諸佛を見たてまつりしもの、

聲聞あるひは菩薩、

譬ふれば生れてより 盲ひたる者の、

如來の智慧海は、

必ず是のごとき刹を成ぜむ。

安養の佛に觀えしむ、

疾く清淨の處を得よ。

便ち速かに神通を得む、

記を受けて等覺を成すべし。

名を聞きて往生せむと欲せば、

自ら不退轉に致らむ。

願はくは己が國も異なることなからしめむ、

名あらはれて十方に達せむと念す。

飛化して諸刹に通じ、

還りて安養國に到る。

此の經を聞くことを得じ、

乃ち正法を聞くことを獲む。

すなはち能く此の事を信す、

踊躍して大に歡喜す。

以て此の法を信じがたし、

樂ひて是のごとき教へを聽く。

よく 聖心を究むることなし、

行きて人を開導せむと欲するがごとし。

深廣にして涸底なし、

【三四】 第四十七得不退轉願成就、第十八第十一參照。

【三六】 彼の國に到る。自ら不退轉に致ると二句に讀み、不退轉の位は、開信の一念に得る利益なりとす。

【三六】 以下釋尊の讚嘆なり。

【三七】 善本。廣く通ずるも、戒は諸善の初佛法の壽なれば、以て開經の宿因とす。

【三八】 憍は自高、慢は卑他、謙敬の反對なり。

【三九】 六弊は六度を閉塞す。

【四〇】 聖心。彌陀果上の佛智。

【四一】 生盲は不知にして他を導き難きを以て聖心の究め難きに譬ふ。

功德藏を具足して、

慧日世間を照らして、

恭敬して遶ること、三匝して、

彼の嚴淨の土を見るに、

因りて無上心を發こす、

時に應じて無量尊、

口より無數の、光りを出だして、

光りを迴らして身を圍遶せしむること、

一切の天人衆、

大土觀世音、

佛に白さく何に緣りてか笑みたまへる、

梵聲は猶し雷震のごとく、

當に菩薩に、記を授くべし、

十方より來れる正士、

嚴淨の土を志求す、

一切の法は、猶し

諸の妙願を満足して、

法は電と影のごとしと知りて、

諸の功德の本を具せるをもて、

諸法の性は、

妙智等倫なし。

生死の雲を消除したまふ。

無上尊に稽首したてまつる。

微妙にして思議し難し、

願はくは我が國もまた然ならむと。

容を動かして欣笑を發こし、

遍く十方の國を照らしたまふ。

三匝して、頂より入る、

踊躍してみな歡喜す。

服を整へて稽首して問ひたてまつる、

唯しかり願はくは、意を説きたまへ。

八音妙響を暢べたまふ、

いま説かむ仁あきらかに聽け。

われ悉く彼の、願を知れり、

決を受けて當に作佛すべし。

夢と幻と響のごとしと覺了して、

必ず是のごとき刹を成ぜむ。

菩薩の道を究竟す、

決を受けて當に作佛すべし。

一切空無我なりと通達して、

【四】右繞三匝は叮重なる恭敬なり。或は佛の三徳を以て三毒を滅するを表すと云。

【五】この類の光を神通光と云。

【六】得佛を記するとき光頂より入る。

【七】唯然は意中を示す助語。

【八】二句は彌陀の説音を形容せる也。梵は清淨の義。

【九】八音、柔輦聲、和調聲、尊惡聲、不眠聲、深妙聲、不女聲。

【一〇】授記。決定して成佛すべしと記説する也。

【一一】願。前の第七偈に願我國亦然とせる彌陀に同ずる願。

【一二】決。受記決定。

【一三】無實の故に如夢、而有の故に如幻。

【一五】 慧は次ぎて上輩のものごとくならむ。」

佛阿難に告げたまはく、「其の下輩の者は、十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼の國に生ぜむと欲せむに、たとひ諸の功德を作すことあたはずとも、當に無上菩提の心を發こして、一向に意を專らにして乃至十念無量壽佛を念じて其の國に生ぜむと願ふべし。若し深法を聞きて歡喜信樂して疑惑を生ぜず、乃至一念かの佛を念じて、至誠心を以て其の國に生ぜむと願はば、此の人臨終に、夢のごとくに彼の佛を見たてまつりてまた往生を得む。功德智慧は次ぎて中輩の者のごとくならむ。」

佛阿難に告げたまはく、「無量壽佛の威神きはまりなし、十方世界の無量無邊不可思議の諸佛如來稱歎したまはずといふことなし。彼の東方恒沙の佛國において、無量無數の諸の菩薩衆、みな悉く無量壽佛の所に往詣して、及び諸の菩薩聲聞大衆を恭敬し供養して、經法を聽受し道化を宣布す。南西北方四維上下も亦また是のごとし。」爾のとき世尊頌を説きて曰たまはく、

【一六】 東方の諸佛の國、

彼の土の菩薩衆、ゆきて

南西北四維、

彼の土の菩薩衆、

一切の諸の菩薩、

寶香と無價の衣とを齎て、

威然として天樂を奏し、

最勝尊を歌歎して、

神通と慧とを究達して、

【一七】 そのかず恒沙のごとし、

無量覺に觀えたてまつる。

上下も亦また然なり、

ゆきて無量覺に觀えたてまつる。

おのおの天の妙華と、

無量覺を供養す。

和雅の音を暢發し、

無量覺を供養す。

深法門に遊入す。」

【一八】 逆誘を除くは抑止の説と云ふ。

【一九】 三輩往生を説く。第十九願成就、三輩と觀經の九品と同異に就て異説す。*三輩の文をば諸行念佛並説即ち助正傍正の説相なりと見、諸行往生の假文とす。

【二〇】 三輩に但念佛、助念佛、但諸行の三類あり、念佛は本願なれば一向と云ふ。

【二一】 正しくは臨終見佛、兼ては平生。

【二二】 中輩。

【二三】 齋戒。八戒と齋となり。

【二四】 在家一日夜出家の戒を持つ。

【二五】 繪は彩幡也。

【二六】 深法。彌陀の功德。

【二七】 第十七諸佛稱揚願成就細説。又前の凡夫往生に對し十方聖者往生を兼説す。

【二八】 第四十五住定見佛願參照。

【二九】 及の上に佛ある意にて讀むべし。

【三〇】 釋尊の別讚。

【三一】 無量覺。阿彌陀佛。

【三二】 威然。皆。

【三三】 深法門。涅槃なり、究竟の定慧にて大涅槃の理に入る。

卷の下

二 佛阿難に告げたまはく、「其れ衆生ありて彼の國に生ぜむ者は、皆ことごとく 正定の聚に住せむ。ゆゑはいかに。彼の佛國の中には諸の邪聚および不定聚なし。十方恒沙の諸佛如來みな共に無量壽佛の威神功德の不可思議なることを讚歎したまふ。あらゆる衆生その名號を聞きて、信心歡喜して 乃至一念至心に迴向して彼の國に生ぜむと願はば、即ち往生を得て不退轉に住せむ。ただ五逆と正法を誹謗するとを除く。」

三 佛阿難に告げたまはく、「十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼の國に生ぜむと願はんはんに、凡そ三輩あり。其の上輩の者は、家を捨てて欲を棄てて、沙門と作り、菩提心を發こし、一向に専ら無量壽佛を念じ、諸の功德を修して、彼の國に生ぜむと願ふ。此れ等の衆生、壽終の時に臨みて、無量壽佛もろもろの大衆とともに、其の人の前に現じたまはむ。即ち彼の佛に隨ひて其の國に往生し、便ち七寶華の中において自然に化生し、不退轉に住して智慧勇猛神通自在ならむ。是のゆゑに阿難、それ衆生ありて、今世において無量壽佛を見たてまつらむと欲せば、まさに無上菩提の心を發こし、功德を修行して、彼の國に生ぜむと願ふべし。」

四 佛阿難に告げたまはく、「其中輩の者は、十方世界の諸天人民、それ至心ありて彼の國に生ぜむと願はば、行じて沙門と作り、大に功德を修することあたはずとも、當に無上菩提の心を發こして、一向に専ら無量壽佛を念すべし、多少に善を修して、齋戒を奉持し塔像を起立し、沙門に飯食せしめ、繒を懸け燈を然し、華を散じ香を燒き、此れを以て迴向して彼の國に生ぜむと願はば、其の人をはりに臨みて、無量壽佛その身を化現したまひ、光明相好つぶさに眞佛のごとく、諸の大衆とともに其の人の前に現じたまはむ。即ち化佛に隨ひて其の國に往生し、不退轉に住せむ。功德智

【一】 下卷は彌陀果上の事を説く。*上卷を以て彌陀成佛の因果を顯はしたるものとするに對し、下卷は衆生往生の因果を示すものとす。

【二】 第六段悲化を明す。淨影は第三所攝を明すと云ふ。

【三】 第十一住正定聚願成就。三定聚に異説多きも普通の一説は正定聚は三賢十聖、不定聚は十信、邪定聚は十信前と、これ位に就て云ふ。今は諸行念佛を問はず往生するもの土徳により不退なれば邪聚不定聚なしと云ふ。

【四】 信心決定の時、平生に業成したるを正定聚に住すとすして、現生不退の義を立つ。

【五】 第十七諸佛稱揚願成就。

【六】 第十八念佛往生願成就。

* 諸々の衆生、其の名號を聞いて、信心歡喜し、乃至一念せんに、至心に河向したまへり。彼の國に云云」と讀みたり。文中「聞」といふは「本願をききて聚ふところ無き」を願ふことと云ひ、「信心」とは「本願力廻向の信心なり」として、第十八願の三倍を、機に約した一八樂なりと見、「乃至一念」に就ては、因願の十念を念佛とするに反し、是をば「信の一念」と説き、「至心迴向」をば他力迴向の義に解す。

【七】 願文には乃至十念と云

ること四寸なり、足を擧げをはるに隨ひて、還復すること故のごとし、華もちりをはりぬれば地すなはち開裂す、次でて以て化没して、清淨にしてのこりなし、其の時節に隨ひて、風はなを吹き散す。是の如くすること六返なり。また衆寶の蓮華世界に周滿せり、一一の寶華に百千億の斐あり、其の華の光明無量種の色あり、青色には青光あり、白色には白光あり、玄黄朱紫の光色もまた然なり、時暉燦爛にして、明曜なること日月のごとし。一一の華の中より三十六百千億の光りを出だす、一一の光りの中より三十六百千億の佛を出だす、身色紫金にして相好殊特なり、一一の諸佛また百千の光明を放ちて、普く十方のために微妙の法を説きたまふ、是のごとき諸佛おのの無量の衆生を、佛の正道に安立せしめたまふ。」

故に阿難これを詳説す。
 【三六〇】羸は瘦也、困也。
 【三六一】底極断下は最極陋下也。
 【三六二】入理。人間の分。
 【三六三】善、徳。十善五徳等。
 【三六四】下卷に善徳を出す。
 【三六五】外相を視れば人類なるも實に人理なきを云ふ。
 【三六六】善業に應報せる善道。
 【三六七】欲界第六天王も極樂聖衆に比較とならざるを示す。
 【三六八】極樂正報の勝れたる如く、以下依報の勝れたるを説く。資具身に應ず。
 【三六九】第三十八願。
 【三七〇】第三十二願。
 【三七一】第三十九受樂無染願成就。
 【三七二】人法の實在の執滅し、二空成就して滅盡定の樂を得。
 【三七三】香華敷地の徳を説く。
 【三七四】六返。彼土晝夜なきも此土一日に準ずれば晨朝日中晡時初中後夜の六時。

無漏に等し。次を隣近、次續と解し、或は次は歸と解す。
 【三五五】第四無有好醜願成就。
 【三五六】本義に隨ひて人天と云ふあり、居處天地に依るを例して人と云ひ天と云ふ。
 【三五七】胎生等にあらざるを示す。
 【三五八】無極。圓滿無上即ち佛果。
 【三五九】此土好醜差別を比較し善惡の應報なるを説く。
 【三六〇】喫食を戒め無食を勸むる因果應報は可なるも佛教の俗門なり、亦經の要にあらず、

【三五五】暉は光り盛明、暉は華光の盛、燦爛は炳明。
 【三五六】華より現はるる化佛なれば依報に屬す、かかる化佛には身口業化ありて意業化なしとす。
 【三五七】無上正眞の大菩提道なり。

慈恵ありて博く施し、仁愛ありて兼ね濟ひ、信を履み善を修めて違諍するところなかりき。是をもて壽をはりぬれば、福應じて善道に昇ることをえ、天上に上生して茲の福樂を享けぬ。積善の餘慶ありて、いま人と爲ることを得て、たまたま王家に生れて自然に尊貴なり。儀容端正にして衆に敬事せられ、妙衣珍饈ころにしたがひて服御す、宿福の追ふところ故に能く此れを致す。」

佛阿難に告げたまはく、「汝が言是なり。たとひ帝王人中の尊貴にして形色端正なりといへども、これを轉輪聖王に比せむに、甚だ鄙陋なりとす、猶し彼の乞人の帝王の邊に在るがごとくならむ。轉輪聖王の威相殊妙は天下第一なれども、これを忉利天王に比せば、またまた醜惡にしてあひ喩ふることを得ざること、萬億倍ならむ。もし天帝を第六天王に比せば、百千億倍にしてあひ類せざらむ。設し第六天王を無量壽佛國の菩薩聲聞に比せむに、光顏容色あひおよばざること百千萬億不可計倍ならむ。」

佛阿難に告げたまはく、「無量壽國の其の諸の天人、衣服・飲食・華香・瓔珞・總蓋・幢幡、微妙の音聲、所居の舍宅・宮殿・樓閣、その形色に稱ひて高下大小あり、或は一寶二寶乃至無量の衆寶、こころの所欲に隨ひ念に應じてすなはち至る。また衆寶の妙衣を以て遍く其の地に布けり、一切の天人これを踐みて行く、無量の寶網佛土に彌覆せり、みな金縷眞珠百千の雜寶奇妙珍異なるを以て莊嚴交飾せり、四面に周匝して垂るるに寶鈴を以てす、光色晃耀にしてごとく嚴麗を極めたり。自然の徳風ゆるく起りて、微動するに其のなぜ調和にして、寒からず暑からず、溫涼柔軟にして、遅からず疾からず、諸の羅網および衆の寶樹を吹きて、無量の微妙の法音を演發し、萬種の溫雅の徳香を流布す。其の聞くことあらむものは、塵勞垢習自然に起こらず、風その身に觸るるにみな、快樂を得む、譬ふれば比丘の滅盡三昧を得るがごとし。また風はなを吹き散じて佛土に遍滿す、色の次第に隨ひて雜亂せず、柔軟光澤にして、馨香芬烈せり。足その上を履むに、陷下す

究竟。

【三八】 到彼岸の六度十度等。

【三九】 十力は是處非處力、業智力、定力、根力、欲力、性力、至處道力、宿命力、天眼力、漏盡力。

【四〇】 不共法。十力に四無畏等を加へ、般若六には身無失等十八とし、十住論四十不共徳を説く。

【四一】 通慧。六通定慧。

【四二】 實因所作なし無自性の義。

【四三】 不起滅。實果起滅なき義。

【四四】 灌頂。菩薩の十地に佛記を授く、天子讓位の式の如し。

【四五】 第十六離諸不善願成就。

【四六】 以下國土に就て人を明す。

【四七】 生因攝機の願によるもの。

【四八】 第二十一具足諸相願成就。

【四九】 第三十智辨無窮願成就。

【五〇】 第五宿命以下第十漏盡通まで諸願成就。

【五一】 第二十七萬物嚴淨願成就。

【五二】 第三十八衣服隨念願成就。

【五三】 百味。衆味具足。必ずしも百種に限らず。

【五四】 有爲無漏の快樂、無爲

三四六 阿難、かの佛の國土の諸の往生せる者は、是のごとき、清淨の色身、もろもろの妙音聲、神

通功德を具足す。處るところの宮殿、衣服飲食もろもろの妙華香莊嚴の具、なほし第六天の自然

の物のごとし。若し食せむと欲せむときは七寶の蓋器自然に前にあり、金銀・瑠璃・砗磲・碼瑙・珊瑚・

琥珀・明月・眞珠かくのごとき諸蓋ところに随ひて至り、百味の飲食自然に盈滿せむ。此の食あり

といへども、實に食するものなし、ただ色を見香を聞きて、意に食なりとおもへば自然に飽足す。

身心柔軟にして味著するところなし、事をはれば化し去り、時いたればまた現す。彼の佛の國土は

清淨安穩にして微妙快樂なり。無爲泥洹の道に、次げり。

其の諸の聲聞菩薩天人、智慧高明に神通洞達し、威おなじく一類にしてかたち異状なし。た

だ、餘方に因响するがゆゑに、天人の名あり、顏貌端正にして、世に超えて希有なり、容色微妙に

して天にあらず人にあらず、みな自然虛無の身、無極の體を受けたり。』

佛阿難に告げたまはく、『譬へば世間の貧窮乞人の帝王の邊に在るがごとき、形容貌、いづく

にぞ類すべきか。阿難佛に白さく、『もし此の人帝王の邊に在らむに、富饒醜惡にして、以て喻

へとすることなきこと、百千萬億不可計倍ならむ。然るゆゑは貧窮乞人は、底極下にして、衣は

形を蔽さず、食は趣に命を支ふ、飢寒困苦して、人理ほとんど盡きなむとす。みな前世に徳本を植

ゑず、財を積みて施さず、富有にしていますます慳しみ、ただ唐らに得むと欲して、貪求して厭くこ

となく、あへて善を修めず、惡を犯して山のごとくに積みしに坐る。是のごとくして壽をはりぬれ

ば財寶消散す、身を苦めて聚積して、これがために憂惱したれども、己れにおいて益なくして徒ら

に他の有と爲る。善として枯むべきなく、徳として恃むべきなし、是のゆゑに死して惡趣に墮し

て、此の長苦を受けぬ。罪をはりて出づることを得たれども、生れて下賤と爲り、愚鄙斯極にし

て、示れば人類に同じ。世間の帝王の人中に獨尊たるゆゑは、みな宿世積徳の致すところ由る、

アハレにして而も調子明亮なり。

【三六】第三十二國土嚴飾顯成就。宮殿樓觀細說。

【三七】精舍。寺、息心の所極。

【三八】工匠の所作にあらず。

【三九】交露。珠珍交結せる幔。

【四〇】彌陀經八功德池、觀經寶池觀參照。

【四一】一等。十由旬の池は縱廣深淺各十由旬、一様の義。

【四二】八功德は澄淨、清冷、甘美、輕軟、潤滑、安和、飲時調適、飲已無患。

【四三】湛然。湛へて流れず。

【四四】優曇羅(Utpala)。青蓮。

【四五】蓋曇摩(Padma)。蓮華、赤蓮、紅蓮。

【四六】拘物頭(Kumuda)。赤蓮或は黃蓮。

【四七】分陀利(Pundarika)。白蓮。

【四八】身意調適。

【四九】心垢。煩惱。

【五〇】微瀾。小波。

【五一】第四十六隨意開法顯成就。

【五二】佛聲。佛德讚嘆。

【五三】法聲。佛法真理の説。

【五四】僧聲。大衆和合の説。

【五五】寂靜。涅槃。

【五六】空無我。諸法緣起の故に空無我平等なり、眞理勝義諦。

【五七】大慈悲。無緣平等慈悲。

十乃至百千由旬にして、縱廣深淺おのおのみな一等なり。八功德水湛然として盈滿せり、清淨香潔にして味ひ甘露のごとし。黄金の池には底に白銀の沙あり、白銀の池には底に黄金の沙あり、水精の池には底に瑠璃の沙あり、瑠璃の池には底に水精の沙あり、珊瑚の池には底に琥珀の沙あり、琥珀の池には底に珊瑚の沙あり、礫の池には底に礫の沙あり、礫の池には底に礫の沙あり、寶うたた共に合成せり。其の池の岸の上に梅檀樹あり、華葉垂れ布きて香氣あまねく薫ず。天の優盜羅華・盞曇摩華・拘頭頭華・分陀利華あり、雑色の光りうるはしくして水上に彌覆せり。彼の諸菩薩および聲聞衆、もし寶池に入りて、意に水をして足をぬめしめむと欲せば、水すなはち腰にぬめむ、膝に至らしめむと欲せば、すなはち膝に至らむ、腰に至らしめむと欲せば、水すなはち腰に至らむ、頸に至らしめむと欲せば、水すなはち頸に至らむ、身に灌がしめむと欲せば、自然に身に灌がむ、還復せしめむと欲せば、水すなはち還復せむ。調和冷煖にして、自然に意に隨ひて、神を開き體を悦ばしめ、心垢を蕩除す、清明激潔にして淨きこと形なきのごとし、寶沙映徹して深しとして照らさずといふことなし。微澗迴流して轉あひ灌注す。安詳として徐く過ぎて、遅からず疾からず。波は無量自然の妙聲を揚ぐ、其の所應に隨ひて聞かざるものなし。或は佛聲を聞き、或は法聲を聞き、或は僧聲を聞き、或は寂靜のこゑ、空無我のこゑ、大慈悲のこゑ、波羅蜜のこゑ、或は十力無畏不共法のこゑ、諸の通慧のこゑ、無所作のこゑ、不起滅のこゑ、無生忍のこゑ、乃至甘露灌頂もろもろの妙法のこゑ、是のごとき等の聲、その所聞に稱ひて歡喜無量なり。清淨離欲寂滅眞實の義に隨順し、三寶力無所畏不共の法に隨順し、通慧菩薩聲聞所行の道に隨順す。三途苦難の名あることなく、ただ自然快樂の音のみあり。是のゆゑに其の國を名づけて安樂といふ。

【一九】純樹。

【二〇】雜樹。

【二一】行行相値とは行樹（ナミキ）の出入なき也。

【二二】清風は次文に云ふ清涼の微風、萬種の樂音。

【二三】五音とは宮、商、角、徵、羽にて六拍子の基準。

【二四】宮は喉音、商は齒音。

【二五】第二十八見道場樹顯成就。

【二六】彌陀成道の場にある樹、釋迦の菩提樹畢鉢羅樹の如し。

【二七】摩尼（Mani）珠に勝光あるを月光摩尼、勝徳あるを持海摩尼と云。

【二八】もの。底本なし。

【二九】深法忍。初地以上の忍を云ふ、或は第三忍。得忍は第四十八得三法忍顯成就。

【三〇】六根は眼、耳、鼻、舌、身、意。清徹は互用の徳、目に聞き耳に觀る類なり。

【三一】音響忍。音響有にして實に非ずと知る。

【三二】柔順忍。空に順じて有を觀る。

【三三】無生法忍。生滅不生不滅を絶して諸法を觀る。

【三四】威神力等六故を擧ぐ。前の一故は、如來十力等の現充分なる故とす。衆生得忍は如來因果の力なり。

【三五】清揚哀亮。スミ、ノビ、

莖莖あひ望み、枝枝あひ準へ、葉葉あひ向ひ、華華あひ順ひ、實實あひ當たり、榮色光耀として視るにたふべからず、清風ときに發こりて、五音の聲を出だす、微妙の富商、自然にあひ和せり。
また無量壽佛の其の道場樹は、高さ四百里なり、其の本周圍五十由旬なり、枝葉四もに布けること二十萬里なり。一切の衆寶自然に合成せり。月光摩尼持海輪寶衆の王たるものをしてこれに莊嚴せり、條の間に間匝して寶瓔珞を垂れたり。百千萬のいろ種種に異變す、無量の光燄照耀することきはまりなし、珍妙の寶網その上に羅覆せり、一切の莊嚴よろしきに隨ひて現す。微風ゆるく動きて、諸の枝葉を吹くに無量の妙法の音聲を演出す、其のこゑ流布して諸佛の國に遍す、其の音を聞かむものは、深法忍を得て不退轉に住せむ。佛道を成ずるに至るまで、耳根清徹にして苦患に遭はず、目にその色を觀、耳にその音を聞き、鼻にその香を知り、舌にその味ひを嘗め、身にその光りを觸れ、心に法を以て緣するに、一切みな甚深法忍を得て不退轉に住せむ。佛道を成ずるに至るまで、六根清徹にして、諸の惱患なからむ。阿難、もし彼の國の人天この樹を見むものは、三法忍を得む。一つには音響忍、二つには柔順忍、三つには無生法忍なり。此れみな無量壽佛の威神力のゆゑに、本願力のゆゑに、滿足願のゆゑに、明了願のゆゑに、堅固願のゆゑに、究竟願のゆゑなり。佛阿難に告げたまはく、「世間の帝王に百千の音樂あり、轉輪聖王より乃至第六天上の伎樂の音聲、展轉してあひ勝るること、千億萬倍なり、第六天上の萬種の樂の音は、無量壽國の諸の七寶樹の一種の音聲にしかざること千億倍なり、また自然の萬種の伎樂あり、又その樂のこゑ法音にあらずといふことなく、清揚哀亮にして微妙和雅なり、十方世界の音聲の中に最も第一とす。

また講堂精舍宮殿樓觀あり、みな七寶の莊嚴、自然の化成なり、また眞珠明月摩尼の衆寶を以て、交露とし、其の上に覆蓋せり、内外左右に諸の浴池あり、或は十由旬、或は二十三

- 【二〇】三塗。火塗は地獄、刀塗は餓鬼、血塗は畜生。
- 【二一】解脱。往生を得るを云ふ。
- 【二二】第十七諸佛稱揚顯成就。諸佛稱揚は下卷の初にも彌陀經にも出づ。
- 【二三】稱說。通じては讚嘆、別しては稱名。
- 【二四】この一句は新生人の後成佛する時の意。
- 【二五】巍巍。高麗の義。
- 【二六】第十三壽命無量顯成就。
- 【二七】聲聞緣覺の解脱分人中三洲と定むる故に先づ人身を得しめと云。
- 【二八】第十五眷屬長壽顯成就。
- 【二九】第十四聲聞無數顯成就、彌陀經もこれを説く。
- 【三〇】第三十智見無窮顯成就。
- 【三一】第二十六得金剛身。
- 【三二】第十四成就細説。
- 【三三】初會。彌陀成道最初の説法。
- 【三四】大目犍連は釋迦弟子中神通第一の稱ある故に擧ぐ。
- 【三五】阿信祇(Aśmīkhyā)。無數と譯す。
- 【三六】巧曆。數學に長ずる曆師。
- 【三七】前出の大目犍連に同じ。
- 【三八】以下第五段極樂依報。
- 【三九】觀經寶樹觀。第三十二國土嚴飾顯成。

大目犍連のごとき百千萬億無量無數ありて、阿僧祇那由佉劫において乃至滅度まで悉く共に

計校すとも、多少の數を究了すること能はじ。譬ふれば大海の深廣無量ならむに、もし人ありて其

の一毛を拵きて以て百分と爲し、一分の毛を以て一滯を沾取せむがごとし。意においていかにぞ、

其の滯るところのものを彼の大海においてするに、何れか多しとするところぞ。阿難佛に白さく、

『彼の滯るところの水を大海に比するに、多少の量、巧曆の算數言辭譬類のよく知るところにあら

ず。』佛阿難に語げたまはく、『目連等のごとき、百千萬億那由佉劫において、彼の初會の聲聞菩薩

を計りて知るところの數は猶し一滯のごとく、其の知らざるところは大海の水のごとくならむ。

又その國土には七寶の諸樹世界に周滿せり。金樹・銀樹・瑠璃樹・玻瓈樹・珊瑚樹・碼碯樹・砮磲樹

あり。或は二寶三寶乃至七寶うたた共に合成せるあり。或は金樹の銀葉華果なるあり、或は銀樹

の金葉華果なるあり、或は瑠璃樹あり玻瓈を葉とす、華果また然なり、或は水精樹あり瑠璃を葉と

す、華果また然なり、或は珊瑚樹あり碼碯を葉とす、華果また然なり、或は碼碯樹あり瑠璃を葉と

す、華果また然なり、或は砮磲樹あり衆寶を葉とす、華果また然なり、或は寶樹あり、紫金を本と

し白銀を莖とし瑠璃を枝とし水精を條とし、珊瑚を葉とし碼碯を華とし砮磲を實とす、或は寶樹あ

り、白銀を本とし瑠璃を莖とし水精を枝とし珊瑚を條とし碼碯を葉とし砮磲を華とし紫金を實とす、

或は寶樹あり、瑠璃を本とし水精を莖とし珊瑚を枝とし碼碯を葉とし砮磲を華とし白

銀を實とす、或は寶樹あり、水精を本とし珊瑚を莖とし碼碯を枝とし砮磲を葉とし紫金を葉とし白

銀を華とし瑠璃を實とす、或は寶樹あり、珊瑚を本とし碼碯を莖とし砮磲を枝とし紫金を條とし白

【一四】 跋天 (Vata)。第三夜摩

天以上は空居天にて須彌山に

よらずとも住すとす。

【一五】 五不思議力に業力不思

議あり、佛力最も不可思議と

す。

【一六】 第十二光明無量顯成就

【一七】 四十里なり。

【一八】 今十二光佛平九阿十無

十五莊十三、梵十九光。此光

皆彌陀の常光。

【一九】 無量光。佛光數量なし。

【二〇】 無邊光。横に邊際なし。

【二一】 無礙光。他の入法の障

る所にあらず。

【二二】 無對光。他光の敵對す

る所にあらず。

【二三】 嚴王光。光明自在。

【二四】 清淨光。無貪善根に生

じて衆生貪濁を除く。

【二五】 歡喜光。無瞋善根に生

じて衆生瞋恚を除く。

【二六】 智慧光。無癡善根に生

じて衆生無明の癡闇を除く。

【二七】 不斷光。常光相續不絕。

【二八】 難思光。二乘菩薩等の

思量し難きを云ふ。

【二九】 無稱光。大菩薩も言語

道斷の故に。

【三〇】 超日月光。彼光晝夜に

通じ色心を照し心垢を除く、

日月の比にあらず。

【三一】 第三十三觸光柔軟顯成

佛刹を照らす、南西北方四維上下も亦また是のごとし、或は佛光あり七尺を照らし、或は一由旬

二三四五由旬を照らす、是のごとく、轉倍して乃至一佛刹土を照らす。是のゆゑに、無量壽佛をば、無

量光佛、無邊光佛、無礙光佛、無對光佛、欲王光佛、清淨光佛、歡喜光佛、四智

慧光佛、不斷光佛、難思光佛、無稱光佛、超日月光佛と號したてまつる。其れ衆生あり

て、斯の光りに遇はむものは、三垢消滅し、身意柔軟に歡喜踊躍して善心生ぜむ。もし三塗勤

苦の處にありて、此の光明を見たてまつらば、みな休息を得てまた苦惱なく、壽終の後みな解脱

を蒙らむ。無量壽佛の光明顯赫にして十方を照耀す、諸佛の國土に聞こえざることなし。ただ

我れ今その光明を稱するのみにあらず、一切の諸佛聲聞緣覺ももろの菩薩衆も咸く共に歎譽し

たまふこと、亦また是のごとし。もし衆生ありて、其の光明の威神功德を聞きて、日夜に稱説し

て至心不斷ならば、意の所願に隨ひて、其の國に生ずることを得て、諸の菩薩聲聞大衆と共に歎譽

して其の功德を稱せられむ。其の然してのち佛道を得る時に至りて、普く十方の諸佛菩薩に其の

光明を數ぜられむこと亦いまのごとくならむ。佛の言たまはく、『我れ無量壽佛の光明威神の巍

巍殊妙なるを説くこと、晝夜一劫すともなほ未だ盡くすことあたはじ。』

佛阿難に語げたまはく、『また無量壽佛の壽命長久にして稱計すべからず。汝いづくにぞ知ら

むや。たとひ十方世界の無量の衆生をしてみな人身を得しめ、悉く聲聞緣覺を成就せしめて、都

べて共に集會し、禪思一心に其の智力を竭くして、百千萬劫において悉く共に推算して、其の壽命

の長遠の數を計るとも、窮盡して其の限極を知ることあたはじ。聲聞菩薩天人の衆の壽命の長短

もまたまた是のごとし、算數譬喩の能く知るところにあらず。また、聲聞菩薩の數はかりがたし、

稱説すべからず、神智洞達にして、威力自在なり、能く掌中において一切の世界を持せり。』

佛阿難に語げたまはく、『彼の佛の初會の聲聞衆のかず稱計すべからず、菩薩も亦しかり。い

蓋キヌガサ。幢幡はマトヒバ

【二四】正宗第四、法藏の勝報成佛を明す、淨影正宗三分によれば以下第二に所成を明す、彌陀果位の身土。

【二四】滅度。入滅。

【二四】彼佛現在の教證にして淨土の信仰中最要項の一。

【二五】指方立相の文據たり。

【二五】平阿千億萬須彌山佛國無十萬億佛刹陀經同じ、莊稱讚經梵本百千俱胝那由他佛土、寶積經諸佛功德經には十萬と云。

【二五】平十八劫阿凡十小劫無經今十劫莊於今十劫、稱讚經に經十大劫。梵本單に十劫と云。

【二五】第三十二國土嚴飾の願成。

【二五】廁は雜也。

【二五】第三十一國土清淨願參照。

【二五】欲界天の中には第六天最勝の故に比す。

【二五】金剛鐵圍。大小の鐵圍山、洲外に在り、金剛所成と云ふ。

【二五】外海を大海、内海を小海と云ふ。

【二五】第一無三惡趣願成就。

【二六】諸難。八難處。

【二六】初利(Firstlings)三十三(天)。四王初利は地居天

ら、衣服・飲食・珍妙・華香二四六・繒蓋・幢幡・莊嚴の具を出だす。是のごとき等のごと諸の天人に超えたり。一切の法において自在をえたり。二四七

阿難、佛に白さく、『法藏菩薩すでに成佛して二四八、滅度を取りたまひきとやせむ、未だ成佛したまはずとやせむ、いま現に在しますとやせむ。』佛阿難に告げたまはく、『法藏菩薩いま二四九已に成佛して現に西方に在しますとやせむ、此を去ること二五〇十萬億利なり、其の佛の世界を名づけて安樂といふ。』阿難また問ひたてまつる。『其の佛成道よりこのかたいくばく時を還とかせむ。』佛の言たまはく、『成佛よりこのかた凡そ二五一十劫を歴たり。其の佛二五二國土は自然の七寶金銀瑠璃珊瑚琥珀磲磔碼瑙をもて合成して地と爲り、恢廓曠蕩として限極すべからず、悉くあひ雜二五三廁し、うたたあひ入間せり、光赫煥耀として微妙奇麗なり。二五四清淨の莊嚴十方一切の世界に超踰せり。衆寶の中の精なり、其の寶なほし二五六第六天の寶のごとし。又その國土には須彌山および二五七金剛鐵圍一切の諸山なく、また二五八大海小海谿渠井谷なし。佛神力のゆゑに見むと欲すれば即ち現す。二五九また地獄・餓鬼・畜生二六〇諸難の趣なく、また四時春秋冬夏なし、不寒不熱にして常和調適なり。爾のとき阿難佛に白して言さく、『世尊もし彼の國土に須彌山なくば、其の四天王および二六一忉利天なに依りてか住せる。』佛阿難に語げたまはく、『第三二六二餓天乃至色究竟天みな何に依りてか住せる。』阿難佛に白さく、『行業果報不可思議なればなり。』佛阿難に語げたまはく、『行業果報不可思議なれば、諸佛世界もまた不可思議なり。其の諸の衆生功德善力をもて行業の地に住す。故に能く爾のみ。』阿難佛に白さく、『我れ此の法を疑はず、ただ將來の衆生の爲に、其の疑惑を除かむと欲して、ことさらに斯の義を問ひたてまつる。』

佛阿難に告げたまはく、『無量壽佛の二六三威神光明最尊第一にして、諸佛の光明よく及ばざるところなり。或は佛光あり、百佛世界或は千佛世界を照らす。要を取りてこれを言はば、乃ち東方恒沙の

【二三】内外苦を忍びて憎怨せず。

【二四】染毒癩。三毒染毒即ち貪瞋。

【二五】三寶。佛法僧寶。

【二六】大莊嚴。恭敬三寶等の福智行は佛果の莊嚴なり。

【二七】無作無起は因果を空す。

【二八】他人も自己も俱に利益す。

【二九】六波羅蜜。施、戒、忍、進、定、慧也。波羅蜜(Brahmā)到彼岸と譯す。

【三〇】無央。數劫の積功累徳をば、禮拜、讚歎、作願、觀察、廻向の五念の行とす。

【三一】正宗第三、法藏因位の勝果を明す。

【三二】刹利。具さに刹帝利(Kshatriya)四姓の一、王種貴族軍人の階級。

【三三】轉輪聖帝。王者の輪法轉じて一切を服す。金輪は四天下、銀輪は三天下、銅輪は二天下、鐵輪は一天下とす。

【三四】六欲。四王、忉利、夜摩、都率、化樂、他化自在天也。

【三五】四事とは飲食、衣服、臥具、湯藥也。

【三六】優婆塞羅(Uparikam)。青蓮と譯す。

【三七】栴檀(Chandan)。與樂と譯す。香の最良なる者。

【三八】繒は張帛トベリ蓋は天

佛阿難に告げたまはく、『法藏比丘、この頌を説き已るに、時に應じて、普地六種に震動し、天より妙華を雨らして、以て其の上に散す。自然の音楽ありて、空中に讚じて言はく、『決定して必ず無上正覺を成せむ』と。是において法藏比丘、かくのごとき大願を具足し修滿して、誠諦むなしからず、世間を超出して深く、寂滅を樂へり。

阿難、ときに彼の比丘、その佛の所の諸天と、魔梵と龍神との、八部大衆の中において、斯の弘誓を發こす。此の願を建て已りて、一向に志を専らにして妙土を莊嚴す、修するところの佛國、恢廓廣大にして超躋獨妙なり、建立常然にして無衰無變なり。不可思議兆載永劫において菩薩の無量の徳行を積植す。欲覺瞋覺害覺を生ぜず、欲想瞋想害想を起こさず、色聲香味觸法に著せず、忍力成就して、衆苦を計せず、少欲知足にして、染患癡なく、三昧常寂にして智慧無礙なり、虚偽詭曲の心あることなく、和顏愛語して、意に先だちて承問す、勇猛精進にして志願うむことなく、専ら清白の法を求めて、もて羣生を惠利す。三寶を恭敬し師長に奉事し、大莊嚴をもて衆行を具足し、諸の衆生をして功德成就せしむ。空無相無願の法に住して、作もなく起もなく、法は化のごとしと觀す。兪言と自害と害彼と彼此俱害とを遠離し、善語と自利と利人と、人我兼利とを修習す。國を棄て王を捐て、財色を絶去して、自ら六波羅蜜を行じ、人を教へて行ぜしむ。

(三〇一) 無央數劫に功を積み徳を累ぬ。

其の生處に隨ひて、意の所欲に在りて無量の寶藏自然に發應し、無數の衆生を教化し、安立して無上正眞の道に住せしむ。或は長者居士豪姓尊貴と爲り、或は利利國君、轉輪聖帝と爲り、或は六欲天主乃至梵王と爲り、常に四事をもて、一切の諸佛を供養し恭敬したてまつる。是のごとき功德稱説すべからず。口氣香潔にして、優盜維華のごとし、身の諸の毛孔より、梅檀香を出たす。其の香あまねく無量の世界に薫す。容色端正にして相好殊妙なり。其の手より常に無盡のたか

【三〇二】 惡道。別しては地獄餓鬼畜生の三なれど、總じては流轉の六道なり。
 【三〇三】 功祿。因位の行を功と云ひ果位の福を祿と云ふ。
 【三〇四】 天光。梵天等の光。
 【三〇五】 師子吼。大理を宣べて怖れざるを喩ふ。
 【三〇六】 佛果を三界の雄と云ふ。
 【三〇七】 佛のこと世自在玉佛を指す。
 【三〇八】 第四の誓、故に重誓偈を四誓偈とも云ふ。
 【三〇九】 大千、三千世界、國土のこと。
 【三〇〇】 現瑞證誠。
 【三〇一】 普地。大千のこと。誓願虛しからず。
 【三〇二】 寂滅。大涅槃即ち佛果。
 【三〇三】 以下正宗第二、法藏因位の勝行を明す。
 【三〇四】 魔 (Mara) 梵 (Brahmā)。
 【三〇五】 八部とは天、龍、夜叉、乾達婆、阿修羅、迦樓羅、緊那羅、摩睺羅伽なり。
 【三〇六】 恢廓。廣大の義。
 【三〇七】 建立常然。國土常住を云。
 【三〇八】 梵本無量無數不可思議無比不可數不可量不可說なる百千俱胝那由他年。時節永きを示す、長時修。
 【三〇九】 欲覺。財色を思ふ。
 【三〇〇】 忍力。安受苦忍、耐怨害忍、法思惟忍。

われ無量劫において、

普く諸の貧苦を濟はずば、

われ佛道を成ずるに至りなば、

究竟して聞こゆるところなくば、

離欲と深正念と、

無上道を志求して、

神力大光を演べ、

三垢の冥を消除して、

彼の智慧の眼を開きて、

諸の惡道を閉塞して、

功祚満足することを成じて、

日月重暉を敢め、

衆の爲に法藏を開きて、

常に大衆の中において、

一切の佛を供養し、

願慧ことごとく成滿して、

佛の無礙智のごときは、

願はくは我が功慧の力、

斯の願もし刻果せば、

虚空の諸の天人、

大施主と爲りて、

誓ひて正覺を成ぜじ。

名聲十方に超えむ、

誓ひて正覺を成ぜじ。

淨慧との修梵行をもて、

諸の天人師と爲らむ。

普く無際の土を照らし、

廣く衆の厄難を濟ひ、

此の昏盲の闇を滅し、

善趣の門に通達せしめ、

威曜十方に朗かなり、

天光も隠れて現ぜず、

廣く功德の寶を施し、

說法 師子吼したまふ。

衆の徳本を具足し、

三界の雄と爲ることを得たまへり。

通達して照らしたまはずといふことなし。

この 最勝尊に等しからむ。

大千まさに感動すべし、

まさに珍妙の華を雨らすべし。」

【一四】定意。不動三昧。

【一五】(四三)生尊貴家願。

【一六】(四四)具足徳本願。

【一七】徳本、名號或は六度を指すなり。

【一八】(四五)住定見佛願又は常見諸佛願。

【一九】普等三昧。正受見佛なり。

【二〇】(四六)隨意閉法願。

【二一】(四七)得不退轉願。

【二二】不退に處位行念の四あり、淨土に生ずれば處不退なるが今は位不退なり。

【二三】(四八)得三法忍願。三忍とは音響忍、柔順忍、無生忍なり。

【二四】以下立誓請證、故にこの偈を重誓偈と云ふ。*四誓偈とも三誓偈ともいふ。

【二五】梵本偈十二首、平阿なし無七言四十八句、莊今と同じく五言四十四句。

【二六】超世。四十八願地前世間に超え通途諸佛の願に優る。

【二七】大施主。財施法施無畏施窮りなきもの。

【二八】この一句佛の因徳にして、無貪無瞋無癡の三菩提を満足す、或は六度を充たす。

【二九】天人師。九界に通ずるも受化の主なる人と天とを舉ぐ。

【三〇】三垢。貪瞋癡なり。

【三一】智慧。人空法空の智慧。

根闕陋して具足せずば、正覺をとらじ。

一九二 (四)もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて皆悉く、清淨解脱三昧を速得せむ、是の三昧に住して一たび意を發こさむ頃に、無量不可思議の諸佛世尊を供養して、定意を失せざらむ。若ししからずば正覺をとらじ。

一九三 (四)もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて壽終ののち尊貴の家に生ぜむ。若ししからずば正覺をとらじ。

一九四 (四)もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて歡喜踊躍して菩薩の行を修し、徳本を具足せむ。若ししからずば正覺をとらじ。

一九五 (四)もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて皆悉く、普等三昧を速得せむ。是の三昧に住して成佛に至るまで常に無量不可思議の一切の諸佛を見たてまつらむ。若ししからずば正覺をとらじ。

一九六 (四)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、その志願に隨ひて聞かむと欲するところの法自然に聞くことをえむ。若ししからずば正覺をとらじ。

一九七 (四)もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて即ち不退轉に至ることを得ずば、正覺をとらじ。

一九八 (四)もしわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて即ち第一第二第三法忍に至ることをえず、諸佛の法において即ち不退轉を得ることあたはずば、正覺をとらじ。』

佛阿難に告げたまはく、『爾のとき法藏比丘、この願を説きはりて、願を説きて曰さく、

「われ 超世の願を建つ、必ず無上道に至らむ、

斯の願満足せずば、誓ひて正覺を成ぜじ。

【七〇】(三)智辯無窮願又は辯重攝衆生願。以上十三願第五科土清淨願。

【七一】(三)微見十方願又は國土清淨願。

【七二】(三)國土嚴飾願、又は雜物薰香願、以上二願、第六科攝淨土願。

【七三】(三)觸光柔軟願又は光觸滅罪願。

【七四】(三)聞名得忍願。

【七五】(三)無生法忍。諸法空の智を忍可す、悟證なり。

【七六】(三)女人往生願又は轉女成男願。*また變成男子の願といひ、第十八願の別益たり。

【七七】(三)常修梵行願。梵行とは別しては離欲清淨、總じては佛道修行。

【七八】(三七)人天致敬願。

【七九】(三)衣服隨念願。

【八〇】(三)應法。法量の袈裟を著す。

【八一】搗は春也敲也。うつこと。

【八二】(三九)受樂無染願又は自然攝盡願。

【八三】(四〇)見諸佛土願又は普見十方願。

【八四】(四一)諸根具足願又は開名具根願。

【八五】(四二)住定供佛願又は開名得定願。

【八六】(四三)染惑なき無生忍を清淨解脱と云。

身に觸れむ者は身心柔軟にして人天に超過せむ。若し爾らずば正覺をとらじ。

【一八四】しわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが名字を聞きて菩薩の無生法忍もろもの深總持をえずば、正覺をとらじ。

【一八五】しわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界に、其れ女人ありて我が名字を聞きて歡喜信樂して、菩提心を發こし女身を厭惡せむに、壽終の後また女像とならば、正覺をとらじ。

【一八六】しわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて壽終の後つねに梵行を修して佛道を成ずるに至らむ。若し爾らずば正覺をとらじ。

【一八七】しわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の諸天人民、わが名字を聞きて五體投地し稽首作禮し歡喜信樂して菩薩の行を修せむに、諸天世人敬ひを致さずといふことなからむ。若ししからずば正覺をとらじ。

【一八八】しわれ佛をえたらむに、國中の人天、衣服を得むと欲せば念にしたがひて即ち至らむ。佛の所讃のごとくなる。應法の妙服自然に身に在らむ。若し裁縫し擣染洗濯することあらば、正覺をとらじ。

【一九〇】しわれ佛をえたらむに、國中の人天、うけむところの快樂漏盡比丘のごとくならずば、正覺をとらじ。

【一九一】しわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、ここに隨ひて十方無量嚴淨の佛土を見むと欲せば、時に應じて願ひのごとく寶樹の中において皆ごとく照見せむこと、猶し明鏡をもて其の面像を觀るがごとくならむ。若ししからずば正覺をとらじ。

【一九二】しわれ佛をえたらむに、他方國土の諸の菩薩衆、わが名字を聞きて佛をうるに至るまで諸

本しを名號の義に解して、此の願をば自力念佛の眞門と見

是による往生を難思往生と云ふ。以上の三願はまた次での

如く、大經、觀經、小經の三經に配して弘願と要門と眞門とが説かれたるものとす。

【六五】(三)三十二相願又は具足諸相願、阿三十二相八十種好と云ふ。

【六六】(三)必至補處願。＊また一生補處の願、還相迴向の願といふ。衆生が教を聞き念佛の行を信じ、往生の證を得るは阿彌陀佛の往相迴向であり、往生して還つて衆生を救ふは、その還相迴向たり。

佛は是を第十七(行)、第十八(信)、第十一(證)、と今の第二十二とに誓ひたまへりとして、この願を還相迴向の願といふ。

【六九】補處。佛處を補ふ。次位なり。

【六八】(三)供養諸佛願。

【六九】(四)供具如意願。

【七〇】(五)説一切智願。

【七一】一切智道相智一切相智の三智を總じて一切智智と云佛智なり。

【七二】(六)得金剛身願又は那羅延身願。

【七三】那羅延(Nirgrāman)。力勝と譯す。

【七四】(七)萬物嚴淨願。

【七五】(八)見道場樹願。

【七六】(九)得辯才智願。

二六九 (四)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、諸佛の前にありて其の徳本を現げむに、諸の欲求するところの供養の具もし意のごとくならずば、正覺をとらじ。

二七〇 (五)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、一切智を演説することあたはずば、正覺をとらじ。

二七一 (六)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、金剛 那維延身をえずば、正覺をとらじ。

二七二 (七)もしわれ佛をえたらむに、國中の天人、一切の萬物嚴淨光麗に形色殊特にして、微を第め妙を極めて能く稱量することなからむ。其のよろもろの衆生乃至天眼を逮得すとも能く明了に其の名數を辯することあらば、正覺をとらじ。

二七三 (八)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、乃至少功德の者、その道場樹の無量の光色ありて高さ四百萬里なるを知見することあたはずば、正覺をとらじ。

二七四 (九)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、もし經法を受讀し諷誦持説して辯才智慧をえずば、正覺をとらじ。

二七五 (一〇)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、智慧辯才もし限量すべくば、正覺をとらじ。

二七六 (一一)もしわれ佛をえたらむに、國土清淨にして、皆ことごとく十方一切無量無數不可思議の諸佛世界を照見せむこと、猶し明鏡をもて其の面像を覩るがごとくならむ。若し爾らずば正覺をとらじ。

二七七 (一二)もしわれ佛をえたらむに、地より以上虚空に至るまで、宮殿樓觀池流華樹國中のあらゆる一切の萬物みな無量の雜寶百千種の香をもて共に合成し、嚴飾奇妙にして諸の天人に超えむ。其の香あまねく十方世界に熏じて、菩薩さかむ者はみな佛行を修せむ。若し是のごとくならずば正覺をとらじ。

二七八 (一三)もしわれ佛をえたらむに、十方無量不可思議の諸佛世界の衆生の類、わが光明を蒙りて其の

【一】また本願三心の願、至心信樂の願、往生信心の願と云ひ、是によつて眞實報土に往生する信心成就の願とはなす。而して信心とは文中に所謂至心信樂・欲の三信にして、是を法(阿彌陀佛)に約せば、如來の眞實心・智慧心・慈悲心となり、是を機(衆生)に約すればたゞ歸命の一心となる。本願三信機受一心と云ひ、三信即一といふものはなり。

【二】空】五逆。殺父殺母殺和尚破和合殺聖人等。*此の五逆と謗法とを除く文は、法藏菩薩の願意に非ずして、未造業の者を抑止する釋尊の方便とし、是有るが爲に、惡人正機の佛たるを知る。

【三】空】(一)亦來迎引接願。これと次願とを諸行生因の願と解するものあり。*修諸功德の願、至心發願の願ともいひ、諸行往生即ち定數諸機の化土の往生を誓はせられしものと見、是を萬行諸善の假門といひ、この願による往生を雙林樹下の往生と云へり。之に對して第十八願を選択本願の他力眞實の門といひ、その往生を難思議往生と云ふ。

【四】(一〇)係念定生願、三生等に往生の係念を果遂せしむ。*植諸徳本の願、不果遂者の願、至心迴向の願といひ、一徳

一五九 心をば除く、若し爾らずば正覺をとらじ。

一六〇 (二)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天乃至不善の名あることを聞かば、正覺をとらじ。

(三)もしわれ佛をえたらむに、十方世界の無量の諸佛、ことごとく咨嗟して我が名を稱せずば、正覺をとらじ。

一六一 (二)もしわれ佛をえたらむに、十方の衆生至心に信樂して我が國に生ぜむと欲して、乃至十念せむに、若し生ぜずば正覺をとらじ。ただ五逆と正法を誹謗するとを除く。

一六二 (二)もしわれ佛をえたらむに、十方の衆生、菩提心を發こし諸の功徳を修し、至心に發願して我が國に生ぜむと欲せむに、壽終の時に臨みて、もし大衆のために圍遶せられて其の人の前に現ぜずば、正覺をとらじ。

一六三 (一)もしわれ佛をえたらむに、十方の衆生、わが名號を聞きて、念を我が國に係けて、諸の徳本を植ゑ至心に迴向して我が國に生ぜむと欲せむに、果遂せずば正覺をとらじ。

一六四 (三)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、ことごとく三十二大人の相を成滿せずば、正覺をとらじ。

一六五 (三)もしわれ佛をえたらむに、他方佛土の諸の菩薩衆、わが國に來生せば究竟して必ず一生補處に至らむ。其の本願ありて自在の化するところ、衆生の爲のゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し一切を度脱し、諸佛の國に遊びて菩薩の行を修し、十方の諸佛如來を供養し恒沙無量の衆生を開化して、無上正眞の道を立てしめむをば除く。常倫諸地の行を超出し現前に普賢の徳を修習せむ。もし爾らずば正覺をとらじ。

一六六 (三)もしわれ佛をえたらむに、國中の菩薩、佛の神力を承けて諸佛を供養せむに、一食の頃に遍く無數無量那由他の諸佛の國に至ることあたはずば、正覺をとらじ。

【四九】(六)天眼智通願。

【五〇】(七)天耳智通願。

【五一】(八)他心智通願。

【五二】(九)神境智通願。

【五三】(一〇)速得漏盡願、或は無貪著身願。

【五四】(一一)住正定聚願又は必至滅度願、正定聚は邪定聚不定聚に對す、以上十一願、第一科攝衆生の願。*

【五五】(一二)往相證果の願ともいひ、往生成就の願とす。

【五六】(一三)光明無量願。以上二願第二科攝法身願と云ふ。

*光明は智慧の相、壽命は涅槃の徳を示し、また光明は横に一切衆生を廣く攝取すること、壽命は堅に十方世界を久しく利益することを顯はす。

【五七】(一四)聲聞無數願。

【五八】(一五)眷屬長壽願又は人天壽命願。

【五九】(一六)離諸不善願。以上三願第三科重攝衆生願。

【六〇】(一七)諸佛稱揚願。第四科重攝法身願。*

【六一】(一八)往相迴向の願、撰擇稱名の願、往相正業の願など云ひ、名號成就の願として、次下第十八の願と不離の關係にあるものとす。

【六二】(一九)念佛往生願。四十八願の王とする所の願なり。

【六三】(二〇)念心乃至十念は上盡一形下至十聲一聲の稱名行。

一四九

(三)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、ことごとく眞金色ならずば、正覺をとらじ。

一四六

(四)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天形色不同にして好醜あらば、正覺をとらじ。

一四七

(五)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天宿命を識らず、下百千億那由他諸劫の事を知らざるに至らば、正覺をとらじ。

一四九

(六)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天天眼をえず、下百千億那由他諸佛の國を見ざるに至らば、正覺をとらじ。

一五〇

(七)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天天耳をえず、下百千億那由他の諸佛の所説を聞きて、

ことごとく受持せざるに至らば、正覺をとらじ。

一五一

(八)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天見他心智をえず、下百千億那由他諸佛國中の衆生の心念を知らざるに至らば、正覺をとらじ。

一五二

(九)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天神足をえず、一念の頃において下百千億那由他の諸佛の國を超過することあたはざるに至らば、正覺をとらじ。

一五三

(一〇)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天、もし想念を起こし身を貪計せば、正覺をとらじ。

一五四

(一一)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天定聚に住し必ず滅度に至らずば、正覺をとらじ。

一五五

(一二)もしわれ佛をえたらむに、光明よく限量ありて、下百千億那由他諸佛の國を照らさざるに至らば、正覺をとらじ。

一五六

(一三)もしわれ佛をえたらむに、壽命よく限量ありて、下百千億那由他劫に至らば、正覺をとらじ。

一五七

(一四)もしわれ佛をえたらむに、國中の聲聞、よく計量ありて下三千大千世界の聲聞緣覺百千劫において悉く共に計較して其の數を知るに至らば、正覺をとらじ。

一五八

(一五)もしわれ佛をえたらむに、國中の人天壽命よく限量なからむ、其の本願ありて脩短自在なら

【二五】二重發心とせば前は地前、今は地上發心。

【二六】* 經法、次に謂ふ所の、莊嚴佛土の因果を指す。

【二七】* 世饒王佛。世自在王佛。

【二八】* 修行する所の如き莊嚴佛土、汝自ら當に知るべしと讀む。如所修行の因によつて、莊嚴佛土の果を得たるなり、この一句、久遠の佛が果後の方便として現れたまへるを示す。汝自當知の一句、意味深長なり。

【二九】* 今本平阿同じ、無は二十一億莊は八千四百千俱胝那由他、梵八十一百千俱胝那由他。

【三〇】* 平阿五劫の言なし。

【三一】* 梵本無莊滿四十劫平阿になし。

【三二】* 以下別願の序。

【三三】* 以下正しく別願四十八を説く無も亦四十八願平阿二十四願莊は三十六梵文四十六願互略なり今第一(一)無三惡趣願、四十八願今三種七科に分つとも一一の願攝身攝土攝生に通ず。

【三四】* (一)不更惡趣願。

【三五】* (二)悉皆金色願。

【三六】* (三)無有好醜願。

【三七】* (四)宿命智通願。以下の六は六通自在の願なり。

【三八】* 那由他(Catyula)。千萬億と譯す。

て佛國清淨なる莊嚴無量の妙土を攝取すべし。我れをして世において速かに正覺を成じ、諸の生死勤苦の本を抜かしめたまへ。』佛阿難に語げたまはく、『時に世饒王佛法藏比丘に告げたまはく、『汝が修行するところの莊嚴佛土、なむ自らまさるに知るべし。』比丘、佛に白さく、『斯の義弘深にして我が境界にあらず。唯ねがはくは世尊、ひろく爲に諸佛如來の淨土の行を敷演したまへ。我れこれを聞きをはりて、當に説のごとく修行して、所願を成滿すべし。爾のとき世自在王佛、その高明の志願の深廣なることを知らしめして即ち法藏比丘の爲に經を説きて言たまはく、『譬ふれば大海の如きも一人升量して劫數を經歷せばなほ底を窮めて其の妙寶を得べし。人至心ありて精進に道を求めて止まずば會ず當に剎果すべし、いづれの願か得ざらむ。』と。是において世自在王佛、すなはち爲に廣く、二百一十億の諸佛刹土の天人の善惡、國土の龜妙を説きて、其の心願に應じて悉く現じてこれを與へたまふ。時にかの比丘、佛の所説の嚴淨の國土を聞き、皆ことごとく覩見して、無上殊勝の願を超發す。其ころ寂靜にして、ころざし所著なく一切世間よく及ぶものなし。五劫を具足して莊嚴佛國清淨の行を思惟し攝取す。』阿難佛に白さく、『彼の佛の國土の壽量いくばくぞや。』佛の言たまはく、『其の佛の壽命、四十二劫なり。時に法藏比丘二百一十億の諸佛妙土の清淨の行を攝取す、是のごとく修しをはりて彼の佛の所に詣でて、稽首して足を禮し、佛を遶ること三匝合掌して住し、佛に白して言さく、『世尊われすでに莊嚴佛土の清淨の行を攝取しぬ。』佛比丘に告げたまはく、『汝いま説くべし、宜しく知るべし是の時なり、一切の大衆を發起し悅可せしめよ、菩薩まき己はらば、此の法を修行して、緣りて無量の願を満足することを致さむ。比丘佛に白さく、『たゞ聽察を垂れたまへ、我が所願のごとくまさるに具さにこれを説くべし。』

(一) 設し我れ佛を得たらむに、國に地獄・餓鬼・畜生あらば、正覺を取らじ。

(二) もしわれ佛をえたらむに、國中の人天壽終の後また三惡道に更らば、正覺をとらじ。

【二八】劫具さに劫波 Kalpa 譯時。

【二九】本經は錠光より世自在まで過去五十四佛。平三十七佛、阿三十四佛、無四十三佛、莊三十八佛、梵本八十一佛、十住論九十一佛を列ね法藏發願に至る值遇受教の邊縁を示す。

【三〇】梅檀 (Gandana)。香樹なり。

【三一】須彌 (Sumeru)。山名、妙高と譯す。

【三二】瓊瑤。具さに吹瓊瑤耶 (Valtura) 遠山寶。

【三三】如來等は佛の十號。

【三四】以下比丘發願の相を明す。

【三五】沙門 (Sramana)。勤善息惡と譯す。

【三六】三匝するは敬意を表す。

【三七】偈頌今本四言八十句、平五言八十句阿なし無七言四十二句莊七言三十六句梵本十首。

【三八】摩尼 (Mani)。如意寶。

【三九】戒定慧は多聞に依て生じ精進に依て成る。三昧は定。

【四〇】人雄も師子も佛のこと。大千は三千世界なり。

【四一】恆伽 (Ganga) 河の沙數。

【四二】刹 (Ksetra)。國。田。

【四三】泥洹 (Nirvana)。不生不滅又圓寂と譯す。涅槃に同じ。

一切のこれらの、

道を求めて堅正にして、

譬へば恒沙のごとくならむ、

また不可計、

光明のごとく照らして、

是のごとく精進にして、

我が作佛の國土をして、

其の衆奇妙にして、

くに泥洹のごとくにして、

我れまさに一切を、

十方より來生せむもの、

すでに我が國に到りなば、

幸はくは佛信明したまへ、

願を彼れに發こして、

十方の世尊、

常に此の尊をして、

たとひ身を、

我が行は精進にして、

佛阿難に告げたまはく、『法藏比丘、

尊われ無上正覺の心を發こせり。願はくは佛わが爲に廣く、經法を宣べたまへ。我れまさに修行し

諸佛を供養せむより、
卻かざるにはしかし。

諸佛世界、

無數の刹土ありて、

此の諸の國に遍からむ。

威神はかり難からむに、

第一ならしめむ。

道場超絶し、

等雙なからむ。

哀愍し度脱すべし。

心悅清淨にして、

快樂安穩ならしめむ。

是れ我が眞證なり、

所欲を力精せむ。

智慧無礙なり、

我が心行を知らしめむ。

諸の苦毒の中に止むとも、

忍びて終に悔いさらむ。』

【一〇五】佛智世に於て奕勝。

【一〇六】五天の上尊。世尊世雄
世眼世英天尊は、皆佛のこと。

【一〇七】過去未來現在の三世。

【一〇八】釋尊は阿彌陀佛を念
じ、阿彌陀佛は同時に釋尊を
念じたまひて、彌陀の報身を
離れざる釋尊の說法たり。本
經を彌陀の直説と云ふ所以こ
ゝに在り。

【一〇九】世尊の奇特法等の五徳
を知れるを云ふ。

【一一〇】聖道得果を施す大悲と
聖道不堪の常没に施す大悲と
あり。今常没を救ふ大悲を出
世の本懐とす。無盡異本無蓋

【一一一】欲界、色界、無色界。

【一一二】一世に出興する所以
は、道教を光闡し、群萌を拯ひ、
惠むに眞實の利を以てせんと
欲してなり。と讀み、眞實の
利とは、彌陀の誓願を謂ふと
す。

【一一三】往生淨土萬機普益の念
佛を實利と云ふ。

【一一四】靈瑞華。優曇華。

【一一五】定を食に喩ふ。或は因
の一施食と云ひ、或は果の一
受食と云ふ。

【一一六】住むる。底本住ましむ
る。

【一一七】第二段正宗分、第一所
行即ち彌陀因位の願行を明す、
その内先づ勝因を明す、初に
發願の緣。

日月 摩尼の、

皆悉く隠蔽して、

如來の容顏は、

正覺の大音、

戒聞精進、

威徳ともがらなく、

深諳として善く、

深を窮め奥を盡くして、

無明と欲と怒と、

人雄師子、

功勳廣大にして、

光明の威相、

願はくは我れ作佛して、

生死を過度して、

布施調意、

是のごときは三昧と、

吾れ誓ふ佛を得るまでに、

一切の恐懼に、

たとひ佛ありて、
無量にして大聖、

珠光燄耀なるも、

猶し聚墨のごとし。

世に越えて倫なし。

ひびき十方に流る。

三昧智慧、

殊勝希有なり。

諸佛の法海を念じ、

其の涯底を究む。

世尊は永く無し、

神徳無量なり。

智慧深妙なり。

大千を震動したまふ。

聖法王に齊しく、

解脱せずといふことなからむ。

戒忍精進、

智慧とを上れたりとす。

普くこの願を行じて、

爲に大安を作さむ。

百千億萬、
かず 恒沙のごとくならむに、

【一七】 しては信・進・念・定・慧の五根の三昧。

【一八】 劇難。三途八難。

【一九】 諸閑。人天の善惡業を作らざる閑者。

【二〇】 不閑。業惑二障あるもの。

【二一】 度世。涅槃、その道は智。

【二二】 庶類。多類の衆生。

【二三】 大悲深きが故に請を待たず。

【二四】 佛種性。衆生の佛性。

【二五】 三趣。地獄・餓鬼・畜生なり。

【二六】 涅槃。菩薩は分證。

【二七】 正しく發記序。説法の起因を明す。世尊、大經の教主としての融本の釋迦たり。

【二八】 佛の間に應ずる許容。

【二九】 師に事ふる法。右肩を脱ぎて命に應せんとするなり。

【三〇】 長跪。兩膝を地に著け兩股を空に身を立て兩足地を指す、敬禮。

【三一】 合掌。胸上に置き一心を表す。

【三二】 世中最尊。此の句以下の四住一行を五徳と稱し、この一段を、五徳現瑞の段といふ。

【三三】 世中最猛。

【三四】 世人の眼を開く。

正念と名づけ、次ぎをば離垢と名づけ、次ぎをば無著と名づけ、次ぎをば龍天と名づけ、次ぎをば夜光と名づけ、次ぎをば安明頂と名づけ、次ぎをば不動地と名づけ、次ぎをば瑠璃妙華と名づけ、次ぎをば瑠璃金色と名づけ、次ぎをば金藏と名づけ、次ぎをば欲光と名づけ、次ぎをば欲根と名づけ、次ぎをば地動と名づけ、次ぎをば月像と名づけ、次ぎをば日音と名づけ、次ぎをば解脱華と名づけ、次ぎをば莊嚴光明と名づけ、次ぎをば海覺神通と名づけ、次ぎをば水光と名づけ、次ぎをば大香と名づけ、次ぎをば離塵垢と名づけ、次ぎをば捨厭意と名づけ、次ぎをば寶猷と名づけ、次ぎをば妙頂と名づけ、次ぎをば勇立と名づけ、次ぎをば功德持慧と名づけ、次ぎをば蔽日月光と名づけ、次ぎをば日月瑠璃光と名づけ、次ぎをば無上瑠璃光と名づけ、次ぎをば最上音と名づけ、次ぎをば菩提華と名づけ、次ぎをば月明と名づけ、次ぎをば日光と名づけ、次ぎをば度蓋行と名づけ、次ぎをば華色王と名づけ、次ぎをば水月光と名づけ、次ぎをば除癡暝と名づけ、次ぎをば法慧と名づけ、次ぎをば淨信と名づけ、次ぎをば善宿と名づけ、次ぎをば威神と名づけ、次ぎをば法慧と名づけ、次ぎをば鸞音と名づけ、次ぎをば師子音と名づけ、次ぎをば龍音と名づけ、次ぎをば處世と名づく。此のとき諸佛みな悉く已に過ぎたまひき。

その時に次ぎに佛まします、世自在王 如來・應供・等正覺・明・行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊と名づく。 時に國王あり、佛の説法を聞きて心に悦豫を懷き、尋ち無上正眞の道意を發こし、國を棄て王を捐てて、行じて 沙門と作る。號して法藏といふ。高才勇哲にして世と超異せり。世自在王如來の所に詣でて、佛足を稽首し右に遶ること 三匝長跪し合掌して 頌をもて讚じて曰さく、

光顏巍巍として、
威神きはまりなし。
是の如き欲明、
共に等しきものなし。

すべしと豫示するを記別又は授記と云ふ。
 【七〇】 第九涅槃相。如來の涅槃は非滅に滅を現す。
 【七一】 漏は煩惱、三漏あり欲漏四十一、有漏五十二、無明漏十五合して百八。
 【七二】 以下菩薩二利の徳を歎す。
 【七四】 行。六度四攝等。
 【七五】 本學。先きに學習する謂。
 【七六】 所住。所化の衆生は菩薩智恵の安住する所。
 【七七】 佛の住する涅槃の理は菩薩も亦證す。
 【七八】 大聖。如來。皆佛のこと。
 【七九】 一切智。漏盡、説障道、説苦盡道の四無長は如來の徳。
 【八〇】 聲聞緣覺。二乘即ち小乘。
 【八一】 三昧或は三解脱門と云ふ。諸法の無自性を空と云ひ、如幻の假相にして自相と云ふべきなきを無相と云ひ、念願も亦無なるを無願と云ふ。
 【八二】 三昧(Samadhi)。等持又は正定と譯す。
 【八三】 三乘。聲聞乘緣覺乘菩薩乘なり。
 【八四】 中は緣覺、下は聲聞。
 【八五】 總持。諸善を散失せざらしむ、陀羅尼これ。
 【八六】 總じては一切善法、別

と無量なり。未だかつて殊妙なること今のごとくなるをばみたまつらざりき。唯しかり。大聖、わが心に念言すらく、今日、世尊奇特の法に住し、今日、世雄諸佛の所住に住し、今日、世眼導師の行に住し、今日、世英最勝の道に住し、今日、天尊如來の徳を行じたまへり。去來現の佛、佛と佛と相ひ念じたまふ。今の佛も諸佛を念じたまふことなきことを得むや。何がゆゑぞ威神の光光たること乃ち爾る。是において世尊阿難に告げて曰たまはく、「いかにぞ阿難諸天なむちに教へて來りて佛に問はしむるか、自ら慧見をもて威顔を問ふか。阿難佛に白さく、「諸天の來りて我れに教ふる者あることなく、自ら所見をもて斯の義を問ひたまつるのみ。佛の言たまはく、「善きかな阿難、とふところ甚だ快し。深智慧を發こして眞妙の辯才あり、衆生を愍念するをもて斯の慧義を問へり。如來、無盡の大悲を以て、三界を矜哀す、ゆゑに世に出興して光く道教を闡き、群萌を拯はむと欲して恵むに、眞實の利を以てす。無量億劫にも値ひがたく見がたし。猶し、靈瑞華の時ありてすなはち出づるがごとし。今とふところは饒益するところ多くして、一切の諸天人民を開化す。阿難まさに知るべし、如來正覺は其の智はかり難くして導御するところ多し、慧見無礙にして、能く遍絶することなし、一滄の力をもて能く壽命を、住むること億百千劫無數無量にして復これに過ぎたり。諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變にして光顔ことなることなし。ゆゑはいかに。如來は定慧究暢して極まりなし。一切の法において自在をえたり。阿難あきらかに聽け、いま汝がために説かむ。對へて曰さく、「唯しかり、願樂すらく聞きたてまつらむと欲す」。

二七 佛阿難に告げ給はく、「乃往過去久遠無量不可思議無央數劫に、鏡光如來世に興出して、無量の衆生を教化し、度脱してみな得道せしめて乃ち減度を取りたまひき、次ぎに如來まします、名づけて光遠といふ。次ぎをば月光と名づけ、次ぎをば梅檀香と名づけ、次ぎをば善山王と名づけ、次ぎをば須彌天冠と名づけ、次ぎをば須彌等曜と名づけ、次ぎをば月色と名づけ、次ぎをば

- 【五】 以下第六出家の相。
- 【五二、五三、五四】 底本助辭なし。
- 【五四】 劫濁・見濁・煩惱濁・衆生濁・命濁の五なり。以下第七成道の相。
- 【五五】 命流。尼連禪河。
- 【五六】 吉祥感徴。成道せんとする時帝釋化して吉祥と號し草座を奉り因位種徳の功を表す。
- 【五七】 佛樹。菩提樹又は道場樹とも云ふ。諸佛成道に各各樹あり、釋尊には畢鉢羅樹なり。
- 【五八】 降魔の相。魔具さに魔羅(Māra)といふ。
- 【五九】 大論三魔王十八億衆を將めて菩薩の所に到る。
- 【六〇】 第八轉法輪相。一代の説法傳道。
- 【六一】 以下八句淨影これを四法四無礙に配す。
- 【六二】 攝或は攝か。おどしてと訓ずることなる。
- 【六三】 邪見身見邊見等の見惑。
- 【六四】 五欲の境に勞す。思惑。
- 【六五】 正法の涅槃の妙果を喻ふ。
- 【六六】 分衛。具さに賓茶波底迦(Chāṭika-Pāṭika)托鉢、乞食。
- 【六七】 福田。世の福善を生ずる故に、三寶を福田と云ふ。
- 【六八】 三苦。苦苦、壞苦、行苦の三、苦空無常を苦より觀るもの。
- 【六九】 道意。菩提心。
- 【七〇】 記。何時何國にて成佛

とき法一切具足せり。菩薩の經典要妙を究暢し、名稱普く至りて十方を導御す。無量の諸佛ことごとく共に護念したまふ。佛の所住には皆すでに住することをえ、大聖の所立には皆すでに立てり、如來の導化おのおの能く宣布し、諸の菩薩の爲に大師と作りて甚深の禪慧を以て衆人を開導す。諸法の性に通じ、衆生の相に達し、諸國を明了にす。諸佛を供養するにその身を化現すること猶し電光のごとし。善く、無畏の網を學して幻化の法を曉了す。魔網を壊裂し諸の纏縛を解く。聲聞緣覺の地を超越して、空無相無願、三昧をえたり。善く方便を立てて、三乘を顯示し、此の 中下において減度を現す。また所作なくまた所有なく不起不滅にして平等の法をえたり。無量の 總持、百千の三昧、諸根智慧を具足し成就し、廣普の寂定ありて深く菩薩の法藏に入り、佛華嚴三昧をえたり。一切の經典を宣暢し演說す。深定門に住して悉く現在の無量の諸佛を親たてまつり、一念の頃に周遍せずといふことなし。諸の 劇難と 諸閑と 不閑とを濟ひ、眞實の際を分別し顯示するに諸の如來の辯才の智をえたり。衆の言音を入りて一切を開化す。世間もろもろのあらゆる法を超過して、心つねに 度世の道に誦住す。一切の萬物において意に隨ひて自在なり。諸の 庶類のために、不請の友と作り、群生を荷負してこれを重擔とす。如來甚深の法藏を受持し、佛種性を護りて常に絶えざらしむ。大悲を興こして衆生を愍み、慈辯を演べて法眼を授け、三趣を杜ぎ善門を開き、不請の法をもて諸の黎庶に施す。純孝の子の父母を愛敬するがごとし。もろもろの衆生において視ること自己のごとし。一切の善本みな 彼岸に渡る。悉く諸佛無量の功德を獲たり。智慧聖明なること思議すべからず。是のごとき等の菩薩大士稱計すべからず一時に來會せり。

爾のとき世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり。尊者阿難、佛の 聖旨を承けて、即ち座より起ちて、偏袒右肩し、長跪、合掌して佛に白して言さく、「今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たること、明淨なる鏡のかけ表裏に暢るがごとし。威容顯曜にして超絶したまへるこ

- 【三】 行願。六度四攝等の行。
- 【四】 四弘誓十大願の願。
- 【五】 感應自在に十方に顯はる。
- 【六】 宜しきに隨ひ種種に現じ化現りて隱くる。權とは假なり。
- 【七】 彼岸。涅槃の果。
- 【八】 等覺。佛の覺悟正等なる故等覺と云ふ、三藐三菩提なり。
- 【九】 示現分證にて實成なりす。
- 【十】 兜率。以下現成等覺の別說にて列ぬる所九相あり、通途云ふ八相成道なり。初に上天の相、兜率(Trāyastri-loka)知足或は喜足と譯す、欲界第四天なり。
- 【十一】 正法又は妙法、佛道のこと。
- 【十二】 第二下天入胎の相。
- 【十三】 第三出胎の相、右脇は生處穢れなきを表す。
- 【十四】 七步。六道超過を示す。
- 【十五】 底本をなし。六種震動、動と涌と震と擊と吼と爆との六相。
- 【十六】 無七尊。佛。
- 【十七】 釋(Chakravartin)帝釋、梵(Brahma)梵天。
- 【十八】 六藝。以下第四童子の相。
- 【十九】 道術。内外諸道。
- 【二十】 第五聘娶の相。

藝を試み、宮中色味の間に處することを現す、老病死を見て世の非常を悟り、國と財と位とを棄てて山に入りて道を學ぶ。服乘の白馬と寶冠と璽珞とはこれを遣はして還さしむ。珍妙衣を捨てて法服を著し、鬚髮を剃除す。樹下に端坐して勤苦すること六年なり、行所應に如ふ。五濁の刹に現じて群生に隨順するをもて、塵垢あることを示して、金流に沐浴す。天樹枝を按へて攀ぢて池を出づることをえしむ。靈禽翼從して道場に往詣す。吉祥の感徵功祚を表草す。哀みて施草を受けて佛樹の下に敷て跏趺して坐す。大光明を奮ひて魔をしてこれを知らしむ。魔官屬を率ゐて來りて逼め試みる。制するに智力を以てしてみな降伏せしむ。微妙の法をえて最正覺を成ず。釋梵祈勸して法輪を轉ぜむことを請す。佛の遊歩を以てし、佛吼をもて吼す。法鼓を拍き、法雲を吹き、法劍を執り、法幢を建て、法雷を震ひ、法電を曜し、法雨を澍ぎ、法施を演ぶ。常に法音を以て諸の世間を覺せしむ。光明あまねく無量の佛土を照らし、一切の世界六種に震動するに、總べて魔界を攝して魔の宮殿を動かす。衆魔惛怖して歸伏せずといふことなし。邪網を擱裂して諸見を消滅し、諸の塵勞を散じ、諸の欲慳を壞す。法城を嚴護して法門を開闡す。垢汗を洗濯すること顯明清白にして、光く佛法を融じて正化を宣流す。國に入りて分衛して諸の豐膳をえ、功德を貯へて福田を示し、法を宣べむと欲して欣笑を現じ、諸の法藥をもて三苦を救療す。道意無量の功德を顯現し、菩薩に記を授けて等正覺を成ぜしむ。滅度を示現して拯濟すること極まりなし。諸漏を消除して衆の徳本を植ゑしむ。功德を具足すること微妙にして量り難し。諸佛の國に遊びて普く消教を現す。其の修するところの行清淨にして穢れなし。譬ふれば幻師の衆の異像を現するに、男を爲し、女を爲して所として變ぜずといふことなく、本學明了にして意の所爲に在るがごとし。此の諸の菩薩もまた是のごとし。一切の法を學して貫結練練し、所住安諦にして化を致さずといふことなし。無數の佛土にみな悉く普く現す。未だ曾て慢恣せず衆生を惑傷す。是のご

【七】 Santi-Putra

【八】 Mahā-Maṇḍaḥalyaṣṭya

【九】 Kapṣhla

【一〇】 Mahā-Cunda

【一一】 Rāhula

【一二】 Amanda

【一三】 上に列ぬる三十一聖は大衆中の特に上席たる者なり。

【一四】 徒衆の中二に菩薩衆を列ぬ。

【一五】 Bodhisattva 覺有情と譯す。

【一六】 今本十七名無十三名梵慈氏一名平阿莊に名なし。

【一七】 底本等の下の「」を加ふ。

【一八】 賢劫(Bhadrakāṃpa)大乘には現在世を賢劫の時とし千佛出世すと云ふ。慈氏等はその中なるや否や異説あり。

【一九】 智度論七に善守等十六菩薩是居家菩薩と云ふ。大般若第一、思益經第一等その名を列ぬ。

【二〇】 善思議以下の十四菩薩は十六正士の中とするせざるは異説す。別とするべし。

【二一】 華嚴四十に説く普賢十大願行を云ふ。*眞宗にては此の普賢大士の徳とは、後に來る四十八願中の第二十二願(還相廻向の願)に示す大悲の行を謂ふものとす。

【二二】 以下菩薩の勝徳を讚歎す。

佛說無量壽經

卷の上

曹魏天竺三藏康僧鎧譯

我れ聞きき是の如きを。一時、佛王舍城の耆闍崛山の中に住しまして、大比丘衆、萬二千人と俱なりき。一切大聖にして、神通すでに達せり。其名を、尊者了本際、尊者正願、尊者正語、尊者大號、尊者仁賢、尊者離垢、尊者名聞、尊者善實、尊者具足、尊者神王、尊者優樓頻伽迦葉、尊者伽耶迦葉、尊者那提迦葉、尊者摩訶迦葉、尊者舍利弗、尊者大目犍連、尊者劫賓那、尊者大住、尊者大淨志、尊者摩訶周那、尊者滿願子、尊者離障、尊者流灌、尊者堅伏、尊者面王、尊者異乘、尊者仁性、尊者嘉樂、尊者善來、尊者羅云、尊者阿難と曰ひき。皆是の如き等の上首たる者なり。

また大乘の衆の菩薩と俱なりき。普賢菩薩、妙德菩薩、慈氏菩薩等、この賢劫の中の一切の菩薩となり。また賢護等の十六正士あり。善思議菩薩、信慧菩薩、空無菩薩、神通華菩薩、光英菩薩、慧上菩薩、智幢菩薩、寂根菩薩、願慧菩薩、香象菩薩、寶英菩薩、中住菩薩、制行菩薩、解脫菩薩あり。みな普賢大士の徳に遊べり。諸の菩薩の無量の行願を具して一切功德の法に安住せり。十方に遊歩して、權方便を行じ、佛法藏に入りて、彼岸を究竟す。無量の世界において、等覺を成ずることを現す。兜率天に處して、正法を弘宣し、彼の天宮を捨てて、神を母胎に降し、右脇より生ぜり。行くこと七歩を現じ、光明顯耀してあまねく十方を照らし、無量の佛土を六種に震動す。聲を擧げて自から稱すらく、吾れ當に世において無上尊と爲るべしと。釋梵奉侍し天人歸仰す。算計文藝射御を示現し、道術を博綜し群籍を貫練す。後園に遊びて武を講ひ

佛說無量壽經卷上

- 【一】淨土三部經の第一、釋尊阿彌陀佛に就き説き給へる經なり、分ちて二卷とす。
- 【二】一經三段中第一序分四頁一六行まで、その中の一頁を證信序とす。梵に從へば我によりて開かれたり是の如くと云ふべし。結果集者開持正しきを證す。六成就には開成就成なり。
- 【三】この經説時を示す、時成就なり。
- 【四】教主釋迦佛陀 (Buddha) 説處を明す、處成就。
- 【五】耆闍崛 (Gṛhṇakūṭa) 者闍崛 (Gṛhṇakūṭa) 靈鷲と巴利に (Gijjhakūṭa) 靈鷲と譯す。
- 【六】以下第六の衆成就、一會に集る大衆。
- 【七】比丘 (Bhikkhu) 乞士と譯す、大衆の中先づ聲聞衆を擧ぐ。
- 【八】今本阿無同じ平は千二百五十莊と梵本とは三萬二千と訓す。この句底本一切の大聖と訓す。皆無學の大阿羅漢なるを云ふ。
- 【九】六通自在。
- 【一〇】今本阿莊三十一名平三十五無二九梵三十四の阿羅漢を列ぬ。
- 【一一】 Uruvīra-Kāśyapa
- 【一二】 Gyaṅga-Kāśyapa
- 【一三】 Nadi Kāśyapa
- 【一四】 Mala Kāśyapa

土宗眞宗時宗等通依する所なりと雖、三經異轍なりや同轍なりや。經文の細釋に至りては微を穿ち細を極め流派の別を致す。今の加註解説只本文を讀解するを助

昭和七年九月十五日

くるのみ、宗義の異同に觸るゝことを避けたり。

本譯は國譯大藏に譯載せるものなるも、その後版には島地大等君譯によりて

眞宗の釋意を示せり。今その重要なりと認むる讀み方及び解説を（*）印を附して註記することとせり。

譯者 椎 尾 辨 匡 識

く本經の大綱なり。

- 【一】 費長房三寶記、(致六、三四)。
- 【二】 開元錄(結四、七、二八、四一)。
- 【三】 義疏、貳編、乙、八ノ一ノ十七。
- 【四】 義疏二卷、或は義記一卷とす、續藏三十二ノ四、淨土宗全書五。
- 【五】 疏二卷、續藏三十二ノ五、淨全同上、妙樂の疏記一卷、法聰の記一卷科一卷、義通、行靖の疏記、知禮の妙宗鈔三卷、源清の顯要記二卷、智圓の刊正記二卷、如湛の淨業記四卷、從義の往生記四卷等あり、又妙宗鈔の末釋種種あり。
- 【六】 唐延興寺古藏作義疏二卷、續藏三十二ノ四、淨全五。
- 【七】 義疏三卷、續藏三十二ノ五、淨全五。三聖立像記一卷。
- 【八】 正觀記三卷、扶新論一卷。續藏三十三ノ一、淨全五。
- 【九】 圓頌一卷、續藏同上。
- 【一〇】 續法集、直指疏二卷、彭際清約論一卷。俱に續藏同上に在り。
- 【一一】 續藏貳ノ十二ノ三。淨全一。
- 【一二】 續藏三十二ノ四。淨全二。
- 【一三】 蓮門經籍錄上傳通記以下廿二部、觀門要義鈔以下了意の鼓吹まで廿七部を列ぬ。その他近代の述作多し。
- 【一四】 智顛・知禮・道綽・善導。

阿彌陀經

解題

一、原本。この經の梵本は古來我國にも弘通せり。南條博士はこれを大經原本と俱に牛津オックスフォードに出版せり。

二、譯本。支那譯は經錄を總括して四、一、姚秦羅什譯阿彌陀經即ち今和譯する所の淨土正依三部の一たり。二、東晉若くは劉宋に屬せられ、曇摩密多譯とも云はるゝ樂佛土經にして早く佚せり。三、劉宋

孝建中荊州に於て譯する小無量壽經或は阿彌陀經これ也。又佚せり。四、唐玄奘、永徽元年一月譯稱讚淨土佛攝受經一卷なり。若し第二は大經に屬すとせば三譯兩存一缺となる。和譯底本等大經に辨じたる所に同じ。南條博士は梵文を和譯して支那兩譯と對照 出版せり。

三、小經の註疏。疏者梁善慧。隋智顛。唐慧淨・觀基・元曉・智首・圓測・玄一。慈藏。宋・智圓・元照・戒度・仁岳・用欽。元・性澄。明・大佑・株宏、大慧智旭。清に淨挺・續法・彭際清・了根等あり。日

本に空海・永海・源空・凝然以下、述作甚だ多し。

四、大意。本經序正流通あること常の如し。文に就て知れ。正宗には極樂依正の莊嚴功德と念佛往生と證誠勸進とを明す。六方諸佛釋迦彌陀一を知り、念佛行者を證誠し護念し勸進す。

- 【一】 西紀四五四一四五六。
- 【二】 西紀六五〇。
- 【三】 明治四十一年四月。
- 【四】 續藏三十三ノ一、淨全五。
- 【五】 續藏同上。
- 【六】 續藏三十三ノ一、二。淨全五。
- 【七】 淨全五。
- 【八】 續藏三十三ノ二。淨全五。
- 【九】 同上。
- 【一〇】 同上。
- 【一一】 續藏同上。
- 【一二】 同上。
- 【一三】 續藏三十三ノ二、三。
- 【一四】 續藏三十三ノ四。
- 【一五】 續藏同上。
- 【一六】 經籍錄、教典志等前註參照。

三經總說

淨土三部は法然上人以後我邦淨土門淨

らん。

二、譯本。經錄を總攬せば、一漢代失譯無本、二晋失源有本、三、宋曇良耶舍（時稱）譯有本現行、四宋曇摩密多譯無本とあるも、一は三寶記の錯誤と云ふべく、三と四との兩譯ありとは智昇の説なるも同時同處二人の別譯となるは、共譯の別傳せられたるものならんか。別個の譯出としては二と三とあるべし。二の古本觀經に關しては經錄只晋失源有本と云ひ、その名目を傳ふるのみなるも、往生傳の僧顯の條に梵僧傳譯の新經三事因願より九品往生次第に洎ぶものを得て西方を願求せりと云ふ。これ三福九品にして觀經なるは明かなり。譯者明かならざるも、東晋の初めに譯出されたるものなるべし。次に三の新本觀經は劉宋文帝元嘉七八年頃曇良耶舍の譯出に係る。轉障の祕術淨土の洪因として受持諷誦せるが故に、僧舍その譯出を請へるに因る。今

淨土正依の一として和譯する所はこの經なり。和譯底本等、前述の大經の解に同じ。

三、觀經の註疏。古本は註疏を見るに及ばざりしが、新本に及び註疏講解最も盛なり。これ此經が禪觀と滅罪と臨終と往生とに適すとせられたるが爲なり。靈裕の義疏を魁とし、慧遠・智顛・吉藏の三疏諸師淨土教の蘭菊妍を競ふ。窺基澄觀にも疏ありと云ひ、義寂・慧均・龍興・憬興・太賢・玄一・法位・法常・道闇、等各紹述する所ありと云ふ。宋に元照戒度を最とし、擇瑛・用欽・道心・可觀等名あり。明に傳燈あり、清また人なしとせず。前後脈絡絶えざるも就中經要を得るもの、道綽の安樂集と善導の四帖御疏これなり。殊に後者は聖僧の指授古今楷定の妙釋とし、日本淨土教の指南たり。

日本には前記 天台四明、西河光明の

末釋極めて多きも、直ちに本經を註解するものも少からず。智光の疏最も古く、當麻の觀經曼荼羅また耳目に久し、降りて良源の九品往生義、九品往生略註より靜昭・淨算・利源・實範等の小著あり。決然上人には觀經釋一卷、信瑞に音義一卷、聖聰の曼陀羅鈔四十八卷、祐崇の要義鈔、源譽の直談鈔、義山の隨聞記、觀徹の合讚、鸞宿の廻瀾鈔、加祐の科註、洞空の會疏、法霖の述要、慧雲の微笑記、大乘の講述等あり。

四、大意。この經は兩處二會の説たり。王宮會と耆闍崛山會となり。韋提の致請に應じて光臺に佛國を現じ、空中に三尊出現し給ひ、佛具さに十三定善と三福九品の散善とを説き給ふ。十三とは日想水想・地想・寶樹・寶池・寶樓・華座・像想・佛身・觀音・勢至・普觀・雜想これ也。九品散善は釋尊自ら進みて説く所、別して本意は念佛に在りとす。これ善導の釋意に基

- 【一】三年龜茲沙門白延譯。缺。
- 六、佛說無量壽經二卷、西晉永嘉二年沙門竺法護譯。缺。
- 七、佛說無量壽至眞等正覺經一卷、一名樂佛土經、一名極樂佛土經。東晉元熙元年西域沙門竺法力譯。缺。
- 八、新無量壽經二卷、宋永初二年印度佛陀跋陀羅(覺賢)譯。缺。
- 九、新無量壽經二卷、宋永初二年涼州沙門寶雲譯。缺。
- 十、無量壽經一卷、宋元嘉中中印沙門求那跋陀羅(功德賢)譯。缺。
- 十一、大寶積經卷第十七、十八、無量壽如來會第五、二卷。唐南印菩提流志(覺希)譯。存。本書無とす。
- 十二、佛說大乘無量壽莊嚴經三卷、宋西天沙門法賢譯。存。本書莊とす。
- 【七】 出三藏記第二。
- 【八】 衆經目錄第一。
- 【九】 結二、一八。
- 【一〇】 結二、一三。
- 【一一】 無量壽經連義述文贊、續藏三十二ノ三。
- 【一二】 魏白延、吳支謙四晉法護。
- 【一三】 淨土宗全書第一卷。
- 【一四】 開證に無量壽經異譯對映一卷あり。
- 【一五】 東域傳燈目錄上。
- 【一六】 誓經著、眞宗全書。
- 【一七】 續藏貳編ノ十二ノ三。淨土宗全書一ノ六六六。

解 題

- 【一】 真空寺重裕著無量壽經義疏二卷佚。
- 【二】 淨影寺慧遠著、義疏二卷、續藏三十二ノ二。淨全五。
- 【三】 嘉祥寺吉藏著、義疏一卷、續藏淨全同上。
- 【四】 西明寺圓測著、疏三卷、佚。
- 【五】 光明寺善導著、彌陀義卷數未詳、或は云ふ百卷、坊間一卷本あり偽書なり。
- 【六】 新羅義寂著、述義記三卷、佚。
- 【七】 新羅元曉著、兩卷無量壽經宗要一卷、續藏三十二ノ三。淨全五。別に同著私記一卷ありとす。
- 【八】 無量壽經連義述文贊三卷、續藏淨全同上。
- 【九】 義疏二卷
- 【一〇】 記二卷。續藏三十二ノ二。上卷殘冊。
- 【一一】 疏三卷。僧徹これに註して疏法燈二卷を作る。
- 【一二】 古迹記一卷。
- 【一三】 三卷。續藏三十二ノ三。
- 【一四】 一卷。續藏同上。
- 【一五】 讚鈔、註字釋各一卷。
- 【一六】 私記一卷。
- 【一七】 四十八願釋一卷、十最疏傳記、一卷。
- 【一八】 四十八願釋一卷。
- 【一九】 同上。
- 【二〇】 同上及四十八願抄一卷。
- 【二一】 又曰大經私記、淨全九漢語燈錄。
- 【二二】 淨全九和語燈錄。
- 【二三】 淨全十四。

- 【一】 鈔見開八卷。
- 【二】 鈔名義辨事七卷、引據一卷。
- 【三】 鈔引文私考七卷。
- 【四】 頌義二十二より二十七に至る六卷、別顯義。
- 【五】 大經直談要註記三十四卷、淨全十三。
- 【六】 無量壽經集解十五卷(或云十六卷)續淨全三。
- 【七】 十卷。
- 【八】 無量壽經隨開講錄六卷、淨全十四。
- 【九】 合讚四卷に附原記六卷あり。
- 【一〇】 隨天の大經曼荼羅開境記四卷、義海の大經義疏選要記二卷、本阿の無量壽經精決六卷等。
- 【一一】 十八卷、眞宗全書。
- 【一二】 十五卷、續眞全。
- 【一三】 十二卷、續眞全。
- 【一四】 長西錄、蓮門經籍錄上、學部必用目錄前編、眞宗教典志、第二第三、及び同一卷本参照。

觀無量壽經

一、原本。この經の原本明かならず、往生論の如き五念の中に觀察を廣説するも、二十九種莊嚴を説き、直接本經の諸觀に依らず。然れども數次の譯出あるに徴しても、梵本將來訪得せらるゝことあ

鈔五卷、南楚の義苑七卷、炬範の略箋八卷、圓澄の玄談一卷補遺記四卷、慧空の開義六卷、峻詔の會疏十卷、泰巖の海滯記二十二卷、道隱の^{五二}甄解、性海の^{五二}顯宗疏、慧雲の大經^{五三}安永錄^{五四}等あり。近くは大經頭書、講述、五惡段辨釋、同因果實驗錄、三部經鼓吹等の述作あり。

五、本經の大意。法然上人は釋して大意、立教開宗、淨教本末、釋名、入文解釋の五段とす。一に大意とは釋迦彌陀諸佛衆生を攝取して淨土に生ぜしむるに在り。二に立教開宗とは一代佛敎分れて聖道教と淨土教となる、大乘中往生淨土の法門を説くもの淨土教にして本經その一なり。三に淨教本末とは往生教にも餘を正とし兼て往生を明すは枝末なり。此經は有功具足の正往生教なり。四に釋名とは佛は能説の覺者釋迦、説は口音陳唱、無量壽は所説の佛名即ち阿彌陀なり。經は梵の修多羅なり。五に入文解釋とは一

部兩卷分ちて三段、初より「願樂すらく開きたてまつらむと欲す」までは序分、次に乃往過去より下卷の「略してこれを説けるのみ」までは正宗分、以下流通分なり。序に二、一に通序即ち證信序、二に別序即ち發起序、「爾のとき世尊諸根悅豫し」より下の文は今經に局る序説なり。正宗に四十八願興意、依願修行、所得依正、往生行業の四あり。歸する所念佛往生を明にす。故に流通分は諸行を廢して但念佛を明して、「彼の佛の名號を聞くことを得ることありて」と云ひ、「當來の世經道滅盡せむに我れ慈悲を以て哀愍して獨り此の經を留めて止住すること百歳ならしめむ」と云ふとす。詳には彼の釋及び和語燈の三部經釋を見よ。夫れ淨佛國土成就衆生は成佛の要諦なり。本經は念佛往生を以てこの要諦を顯示す。正宗に彌陀の值遇諸佛、受教、發願、修行、成佛を明すもの、歸する所成就衆生に在

り。念佛皆往は彌陀の願行の詮要にして、衆生の得脱賴む所も亦此に在り。能化の攝取と所化の順應とを詳にす。誠にこれ一代佛敎の本意衆生向上の歸趣を明す法寶と云ふべし。珍敬受持せずして可ならんや。

【一】二の譯本解を見よ。

【二】龍樹造十住毘婆沙易行品、羅什譯。

【三】Anedoth Ozonians, Arpan series. Vol. I. part II. Sukhāvatī Vyāha

Ed. F. Max Müller and Bunyū Nanjō. Oxford, 1883.

【四】尼波爾所傳寫本傳來。

【五】大藏經目錄部、宋元以下の藏經その所定に従ひ追補す。

【六】一、佛說無量壽經二卷、後漢桓靈帝時、安息國沙門安世高譯。缺一。

二、佛說無量壽淨平等覺經二卷（又三卷若くは四卷）後漢月支國沙門支婁迦讖譯。存。本書平とし龜本とす。

三、佛說阿彌陀經二卷、内題佛說阿彌陀三耶三佛薩樓佛檀過度人道經、吳月支國優婆塞支謙恭明譯。存。本書阿とし支本とす。

四、佛說無量壽經二卷、曹魏嘉平四年印度沙門康僧鑠譯。存。今譯する所、本書とし康本とす。

五、佛說無量壽淨平等覺經二卷、曹魏甘

法賢譯西紀九八二——一〇〇一

若しかくの如くならば現存^三五本は殆ど本經譯出の全約を傳ふと云ふべし。別到大阿彌陀經二卷あり、趙宋龍舒居士王日休紹興三十二年唐本以外の四本を刪補校正して五十六分とせるものなり。又後出阿彌陀佛偈經一卷あり、これ支謙本の攝頌なり。

次に日本譯經としては惠隱開講以來訓讀行はれたるべきも、淨土教興隆以後讀誦盛行し、音義訓點次第に是正せられ、延書の刊行を見るに至る。本書は明治三十四年竹川辨中發行の國文淨土三部聖典を底本とせるが、これ此種の最善なるものとす。外に南條博士が梵本を和譯して支那五譯と對照せるもの四十一年に刊行せらる。

三、譯本の正異。これ等五譯存本の中に於て獨り第三を正依とし他を異譯とするは、四十八願具足して觀經所説と一致

せると、第十八本願文の明瞭なると、曇鸞淨影以下の依準する所なると、流布最も廣きとによるも、早く流布して他の所依となれるは文義通暢なるが爲なり。而してこれ恐く康僧鑑所譯に基くも巨匠法護の斧鉞を經、更に曇摩密多佛陀跋陀羅の更新する所、六合山に寶雲の校訂を得て大成せるものなればなるべし。譯語新經に屬するものとあると、隋錄法護を存とし寶雲を缺とせざると、寶雲の文辭を見るときに於てこの感を深くす。憬興王日休の異譯經を對校せる、先德稀れに異譯文を引用せる、東域錄所出の一卷の平等覺經疏、若くは、莊嚴經毛滯記の如き著作もあるも異譯の依用多からずして正異の輕重その差頗る大なり。

四、本經の註疏。康僧鑑本の依用せらるゝ結果註疏少からず。支那に在ては曇鸞の略論淨土義一卷を首とし、靈裕・慧遠・吉藏・圓測・善導・義寂・元曉・

憬興・法位・玄一・知玄・太賢等あり。慧琳は一切經音義第十にこれを辨す。近代の著には清の彭際清の起信論、王耕心の摩訶彌陀經衷論等あり。この他末釋知らるゝもの多きも此にこれを列ねず。存書大概正續大藏中に網羅せらる。

我邦には惠隱この經を宮中に講ぜしより傳承相襲ぐ、釋記少からざるべきも、古くは善珠・智憬・釋昭・智光・良源・澄量壽經釋一卷、和語三部經釋一卷あり。その後信瑞の三部經音義集四卷聖覺の四十八願釋五卷あり。又隆寛の四十八願義四卷稱名菴の義海十卷本願鏡五卷等ありと云ふ。望西了慧に鈔七卷大意一卷あり、良榮・知足・靈哲等これを敷衍す。禮阿に大經聞書四卷あり、了譽聖因の頌義、聖聰の要註記、白辨の集解、岸了の要義、義山の隨聞記、觀徹の合讚、等あり、又加祐の科註六卷、空寂の

じからざるによるも、十住論所抄の經文亦異なるによるも、刊寫所傳の梵本亦別なるに照すも、夙に異本勘からざるを知るのみ。本書梵本と云ふは馬翁南條博士によりて刊行せられたるものを指す。若し原本の成立傳來を明かにせんとせば、本文比較と一般大乘聖典發達とに徴せざるべからず。今これを論ぜず。

二、譯本。支那譯經に關しては通常智昇の開元錄を準とし、今經も十二譯五存七缺と云ふを常とす。若し單に諸錄を掇拾せば十五譯となるも、羅什、求那跋陀羅、玄奘の三譯は小經にして今の大經にあらず。三藏記三寶記が羅什譯を、靜泰錄が玄奘譯を、開元錄が德賢譯を加ふる誤謬を正して可なり。法力譯は費長房が採録する所なるも確かならず、若し僧祐が失譯無量業佛土經一卷と云ふに同じくして、出譯ありとするも小經に外ならざるが如し。僧祐は法力法秀の譯を云

はず、法經錄に新無量壽經二卷宋世曇摩密多(法秀)祇洹寺に譯すと云ふ。同じく疑似なりとするも法力譯を撤して法秀譯を加ふるを可とす。安世高の第一譯を云ふは古錄に存せずして費長房に始まる。依據記事信じ難きのみならず、世高所譯と傳文とに徴して否定すべきを知る。支識般若三昧經を譯して彌陀思想を傳ふるも平等覺經に至りては未だ彼の手に出でざるべし。現存本平は龜茲白延譯に同視して可なり。覺賢寶雲の兩譯は同處同年の同名經にして傳譯の關係より別本と見る能はず。以上略論する所によりて十二

譯と云ふも支謙・僧鎧・白延・法護・法秀・寶雲・覺希・法賢の八譯となる。更に古經錄を案するに、僧祐は支謙・法護・寶雲の三、法經は白延・支謙・法護・覺賢・法秀・寶雲の六、仁壽錄、靜泰錄は白延・支謙・法護とし、憬興は三代經を比較するに至る。支識本を白延に屬し、康僧鎧本を

法護に歸す。此の如きは隋唐時代の本經傳譯の意見なり。これを總括せば僧鎧・法護・法秀・覺賢・寶雲は、今の僧鎧本の關係者と云ふべきが如し。別に三寶記に基く內典錄、開元錄、貞元錄等の説ありて、通常十二代譯説とするもの却て信すべからざるに似たり。要するに左の如きか、

- 一、支本阿支謙本、阿彌陀經二卷、吳黃武建興間、支謙譯、西紀約二二七
- 二二七
- 二、龜本平支識本、無量清淨平等覺經

- 二卷、魏高貴公時、龜茲白延譯、西紀約二五八
- 三、康本僧鎧本、無量壽經二卷、魏嘉平四(二五二)初譯、晋永嘉二年法護譯、西紀約三〇八

- 四、唐本無寶積本、無量壽如來會第五、二卷、唐菩提流志譯、西紀六九三——七一一

- 五、宋本莊大乘無量壽莊嚴經三卷、宋

淨土三部經解題

淨土三部經

淨土宗眞宗等、依用する彌陀の三部を淨土三部經と名く。法華三部、大日三部、鎮護國家三部、彌勒三部等に倣へる也。彌陀の三部とは無量壽經、觀無量壽經と阿彌陀經にして、俱に正しく往生淨土を明すの教なり。この三部を一括するの義は、遠く印度の天親菩薩に基き、曇鸞善導兩師を経て我が法然上人に至りて定まる。菩薩の往生論に無量壽經と題するもの、言從容たるを以て別申論と見る者あるも、曇鸞の論註は三經通申とするもの、如し。道綽、迦才等淨土教義を汎く諸經論に探るに反し、善導が讀誦正行を辨じて一心專讀誦此觀經彌陀經無量壽經等と云ふに至り淨土三部の

解題

義殆ど定ると雖、等の言尙不定なり。選擇集が彌陀三部者は淨土正依經也と云ふに至りて全く確定せり。大小の經法多く、傍に淨土を明すもの少からざるも、専ら念佛を宗とし往生を體とし、西方の指南たるもの、この三經に如くものなし。蓋しこれ上衍の極致不退の風航たるもの、仰ぎて信じ俯して奉すべき金典なり。

- 【一】三經一論を正依經論とす。彌陀三部と天親の往生論となり。
- 【二】法華三部。無量壽經、法華經、普賢觀經。
- 【三】大日三部。大日經、金剛頂經、蘇悉地經。
- 【四】法華經、仁王經、金光明經。
- 【五】上生經、下生經、成佛經。
- 【六】選擇集第一章に云ふ。往生淨土門者、就此有二、一者正明往生淨土之教、二者傍明往生淨土之教。
- 【七】天親は新譯世親、原名婆藪跋頭。

【八】通稱往生論具さに無量壽經優婆提舍願生偈と云ふ。後魏菩提流支の譯。

【九】智昇經錄、智光の往生論記等然りと云ふ。

【一〇】論註上、釋迦牟尼佛在王舍城及舍衛國於大衆之中說無量壽佛莊嚴功德、即以佛名號爲經體。後文に云、王舍城所說無量壽經云云、これ今の無量壽經即ち大經なり。又云、舍衛國所說無量壽經云云と、これ今の阿彌陀經即ち小經なり。觀經は前後に觀無量壽經として引用す。されど論の依修多羅を釋して是三藏外大乘修多羅と云ひ、獨り淨土三經と斷せず。

【一一】その著安樂集。

【一二】その著淨土論。

【一三】觀經疏散善義就行立信。

【一四】第一章私釋。三部經釋には雙卷經、觀經、阿彌陀經、これを淨土三部經といふとせり。

【一五】開元錄所載二千二百七十八部七千四百六卷、その後の譯出及び未譯頗る多し。

【一六】道綽迦才宗曉源信等搜引する所多きも、繼成の阿彌陀佛說林近くは淨土宗全書一、傍說淨土教論集を見よ。

無量壽經

一、原本。この經の原本印度に如何に流傳せるか詳ならず。支那の古譯本同

阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經解題……………三

阿彌陀鼓音聲王陀羅尼經……………〔一—三〕……………三七

後出阿彌陀佛偈解題…………………………三七

後出阿彌陀佛偈…………………………〔一—二〕……………三七

索引……………………………………………………卷末

卷の 下……………〔二六—四七〕……………二四八

諸菩薩學成第四……………二四八

佛般泥洹品第五……………二五六

佛說須摩提菩薩經解題……………〔一—三〕……………二七一

佛說須摩提菩薩經……………〔一—一〇〕……………二七五

彌勒菩薩所問本願經解題……………〔一—三〕……………二八五

彌勒菩薩所問本願經……………〔一—二〕……………二八七

文殊師利所說不思議佛境界經解題……………〔一—三〕……………一九九

文殊師利所說不思議佛境界經(二卷)……………〔一—一五〕……………二〇三

大乘顯識經解題……………〔一—三〕……………二三一

大乘顯識經(二卷)……………〔一—三〕……………二三五

拔一切業障根本得生淨土神呪解題……………〔一—二〕……………二六七

拔一切業障根本得生淨土神呪……………二六九

如來藏章第七.....108

法身章第八.....109

空義隱覆真實章第九.....110

一諦章第十.....110

一依章第十一.....111

顛倒真實章第十二.....111

自性清淨藏第十三.....111

如來真子章第十四.....113

勝鬘章第十五.....114

佛說阿閼佛國經解題.....119

佛說阿閼佛國經(二卷).....123

卷の上.....125

發意受慧品第一.....125

阿閼佛刹善快品第二.....125

弟子學成品第三.....124

目次

淨土三部經解題……………	〔本丁〕 八……………	(通頁) 一
佛說無量壽經(二卷)……………	〔一—四七〕……………	九
佛說觀無量壽經……………	〔一—六七〕……………	毛
佛說阿彌陀經……………	〔一—六〕……………	七
勝鬘師子吼一乘大方廣經解題……………	〔一—二〇〕……………	八
勝鬘師子吼一乘大方廣經(一卷)……………	〔一—二六〕……………	九
如來眞實義功德章第一……………	……………	九
十受章第二……………	……………	九
三大願章第三……………	……………	九
攝受正法章第四……………	……………	九
一乘章第五……………	……………	一〇
無邊聖諦章第六……………	……………	一〇

寶 藏 經 下

卷之...

...

寶積部七

蓮	椎
澤	尾
成	辨
淳	匡
譯	



CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

(27)

國譯一切經

大東出版社藏版

國譯一切經

大東出版社



